秋田県文化財調査報告書第395集

上谷地遺跡
新谷地遺跡

―― 日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅩⅡ ――

２００５・３

秋田県教育委員会

シンボルマークは、北秋田郡森吉町白坂（しろざか）遺跡
出土の「岩偶」です。
縄文時代晩期初頭、1992年8月発見、高さ７㎝、凝灰岩。

上谷地遺跡
新谷地遺跡

―― 日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅩⅡ ――

２００５・３

秋田県教育委員会

巻頭図版1　水さらし場遺構(1)（直上→）

木組部（南西→）

木組部（東→）

調査区全景（南西→）

調査区全景（北→）

序

本県には、これまでに発見された約4,600か所の遺跡のほか、先人の遺産である埋蔵文化財が豊富に残されています。これらの埋蔵文化財は、地域の歴史や伝統を理解し、未来を展望した彩り豊かな文化を創造していくうえで、欠くことのできないものであります。

一方、日本海沿岸東北自動車道をはじめとする高速交通体系の整備は、ゆとりと活力に満ちた新しいふるさと秋田の創造をめざす開発事業の根幹をなすものであります。本教育委員会では、これら地域開発との調和を図りながら、埋蔵文化財を保存し、活用することに鋭意取り組んでおります。

本報告書は、日本海沿岸東北自動車道建設事業に先立って、平成13～15年度に本荘市土谷地区において実施した上谷地遺跡の発掘調査成果と、平成14年に同地区において実施した新谷地遺跡の発掘調査成果をまとめたものであります。上谷地遺跡では、縄文時代後期の水さらし場遺構や祭祀が行われたと考えられる平安時代の井戸跡等が発見されました。また、縄文時代と平安時代の河川跡からは大量の遺物が出土しました。

本書が、ふるさとの歴史資料として広く活用され、埋蔵文化財保護の一助となることを心から願うものであります。

最後になりましたが、発掘調査ならびに本報告書の刊行にあたり、御協力いただきました日本道路公団東北支社秋田工事事務所、本荘市教育委員会など関係各位に対し厚くお礼申し上げます。

平成17年３月

秋田県教育委員会

教育長　小　野　寺　清

例　　言

1．本書は、日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財調査報告書の22冊目である。

2．本書は、平成13年度（2001年度）、平成14年度（2002年度）、平成15年度（2003年度）に発掘調査した、秋田県本荘市土谷字上谷地に所在する上谷地遺跡と、平成14年度（2002年度）に発掘調査した秋田県本荘市土谷字新谷地に所在する新谷地遺跡の調査成果を収めたものである。上谷地遺跡の各年度の調査範囲は第２図上谷地遺跡調査範囲図に示した。

3．本書に使用した図は、日本道路公団東北支社秋田工事事務所提供の工事路線計画図1,000分の１「日本海東北自動車道本荘～岩城間道路実施設計」、建設省国土地理院発行の50,000分の１地形図「本荘」と25,000分の１地形図「本荘」・「岩谷」である。

4．自然化学的分析はパリノ・サーヴェイ株式会社、株式会社パレオ・ラボ、遺物の保存処理は株式会社吉田生物研究所、株式会社京都科学に委託した。

5．空中撮影は、国際航業株式会社、株式会社ハイマーテックに委託した。

6．本書の執筆にあたって、次の方々から御指導・御助言を賜った。記して感謝申し上げます。

（敬称略・五十音順）

穴澤義功・伊藤隆三・岡村道雄・小林圭一・小松正夫・坂井秀弥・坂本真弓・辻誠一郎
土田房貴・冨樫泰時・新野直吉・長谷川潤一・見上喜孝・八重樫忠郎・渡辺誠

7．本書の執筆は、第２章と第５章を村上義直の協力を得て進藤紀が、第３章は藤田賢哉の協力を得て進藤が、その他を進藤が執筆し、編集は進藤が行った。

8．調査の内容については、一部が年報等で公表されているが、本書の内容を正式のものとする。

凡　　例

1．遺構番号は、その種類ごとに略記号を付し、種別を問わず検出順に01から付したが、精査と整理作業の過程で欠番としたものもある。また、遺構の種類に用いた略記号は下記の通りである。

ＳＢ‥‥建物跡　　ＳＤ‥‥溝跡　　ＳＥ‥‥井戸跡　　ＳＫ‥‥土坑　　ＳＭ‥‥階段状遺構

ＳＴ‥‥捨て場　　ＳＸ‥‥性格不明遺構　　ＳＫＰ‥‥柱穴様ピット　　ＳＬ‥‥河川跡

2．遺跡基本土層と遺構土層図中の土色表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版　標準土色帖』1998年版に拠った。

3．土層番号は、ローマ数字を遺跡基本土層に、算用数字を遺構土層に使用して区別した。

4．上谷地遺跡の本文・挿図・図版中の遺物番号は、「縄文土器」、「古代以降の土器」、「石器・石製品」、「木製品」、「金属製品・鍛冶関連遺物」毎に１から付し、観察表と対応させた。新谷地遺跡の遺物番号は、種別を通して１から付した。

5．遺物観察表の計測値の単位は「㎝」と「ｇ」で記入し、残存値は〔　〕内に記入した。計測値のある遺物のみを観察表で著した。

6．文章中の遺物量を示す単位の箱（コンテナ）の容量は、18リットルである。

7．水さらし場遺構（ＳＤ18）及び井戸跡（ＳＥ30）の実測図は、土器は赤線、石器及び礫は青線を使用し区別した。

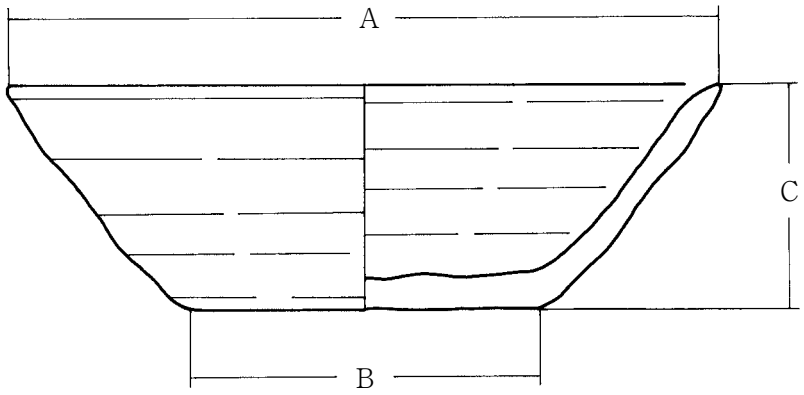
8．ＳＬ14より下位の、遺物包含層は略号のみで番号を付さず「ＳＬ」とし、ＳＬ06・14と区別した。

9．遺構・遺物実測図で使用したスクリーントーンは下記の通りである。

焼土範囲　　炭化物範囲　　自然面

砥面・擦面　　炭化範囲　　ガラス化範囲

10．坏の法量計測基準は下図のとおりである。



A：口径　B：底径　C：器高　　底径指数：$\frac{B}{A}$

高径指数：$\frac{C}{A}\times100$

目　　次

巻頭図版

序

例言……ii

凡例……iii

目次……iv

挿図・表・図版目次……vi

はじめに

第１節　調査に至る経過……1

第２節　調査要項……2

遺跡の環境

第１節　遺跡の位置と立地……4

第２節　歴史的環境……6

上谷地遺跡

第１章　発掘調査の概要

第１節　遺跡の概観……13

第２節　調査の方法……13

第３節　調査の経過……13

第４節　整理作業の方法と経過……15

第２章　沖積地部分調査の記録

第１節　沖積地部分の基本土層……16

第２節　検出遺構と出土遺物……18

1　縄文時代の遺構と遺物……18

2　平安時代の遺構と遺物……46

3　中世以降の遺構と遺物……74

4　柱穴様ピット……78

5　河川跡……81

第３節　遺構外出土遺物……115

第３章　丘陵部分調査の記録

第１節　丘陵部分の基本土層……134

第２節　検出遺構と出土遺物……137

第３節　遺構外出土遺物……149

第４章　自然科学的分析

第１節　上谷地遺跡の自然科学的分析……150

第２節　上谷地遺跡の種実遺体 ……162
第３節　上谷地遺跡から出土した木材の年代と樹種 ……164
第５章　まとめ ……167

新谷地遺跡
第１章　発掘調査の概要
第１節　遺跡の概観 ……189
第２節　調査の方法 ……189
第３節　調査の経過 ……189
第４節　整理作業の方法と経過 ……189
第２章　調査の記録
第１節　基本土層 ……190
第２節　検出遺構 ……192
第３節　遺構外出土遺物 ……192
第３章　まとめ ……194
報告書抄録

挿図目次

第１図　日本海沿岸東北自動車道と関連遺跡……１
第２図　上谷地遺跡調査範囲図……３
第３図　新谷地遺跡調査範囲図……３
第４図　遺跡の位置……４
第５図　遺跡周辺の地形分類図……５
第６図　周辺遺跡位置図……８

上谷地遺跡

第７図　グリッド配置とトレンチ位置図（沖積地部分）…17
第８図　基本土層図（沖積地部分）……17
第９図　水さらし場遺構（ＳＤ18）……20
第10図　ＳＤ18（湧水部・導水部）……21
第11図　ＳＤ18（木組部・排水部）……22
第12図　ＳＤ18（木組みの構築段階１）……23
第13図　ＳＤ18（木組みの構築段階２・遺物の分布）……24
第14図　ＳＤ18（溝部）……25
第15図　ＳＤ18出土縄文土器（１）……27
第16図　ＳＤ18出土縄文土器（２）……28
第17図　ＳＤ18出土縄文土器（３）……29
第18図　ＳＤ18出土縄文土器（４）……30
第19図　ＳＤ18出土石器（１）……31
第20図　ＳＤ18出土石器（２）……32
第21図　ＳＤ18出土石器（３）……33
第22図　ＳＤ18出土石器（４）……34
第23図　ＳＤ18出土石器（５）……35
第24図　ＳＤ18木組み部材……36
第25図　沖積地部分遺構配置図……37
第26図　捨て場（ＳＴ20）・土坑（ＳＫ22・32）……39
第27図　ＳＥ30出土縄文土器（１）……40
第28図　ＳＥ30出土縄文土器（２）……41
第29図　ＳＥ30出土縄文土器（３）
　・ＳＴ20出土縄文土器（１）……42
第30図　ＳＴ20出土縄文土器（２）……43
第31図　ＳＥ30出土石器……44
第32図　ＳＴ20出土石器……45
第33図　掘立柱建物跡（ＳＢ19）……50
第34図　調査区南側の遺構配置……51
第35図　溝跡（ＳＤ05・26）……52
第36図　ＳＤ05・26遺物出土状況……53
第37図　溝跡（ＳＤ25）・土坑（ＳＫ27）……54
第38図　井戸跡（ＳＥ30）……55
第39図　土坑（ＳＫ17）……56
第40図　性格不明遺構（ＳＸ03）……57
第41図　ＳＤ05出土土師器（１）……58
第42図　ＳＤ05出土土師器（２）・須恵器……59
第43図　ＳＤ25・26出土土器、ＳＥ30出土土師器（１）…60
第44図　ＳＥ30出土土師器（２）……61
第45図　ＳＥ30出土土師器（３）……62
第46図　ＳＥ30出土土師器（４）・須恵器、
　ＳＫ17出土土師器……63
第47図　ＳＫ17・27出土土師器・須恵器、
　ＳＥ30出土石器（２）……64
第48図　ＳＥ30出土石器（３）・ＳＫ17出土石器……65
第49図　ＳＢ19柱材（Ｐ７）……66
第50図　ＳＢ19柱材（Ｐ４）……67
第51図　ＳＤ05出土木製品（１）……68
第52図　ＳＤ05出土木製品（２）……69
第53図　ＳＤ05出土木製品（３）……70
第54図　ＳＤ05出土木製品（４）・ＳＤ26出土木製品……71
第55図　ＳＥ30出土木製品……72
第56図　ＳＫ17・27出土木製品……73
第57図　溝跡（ＳＤ09～11）・性格不明遺構（ＳＸ07）……75
第58図　溝跡（ＳＤ15）・階段状遺構（ＳＭ31）……76
第59図　性格不明遺構（ＳＸ02・16）……77
第60図　柱穴様ピット（１）……79
第61図　柱穴様ピット（２）……80
第62図　河川跡（ＳＬ06・14）……83
第63図　ＳＬ06遺物出土状況……84
第64図　ＳＬ06・14（１）……85
第65図　ＳＬ06・14（２）……86

第66図　ＳＬ06・14（３）……87
第67図　ＳＬ06・14（４）……88
第68図　ＳＬ06・14（５）……89
第69図　ＳＬ出土縄文土器（早期末～前期１）……90
第70図　ＳＬ出土縄文土器（早期末～前期２）……91
第71図　ＳＬ出土縄文土器（前期～後期）……92
第72図　ＳＬ出土縄文土器（後期）
・ＳＬ14出土縄文土器（前期・後期）……93
第73図　ＳＬ06出土土師器・須恵器、
ＳＬ出土石器（１）……94
第74図　ＳＬ出土石器（２）……95
第75図　ＳＬ出土石器（３）……96
第76図　ＳＬ出土石器（４）……97
第77図　ＳＬ出土石器（５）……98
第78図　ＳＬ出土石器（６）……99
第79図　ＳＬ出土石器（７）・ＳＬ14出土石器（１）……100
第80図　ＳＬ14出土石器（２）……101
第81図　ＳＬ14出土石器（３）……102
第82図　ＳＬ14出土石器（４）……103
第83図　ＳＬ14出土石器（５）……104
第84図　ＳＬ14出土石器（６）……105
第85図　ＳＬ14出土石器（７）……106
第86図　ＳＬ06出土石器・木製品（１）……107
第87図　ＳＬ06出土木製品（２）……108
第88図　ＳＬ06出土木製品（３）……109
第89図　ＳＬ06出土木製品（４）……110
第90図　ＳＬ06出土木製品（５）……111
第91図　ＳＬ06出土木製品（６）……112
第92図　ＳＬ06出土木製品（７）……113
第93図　ＳＬ06出土木製品（８）……114
第94図　遺構外出土縄文土器・土師器・須恵器（１）……118
第95図　遺構外出土須恵器（２）……119
第96図　遺構外出土須恵器（３）・中世陶磁器……120
第97図　遺構外出土石器（１）……121
第98図　遺構外出土石器（２）……122
第99図　遺構外出土石器（３）……123
第100図　遺構外出土石器（４）……124
第101図　遺構外出土石器（５）……125
第102図　遺構外出土石器（６）……126
第103図　遺構外出土石器（７）……127
第104図　遺構外出土木製品（１）……128
第105図　遺構外出土木製品（２）……129
第106図　遺構外出土木製品（３）……130
第107図　遺構外出土金属製品……131
第108図　鍛冶関連遺物（１）……132
第109図　鍛冶関連遺物（２）……133
第110図　グリッド配置とトレンチ位置図（丘陵部分）…134
第111図　基本土層図（丘陵部分）……135
第112図　遺構配置図（丘陵部分）……136
第113図　溝跡（ＳＤ55･59･85･86）
・性格不明遺構（ＳＸ89）……141
第114図　溝跡（ＳＤ62）・土坑（ＳＫ63）……142
第115図　溝跡（ＳＤ152～155）……143
第116図　竪穴状遺構（ＳＫＩ83）・土坑（ＳＫ88）
・焼土遺構（ＳＮ156）……144
第117図　土坑（ＳＫ50～53）……145
第118図　土坑（ＳＫ54・60・82・148）……146
第119図　土坑（ＳＫ149～151）……147
第120図　遺構外出土石器・銭貨……149
第121図　火山ガラスの屈折率……158
第122図　ＳＤ18主要珪藻化石群集……159
第123図　ＳＤ18主要花粉化石群集……160

新谷地遺跡

第124図　グリッド配置と遺構・トレンチ配置図……190
第125図　基本土層図……191
第126図　溝跡（ＳＤ01）……192
第127図　遺構外出土土器……193
第128図　遺構外出土鍛冶関連遺物……194
付図１　水さらし場遺構（ＳＤ18）
付図２　河川跡（ＳＬ06・14）

表 目 次

第１表　周辺遺跡一覧（１）……9
第２表　周辺遺跡一覧（２）……10
第３表　柱穴様ピット一覧（沖積地部分）……78
第４表　柱穴様ピット一覧（丘陵部分）……148
第５表　放射性炭素年代測定及び樹種同定結果（１）……158
第６表　珪藻分析結果……159
第７表　花粉分析結果……160
第８表　種実分析結果……160
第９表　樹種同定結果……161
第10表　種実遺体同定結果……164
第11表　放射性炭素年代測定及び樹種同定結果（２）……166

図 版 目 次

巻頭図版１　水さらし場遺構（１）
巻頭図版２　水さらし場遺構（２）
巻頭図版３　調査区全景
図版１　遺跡遠景・基本土層・ＳＤ18（１）
図版２　ＳＤ18（２）・ＳＴ20・ＳＢ19・木人形
図版３　ＳＤ05（１）・ＳＥ30（１）
図版４　ＳＤ05（２）・ＳＤ26・ＳＥ30（２）
図版５　ＳＫ17・ＳＭ31・ＳＬ14・ＳＬ06（１）
図版６　ＳＬ06（２）・丘陵部分
図版７　縄文土器（１）
図版８　縄文土器（２）
図版９　縄文土器（３）
図版10　縄文土器（４）・土師器（１）
図版11　土師器（２）・須恵器（１）
図版12　土師器（３）・須恵器（２）
図版13　須恵器（３）・中世陶磁器・石器（１）
図版14　石器（２）・木製品（１）
図版15　木製品（２）・金属製品・丘陵部出土遺物
図版16　検出種実
図版17　新谷地遺跡

はじめに

第１節　調査に至る経過

日本海沿岸東北自動車道は、新潟市から青森市にかけての日本海沿岸や県内の高速交通体系の改善等、地域の生産活動と県民生活に必要な情報や資源の交流を促進することを目的として計画された総延長340㎞の高速道路である。このうち、秋田県内では、国土交通省によって一部事業化されている象潟仁賀保道路及び仁賀保本荘道路、秋田外環状道路、琴丘能代道路、大館西道路と連結して、小坂ＪＣＴで東北自動車道に接続する。1997（平成９年）２月に新潟市～青森市までが日本海沿岸東北自動車道として路線指定され、このうちの秋田南Ｉ・Ｃ～能代Ｉ・Ｃ間は2002（平成14）年９月、岩城Ｉ・Ｃ～秋田空港Ｉ・Ｃ間は同年10月に開通している。

上谷地・新谷地遺跡に係る本荘～岩城間の21.3㎞については、1997（平成９）年２月15日付けの第13次施行命令を経て、路線が発表された。これに伴い、日本道路公団東北支社仙台建設局長から、秋田県教育委員会教育長あてに、計画路線内での埋蔵文化財の分布調査の実施依頼があった。

これを受けて秋田県教育委員会は、路線上の埋蔵文化財確認のため、2000（平成12）年５・６・９・10月に分布調査を実施し、その結果、路線内に周知の遺跡である上谷地遺跡と新たに発見した新谷地遺跡・中ノ目遺跡が存在することが明らかとなった。

上谷地遺跡については、工事区域内の32,000㎡を対象範囲として、2000（平成12）年11月に確認調査を行い、その結果、遺跡の水田部分は平安時代の集落跡、丘陵部分は中世の城館跡で、工事区域内の11,500㎡について発掘調査が必要であることがわかった。発掘調査は、2001（平成13）年６～11月に水田部分の8,600㎡を対象に第一次調査、2002（平成14）年８～10月に丘陵部分の1,700㎡を対象に第二次調査、2003（平成15）年６～７月に丘陵部分の350㎡を対象に第三次調査を行った。

新谷地遺跡については、工事区域内の10,100㎡を対象範囲として、2001（平成13）年７月に確認調査を行い、その結果、遺跡は平安時代の集落跡で、工事区域内の1,200㎡について発掘調査が必要であることがわかった。発掘調査は、2002（平成14）年９～10月に280㎡を対象として行った。

上谷地・新谷地遺跡の発掘調査が行われた平成13～15年には、同事業に伴なって平成14年に大坪遺跡、平成15年に岩倉館跡・苧種坂Ⅲ遺跡・樋ノ口遺跡・堤沢山遺跡（いずれも本荘市）の発掘調査も実施している。

第１図　日本海沿岸東北自動車道と関連遺跡

第2節　調査要項

上谷地遺跡

遺　跡　名　　上谷地遺跡（略記号：６ＫＹＣ）

遺跡所在地　　秋田県本荘市土谷字上谷地２番地外

調査期間　　平成13年度　平成13年6月19日～11月12日

平成14年度　平成14年8月5日～10月4日

平成15年度　平成15年6月21日～7月18日

調査目的　　日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査

調査面積　　10,650㎡

平成13年度　8,600㎡　　平成14年度　1,700㎡　　平成15年度　350㎡

調査主体者　　秋田県教育委員会

調査担当者　　平成13年度

村上　義直（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課文化財主事）

油川龍一郎（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課学芸主事）

深浦　真人（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課学芸主事）

進藤　　紀（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課学芸主事）

菊池　朋宏（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課非常勤職員）

小澤　昌広（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課非常勤職員）

小納谷　亮（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課非常勤職員）

佐藤　健志（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課非常勤職員）

平成14年度

進藤　　紀（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課学芸主事）

片岡　稔彦（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課非常勤職員）

小納谷　亮（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課非常勤職員）

平成15年度

藤田　賢哉（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課学芸主事）

山村　　剛（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課学芸主事）

猿田　良昭（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課調査・研究員）

高橋　浩樹（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課調査・研究員）

長谷川幹子（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課調査・研究員）

総務担当者　　平成13・14年度

土橋　謙一（秋田県埋蔵文化財センター総務課主事）

平成15・16年度

藤原　康悦（秋田県埋蔵文化財センター総務課副主幹）

調査協力機関　　日本道路公団東北支社秋田工事事務所　本荘市教育委員会

新谷地遺跡

遺　跡　名　　新谷地遺跡（略記号：６ＳＹＣ）

遺跡所在地　　秋田県本荘市土谷字新谷地 90 番地外

調査期間　　平成 14 年度　平成 14 年９月 11 日～ 10 月１日

調査目的　　日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査

調査面積　　280㎡

調査主体者　　秋田県教育委員会

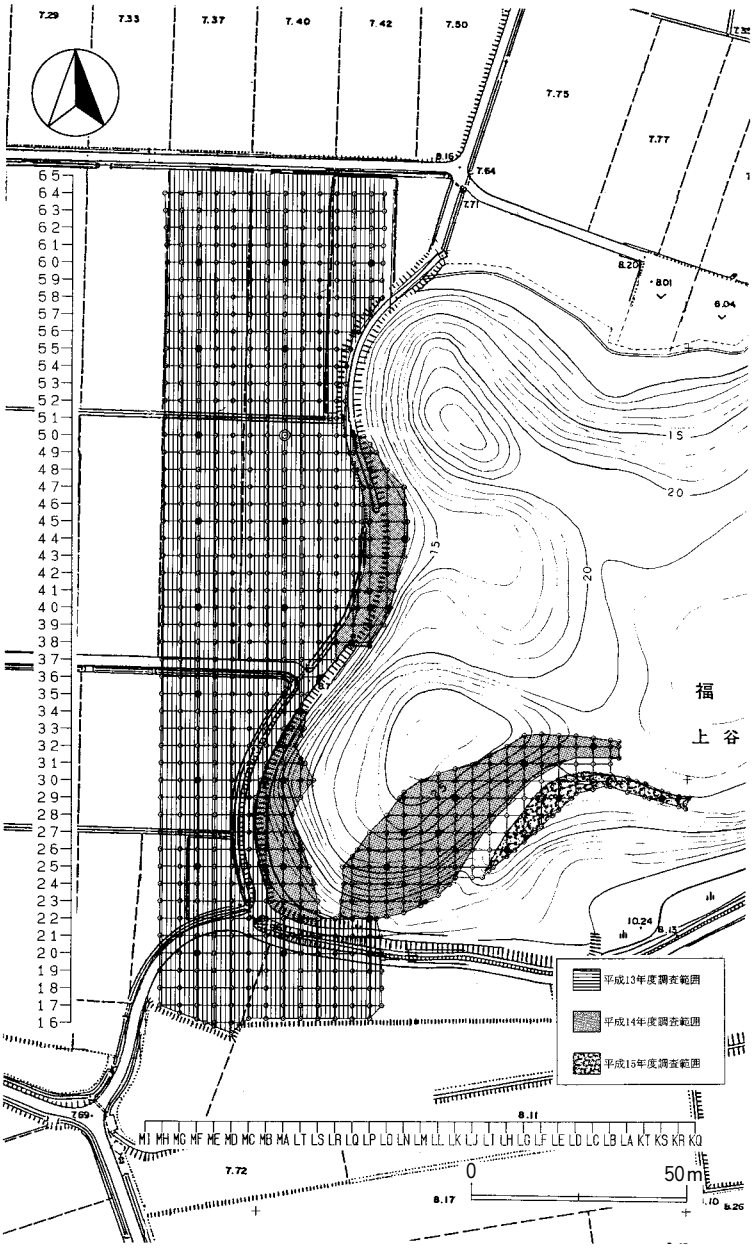
調査担当者　　菊池　　晋（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課学芸主事）

磯村　　亨（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課学芸主事）

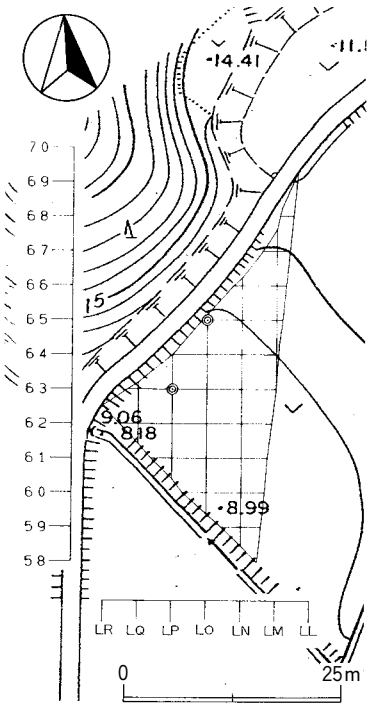
堀井　帝仁（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課非常勤職員）

総務担当者　　土橋　謙一（秋田県埋蔵文化財センター総務課主事）

調査協力機関　　日本道路公団東北支社秋田工事事務所　本荘市教育委員会



第２図　上谷地遺跡調査範囲図



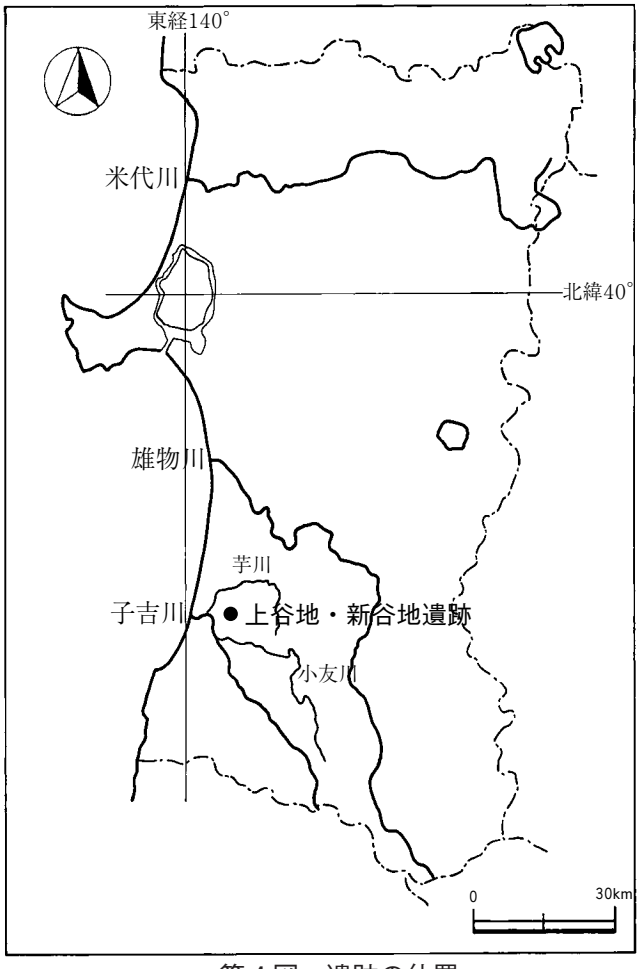
第３図　新谷地遺跡調査範囲図

遺跡の環境

第１節　遺跡の位置と立地

上谷地遺跡と新谷地遺跡の所在する秋田県本荘市は、日本海に面する秋田県沿岸地方の南端寄りに位置し、市域は東西方向に約 16㎞、南北方向に約 20㎞、周囲約 91.5㎞、総面積は約 189．50㎢である。海岸線に沿って国道７号線が延び、これから国道 105 号線、107 号線、108 号線が放射線状に延びており、秋田県内陸都市を結ぶ拠点、また、日本海側と太平洋側とを結ぶ交通の要となっている。市は、鳥海山を水源とする子吉川河口の本荘平野に広がり、元禄年間から記録に残る穀倉地帯であるとともに、日本海に面した港をもつ交易都市でもある。

上谷地遺跡と新谷地遺跡は隣接しており、ＪＲ羽越本線羽後本荘駅の東約 1.5㎞、日本海から約 5.5㎞に位置する。上谷地遺跡が北緯 39°23′11″、東経 140°4′51″に、新谷地遺跡が北緯 39°23′26″、東経 140°4′53″に位置する。上谷地遺跡は本荘市北東部の土谷地区に所在し、遺跡の西に流れる子吉川の河口から、川沿いに広がる本荘平野の北東部に位置し、鬼倉山地から半島状に延びた標高約 20 ｍの寺岡と呼ばれる丘陵地とこれに接する標高約８ｍの水田に立地し、西へ緩く傾斜している。遺跡から西に約 0.5㎞に流れる子吉川は、南へ約５㎞の地点で石沢川と合流し、さらに北東約２㎞下流で芋川に合流して日本海に注いでいる。遺跡の所在する土谷地区は、北西方向には北由利丘陵を望み、南北には鬼倉山からの丘陵、真西には標高約 30 ｍの和田山に周囲を囲まれている。「土地分類基本調査本荘」によると、東から権現山山地（Ｉａ）鬼倉山山地（Ｉｂ）、出羽丘陵に連なる中央丘陵（Ⅱｃ）、子吉川・芋川低地（Ⅲａ・Ⅲｃ）、北由利・子吉川丘陵地（Ⅱｂ・Ⅱｄ）があり、その西に本荘・西目砂丘地（Ⅲｇ・Ⅲｈ）があって海岸線に至っている。鬼倉山（601 ｍ）を中心とする山地は、南東－西北方向に稍々屈曲して発達しており、等値係線は西麓で約 200 ｍ、東麓で約 300 ｍで囲まれた周縁は丘陵地形面に囲まれ、主分水嶺の鬼倉山、その北の笹森山、黒森山は山頂傾斜部が発達している。権現山（317 ｍ）を中心とする山地は、鬼倉山地の北に位置し、200 ｍの等値係線で紡錘状に囲まれ発達している。主尾根の権現山、駒泣峠の北の独立三角点（317 ｍ）は全般に 150 ～ 200 ｍの中小起伏山地であるが、中張断層面が発達し最高位侵食面を形成しているため、中ノ俣丘陵地との変換部や不動ノ滝背斜は



第４図　遺跡の位置

急傾斜となっている。この山地・丘陵部に源を発する中小河川が芋川、小友川、石沢川に注ぎ、子吉川に合流して日本海に達している。

子吉川・芋川低地に広がる本荘平野は、中新世から鮮新世にかけての第３系からなる低山地に包囲されており、南北に細長い形は周辺の第３系の背斜軸の方向に重なっている。子吉川低地は白幡、鎌倉向斜軸の本荘平野下底への沈入収斂しつつ東西方向へのシーソー運動を随伴し、後氷期の海進との三因子に対応する地形変動を来している。平野は、子吉川の旧流路によって低地の広い範囲に沖積地が構成されている。市街地周辺の標高約 10 ｍの平坦な地形面は、芋川と子吉川水系を通じて搬入された泥炭、泥炭質シルト、粘土、および砂の河成や湖沼堆積物が累積し、上流に向かって傾斜約１／1000 で緩やかに高くなる堆積地形となっている。子吉川流域の南部では、氾濫原成の砂やシルトが卓越している。上谷地遺跡は、子吉低地の北端に立地し、丘陵から流れ出す沢によって形成された扇状地形を呈しており、西側には水田が広がっている。

第５図　遺跡周辺の地形分類図

Ⅰ　山地

（Ⅰａ）権現山山地　　（Ⅰｂ）鬼倉山山地

Ⅱ　丘陵地

（Ⅱａ）岩城丘陵地　（Ⅱｂ）北由利丘陵地　（Ⅱｃ）中央丘陵地　（Ⅱｄ）子吉丘陵地
（Ⅱｅ）葛法丘陵地　（Ⅱｆ）石橋丘陵地　（Ⅱｇ）中ノ俣丘陵地　（Ⅱｈ）扇守丘陵地
（Ⅱｉ）上川大内丘陵地（Ⅱｊ）岩野目沢丘陵地（Ⅱｋ）小羽広丘陵地　（Ⅱｌ）桧山丘陵地

Ⅲ　台地・低地

（Ⅲａ）子吉低地　（Ⅲｂ）石沢川低地　（Ⅲｃ）芋川低地　（Ⅲｄ）衣川低地
（Ⅲｅ）西目低地　（Ⅲｆ）由利砂丘地　（Ⅲｇ）本荘砂丘地　（Ⅲｈ）西目砂丘地
（Ⅲｉ）海浜砂丘地

第２節　歴史的環境

由利本荘地区は、文献上「由理柵」「由理駅」「蚶方駅」があった地域として郷土史・考古学上大きな関心が寄せられているほか、縄文時代からの各時代にわたる遺跡が立地している。これらの遺跡について、秋田県教育委員会発行の『秋田県遺跡地図（由利地区版）』『秋田県の中世城館』『遺跡詳細分布調査報告書』に基づいて概観する。

現在までのところ、本荘市内においては旧石器時代の遺跡は確認されていないが、近接する大内町才ノ神や鳥海町国見等で旧石器時代の遺跡が確認されている。

縄文時代の遺跡としては、早期の菖蒲崎貝塚（５）・子吉川底遺跡（６）・神沢遺跡、前期の船岡台遺跡（16）・土谷白山遺跡（34）・土花遺跡（41）・オシダテ遺跡（42）・親川冷水遺跡・深沢遺跡・菖蒲崎貝塚・子吉川底遺跡、中期の田尻遺跡（８）・薬師堂遺跡（13）・鳴瀬遺跡（36）・船岡台遺跡・梵天野遺跡、後期の大浦遺跡（２）・田尻野遺跡（９）・親川フタノ沢遺跡・熊野神社遺跡・上谷地遺跡、晩期の長老沼遺跡（10）、東町遺跡（11）・成沢台遺跡（38）・小友金山遺跡・大浦遺跡・田尻野遺跡等が確認されている。菖蒲崎貝塚は、子吉川支流の芋川河口左岸に所在し、貝層の直上と直下で縄文時代早期末葉の土器片が出土し、貝層の 99 パーセントを汽水性のヤマトシジミが占めていた。他に、ウグイ等の魚類、ガン・カモ類に属する鳥類遺体も確認された。船岡台遺跡は、本荘市南西部の丘陵地に所在し、縄文中期の竪穴住居跡１棟、前期末の土坑８基が確認され、大木式土器、縄文前期円筒下層式土器、北陸系前期末頃の土器や魚形文刻石等が出土している。上谷地遺跡は、従来から古代の遺跡とされてきたが､平成 13・14 年の調査で縄文時代後期にトチのアク抜きをした水さらし場遺構が確認された。

弥生時代の遺跡としては土花遺跡（35）・親川遺跡で遺物が確認されているのみで、当時の様子を解明するには至っていない。

古代の遺跡としては、土谷遺跡（７）・葛法窯跡（19）・新ウルイノ遺跡（27）・横山遺跡（28）・大覚遺跡（29）・新谷地遺跡・岩瀬堤遺跡（30）・宮崎遺跡（43）・子吉大堤遺跡（51）・新漆畑遺跡・中ノ目遺跡・樋ノ口遺跡・雪車町遺跡・上谷地遺跡・立花遺跡等が確認されている。葛法窯跡は、本荘市南西丘陵地の麓に所在し、８世紀末～９世紀初頭に操業の中心を置く半地下式の登り窯が３基検出された。遺物は全て須恵器で、坏・台付坏・台付碗・壺・甕が出土した。坏はロクロ水挽きによって成形され、切り離しは回転ヘラ切り、切り離し後の再調整のないものであった。横山遺跡は、本荘市北東の沖積地に所在し､10 世紀の水田跡が住居跡とともに発見されている。十和田ａ火山灰の堆積状態からこの水田跡は、915 年以前に営まれたと考えられる。古代の水田跡は、県内では初の発見例である。上谷地遺跡の所在する土谷地区は、古くから多数の遺物が出土しており、特に昭和６年６月 13 日の「本荘時報」では大正年間の耕地整理中の角材発見が伝られ、本荘市西部の古雪地区と共に由理柵の推定地のひとつといわれている。本荘市教育委員会では、４次にわたって上谷地遺跡の分布調査を行い、北宋銭・土師器・須恵器・箸片・加工痕の残る板材が出土した。また、平成 13 ～ 15 年度の調査では、掘立柱建物跡・井戸跡等から、北宋銭・土師器・須恵器・木製品等が出土した。大覚遺跡からは祭祀用木製品、新漆畑遺跡からはフイゴの羽口や大量の鉄滓、土谷遺跡からはフイゴの羽口・大量の鉄滓や須恵器系中世陶器、新谷地遺跡からは、土師器・須恵器や鉄滓が出土している。

中世の遺跡には、集落跡として大坪遺跡（88）・大浦遺跡・土花遺跡、鋳造遺跡の堤沢山遺跡がある。大浦遺跡は芋川河口から 900 m上流の右岸に位置する。13 世紀～ 15 世紀の陶磁器や銭貨と共に、掘立柱建物跡、鍛冶炉跡、竪穴状遺構、道路跡が検出された。立花遺跡は、万願寺地区の南部に所在し、珠洲系陶器や中国製の磁器とともに、建物跡・井戸跡や火葬墓が検出されている。大坪遺跡は、子吉低地の東端に位置し、溝跡から中国産の青磁・白磁、常滑焼・渥美焼、須恵系中世陶器等が出土している。堤沢山遺跡は新谷地遺跡の北西側に隣接し、梵鐘等の仏具の生産施設が検出されている。また、平岡館（１）・川口館（３）・岩倉館（４）・子吉館（12）・埋田小館（14）・蝦夷館（15）・花館（17）・葛法山館（18）・鳴瀬館（20・39）・荒城館（21）・万願寺館（22）・株切館（24）・本荘城（26）・エゾ館（44）・黒瀬館・元館・岩谷古館・岩谷麓古館・中館・館前館・樋ノ口遺跡等多くの館跡が発見されている。通説では、由利氏が平安時代末期から鎌倉時代の初期までこの地域を支配したとされ、『吾妻鏡』には文治５（1189）年の奥州合戦の際に、鎌倉方に捕らえられたがその立居が認められ、本領安堵された由利惟平の記事が見られる。建保元（1213）年の和田合戦の後は、幕府女房の大弐局が由利郡地頭職となり、一族の小笠原氏に受け継がれ、分割譲渡を繰り返すなかで地縁的結合をもった庶子が党的性格の独立勢力になったものと推測される。北条得宗家の専制･鎌倉幕府滅亡･南北朝の争乱を経て、小豪族が割拠する「由利十二頭」の時代となる。「由利十二頭」の時代は、天正 18（1590）年の奥州仕置･太閤検地で終わりを迎え、中央政権の地域支配として由利五人衆が設定されたが、慶長７（1602）年には、関ヶ原の戦の功から最上義光の支配となり、重臣の楯岡満茂が入部した。この時に、満茂が統治の拠点として尾崎山に築いた本荘城を中心に、江戸期を通じて近代城下町として本荘は発展を遂げてきた。

《参考文献》

秋田県 『土地分類基本調査　本荘』 1980(昭和 53)年

秋田県教育委員会 『秋田県遺跡地図（由利地区版)』 2001(平成 13)年

秋田県教育委員会 『秋田県の中世城館』 秋田県文化財調査報告書第 86 集　1981(昭和 56)年

秋田県教育委員会 『大浦遺跡－芋川災害復旧等関連緊急事業に係る埋蔵文化財調査報告書－』 秋田県文化財調査報告書第 336 集　2002(平成 14)年

秋田県教育委員会 『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要第７号』 1992(平成４)年

秋田県教育委員会 『遺跡詳細分布調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第 342 集　2002(平成 14)年

秋田県教育委員会 『遺跡詳細分布調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第 365 集　2003(平成 15)年

本荘市教育委員会 『遺跡詳細分布調査報告書』 1985(昭和 60)年

本荘市教育委員会 『上谷地遺跡詳細分布調査報告書－第３次調査－』 1997(平成９)年

本荘市教育委員会 『上谷地遺跡詳細分布調査報告書－第４次調査－』 1998(平成 10)年

本荘市教育委員会 『上谷地遺跡　新谷地遺跡　－内越地区担い手育成基盤整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』 本荘市文化財調査報告書 19 集　2003(平成 15)年

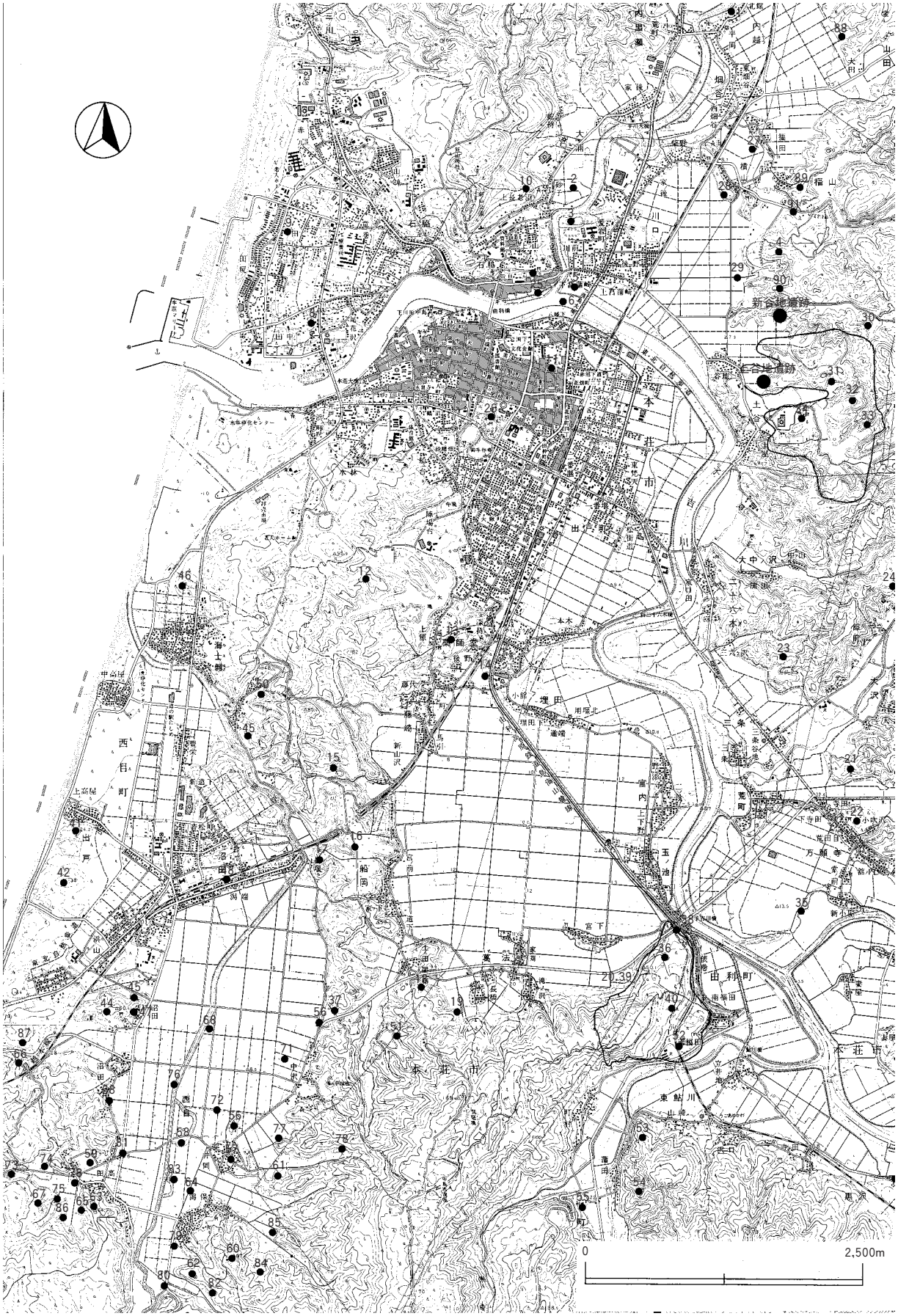
本荘市 『本荘市史通史編・Ⅰ』 1984(昭和 59)年

本荘市 『本荘市史史料編・Ⅰ上』 1984(昭和 59)年

本荘市 『本荘市史史料編・Ⅰ下』 1985(昭和 60)年

奈良修介・豊島　昴 『秋田県の考古学』 吉川弘文館　1967(昭和 42)年

大和久震平・奈良修介 『秋田県史　考古編』 1977(昭和 52)年



第 6 図　周辺遺跡位置図

番号	遺跡名	遺跡地図登録番号	所　在　地	種別	現状	主な遺構・遺物
1	平岡館	５－８	本荘市内越字平岡	館跡	神社他	空堀・土塁
2	大浦	５－１３	本荘市大浦字八走	集落跡	畑地・水田	縄文土器（後期・晩期）・石器 土師器・須恵器・木器
3	川口館	５－１４	本荘市川口字愛宕山	館跡	学校他	空堀・須恵器片
4	岩倉館	５－１５	本荘市川口字岩倉	館跡	山林・採石地	陶磁器・卒塔婆・五輪塔・鉄製品
5	菖蒲崎貝塚	５－１６	本荘市川口字下菖蒲崎	貝塚	河川敷	縄文土器(早期・前期）・シジミ貝・魚骨
6	子吉川底	５－１７	本荘市川口字下菖蒲崎付近川底	遺物包含地	川底	縄文土器片
7	土谷	５－１８	本荘市土谷字田ノ沢	遺物包含地	山林・畑地	製鉄炉跡・珠洲系陶器・唐津焼・羽口・鉄滓
8	田尻	５－１９	本荘市石脇字田尻	遺物包含地	畑地	縄文土器片（中期末：大木9･10式）
9	田尻野	５－２０	本荘市石脇字田尻野	遺物包含地	宅地・畑地	縄文土器片（後期・晩期）
10	長老沼	５－２１	本荘市石脇字上長老沼	遺物包含地	宅地・畑地	縄文土器片（晩期）・石匙・石斧・石鏃
11	東町	５－２２	本荘市東町	遺物包含地	宅地	縄文土器片（晩期）
12	子吉館	５－２３	本荘市出戸町字水林	館跡	山林	空堀・土塁・馬場跡
13	薬師堂	５－２４	本荘市薬師堂字堂ノ下	遺物包含地	原野・畑地・宅地	縄文土器片
14	埋田小館	５－２５	本荘市埋田字小館	館跡	畑地・草地・雑木林	
15	蝦夷館	５－２６	本荘市藤崎字苦竹沢	館跡	山林	
16	船岡台	５－２７	本荘市船岡字船岡台	遺物包含地	畑地・雑木林	縄文土器（前期末・中期：円筒下層式・吹浦式・大木式）
17	花館	５－２８	本荘市船岡字船岡台	館跡	草地	
18	葛法山館	５－２９	本荘市葛法字山館	館跡	山林	
19	葛法窯跡	５－３０	本荘市葛法字前坂	窯跡	山林	須恵器坏・高台坏
20	鳴瀬館	５－３１	本荘市葛法字鳴瀬	遺物包含地	山林・畑地	縄文土器片
21	荒城館	５－３３	本荘市荒町字扇田	館跡	畑地・草地	腰郭
22	万願寺館	５－３４	本荘市万願寺字荒目田	館跡	山林・水田・宅地	帯郭・空堀
23	三条山	５－３５	本荘市三条字定ケ沢	遺物包含地	山林	縄文土器片
24	株切館	５－５０	本荘市館前字株切館	館跡	山林	
25	石脇中町	５－６３	本荘市石脇字石脇	遺物包含地	宅地・畑地	縄文土器片
26	本荘城	５－６４	本荘市出戸町字尾崎	城跡	公園	縄文土器片・石器・陶器片・磁器片
27	新ウルイノ	５－６５	本荘市畑谷字新ウルイノ	遺物包含地	水田	土師器片
28	横山	５－６６	本荘市福山字横山	集落跡	水田	水田跡・竪穴住居跡・土師器片・須恵器片
29	大覚	５－６７	本荘市川口字大覚	遺物包含地	水田	土師器片
30	岩瀬堤	５－７０	本荘市土谷字管沼	遺物包含地	水田	須恵器片
31	土谷田ノ沢	５－７１	本荘市土谷字田ノ沢	遺物包含地	山林	鉄滓
32	土谷堤下	５－７２	本荘市土谷字堤下	遺物包含地	山林	
33	土谷堂ケ沢	５－７３	本荘市土谷字堂ケ沢	遺物包含地	山林	
34	土谷白山	５－７４	本荘市土谷字小深田	遺物包含地	山林	縄文土器（前期）
35	土花	５－７５	本荘市万願寺字土花	遺物包含地	水田	柱穴
36	鳴瀬	５－７９	本荘市葛法字下鳴瀬	遺物包含地	山林	
37	碁石	５－８１	本荘市船岡字碁石	遺物包含地	原野	
38	成沢台	４０－１	由利郡由利町南福田字下鳴瀬	遺物包含地	畑地・果樹園・道路	縄文土器片（晩期）・石器
39	鳴瀬館	４０－２	由利郡由利町南福田字中鳴瀬	館跡	畑地・原野・山林	土塁・陶器片・鉄滓・焼米・縄文土器片・土師器片
40	中鳴瀬	４０－３	由利郡由利町南福田字下鳴瀬	遺物包含地	畑地・原野	溝跡・土坑・羽口・鉄滓・縄文土器片
41	土花	４１－１	由利郡西目町出戸字浜山	貝塚	山林	縄文土器（前期）・石匙・石鏃・石錘・貝類（ヤマトシジミ）
42	オシダテ	４１－２	由利郡西目町出戸字浜山	遺物包含地	山林	縄文土器片（前期）
43	宮崎	４１－３	由利郡西目町沼田字宮崎	遺物包含地	畑地	土師器坏・高坏・長胴甕・須恵器・北大式土器・人骨
44	エゾ館	４１－４	由利郡西目町沼田字大沼田	館跡	山林	縄文土器片（前期）
45	鉢沢	４１－２２	由利郡西目町海士剥字鉢沢	遺物包含地	畑地	縄文土器片
46	御月森	４１－２６	由利郡西目町海士剥字御月森	遺物包含地	公園	縄文土器片
47	汐下	４１－２８	由利郡西目町沼田汐下	遺物包含地	宅地	縄文土器片

第１表　周辺遺跡一覧（１）

番号	遺跡名	遺跡地図登録番号	所　在　地	種別	現況	内　容
48	弁天前	４１－３１	由利郡西目町沼田字弁天前	番屋跡	畑地	干拓番屋跡
49	北沢	４１－３２	由利郡西目町海士剥字北沢	遺物包含地	水田	縄文土器片・石棒
50	碁石	４１－３４	由利郡西目町西目字碁石	遺物包含地	原野	縄文土器片
51	子吉大堤	５－７８	本荘市船岡字大堤	遺物包含地	溜池	土師器片・羽口・鉄滓
52	南福田	４０－４	由利郡由利町町村字鳴瀬台	遺物包含地	学校用地	縄文土器片（中期・後期）・石器
53	山崎館	４０－５	由利郡由利町東鮎川字上山崎	館跡	神社・山林他	土塁・空堀
54	蒲田館	４０－６	由利郡由利町東鮎川字蒲田前	館跡	神社・畑地・山林他	堅堀・土塁・空堀
55	瑞光寺経塚	４０－７	由利郡由利町町村字唐岸城	経塚	神社他	経石
56	客殿森	４１－７	由利郡西目町西目字客殿	遺物包含地	山林・畑地	縄文土器片（中期）・土師器片・須恵器片
57	井岡	４１－８	由利郡西目町西目字井岡	遺物包含地	宅地・水路	土師器片・須恵器片・子持勾玉・墨書土器
58	鷹橋	４１－９	由利郡西目町沼田字小深田	遺物包含地	水田	土師器片・須恵器片
59	根子の沢	４１－１０	由利郡西目町西目字根子の沢	遺物包含地	畑地	縄文土器片（中期･後期）・石棒・石匙・石皿・石鏃
60	潟保館	４１－１１	由利郡西目町西目字古舘	館跡	畑地・公園	腰郭・空堀
61	豊後館	４１－１７	由利郡西目町西目字豊後沢	館跡	山林・畑地	主郭
62	大学館	４１－１８	由利郡西目町西目字雨池	館跡	山林・原野・畑地	腰郭・空堀
63	田高館	４１－１９	由利郡西目町西目字田高	館跡	山林・原野	礎石
64	中ノ目Ⅰ	４１－２１	由利郡西目町西目字中ノ目	遺物包含地	水路・道路	縄文土器片（前期・中期）・石匙・石鏃・石錘
65	寺ケ沢Ⅰ	４１－２３	由利郡西目町西目字寺ケ沢	寺院跡	山林	
66	大股	４１－２４	由利郡西目町出戸字寺大股	寺院跡	山林	礎石
67	大平	４１－２５	由利郡西目町西目字大平	寺院跡	果樹園	石碑
68	沼田	４１－３３	由利郡西目町沼田字沼田町道	遺物包含地	道路	土師器片・須恵器片
69	向谷地	４１－３５	由利郡西目町西目字向谷地	遺物包含地	水田	土師器片・須恵器片
70	新櫃	４１－３６	由利郡西目町沼田字新堰	遺物包含地	水田	土師器片・須恵器片
71	中沢	４１－３７	由利郡西目町西目字中沢	遺物包含地	水田	縄文土器片
72	川袋	４１－３８	由利郡西目町西目字川袋	遺物包含地	水田	縄文土器片（中期）・土師器片・須恵器片
73	西ノ沢	４１－３９	由利郡西目町西目字西ノ沢	遺物包含地	溜池	縄文土器片（中期）・石棒
74	大西目Ⅰ	４１－４０	由利郡西目町西目字大西目	遺物包含地	水田	縄文土器片
75	内山	４１－４１	由利郡西目町西目字内山	遺物包含地	水田・畑地	縄文土器片（中期）・土師器片・須恵器片
76	大西目Ⅱ	４１－４２	由利郡西目町西目字大西目	遺物包含地	水田・水路	土師器片・須恵器片・古銭
77	堅田	４１－４３	由利郡西目町西目字堅田	遺物包含地	水田	須恵器片
78	堅田沢	４１－４５	由利郡西目町西目字堅田沢	遺物包含地	山林	縄文土器片
79	大森	４１－４６	由利郡西目町西目字大森	遺物包含地	水田	土師器片・須恵器片
80	大森橋	４１－４７	由利郡西目町西目字大森	遺物包含地	水路	縄文土器片（晩期）・土師器片・須恵器片
81	小深田	４１－５２	由利郡西目町西目字小深田	遺物包含地	水田	土師器片・須恵器片
82	湯ノ沢	４１－５５	由利郡西目町西目字湯ノ沢	遺物包含地	水田	土師器片・須恵器片
83	中ノ目Ⅱ	４１－５６	由利郡西目町西目字中ノ目	遺物包含地	水田	土師器片・須恵器片
84	館ノ後	４１－５７	由利郡西目町西目字館ノ後	遺物包含地	山林	縄文土器片
85	前ケ沢	４１－５８	由利郡西目町西目字前ケ沢	遺物包含地	水田・畑地	土師器片・須恵器片
86	寺ケ沢Ⅱ	４１－５９	由利郡西目町西目字寺ケ沢	遺物包含地	山林	鉄滓・羽口・須恵器片
87	下山	４１－６１	由利郡西目町出戸字下山	番所跡	山林	唐船番所跡
88	大坪		本荘市畑谷字大坪	集落跡 鍛冶生産	水田	溝跡・鍛冶炉・土師器・須恵器・須恵系陶器・常滑焼・渥美焼・青磁・白磁・宋銭・硯・鉄滓・炉壁・羽口
89	樋ノ口		本荘市福山字樋ノ口	集落跡・館跡	山林	櫓跡・空掘・土師器・須恵器・木製品（刀形等）
90	堤沢山		本荘市川口字大学堤沢山	鋳造遺跡	山林	鉄滓・炉壁・鋳型（仏具）・青磁・銭貨・木製品
91	苧種坂Ⅲ		本荘市福山字苧種坂	製鉄	山林	縄文後期（土器）古代～中世（鉄滓・炉壁・羽口）
	上谷地	５－６８	本荘市土谷字上谷地	集落跡	水田・山林	水さらし場遺構・縄文土器・石器 井戸跡・掘立柱建物跡・土師器・須恵器・木製品
	新谷地	５－６９	本荘市土谷字新谷地	遺物包含地	水田	土師器片・須恵器片・鉄滓

第２表　周辺遺跡一覧（２）

上　谷　地　遺　跡

（６ＫＹＣ）

第１章　発掘調査の概要

第１節　遺跡の概観

上谷地遺跡は本荘市土谷地区にあり、ＪＲ羽後本荘駅の北東約1.5㎞に位置する。遺跡から日本海までは約5.5㎞で、遺跡から真西に位置する子吉川河口から川沿いに広がる本荘平野の北東部に立地する。遺跡の東側は寺岡と呼ばれた標高約20ｍの丘陵地で、その他は標高約８ｍの水田が広がっている。遺跡の真南には丘陵越しに鳥海山を望むことができる。

本遺跡は、平成６～９・13年度に本荘市教育委員会による調査も行われ、平安時代の遺構・遺物が多数検出されている。

第２節　調査の方法

１　調査区の設定

調査の方法は、日本海沿岸東北自動車道建設工事のセンター杭ＳＴＡ.294を基点として真北方向をとり、４ｍ×４ｍの方眼杭を打設して遺構・遺物の検出地点を把握するグリッド法を採用した。基点には、ＭＡ50の呼称を付し、西に行くに従いＭＢ、ＭＣ、ＭＤ……というアルファベットを、北に行くに従い51、52、53……という二桁の算用数字を用い、これを組み合わせた記号で位置を示した。その際、４ｍ方眼の南東隅に位置する杭を当該グリッドの名称とした。

２　発掘方法と記録作成

調査は確認調査に基づき、表土除去は重機によって行い、その後にグリッド杭を打設した。遺構の確認は、水田部分はⅡ～Ⅳ層の上面、丘陵部分はⅤ層の上面を中心とした。

検出した遺構は、発見順に略記号及び番号を付して区別し、図面と写真により記録した。図面の縮尺は１／20を基本とし、遺物の微細図は１／10とした。

遺物は、遺跡名・出土グリッドまたは遺構名・遺物番号・層位・出土年月日を記入し、取り上げた。遺構内で出土した遺物については、一括もしくは遺物番号付を区別し、微細図・写真等の記録を行い取り上げをした。

写真の撮影は、35㎜判モノクロ・リバーサルを合わせて使用した。

第３節　調査の経過

上谷地遺跡の発掘調査は、平成13年６月19日から11月12日、平成14年８月５日から10月４日、平成15年６月21日から７月18日の期間行われた。発掘調査の経過は、以下の通りである。

平成13年度

６月７日	西目町町民センター（シーガル）において作業員説明会。
６月11日	表土除去を開始。

6月19日	発掘器材を搬入、作業員への説明を終え、調査を開始。 調査区北側で溝跡（ＳＤ05）を検出し、ほぼ完形の土師器坏が出土。
7月11日	表土除去終了。
7月16日	作業員の健康診断を実施、方眼杭の打設が終了。
7月19日	調査区南側で平安時代の河川跡（ＳＬ06）を検出。
8月3日	調査区南側で縄文時代の河川跡（ＳＬ14）を検出。
8月7日	調査区東側の一部を調査終了後に引渡し。
8月28日	秋田大学熊田氏が来跡。
8月29日	縄文時代の河川跡（ＳＬ14）から完形の注口土器、平安時代の河川跡（ＳＬ06）から墨書土器が出土。文化庁坂井調査官・秋田県立博物館新野名誉館長・船木学芸主事が来跡。
8月30日	調査区中央部で木製人形が出土。
9月4日	平安時代の河川跡（ＳＬ06）から刳り物が出土。
9月5日	調査区中央部で縄文時代の水さらし場遺構（ＳＤ18）を検出。
9月6日	水さらし場遺構（ＳＤ18）から大量の縄文土器が出土。 秋田県立博物館冨樫館長・本荘市教育委員会長谷川氏・土田氏が来跡。
9月21日	平安時代の河川跡（ＳＬ06）を完掘。
9月26日	平安時代の調査区南側の掘立柱建物跡（ＳＢ19）の精査開始。
10月1日	縄文時代の河川跡（ＳＬ14）を完掘。
10月3日	調査区南側で重機による作業を開始し、10月5日に終了。
10月15日	秋田県立博物館冨樫館長が来跡。
10月16日	文化庁岡村主任調査官が来跡。
10月23日	遺跡の空中撮影を実施。
10月25日	水さらし場遺構（ＳＤ18）から凹石・敲石・石皿が出土。
10月27日	遺跡見学会を実施し、300名の見学者を迎えた。
10月27日	秋田県立博物館船木氏・同庄内氏が来跡。
10月31日	平安時代の掘立柱建物跡（ＳＢ19）の精査を終了。秋田市教育委員会小松氏が来跡。
11月1日	溝跡（ＳＤ05）の精査を終了。
11月2日	作業員は現場終了。
11月12日	水さらし場遺構（ＳＤ18）の精査終了、平成13年度分の調査を終了。

平成14年度

4月30日	本荘市文化会館において作業員説明会。
7月5日	昨年度調査区東側に隣接する農道部分の試掘調査。
8月5日	発掘器材を搬入し、作業員への説明を終え、調査を開始。
8月8日	社会貢献活動で、谷地誠教諭・藤田隆志教諭・三浦智美教諭が来跡（9日まで）。 農道部分で水さらし場遺構（ＳＤ18）の上流部分のプランを検出。
8月22日	井戸跡（ＳＥ30）を検出。
8月27日	井戸跡（ＳＥ30）から大量の礫が、木材等とともに出土。

８月28日	井戸跡（ＳＥ30）から完形の土師器坏や木桶の底板・木箆等が出土。
９月５日	奈良文化財研究所岡村調査部長・国立歴史民俗博物館辻助教授・秋田県立博物館冨樫館長が来跡。
９月６日	井戸跡（ＳＥ30）から縄文土器が大量に出土。
９月12日	文化庁岡田調査官が来跡。水さらし場遺構（ＳＤ18）の湧水部分を検出。
９月13日	水さらし場遺構（ＳＤ18）の立木の位置の記録。
９月17日	丘陵部分のコンター図を作成した。安全対策のため、井戸跡の上部を重機で撤去。
９月18日	井戸跡（ＳＥ30）の精査を終了。水さらし場遺構（ＳＤ18）のコンター図を作成。丘陵部分の平坦面範囲を記録。
９月24日	階段状遺構の精査を終了。
９月27日	文化庁坂井調査官・本荘市教育委員会長谷川氏が来跡。
９月28日	遺跡見学会を実施し、90 名の見学者を迎えた。
９月30日	遺跡の空中撮影を実施。
10月１日	水さらし場遺構（ＳＤ18）の精査を終了。
10月４日	精査および図面の確認を終え、平成 14 年度分の調査を終了。

平成 15 年度

６月18日	本荘由利広域交流センターにおいて作業員説明会。
６月23日	発掘器材を搬入し、作業員への説明を終え、調査を開始。
６月24日	石匙等の石器が出土。
７月９日	竪穴状遺構（ＳＫＩ83）を検出。
７月17日	段状遺構（ＳＸ89）を検出。
７月18日	平成 15 年度分の調査を終了。

第４節　整理作業の方法と経過

遺構は、現場で作成した平面図・断面図を点検・修正し、第２原図を作成し、これをトレースした。水さらし場遺構の記述の際は伊藤隆三氏、小林圭一氏、渡辺誠氏らから指導・助言を受けた。あわせて検出した木製品や種実の分析を委託した。遺物は、調査終了後に秋田県埋蔵文化財センター中央調査課において洗浄し、後に注記、土器の接合復元作業を行った。報告書掲載遺物を選択し、図化・採拓・写真撮影を行った。実測図は、残存状況を理解できるような作図を心がけ、残存状況の少ない遺物は 180° 回転で復元実測を行った。遺物分類・選択の際、中世陶磁器は八重樫忠郎氏に、鍛冶関連遺物は穴澤義功氏の指導・助言を受けて進め、あわせて木製品・金属製品・炭化物・火山灰サンプルの科学的分析を委託した。報告書の作成に当たっては、遺構・遺物の時代や出土状況を明確にする構成に努めた。

以上の経過を経て、原稿を作成し編集作業を行った。

第２章　沖積地部分調査の記録

第１節　沖積地部分の基本土層（第８図、図版１）

上谷地遺跡の調査範囲の地形は丘陵と沖積地に大別される。沖積地部分の基本土層は、農道（点線）以南の地域が河川跡等の影響で層序を異にすることから、以下の２カ所で観察し、遺構調査の際には、点線以南はＡ－Ｂ土層、以北はＣ－Ｈ及びＩ－Ｊ土層を基準とし、修正を加えながら調査を行った。

沖積地南側部分（Ａ－Ｂ）

Ⅰ　層：耕作土
Ⅱ　層：2.5Ｙ５／２　暗 灰 黄 色　粘質土
Ⅲ　層：2.5Ｙ４／２　暗 灰 黄 色　粘質土
Ⅳ　層：2.5Ｙ４／１　黄　灰　色　粘質土
Ⅴ　層：2.5Ｙ３／１　黒　褐　色　粘質土・・・・縄文時代前期中葉の遺物包含層
Ⅵａ層：10 Ｙ５／１　灰　　色　粘質土
Ⅵｂ層：10 Ｙ５／１　灰　　色　粘質土・・・・縄文時代前期前葉の遺物包含層
Ⅶ　層：2.5Ｙ２／１　黒　　色　粘質土
Ⅷ　層：地山（軟質のシルト岩）

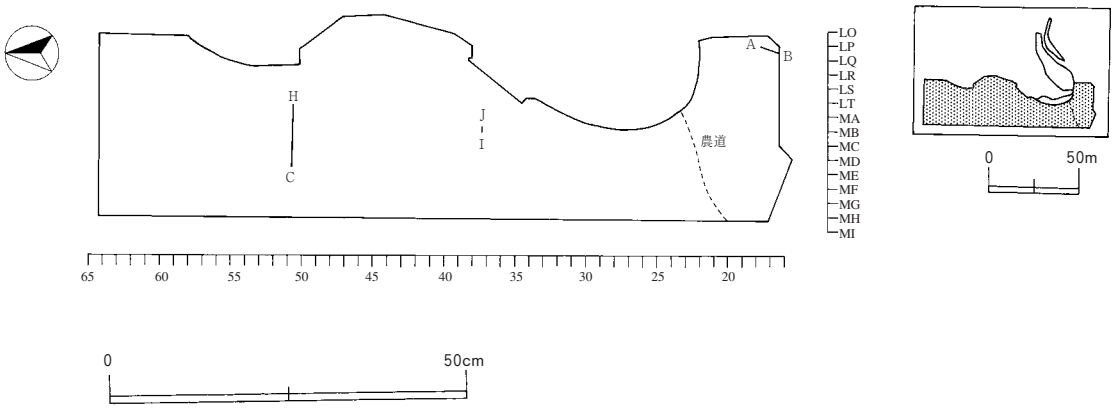
南側の沖積地は北東にある丘陵からの斜面が沖積地に接する場所にあり、沖積地の水田耕作にあたり斜面を削平していることを確認した。この部分の地山は丘陵斜面の延長で、沖積地の地中に深く潜り込んでいる。この地山に沿って旧地表面（縄文時代前期以前）と考えられるⅦ層が堆積している。その上には沖積作用による層が堆積している。本来は古代の遺物包含層があったと考えられるが耕作によって破壊されているようである。縄文時代の遺物包含層は２枚確認した。上層にあたるⅤ層は前期中葉の遺物包含層であるが遺物量は少ない。Ⅵｂ層は前期前葉の遺物包含層で、Ａ－Ｂ土層より西側にみられる層である。遺構は、Ⅱ層とⅧ層で確認した。

沖積地中央～北側部分（Ｃ－Ｈ・Ｉ－Ｊ）

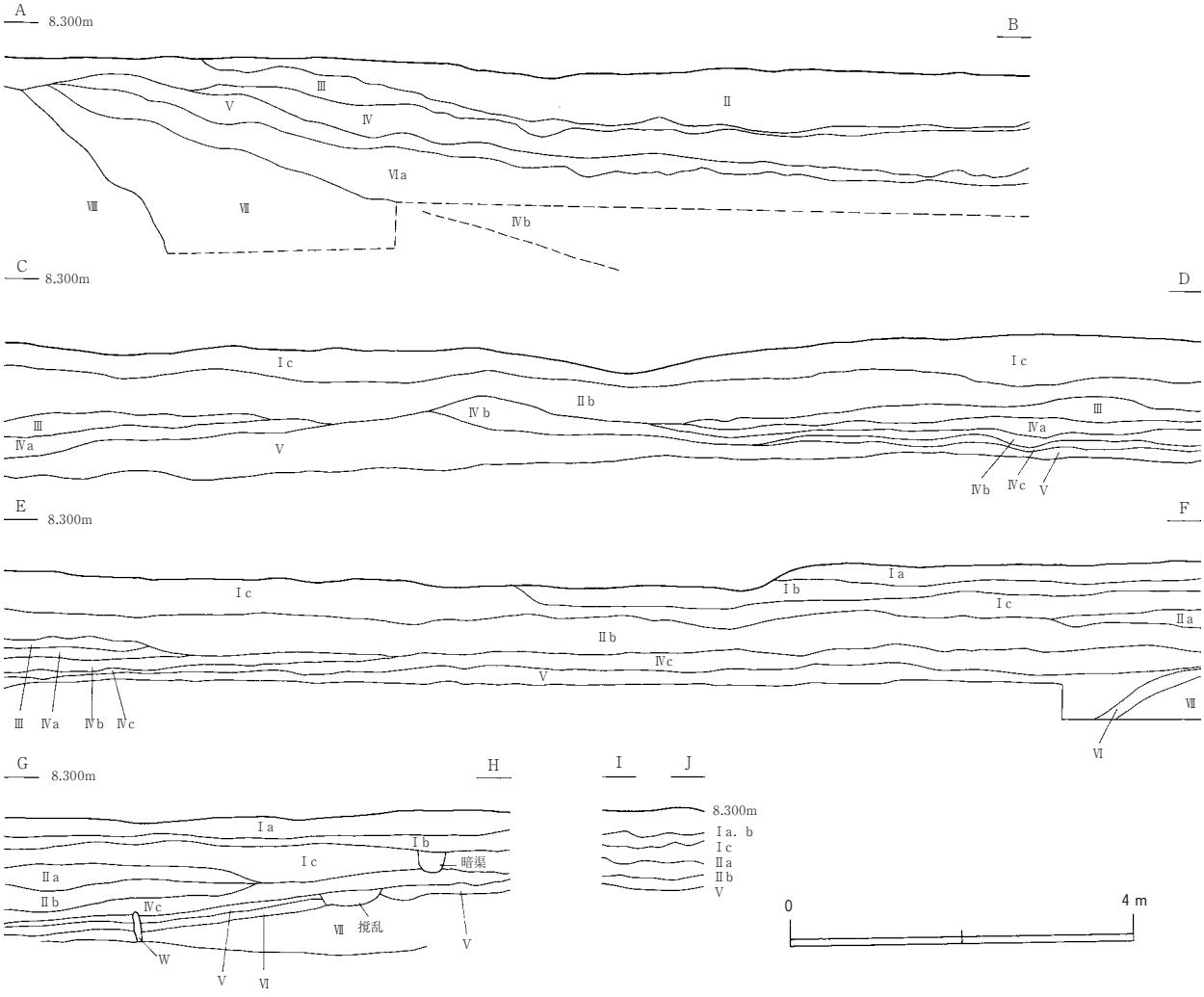
Ⅰ　層：耕作土、表土
Ⅱａ層：2.5ＹＲ６／１　赤灰色　粘質土・・・・古代の遺物包含層
Ⅱｂ層：2.5ＹＲ５／１　赤灰色　粘質土・・・・古代の遺物包含層
Ⅲ　層：7.5 Ｙ７／２　灰白色　粘質土
Ⅳ　層：10 ＹＲ３／１　黒褐色　粘質土・・・・植物遺体多く含む
Ⅴ　層：7.5 Ｙ７／１　灰白色　粘質土・・・・遺構確認面
Ⅵ　層：Ｎ　３　／　０　暗灰色　粘質土
Ⅶ　層：５ Ｂ ６ ／ １　青灰色　シルト質土～シルト岩

この部分の東側には丘陵があり、沖積地南側部分と同様に丘陵から続く地山が地中に深く潜り込み、その上に沖積作用による層が堆積している。古代の包含層であるⅡ層は２層に分けられる。Ⅱａ層はやや薄い色調、Ⅱｂ層は濃い色調である。Ⅱｂ層はこの区域に広く分布するが、Ⅱａ層は丘陵寄りの

部分（水さらし場遺構周辺）にしかみられない。Ⅲ層は古代の整地層である。おおよそ49ライン以北の丘陵から離れた範囲に分布しており、地形から山際の地山土を低湿地に盛り土したと考えられる。Ⅲ層以下からは遺物が全く検出されなかった。Ⅳ層は植物遺体を多く含む層で湿地を形成していた時期の層と考えられる。Ⅶ層は地山で南側部分のⅧ層である。なお、この区域では遺構以外からは縄文時代の遺物がほとんど出土しなかった。遺構はⅢ層とⅤ層で確認した。



第７図　グリッド配置とトレンチ位置図（沖積地部分）



第８図　基本土層図（沖積地部分）

第２節　検出遺構と出土遺物

沖積地部分で検出した遺構は水さらし場遺構１基、掘立柱建物跡１棟、溝跡７条、井戸跡１基、土坑４基、捨て場１箇所、階段状遺構１基、性格不明遺構４基、柱穴様ピット38基、河川跡２条である。

１　縄文時代の遺構と遺物

（１）水さらし場遺構

ＳＤ18（第９～24図、付図１、巻頭図版１・２、図版１・２・７・13）

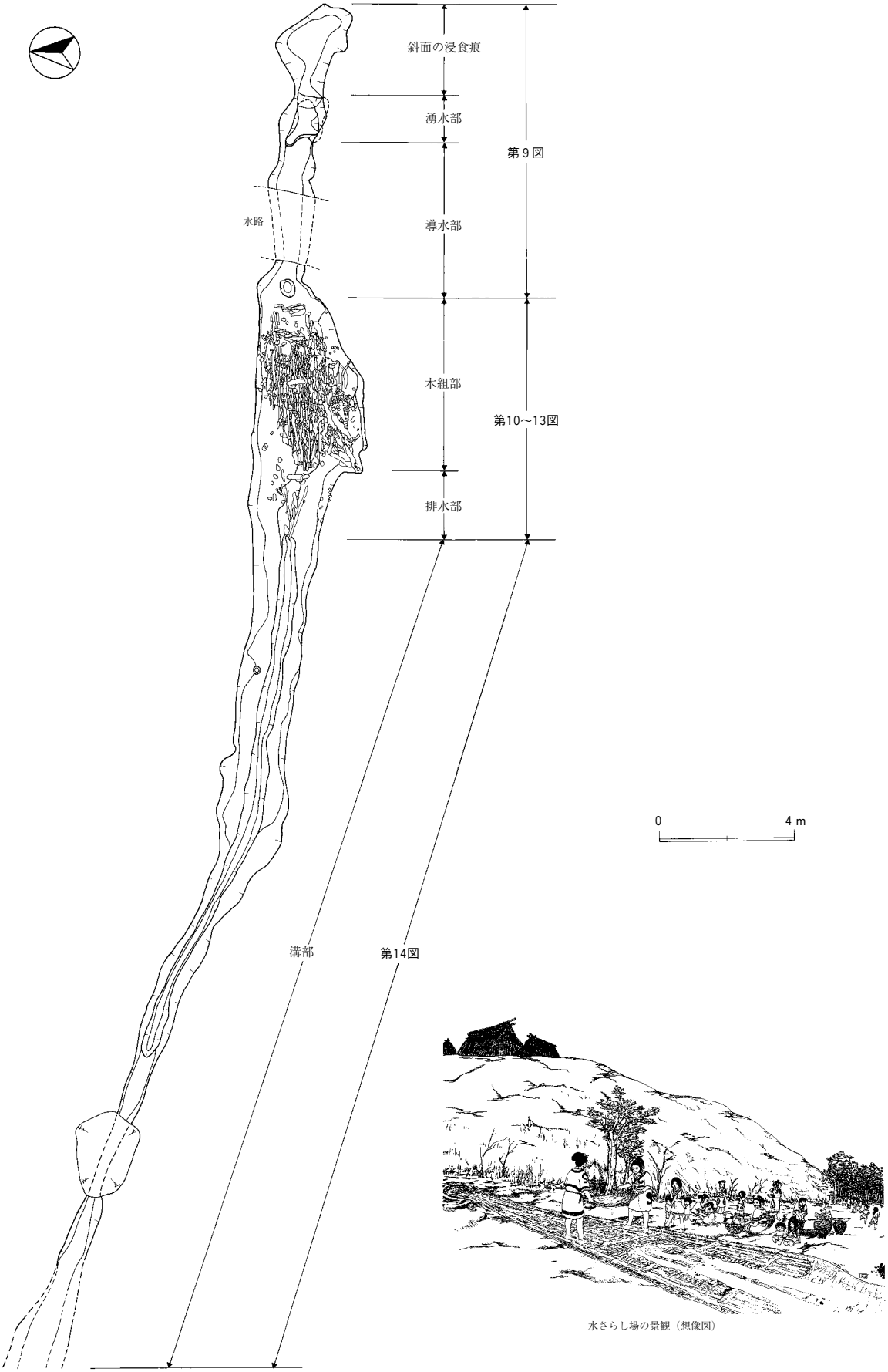
ＬＯ～ＭＡ42、ＬＳ～ＭＣ43、ＭＢ・ＭＣ44グリッドに位置する。Ⅴ層精査中に溝状の黒色プランを確認した。その後精査によって、木組みと砕かれたトチの内殻を大量に確認したため、水さらし場遺構であると判断した。ＳＫ32を切っている。木組部から南約3.0ｍにはＳＥ30があり、直接の切合いはないが出土遺物から、同遺構の第６層部分は同時期に使用された可能性が高い。確認された長さが約35.0ｍ、最大幅約3.2ｍ、最小幅約0.6ｍで、確認面からの深さは木組部の最も深いところで約0.52ｍの溝状を呈する。遺構は、湧水部・導水部・木組部・排水部・溝部から構成されており、以下はそれぞれの部分の状態と機能について述べることとする。湧水部は、シルト岩を掘り込んで形成されている。長軸1.5ｍ×短軸1.2ｍ、確認面からの深さは1.45ｍ（岩盤上面からの深さ0.92ｍ）で、埋土はＳＰ.Ｃ－Ｄで13層に分かれ、灰オリーブ色シルト質土を基調とする。人為的な掘り込みに加えて湧水による浸食によって形成されたと考えられる。湧水部の東側には丘陵の斜面があり、岩盤が水の浸食を受けた痕が溝状に残っており、このように浸食を受けた部分からは水が湧きやすくなる。また、この湧水の南北両側の岩盤は、近年に農道敷設のため切土された様子が残っており、当時は湧水部の両側に岩盤が突き出ていたと考えられる。導水部は､湧水部と木組部を結ぶ溝状の部分で、シルト岩を掘り込んだ状態で検出された。長さ4.4ｍ、幅0.82～1.3ｍ、確認面からの深さは0.08～0.3ｍで、木組部に向かって西側に緩やかに傾斜している。埋土は３層に分かれ、２層はオリーブ灰色シルト質土、３層はオリーブ黒色砂質土である。一部が近年の水路によって失われているが、この部分より下流から幅が狭まることや木材が数点出土したことから、ここに水量を調節する設備があった可能性がある。また、直径0.48ｍの土坑が縄文後期の土器片が詰まった状態で検出された。木組部は、幅2.2ｍ、長さ5.0ｍの溝状に掘り込まれた中に、長さ3.5ｍ、直径5.0㎝前後の丸木や割材を、2.5×3.5ｍの範囲に隙間なく敷き詰め、それを区画するように置かれた４本のやや太目の横木によって構築されている。敷き詰められた木組みは厚い部分では三段階に重ねられている。木組部の底面からは土器片が多量に出土した。これは水の濁りを防ぐ目的で敷設されたか、木組みを造り替えた際に落下したと推察される。砕かれたトチの内殻が多量に出土しており、この遺構がトチのアク抜きのために構築、使用されたことを示している。この木組部からは、トチを砕く際に使用したと思われる敲石や凹石、石皿等の石器が４箱、縄文時代後期前～後葉の深鉢を主体とする土器が32箱出土し、このうち４箱は木組下から出土した。排水部は、幅0.6ｍ、長さ1.6ｍの溝状の掘り込みの中に溝部に向かって収束するように２本の枝木が設置されている。これらの木を挟んで直交する位置には垂直に打ち込まれたやや細めの枝木が何本か検出された。これらは木組部から排水を導き出す設備と考えられる。溝部分は、長さ22.0ｍ、幅0.6～1.6ｍからなる。確認面からの深さが約0.3ｍで、更に底面中央部が幅0.2ｍ、深さ0.2ｍの規模で一段深くなっており、堆積物によって浅くなっ

た溝を掘り直した際にできたものと考えられる。溝部は検出部分よりもさらに西に延びていた可能性もある。埋土はＳＰ．Ｓ－Ｔで４層、ＳＰ．Ｕ－Ｖで７層に分かれ、灰オリーブ色を基調とし、トチの内殻や植物遺体が多く含まれ、互層に堆積しており、水さらしが数度にわたって行われたことを示唆している。

遺物は縄文時代後期の深鉢を中心に土器が 33 箱、凹石等の礫石器が 4 箱出土した。遺構に伴う遺物は後期前葉が中心で、他の遺物は埋土中から出土したものが多い。縄文土器は早期末葉～前期：深鉢（１・２）、中期：深鉢（３～５）、後期初頭～前葉：深鉢（６～21）、後期前葉：深鉢（22 ～ 74）、後期中葉：深鉢（75 ～ 95）、後期：深鉢（96 ～ 128）・深鉢底部（129 ～ 138）・鉢（139）・壺（140 ～ 142）・土製品（143）、晩期：深鉢（144）の 144 点を掲載した。中期の３～５は沈線文をもち、北陸系の影響を受けている。後期初頭～前葉のうち６・８・９は隆帯をもち、８には竹管文が施され、同一個体がＳＥ30から出土した。７・10 ～ 21 は縄文・沈線文・磨きが施されている。後期前葉の深鉢はａ～ｄ類に分類した。ａ類（隆沈文）は 22、ｂ類（縄文・沈線文・磨き・刺突文等）は 23 ～ 59、ｃ類（縄文・側面圧痕で区画・磨き）は 60 ～ 70、ｄ類（縄文・磨き）は 71 ～ 74 である。後期中葉の深鉢は縄文・沈線文・磨き・刺突文等が施され、このうち 81 ～ 84 は沈線に並行する刺突列をもつ。粗製深鉢のうち 96・97 は網目状撚糸文をもち、98 ～ 100 は磨き、108 は磨きのうえ沈線文が施されている。その他は縄文のみで 106・107 は羽状縄文である。深鉢底部は 129 ～ 138 で、129 は木葉痕、130 は笹葉痕、131 は網代痕、132 ～ 138 は簾状圧痕をもつ。壺のうち 142 は瘤状の突起をもち注口土器の可能性が高い。144 は粗製土器を円形に打ち欠いたもので類似品がＳＴ20とＳＥ30からも出土した。

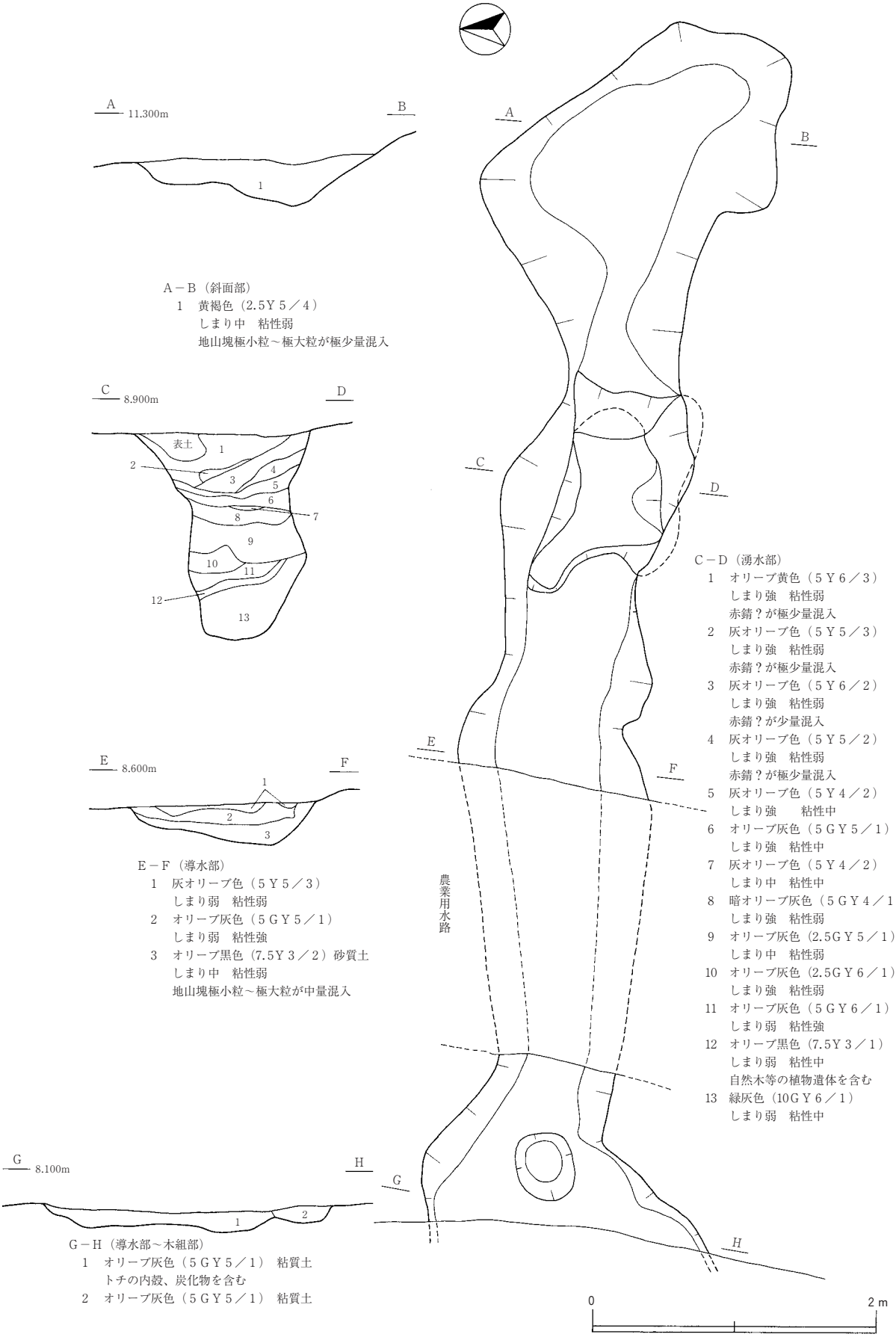
石器は石匙（１）、掻器（２～４）、凹石（５～ 28）、敲石（29）、石皿（30 ～ 32）、砥石（33）の 33 点を掲載した。石匙の１は横型で、表面に自然面を残す。掻器のうち２～３は刃部が片側縁のみである。凹石は５・６が４面、７は３面に凹部を有し、５は側面に敲打痕もみられる。８～ 22 は表裏両面に凹部を有し、８～ 12 は側面に敲打痕もみられ、８は被熱している。23 ～ 28 は片面のみに凹部を有する。敲石の 29 は上下両端に敲打痕がみられる。敲石の出土割合は低いが凹石等からの転用されたものが多いと考えられる。石皿は 30・31 が欠損のため平面形は不明、断面形は凹状で共に裏面は凹石として使用されている。32 は平面形が不整円形、断面形は凹状で周縁が打ち欠かれており、ＳＥ 30 から類似品が出土している。砥石の 33 は表裏両面に砥面を有し、ＳＥ 30 等に起因する古代以降のものと考えられる。木製品は木組部構造材（１～６）を６点掲載した。１～３は割材、４～６は板材で、１の裏面には紐状のもので縛ったと考えられる痕がみられる。自然科学的分析から、木組部の構造材 271 点についての樹種同定を行い、31 種の樹種が使用され、クリ材が 88 点と最も多いことが解った。放射性炭素年代測定で、木組部の構造材は縄文時代後期の数値が得られた。また、種実同定でトチの内殻が大量に検出された他、オニグルミ・クリ・ドングリ等も検出された。トチの内殻の殆どが砕かれた残滓であり、アク抜きがこの遺構を使って行われたことを示している。

上谷地遺跡の水さらし場遺構の特徴は、全体が溝状に掘り込まれており、作業場と考えられる木組部の水量を導・排水によって調節可能であったと考えられる。この水量調節は「水さらし」作業において清潔な水を安定して使用するために重要と考えられる。また、この機能による貯水で「虫殺し」の作業も可能であったと考えられるため、異なる二つの作業で使用された可能性がある。湧水は現在でも澄んだ水が湧いており、清潔な水を大量に必要とするアク抜きの作業に非常に適したものである。これらから遺構は縄文時代後期前葉にトチのアク抜きを行った水さらし場遺構であると考えられる。



水さらし場の景観（想像図）

第９図　水さらし場遺構（ＳＤ18）



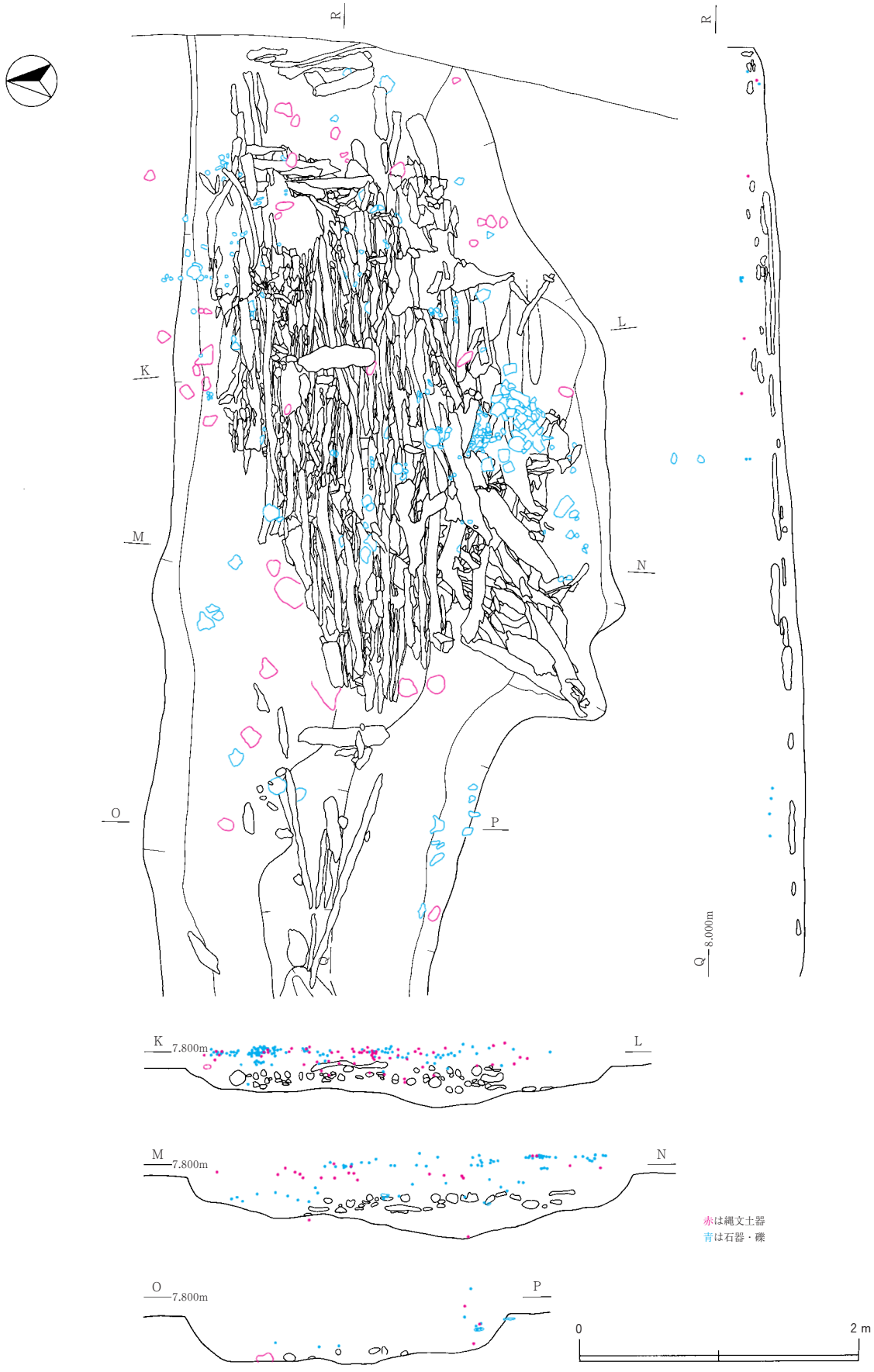
A－B（斜面部）
1　黄褐色（2.5Y５／４）
しまり中　粘性弱
地山塊極小粒～極大粒が極少量混入

C－D（湧水部）
1　オリーブ黄色（５Y６／３）
しまり強　粘性弱
赤錆？が極少量混入
2　灰オリーブ色（５Y５／３）
しまり強　粘性弱
赤錆？が極少量混入
3　灰オリーブ色（５Y６／２）
しまり強　粘性弱
赤錆？が少量混入
4　灰オリーブ色（５Y５／２）
しまり強　粘性弱
赤錆？が極少量混入
5　灰オリーブ色（５Y４／２）
しまり強　粘性中
6　オリーブ灰色（５GY５／１）
しまり強　粘性中
7　灰オリーブ色（５Y４／２）
しまり中　粘性中
8　暗オリーブ灰色（５GY４／１）
しまり強　粘性弱
9　オリーブ灰色（2.5GY５／１）
しまり中　粘性弱
10　オリーブ灰色（2.5GY６／１）
しまり強　粘性弱
11　オリーブ灰色（５GY６／１）
しまり弱　粘性強
12　オリーブ黒色（7.5Y３／１）
しまり弱　粘性中
自然木等の植物遺体を含む
13　緑灰色（10GY６／１）
しまり弱　粘性中

E－F（導水部）
1　灰オリーブ色（５Y５／３）
しまり弱　粘性弱
2　オリーブ灰色（５GY５／１）
しまり弱　粘性強
3　オリーブ黒色（7.5Y３／２）砂質土
しまり中　粘性弱
地山塊極小粒～極大粒が中量混入

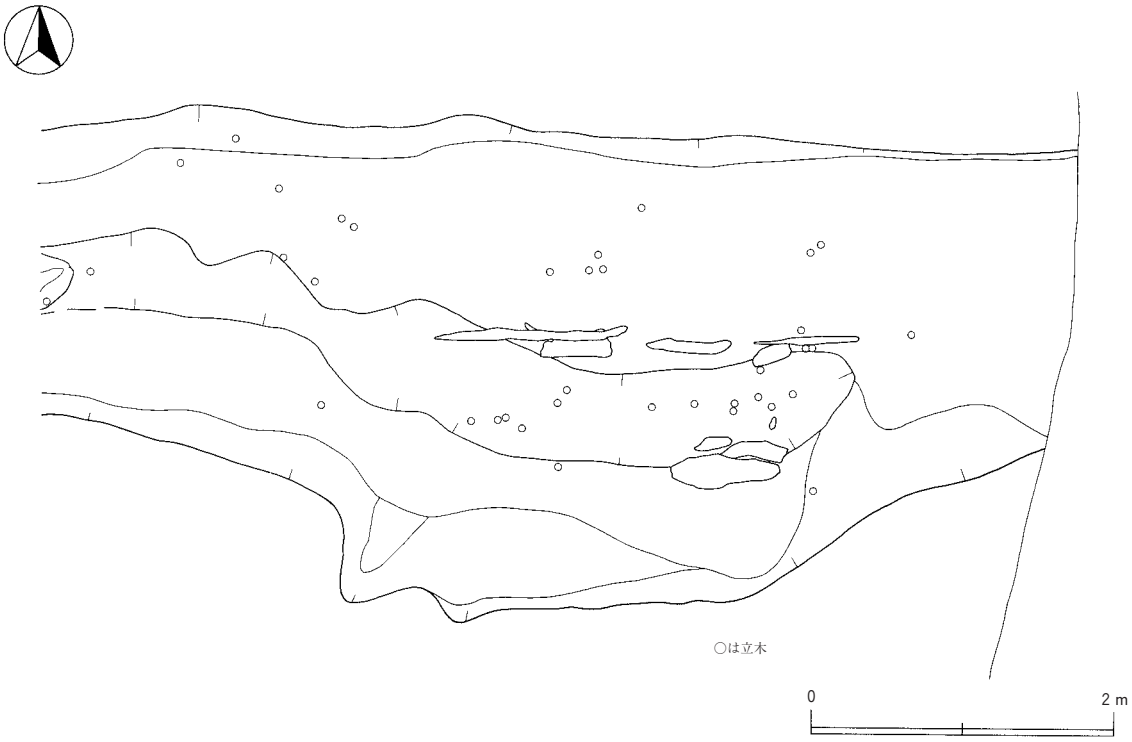
G－H（導水部～木組部）
1　オリーブ灰色（５GY５／１）　粘質土
トチの内殻、炭化物を含む
2　オリーブ灰色（５GY５／１）　粘質土

第10図　ＳＤ18（湧水部・導水部）

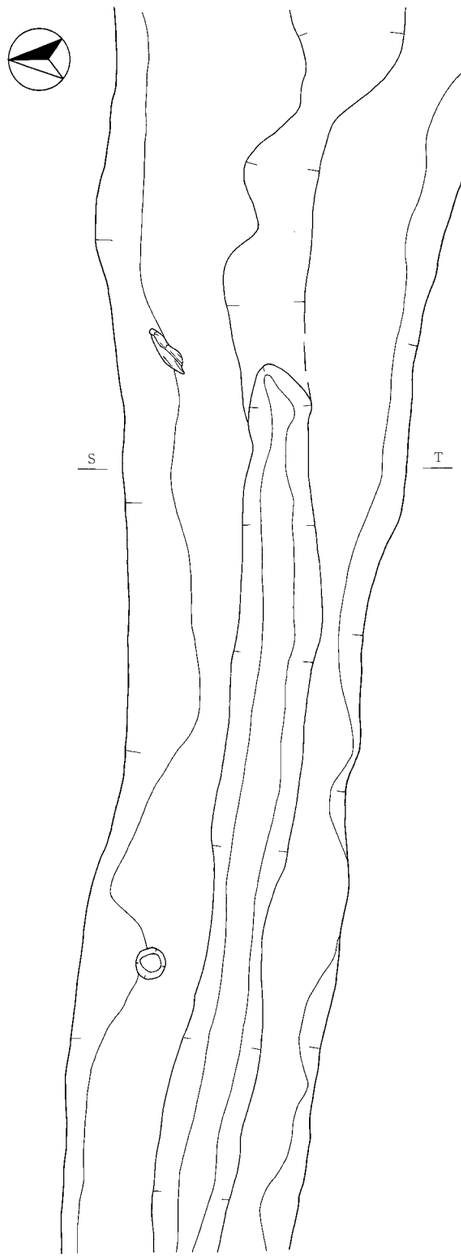


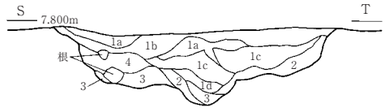
第11図　ＳＤ18（木組部・排水部）

第12図　ＳＤ18（木組みの構築段階１）

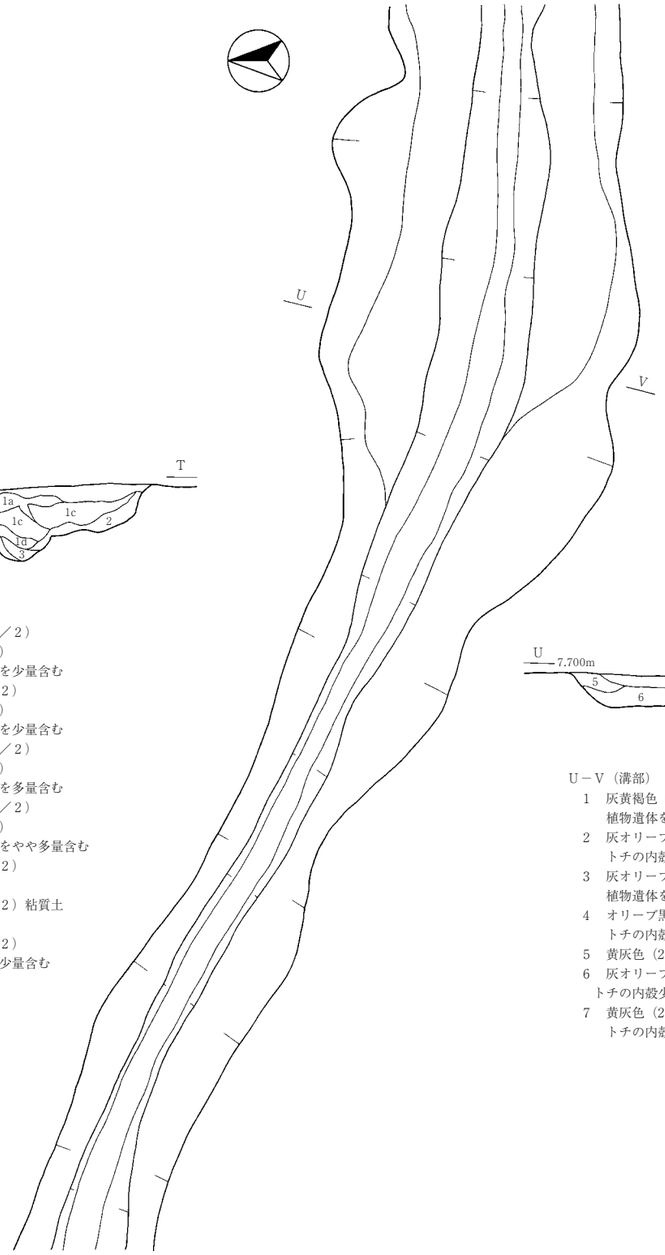


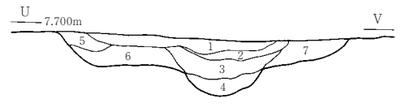
第13図　ＳＤ18（木組みの構築段階２・遺物の分布）



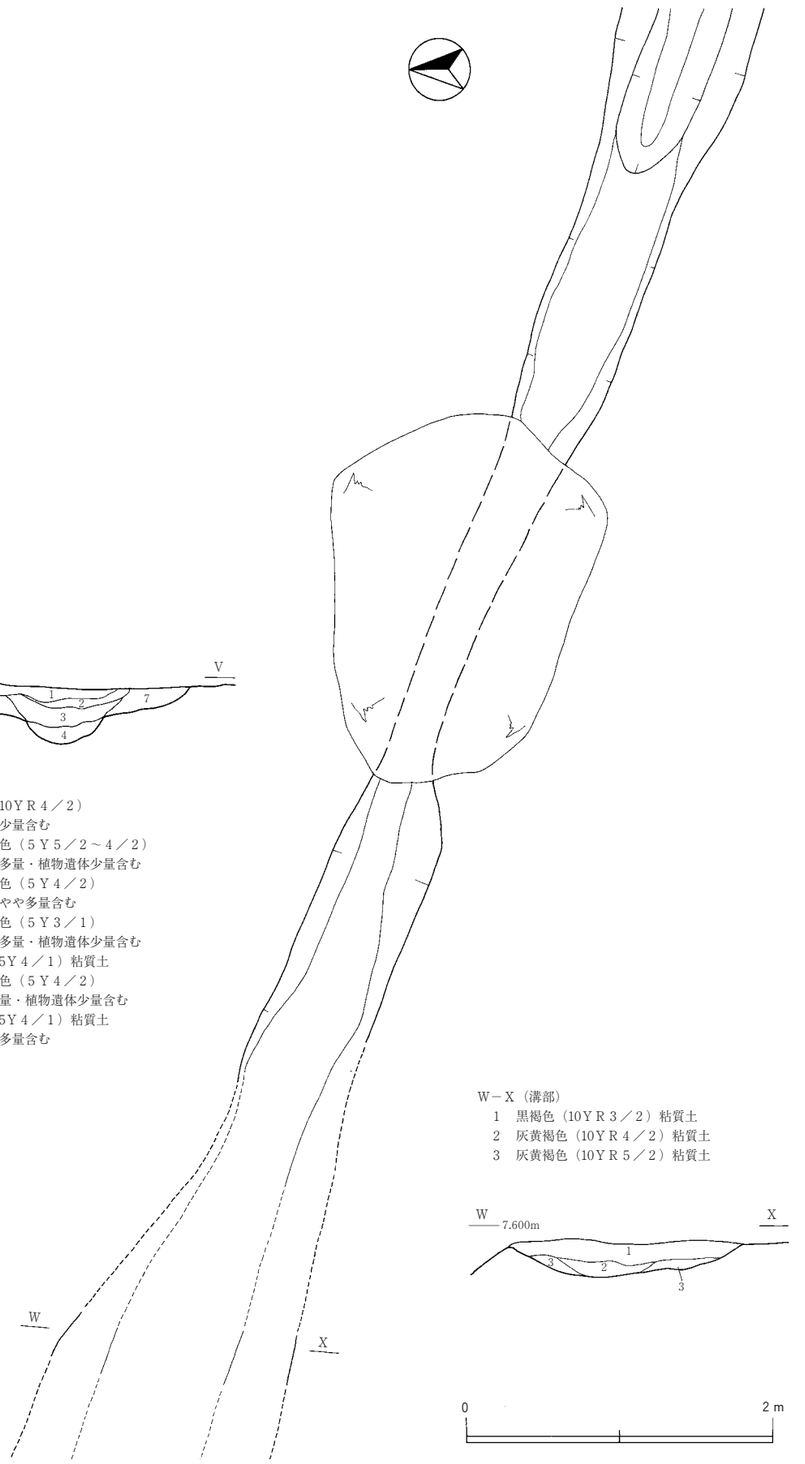


S－T（溝部）
1 a　灰オリーブ色（５Ｙ４／２）
　　粘性なし（砂質に近い）
　　トチの内殻・植物遺体を少量含む
　b　灰黄褐色（10ＹＲ４／２）
　　粘性なし（砂質に近い）
　　トチの内殻・植物遺体を少量含む
　c　灰オリーブ色（５Ｙ４／２）
　　粘性なし（砂質に近い）
　　トチの内殻・植物遺体を多量含む
　d　灰オリーブ色（５Ｙ４／２）
　　粘性なし（砂質に近い）
　　トチの内殻・植物遺体をやや多量含む
2　灰オリーブ色（５Ｙ４／２）
　植物遺体を少量含む
3　灰オリーブ色（５Ｙ４／２）粘質土
　植物遺体を少量含む
4　灰オリーブ色（５Ｙ４／２）
　トチの内殻・植物遺体を少量含む



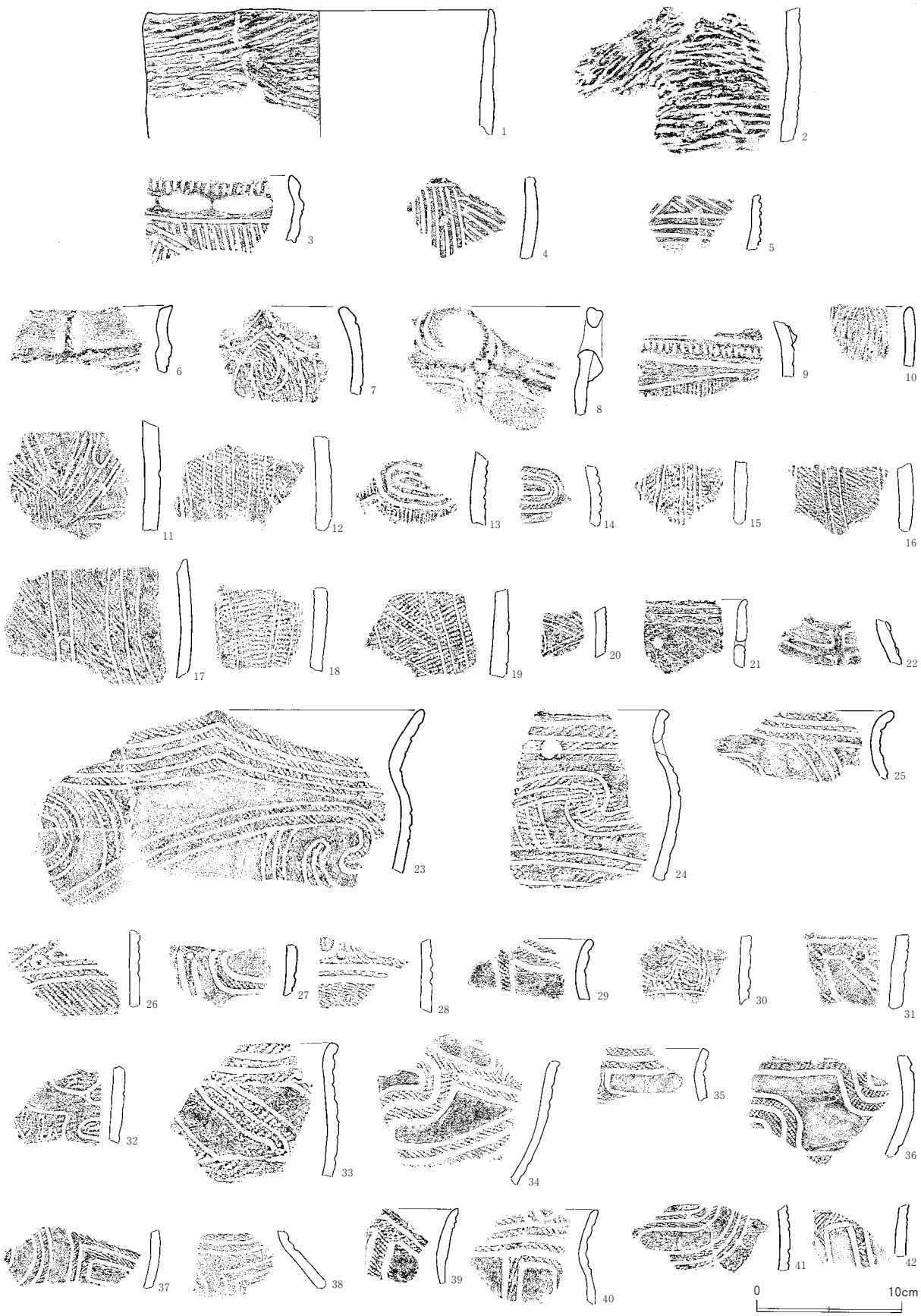


U－V（溝部）
1　灰黄褐色（10ＹＲ４／２）
　植物遺体を少量含む
2　灰オリーブ色（５Ｙ５／２～４／２）
　トチの内殻多量・植物遺体少量含む
3　灰オリーブ色（５Ｙ４／２）
　植物遺体をやや多量含む
4　オリーブ黒色（５Ｙ３／１）
　トチの内殻多量・植物遺体少量含む
5　黄灰色（2.5Ｙ４／１）粘質土
6　灰オリーブ色（５Ｙ４／２）
　トチの内殻少量・植物遺体少量含む
7　黄灰色（2.5Ｙ４／１）粘質土
　トチの内殻多量含む



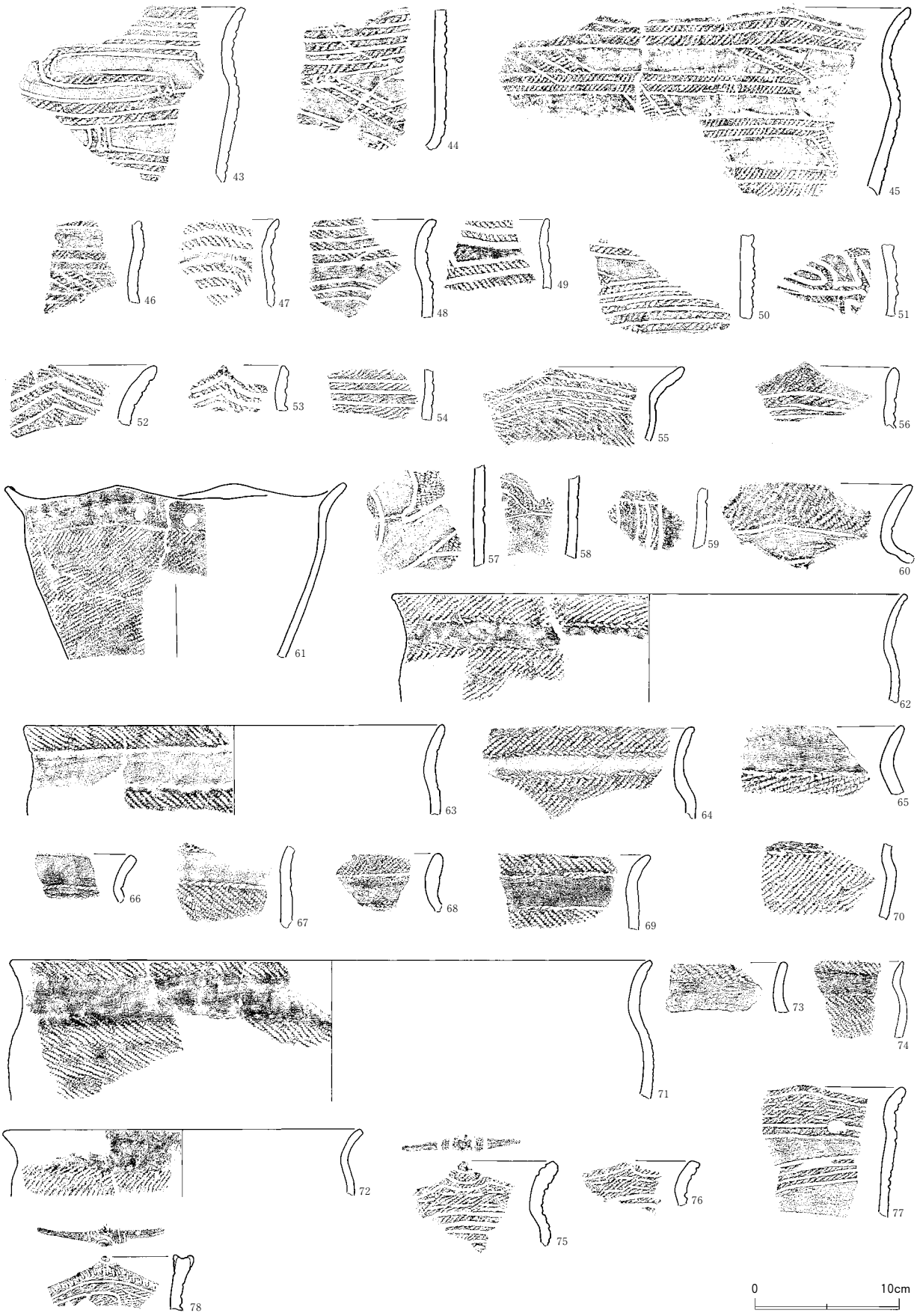
W－X（溝部）
1　黒褐色（10ＹＲ３／２）粘質土
2　灰黄褐色（10ＹＲ４／２）粘質土
3　灰黄褐色（10ＹＲ５／２）粘質土

第14図　ＳＤ18（溝部）

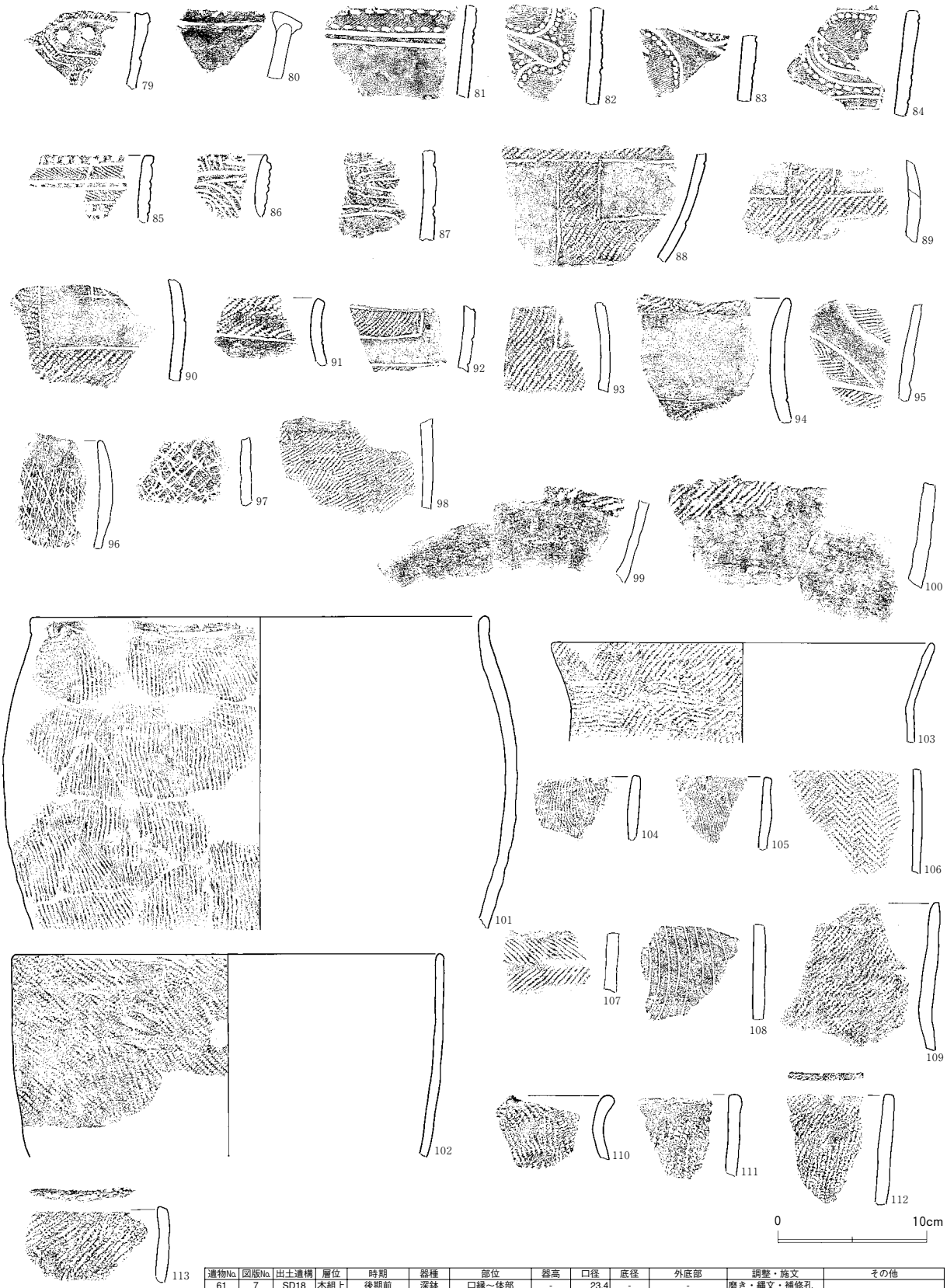


遺物No.	図版No.	出土遺構	層位	時期	器種	部位	器高	口径	底径	外底部	調整・施文	その他
1	7	SD18	-	早期末～前期	深鉢	口縁部	-	23.8	-	-	縄文	ｓｐ．Ｓ－Ｔ付近

第15図　ＳＤ18出土縄文土器（１）

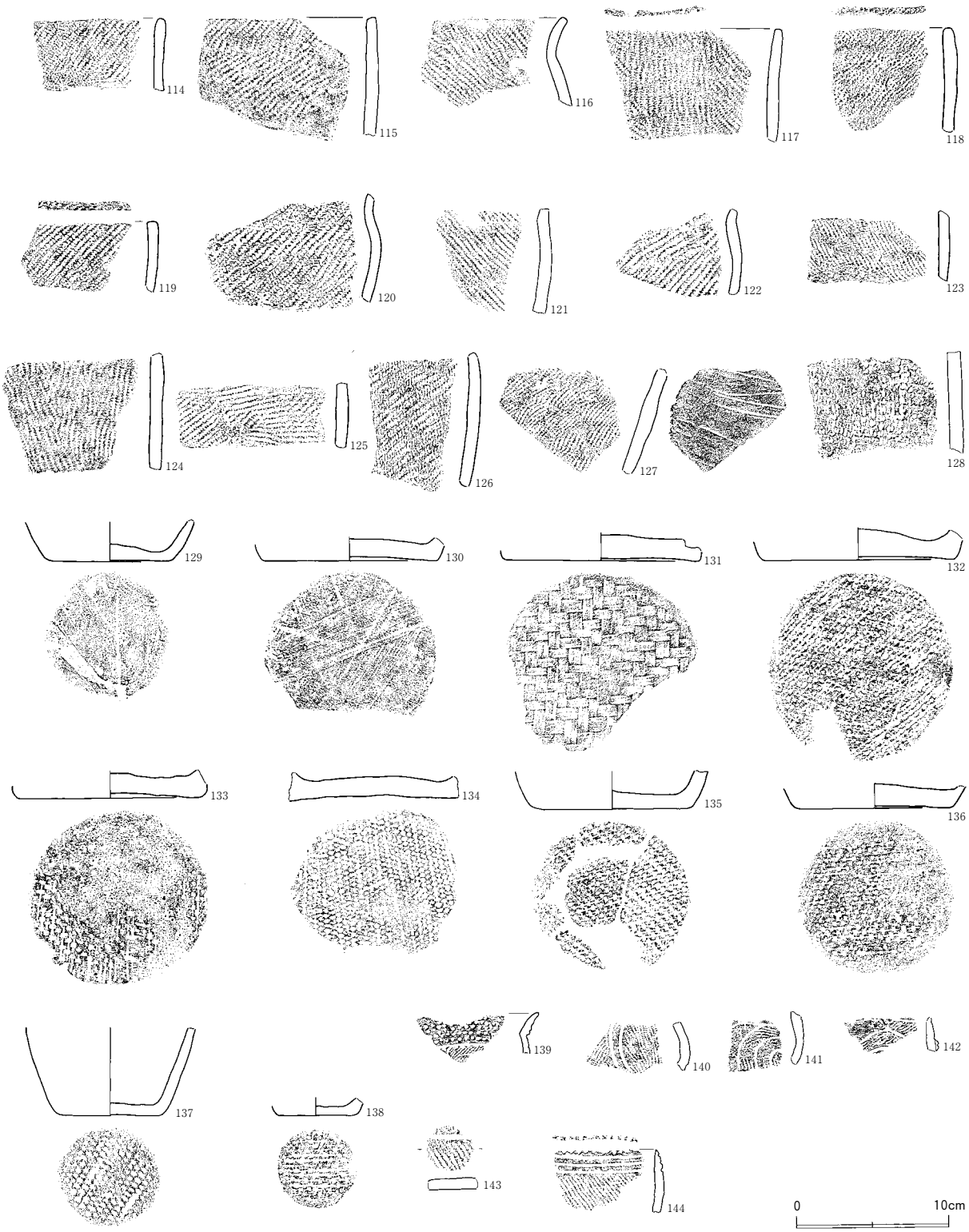


第16図　ＳＤ18出土縄文土器（２）



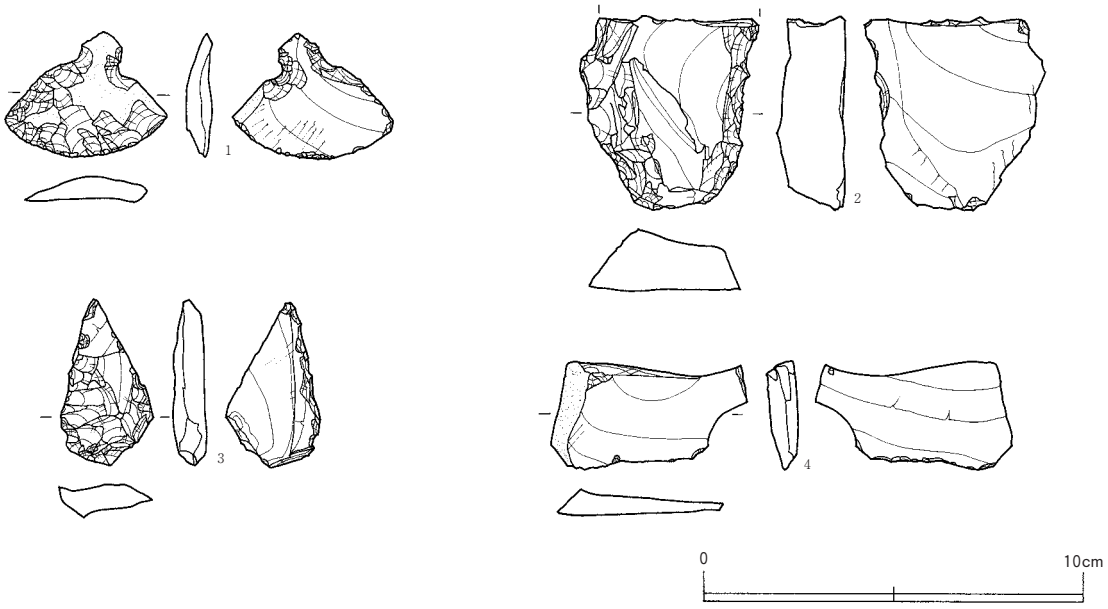
遺物No.	図版No.	出土遺構	層位	時期	器種	部位	器高	口径	底径	外底部	調整・施文	その他
61	7	SD18	木組上	後期前	深鉢	口縁～体部	-	23.4	-	-	磨き・縄文・補修孔	
62	-	SD18	木組中	後期前	深鉢	口縁部	-	35.7	-	-	縄文・圧痕・磨き	
63	-	SD18	木組上	後期前	深鉢	口縁部	-	29.7	-	-	縄文・圧痕・磨き	
71	-	SD18	木組中	後期前	深鉢	口縁部	-	44.2	-	-	縄文・磨き	
72	-	SD18	木組中	後期前	深鉢	口縁部	-	24.7	-	-	縄文・磨き	
101	7	SD18	-	後期	深鉢	口縁～体部	-	31.0	-	-	撚糸文	ｓｐ．Ｓ－Ｔ付近
102	-	SD18	木組上	後期	深鉢	口縁～体部	-	28.6	-	-	縄文	炭化物付着
103	-	SD18	木組上	後期	深鉢	口縁部	-	25.4	-	-	縄文	

第17図　ＳＤ18出土縄文土器（３）



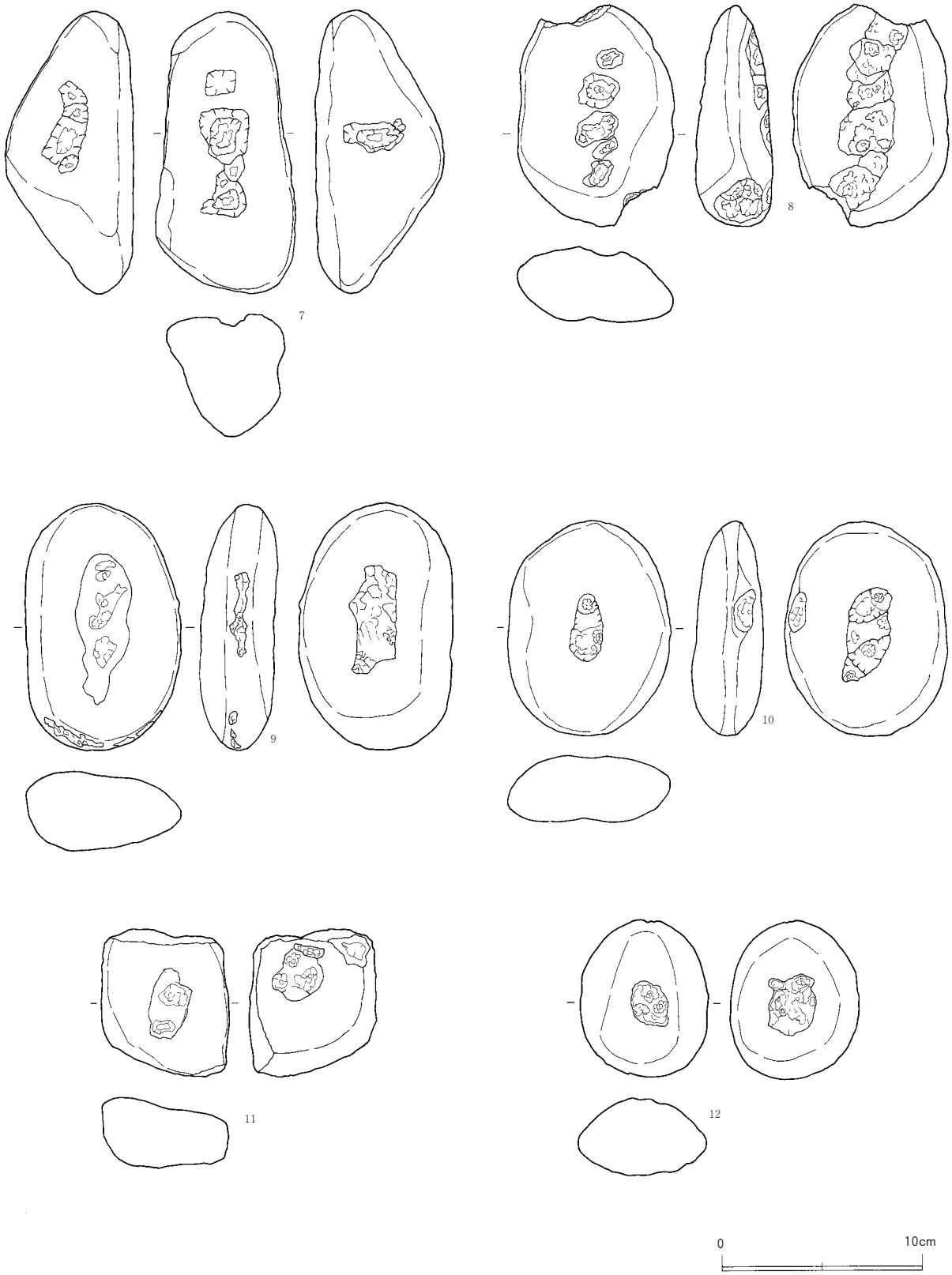
遺物No.	図版No.	出土遺構	層位	時期	器種	部位	器高	口径	底径	外底部	調整・施文	その他
129	7	SD18	木組上	後期	深鉢	底部	〔2.7〕	-	8.2	木葉痕	摩滅	胎土に砂礫多
130	7	SD18	木組上	後期	深鉢	底部	〔1.6〕	-	11.2	笹葉痕	-	
131	7	SD18	木組下	後期	深鉢	底部	〔1.7〕	-	12.7	網代痕	-	
132	7	SD18	木組下	後期	深鉢	底部	〔2.0〕	-	12.5	簾状痕	-	
133	-	SD18	木組上	後期	深鉢	底部	〔1.8〕	-	11.9	簾状痕	-	
134	-	SD18	木組上	後期	深鉢	底部	〔1.5〕	-	11.2	簾状痕	-	
135	-	SD18	木組上	後期	深鉢	底部	〔2.5〕	-	10.4	簾状痕	縄文	
136	7	SD18	木組上	後期	深鉢	底部	〔1.5〕	-	10.2	簾状痕	-	
137	-	SD18	木組上	後期	深鉢	体部下半～底部	〔5.8〕	-	7.0	簾状痕	無文	
138	7	SD18	木組上	後期	深鉢	底部	〔1.2〕	-	4.9	簾状痕	-	
143	-	SD18	木組上	後期	土製品	完形	0.7	3.3	-	-	縄文・沈線	円形に打ち欠き

第18図　ＳＤ18出土縄文土器（４）



遺物No.	図版No.	出土遺構	層位	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石質	その他
1	―	SD18	木組中	石匙	3.3	4.3	0.7	7.4	珪質頁岩	
2	―	SD18	木組上	掻器	5.1	4.7	1.8	46.7	珪質頁岩	
3	―	SD18	木組下	掻器	4.3	2.5	0.9	6.9	珪質頁岩	
4	―	SD18	木組中	掻器	2.9	5.1	0.8	9.7	珪質頁岩	
5	13	SD18	木組下	凹石	9.4	6.1	7.1	375.9	安山岩	敲石に転用？
6	―	SD18	―	凹石	11.4	7.6	5.6	559.0	安山岩	

第19図　ＳＤ18出土石器（１）

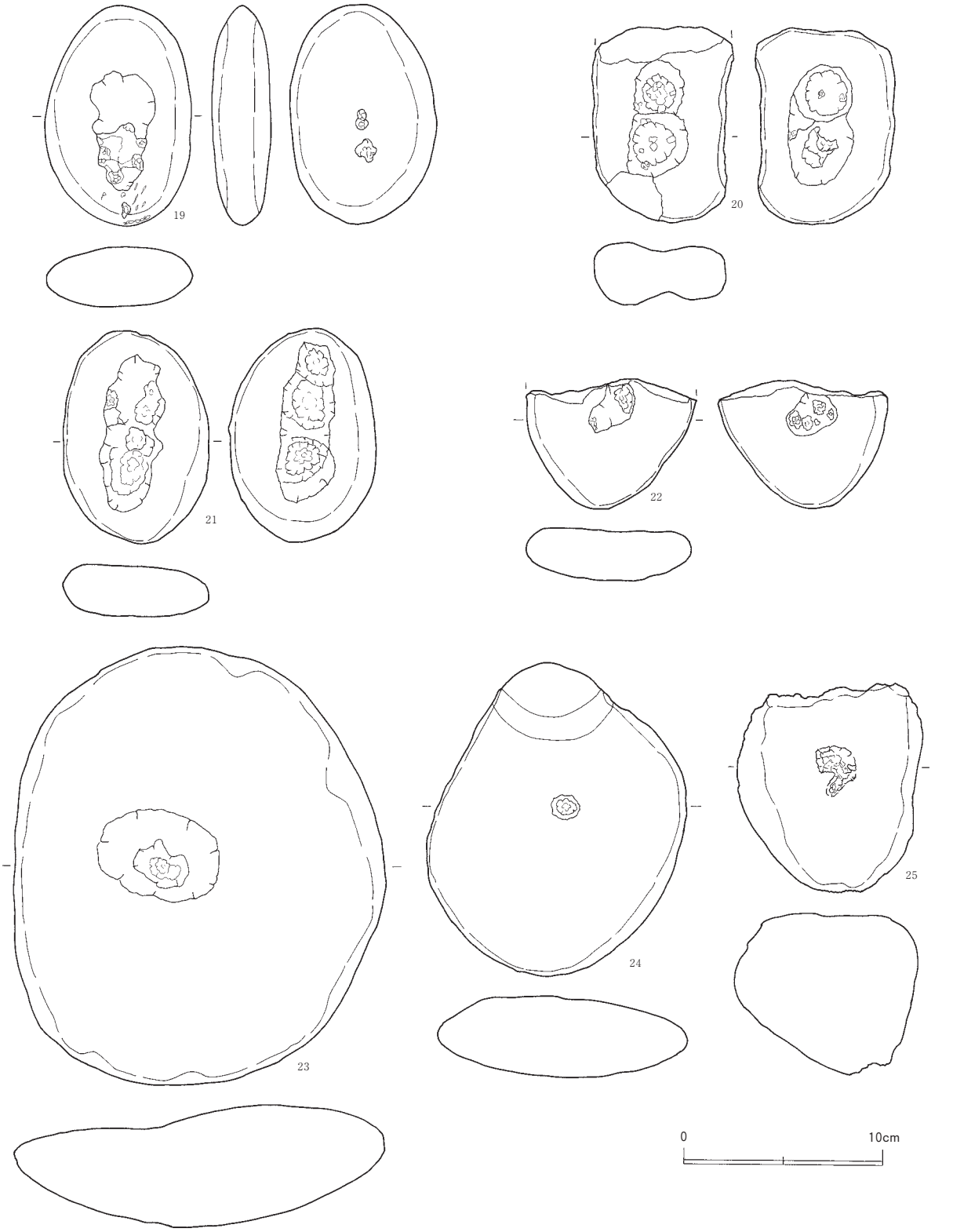


遺物No.	図版No.	出土遺構	層位	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石質	その他
7	—	SD18	—	凹石	14.0	7.0	6.4	607.0	輝石安山岩	
8	13	SD18	—	凹石	11.0	7.8	3.9	486.2	輝石安山岩	敲石に転用？、被熱
9	—	SD18	木組下	凹石	12.2	7.7	3.95	550.0	安山岩	敲石に転用？
10	—	SD18	—	凹石	10.6	8.2	3.6	433.2	安山岩	敲石に転用？
11	—	SD18	—	凹石	7.4	6.4	3.5	212.8	安山岩	敲石に転用？
12	—	SD18	木組下	凹石・敲石	7.8	6.5	3.9	269.4	輝石安山岩	敲石に転用？

第20図　ＳＤ18出土石器（２）

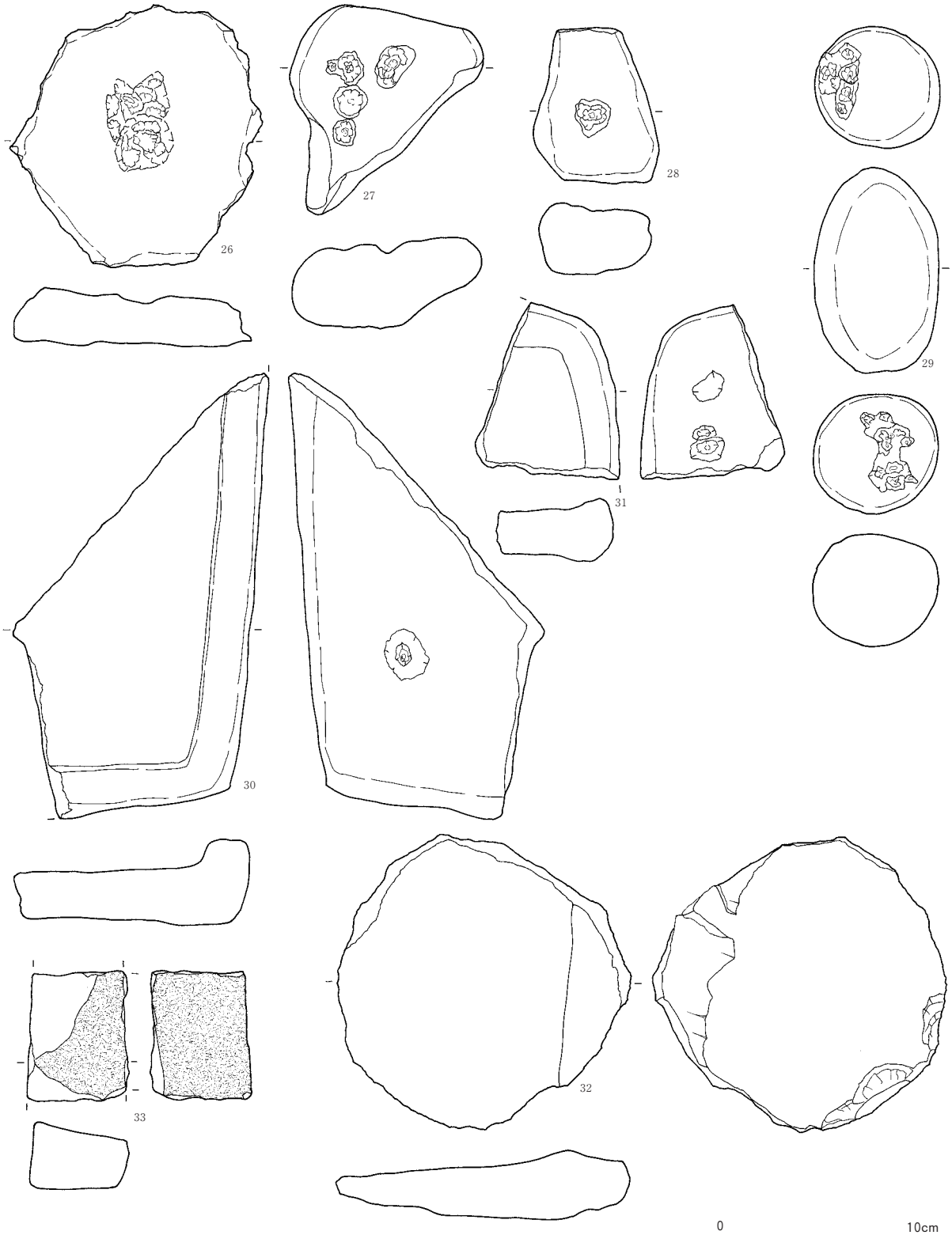
遺物No.	図版No.	出土遺構	層位	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石質	その他
13	―	SD18	―	凹石	18.5	11.5	6.0	1615.0	安山岩	
14	13	SD18	―	凹石	10.9	9.9	3.3	480.0	輝石安山岩	
15	13	SD18	―	凹石	13.4	13.0	7.4	1178.5	安山岩	
16	―	SD18	木組中	凹石	10.1	8.6	7.1	624.0	安山岩	
17	―	SD18	―	凹石	11.95	6.6	4.1	504.0	輝石安山岩	
18	―	SD18	―	凹石	12.9	6.0	3.0	340.0	変質安山岩	

第21図　ＳＤ18出土石器（３）



遺物No.	図版No.	出土遺構	層位	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石質	その他
19	—	SD18	木組中	凹石	11.0	7.3	3.1	348.9	変質安山岩	
20	—	SD18	—	凹石	9.8	7.1	3.2	295.8	輝石安山岩	
21	—	SD18	—	凹石	10.7	7.4	3.0	339.0	安山岩	
22	—	SD18	木組下	凹石	6.4	8.6	2.75	170.4	輝石安山岩	
23	—	SD18	—	凹石	22.0	18.7	6.2	3440.0	輝石安山岩	
24	—	SD18	—	凹石	15.6	13.0	5.2	1120.0	安山岩	
25	—	SD18	木組中	凹石	10.4	9.3	8.2	994.0	変質安山岩	

第22図　ＳＤ18出土石器（４）

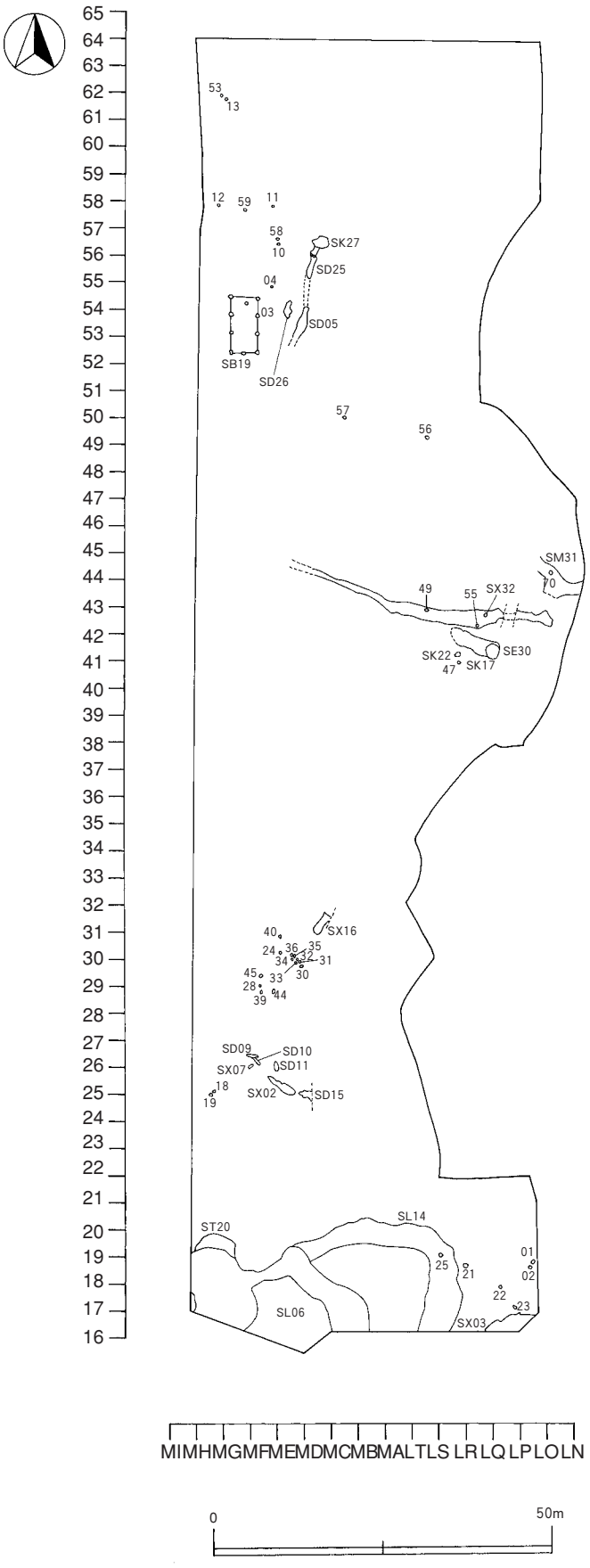


遺物No.	図版No.	出土遺構	層位	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石質	その他
26	13	SD18	木組下	凹石	13.0	12.5	3.1	518.0	輝石安山岩	
27	―	SD18	木組下	凹石	10.4	9.6	4.6	364.5	輝石安山岩	
28	―	SD18	―	凹石	7.8	6.2	3.7	211.0	安山岩	
29	―	SD18	―	敲石	10.3	6.2	5.9	473.0	安山岩	
30	13	SD18	―	石皿	22.1	12.7	4.3	956.0	凝灰質砂岩	裏面は凹石
31	13	SD18	―	石皿	8.6	7.2	3.2	191.3	凝灰質砂岩	裏面は凹石
32	―	SD18	―	石皿？	14.6	14.7	3.5	874.0	輝石安山岩	打ち欠き石？
33	―	SD18	―	砥石	6.4	5.1	3.3	141.6	砂岩	古代の可能性有

第23図　ＳＤ18出土石器（５）

遺物No.	図版No.	出土位置	層位	器種	長さ	幅	厚さ	樹種	その他
1	—	SD18	—	割材	70.1	14.8	6.5	ブナ科クリ属クリ	木組み用材、裏面に紐の痕？
2	—	SD18	—	割材	33.5	14.6	7.3	ブナ科クリ属クリ	木組み用材
3	—	SD18	—	割材	30.1	12.0	5.0	ブナ科クリ属クリ	木組み用材、両端側面に加工痕
4	—	SD18	—	板材	66.9	15.3	3.4	ブナ科クリ属クリ	木組み用材
5	—	SD18	—	板材	86.8	19.0	3.2	ヒノキ科アスナロ属	木組み用材
6	—	SD18	—	板材	99.0	14.7	4.3	ヒノキ科アスナロ属	木組み用材

第24図　ＳＤ18木組み部材



第25図　沖積地部分遺構配置図

（２）井戸跡

ＳＥ30（第６層）

（第27～29・31・38図、図版４・７・８・13）

ＬＰ・ＬＱ41グリッドに位置する。平安時代の井戸底を約0.3ｍ掘り下げた地点から、縄文時代後期の土器を多く含んだ砂質土層（第６層）を検出した。縄文時代に帰属するのはこの第６層であり、上位の第５層までは平安時代のものと考えられ、縄文時代の井戸跡の上部は平安時代の井戸跡を構築する際に失われたと考えられる。直径約0.78ｍの不整円形で、確認された深さは1.17ｍ（第１層からの深さは約3.0ｍ）である。埋土はオリーブ黒色砂質土の単一層である。遺物は縄文時代後期初頭～後葉の土器が深鉢を中心に14箱、石器が２箱出土した。縄文土器は後期初頭～前葉：深鉢（145～156）、後期前葉：深鉢（157～169）、後期中葉：深鉢（170～171）、後期：粗製深鉢（172～195）・深鉢底部（196～204）・台付鉢（205）・壺か注口土器（206～208）・土製品（209）の55点を掲載した。後期初頭～前葉のうち145・154は口縁部に円孔をもち、145は同一個体がＳＤ18から出土した。後期前葉の深鉢はＳＤ18と同様にａ～ｄ類に分類した。ｂ類は157～163で、157～159・162は刺突文をもつ。ｃ類は164～166、ｄ類は167・168で、169は粗製だが器形はｂ～ｄ類に対応する。後期中葉の170・171は爪形文をもつ。粗製深鉢のうち172は補修孔をもつ。深鉢底部は196～204で、196～199は簾状圧痕、200・201は上げ底、202～204は無文で、204は壺の可能性がある。209は粗製土器を円形に打ち欠いたもので類似品がＳＤ18とＳＴ20からも出土した。石器は掻器（34）、二次加工のある剥片（35）、砥石（36・37）の４点を掲載した。掻器の34は刃部が片側縁のみである。砥石のうち36は砥面が表面のみで小型の石皿である可能性が高い。37は砥面を４面有

する。出土遺物の内容からＳＤ18と同時期の可能性が高く、トチの加工にも利用された可能性がある。遺構の規模から湧水を活用するために、人為的に掘り込まれた結果、形成された遺構と考えられる。

（３）捨て場

ＳＴ20（第26・29・30・32図、図版２・８・９）

ＭＦ･ＭＧ19グリッドに位置する。Ⅱ層精査中にＳＬ06とともに縄文土器を伴なった黒色のプランを確認した。ＳＬ06に南側の部分が切られており全体の規模は不明だが、捨て場の広がりは長軸（東－西）6.0ｍ×短軸（南－北）2.0ｍで、確認面から遺物を包含する最下層までの深さは約0.6ｍである。堆積土は15層に分かれ、ＳＬ14と同様にオリーブ色を基調とする。1～9層は粘質土でしまりが強く、10～15層は砂質土である。このうち、オリーブ黒色土の4層と暗オリーブ色土の13層が遺物包含層である。4層は確認面に一部露出し、これが確認時の黒色プランに相当し、遺物は磨耗したものが多い。13層は底面部分にあたり、2つの層には時期差があり、捨て場に相当するのは4層部分であると考えられる。ＳＬ14は数度にわたり流路を変えた形跡があり、13層は土色･土質が酷似し、底面付近に遺物の他トチ等の植物遺体が多く出土し、底面は起伏のある形状である等の理由から、この延長ではないかと推測される。遺物は縄文土器が5箱、剥片石器が13点、剥片が77点、礫石器1.5箱が出土した。縄文土器は後期中葉：深鉢（210～228）・台付鉢（229）壺（230～232）・土製品（233）の24点を掲載した。後期中葉のうち210～216は縄文・沈線文・磨きが施され、このうち210・211は沈線に並行する刺突列をもつ。215・216は刺突文をもち、216は渦巻状の沈線文等が施されている。217～219は縄文・沈線が施されている。深鉢底部は225～228で、225が木葉痕、他は簾状圧痕をもつ。233は粗製土器を円形に打ち欠いたもので類似品がＳＤ18とＳＥ30からも出土した。石器は石槍（38）、石篦（39～42）、石匙（43～45）、磨製石斧（46・47）の10点を掲載した。石槍の38は細長で両面に加工の施された木葉形である。石篦は39～41が篦形、42は細長で表面に自然面を残し、共に裏面は周縁加工のみである。石匙は43・44が縦型で43は表面に自然面を残し、45は横型で未成品である。磨製石斧の46・47は断面形が共に扁平であり、石材は46がひん岩、47が破砕岩である。

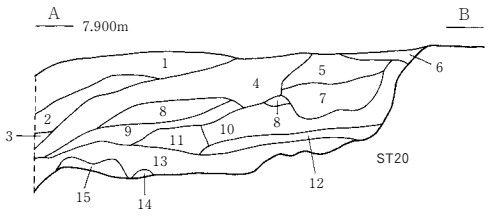
（４）土坑

ＳＫ22（第26図）

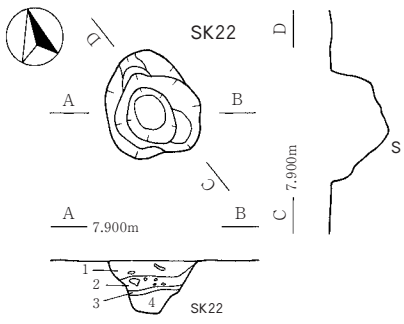
ＬＲ42グリッドに位置する。Ⅱ層精査中に黒色土の不整円形プランを確認した。長軸（南－北）0.57ｍ×短軸（東－北）0.49ｍで、確認面からの深さは0.27～0.29ｍである。埋土は4層に分かれ、1層は炭化物を含む黒色土、2層は灰色シルト質土、3層は黒褐色土を含む灰色粘質土、4層は黒褐色土を斑状に含む灰色シルト質土である。遺物は1・2・4層から縄文土器が0.5箱出土し、沈線で区画し撚糸圧痕文を施されたものもある。遺物から当遺構は縄文中期末～後期初頭のものと考えられる。

ＳＫ32（第26図・付図1）

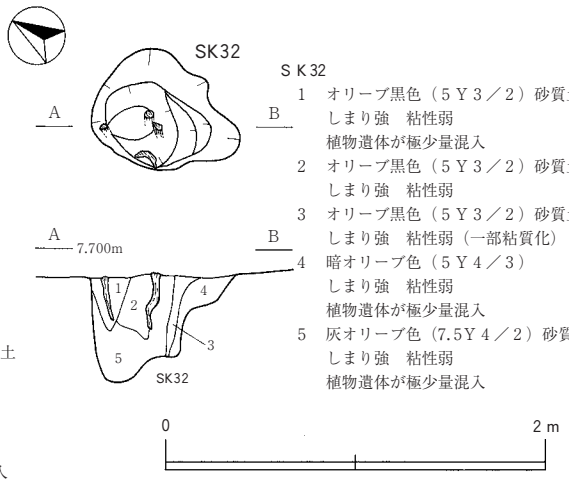
ＬＱ42グリッドに位置する。ＳＤ18の木組部底面で黒色の不整円形プランを確認した。長軸（南－北）0.78ｍ×短軸（東－北）0.56ｍで、確認面からの深さは0.55ｍである。埋土は5層に分かれ、1～3層はオリーブ黒色砂質土、4層は暗オリーブ色シルト質土、5層は灰オリーブ色砂質土である。1～3層はＳＤ18の立木に起因する層である。クルミとトチの内殻が出土したが、遺物は出土しなかった。ＳＤ18と関連深い遺構と考えられるが、詳細は不明である。



ＳＴ20
1　灰黄褐色（10ＹＲ４／２）
　しまり強　粘性強
　炭化物小粒が極少量混入
2　灰オリーブ色（５Ｙ５／３）
　しまり強　粘性強
　炭化物小粒が極少量混入
3　オリーブ黄色（５Ｙ６／３）砂質土
　しまり中　粘性中
4　オリーブ黒色（５Ｙ３／２）
　遺物包含層
　しまり強　粘性強
　炭化物中粒が少量混入
5　灰オリーブ色（５Ｙ４／２）
　しまり強　粘性強
　炭化物小粒が少量混入
6　暗灰黄色（2.5Ｙ４／２）
　しまり強　粘性中
7　黒褐色（2.5Ｙ３／２）
　しまり中　粘性強
　炭化物極小粒が少量混入
8　灰オリーブ色（５Ｙ５／３）
　しまり強　粘性強
　オリーブ黒色土（４層）中～大粒が中量混入
9　暗オリーブ色（５Ｙ４／３）
　しまり中　粘性中
10　暗灰黄色（2.5Ｙ４／２）砂質土
　しまりやや強　粘性弱
　炭化物小粒が極少量混入
11　灰オリーブ色（５Ｙ５／２）砂質土
　しまり中　粘性弱
12　オリーブ黒色（５Ｙ３／１）砂質土
　しまりかなり弱　粘性弱
13　暗オリーブ色（５Ｙ４／３）砂質土
　遺物包含層（ＳＬ14の延長？）
　しまり中　粘性弱
14　灰オリーブ色（５Ｙ４／２）砂質土
　しまりかなり弱　粘性弱
15　オリーブ黒色（５Ｙ３／２）砂質土
　しまり中　粘性中

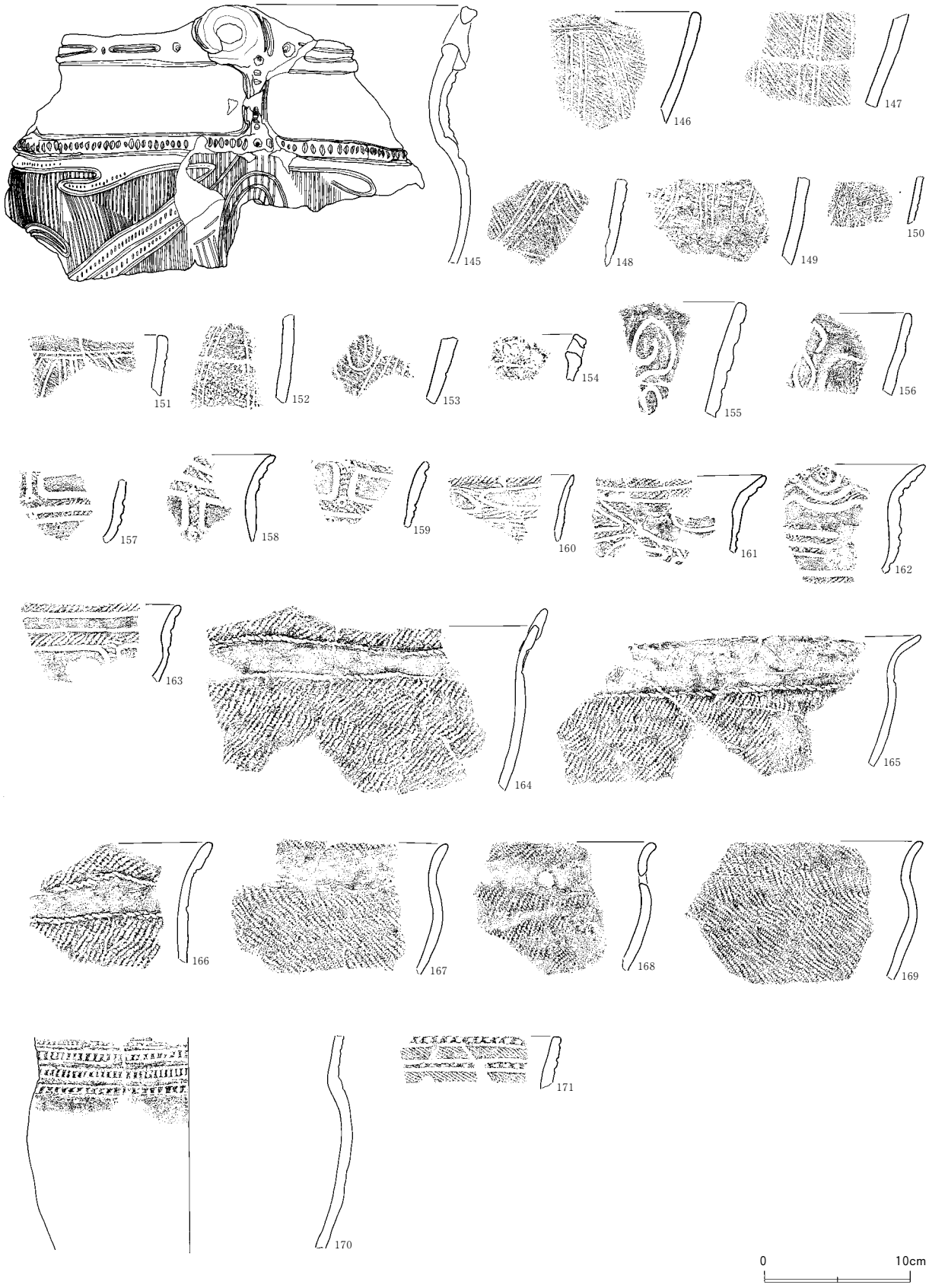


ＳＫ22
1　黒色（7.5Ｙ２／１）
　しまり中　粘性中
　炭化物中粒が少量混入
　植物遺体が粒状に混入
2　灰色（５Ｙ４／１）
　しまり中　粘性中
　炭化物斑状に混入
3　灰色（7.5Ｙ５／１）粘質土
　しまり中　粘性強
　黒褐色土が極少量混入
4　灰色（7.5Ｙ４／１）
　しまり中　粘性やや強
　淡い黒褐色土が斑状に混入



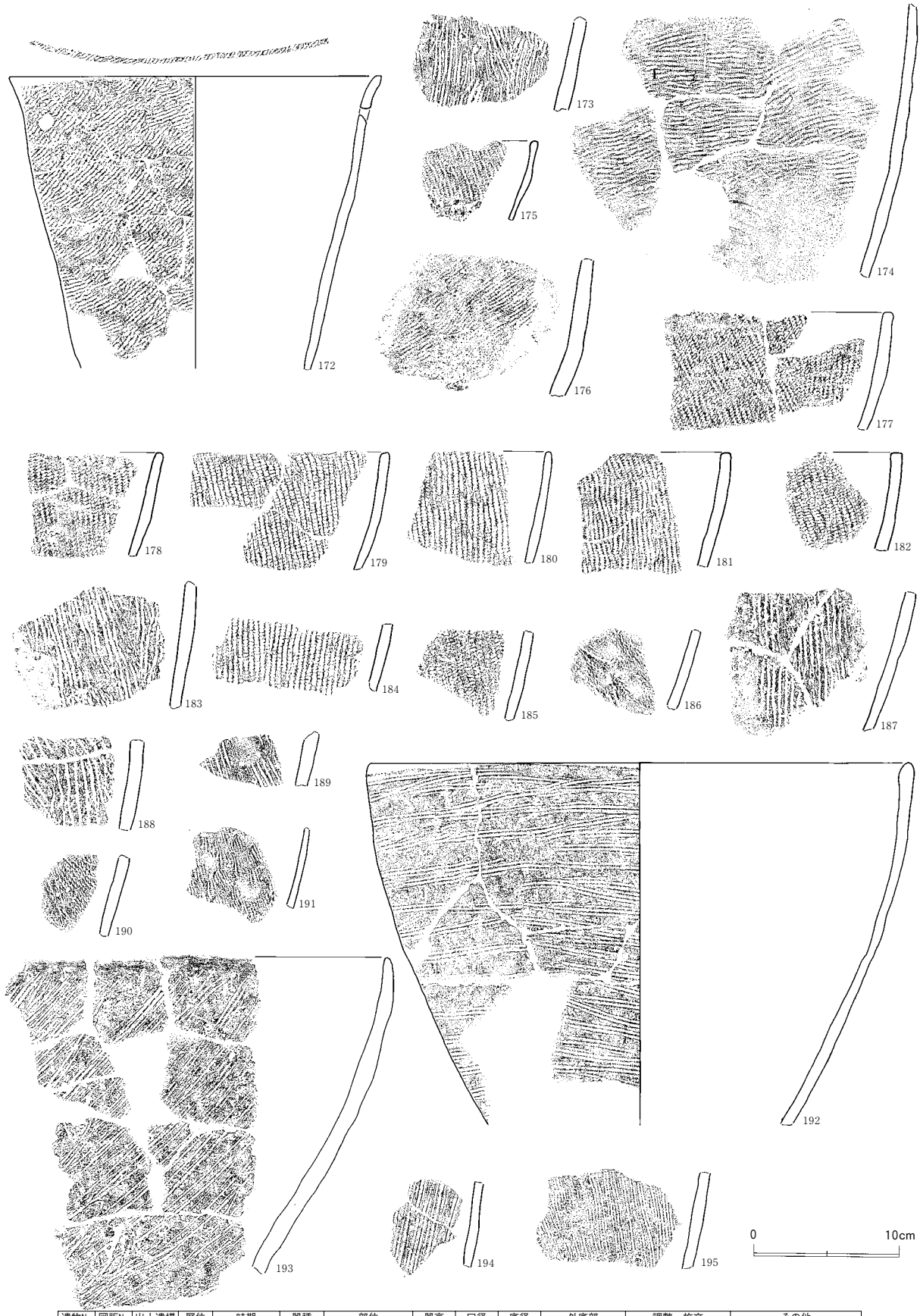
ＳＫ32
1　オリーブ黒色（５Ｙ３／２）砂質土
　しまり強　粘性弱
　植物遺体が極少量混入
2　オリーブ黒色（５Ｙ３／２）砂質土
　しまり強　粘性弱
3　オリーブ黒色（５Ｙ３／２）砂質土
　しまり強　粘性弱（一部粘質化）
4　暗オリーブ色（５Ｙ４／３）
　しまり強　粘性弱
　植物遺体が極少量混入
5　灰オリーブ色（7.5Ｙ４／２）砂質土
　しまり強　粘性弱
　植物遺体が極少量混入

第26図　捨て場（ＳＴ20）・土坑（ＳＫ22・32）



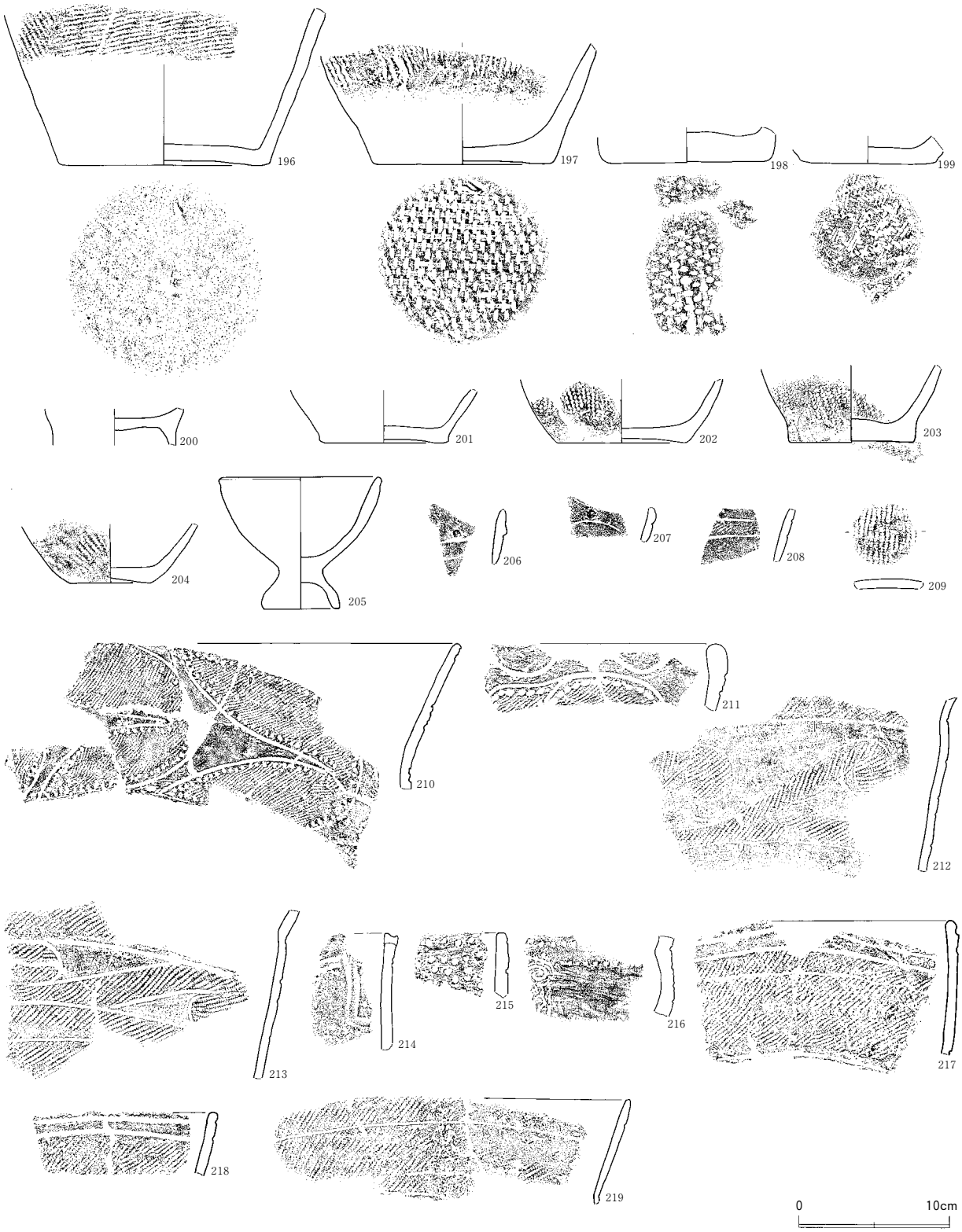
遺物No.	図版No.	出土遺構	層位	時期	器種	部位	器高	口径	底径	外底部	調整・施文	その他
170	8	SE30	6	後期中	深鉢	体部上半	—	—	—	—	磨き・沈線・爪形文	

第27図　ＳＥ30出土縄文土器（１）



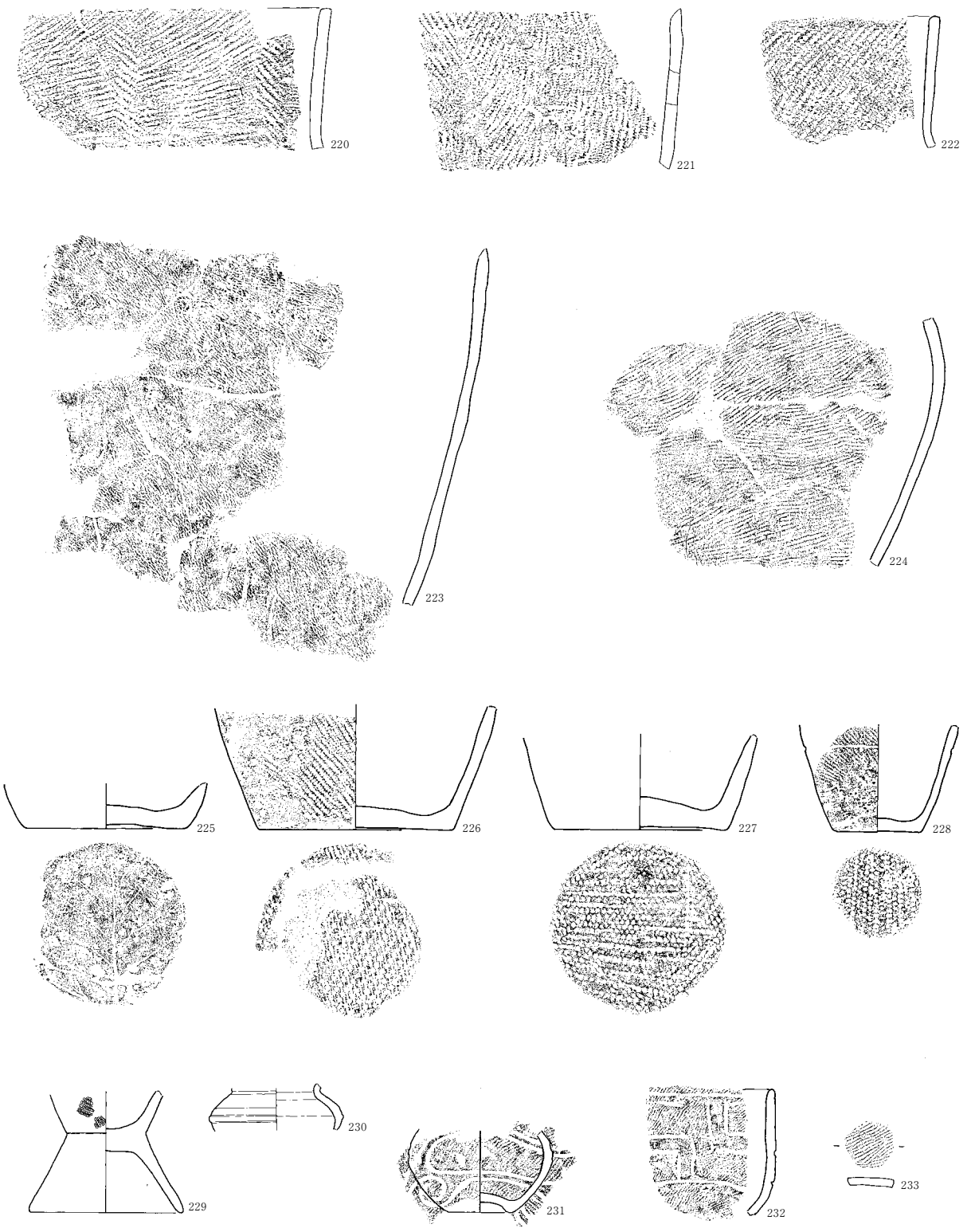
遺物No.	図版No.	出土遺構	層位	時期	器種	部位	器高	口径	底径	外底部	調整・施文	その他
172	8	SE30	6	後期	深鉢	口縁～体部上半	〔21.0〕	25.6	―	―	縄文	補修孔、口縁に縄文
192	8	SE30	6	後期	深鉢	口縁～体部上半	〔25.0〕	37.2	―	―	櫛描文	

第28図　ＳＥ30出土縄文土器（２）



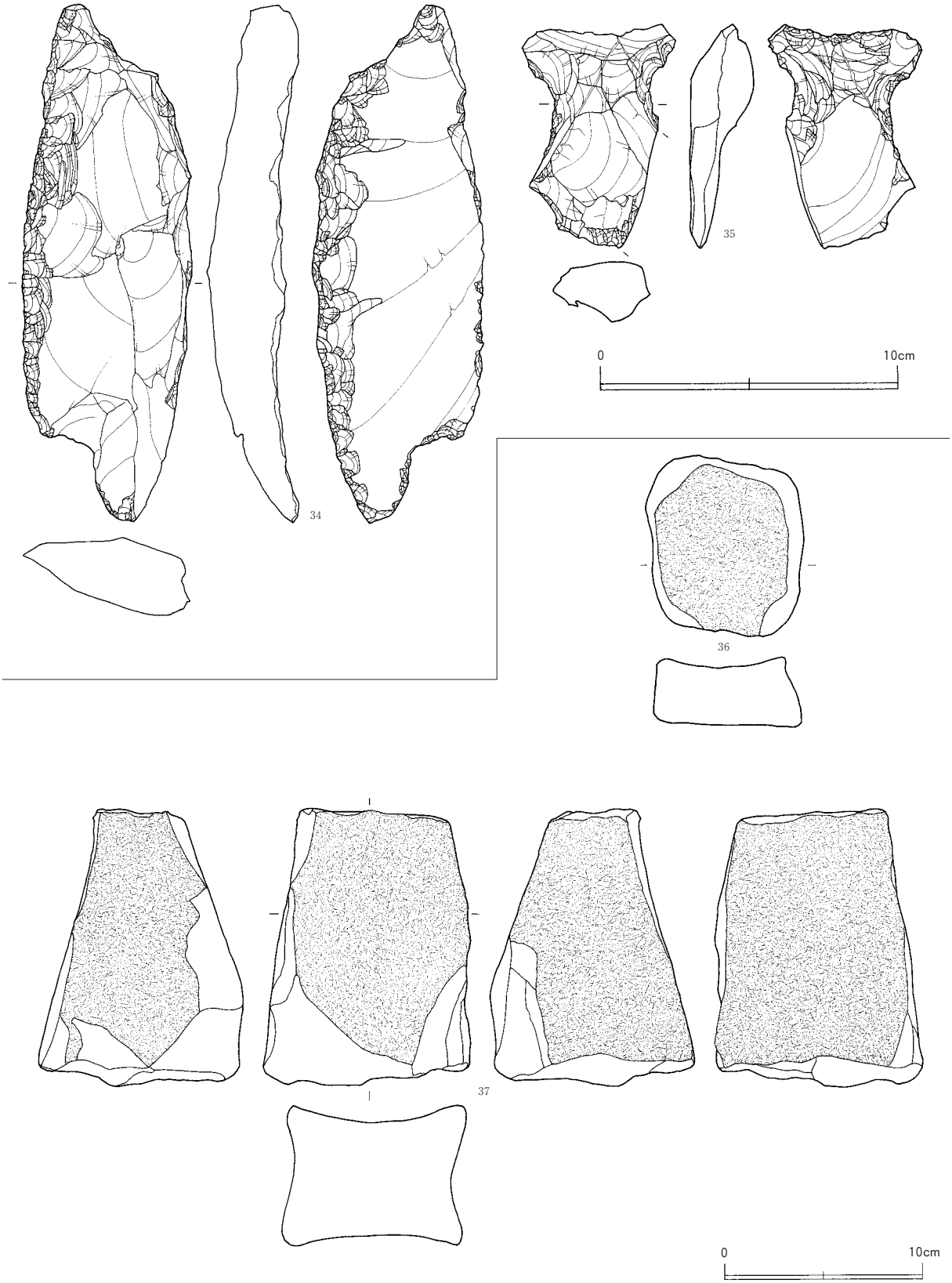
遺物No.	図版No.	出土遺構	層位	時期	器種	部位	器高	口径	底径	外底部	調整・施文	その他
196	-	SE30	6	後期	深鉢	体部下半～底部	〔10.6〕	—	13.4	網代痕？	縄文・下部：磨き	
197	-	SE30	6	後期	深鉢	体部下半～底部	〔8.1〕	—	11.6	網代痕	縄文、磨滅	
198	-	SE30	6	後期	深鉢	底部	〔2.3〕	—	10.2	網代痕	—	
199	-	SE30	6	後期	深鉢	底部	〔1.9〕	—	9.0	網代痕	—	
200	-	SE30	6	後期	深鉢	底部	〔2.4〕	—	—	台付	磨き	台底破損
201	-	SE30	6	後期	深鉢	体部下半～底部	〔3.5〕	—	8.6	磨き・上底	磨き	
202	-	SE30	6	後期	深鉢	底部	〔4.3〕	—	8.4	無文	縄文	
203	-	SE30	6	後期	深鉢	体部下半～底部	〔5.6〕	—	8.4	無文	縄文	
204	-	SE30	5	後期	深鉢	体部下半～底部	〔3.9〕	—	5.5	無文	縄文	
205	8	SE30	6	後期	台鉢	ほぼ完形	8.8	10.8	5.0	台付	磨き	
209	-	SE30	6	後期	土製品	完形	4.0	3.0	—	—	縄文	円形に打ち欠き

第29図　ＳＥ30出土縄文土器（３）・ＳＴ20出土縄文土器（１）



遺物No.	図版No.	出土遺構	層位	時期	器種	部位	器高	口径	底径	外底部	調整・施文	その他
225	9	ST20	4	後期中	深鉢	底部	〔3.0〕	―	10.6	木葉痕	摩滅	
226	-	ST20	4	後期中	深鉢	体～底部	〔8.2〕	―	12.8	網代痕	縄文	
227	-	ST20	4	後期中	深鉢	底部	〔6.3〕	―	11.4	簾状痕	摩滅	
228	-	ST20	4	後期中	深鉢	体～底部	〔7.1〕	―	5.4	簾状痕	縄文・沈線	
229	9	ST20	4	後期中	台付鉢	底部（台）	〔8.1〕	―	10.2	―	体部：縄文、台：磨き	
230	9	ST20	4	後期中	壺	肩部	―	3.1	―	―	磨き・沈線	
231	9	ST20	-	後期中	壺	体下半～底部	〔5.4〕	―	4.2	上げ底	縄文・箆描文	
233	-	ST20	4	後期中	土製品	―	0.6	―	3.3	―	縄文・沈線	円形に打ち欠き

第30図　ＳＴ20出土縄文土器（２）



遺物No.	図版No.	出土遺構	層位	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石質	その他
34	13	SE30	6	掻器	17.2	5.8	3.1	206.0	珪質頁岩	
35	―	SE30	―	ＲＦ	7.5	5.2	2.1	53.2	珪質頁岩	
36	13	SE30	6	砥石	9.1	8.0	3.5	371.0	砂岩	石皿？
37	13	SE30	6	砥石	13.8	10.45	6.95	1570.0	砂岩	

第31図　ＳＥ30出土石器

遺物No.	図版No.	出土遺構	層位	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石質	その他
38	―	ST20	4	石槍	5.3	1.3	1.0	5.2	珪質頁岩	
39	―	ST20	4	石篦	6.7	3.7	1.5	29.1	珪質頁岩	
40	―	ST20	4	石篦	6.2	3.9	1.6	41.3	珪質頁岩	
41	―	ST20	4	石篦	4.1	2.9	0.8	10.7	珪質頁岩	
42	―	ST20	4	石篦	7.3	2.9	1.5	33.4	珪質頁岩	表面に自然面
43	―	ST20	13	石匙	7.85	2.6	1.0	11.5	珪質頁岩	表面に自然面
44	―	ST20	13	石匙	6.6	4.0	1.0	15.7	珪質頁岩	
45	―	ST20	4	石匙	4.4	5.4	1.4	23.5	珪質頁岩	
46	―	ST20	4	磨製石斧	〔5.6〕	3.9	2.6	85.8	ひん岩	刃部欠損
47	―	ST20	4	磨製石斧	〔4.7〕	3.9	1.5	33.2	破砕岩（珪質頁岩）	刃部欠損

第32図　ＳＴ20出土石器

2　平安時代の遺構と遺物

（1）掘立柱建物跡

ＳＢ19（第33・34・49・50図、図版2・14）

ＭＥ52～54、ＭＦ52～54グリッドに位置する。表土除去の際にＰ１・４・７・９・10の柱材をⅡ層上面から、Ⅱ層精査中にＰ５・６・８の柱材を検出した。プランの確認はⅡ～Ⅲ層である。この遺構の検出された地域では、整地層と考えられるⅢ層が薄く堆積している。遺構の規模は、桁行（南－北）8.04ｍ×梁間（東－西）4.12ｍの３間×２間で桁行の方向がやや東に傾いている。柱穴間の距離は、桁行が2.52～2.82ｍ、梁間は1.92～2.48ｍで、庇に相当する柱穴は検出されなかった。建物を構成している10基の柱穴のうち９基から柱材が検出され、柱材の欠損・消失のためプランの検出が下層であったＰ２を除いては、プランが確認された標高は7.2～7.37ｍで同一の建物を構成する柱穴であると判断した。柱穴の平面形は、Ｐ９・10を除いて長径0.47～0.59ｍで、Ｐ６・９が隅丸方形、その他が円形または楕円形で、Ｐ９はプランが確認されなかった。確認面からの深さは最も浅いＰ９が15.6㎝、最も深いＰ５が47.8㎝と幅があるが、梁間の中央に位置するＰ９･10以外は底面標高が6.79～6.93ｍと均一である。また、Ｐ６・７の柱材は掘り形より下に突き刺された状態で出土しており、いずれの柱穴からも礎石・礎板は出土しなかった。埋土はＰ４が３層に分かれ、その他は掘り形のないＰ10を除き全て単一層である。柱材のうちＰ１・４・５・９は丸材、Ｐ３・６～８は角材で、Ｐ３～７には刃物による加工痕が多く見られる。特に丸材は何度も面取り加工がされている。また、Ｐ４・７は底部付近に筏穴と考えられる不整形の穴がある。柱材の太さは10.0～20.0㎝である。自然科学分析の結果からＰ９・10は７～８世紀のスギ材、Ｐ４・７はヒノキ材との結果が得られた。遺物は周辺から土師器・須恵器・木片等がⅡ層中から多く出土した。また、Ｐ９の北側では刀子（６）が出土した。木製品は柱材のうちＰ７（７）･Ｐ４（８）の２点を掲載した。その他の柱は図版に掲載した。

（2）溝跡

ＳＤ05（第34～36・41・42・51～54図、図版3・4・10・11）

ＭＣ53・54、ＭＤ52～54グリッドに位置する。Ⅱｂ層精査中に土師器や杭状・板状の木製品を含んだ黒褐色のプランを確認した。ＳＤ25・26、ＳＫ27と隣接しており、出土遺物の分布から一連の施設と考えられる。全長は不明だが、長さ約6.0ｍ、最大幅は中央部分で1.4ｍ、最小幅は北側部分で0.38ｍである。確認面からの深さは中央部分の最深部で0.22ｍである。埋土は４層に分かれる。１層は黒色、２層は黒褐色砂質土でいずれも炭化物粒子を含み、２層は極僅かに火山灰を含んでいる。土師器片の多くはこの２つの層から出土した。３層は灰色、４層は黒褐色粘質土でいずれも粘性が強く、炭化物は含まない。基本土層のⅢ・Ⅳ層に由来し、完形に近い土師器坏や木片等が出土した。埋土は、ほぼレンズ状に堆積しており、自然堆積であると考えられる。遺物は完形の坏を含む土師器が1205点（うち黒色処理のものが57点）、須恵器片19点、砥石１点、木製品は箸・曲物等の他に、溝の壁に沿った板材や、杭状のものが46点出土した。土師器は坏（１～27）・有台坏（28～33）・耳皿（34）・甕（35～40）の40点を掲載した。法量が計測できる坏は、底径指数からＡ～Ｃ類、高径指数から１～３類に分類し、Ａ類（45.1～：底径に対し口径が広い）・Ｂ類（40.0～45.0：平均）・Ｃ類（～39.9：底径に対し口径が狭い）、１類（40.1～：底径に対し器高が高い）・２類（35.0～40.0：平均）３類（～34.9：底径に対し器高が低い）とした。Ａ－１類が１・２、Ａ－２類が３～６、Ａ－３類が７・

８、Ｂ－１類が９～12、Ｂ－２類が13～16、Ｂ－３類が17～23で20・23のみ側面調整が異なる。Ｃ－２類が24・25、Ｃ－３類が26である。切り離しは全て回転糸切りによる。口縁部は３・９・15・18・22・25～27が外反、19・20・23が内湾、４・16・18は内湾から口縁で外反、他はほぼ直線的に立ち上がる。27・33・34は黒色処理が施されている。甕のうち36～40は長胴甕で、40は底部と考えられる。須恵器は有台坏（41）・甕（42～44）の４点を掲載した。41は高台部を打ち欠いた転用硯で、両面に擦り痕、外面に墨痕がみられる。木製品は板材（９～11）、板状（12）、杭（13～26）、棒状（27）、箸（28）の20点を掲載した。９～10は溝の側板と考えられ類似品がＳＤ26からも出土している。13～26の杭は溝の中央部に環状に打ち込まれていたものである。放射性炭素年代測定の結果から、板材は７・８世紀の数値が得られた。杭状木製品は23本で、そのうちの15本が溝の中央に環状に刺さっており、その内側から完形の土師器坏が多く出土した。２点が完形で重なり合って出土したものもある。遺構からは墨書土器や木簡等の出土はないが、遺物の出土状況から祭祀等に関わる施設と考えられる。

ＳＤ25（第34・37・43図）

ＭＣ55・56グリッドに位置する。Ⅱｂ層精査中に土師器片や木製品を含んだ黒褐色のプランを確認した。当遺構の南側には木材が列状に並んだ遺物集中区があり、周辺はしみ状に黒くなっている。この遺物集中区は当遺構とＳＤ05の中間に位置し、一連の溝跡であった可能性を示唆している。また、ＳＫ27に切られているが、これも当遺構と一連の施設であった可能性が高く、出土遺物も同様の傾向を示しており、これを裏付けている。全長は不明だが、長さは4.96ｍ、幅は約0.2～0.92ｍである。確認面からの深さは約0.13ｍで浅い溝状を呈し、底面の所々で柱穴状に深くなる部分がある。埋土は２層に分かれ、１層は黒褐色土で火山灰を僅かに含む。２層は灰色土でいずれも粘性はない。火山灰は、白頭山苫小牧火山灰と十和田ａ火山灰の交じり合い再堆積したものである。遺物は土師器１箱、須恵器甕３片、串状のものを含む木製品９点が出土した。土師器は坏（45～50）の６点、須恵器は甕（51・52）の２点を掲載した。

ＳＤ26（第34～36・43・54図、図版４）

ＭＤ53・54グリッドに位置する。ＳＤ05精査中に土師器や木片を含んだ黒褐色のプランをⅡｂ層で確認した。ＳＤ05・25、ＳＫ27と隣接しており、出土遺物からも一連の施設であったと考えられる。長さは（北－南）3.15ｍ、最大幅1.1ｍ、最小幅0.34ｍで、確認面からの深さは0.13ｍの溝状を呈する。底面は、北側では半円状、中央部はやや浅く平坦、南側はやや深く南東方向に向かって収束する。埋土はざらざらした黒褐色砂質土の単一層で、小粒の炭化物少量と火山灰を極少含む。遺物は土師器片138点、須恵器片２点、串状のものを含む木製品30点が出土した。木製品のうち、板状のものは中央部から南側にかけて南北方向に並んで出土した。また杭状のものは刺さった状態で２点出土した。土師器は坏（53～56）・有台坏（57・58）・長胴甕（59・60）の８点を掲載した。坏はＳＤ05と同様の分類をした。53はＡ－２類、54はＢ－３類で口縁部は共にほぼ直線的に立ち上がる。木製品は板材（29）、杭（30）の２点を掲載した。共にＳＤ05の遺物と同様の傾向を示しており、両遺構が一連のものであることを示唆している。

（３）井戸跡

ＳＥ30（１～５層）（第38・43～48・55・108図、図版３・４・11・12・13・14）

ＬＰ・ＬＱ41グリッドに位置する。ＳＫ17の底面で土師器片を含んだオリーブ灰色のプランを確認

した。平安時代の井戸底より下位には前述した縄文時代の井戸跡があり、この湧水は二時期に渡っての使用痕跡が確認された。平安時代の井戸跡に相当するのは１～５層である。長軸（南－北）2.23ｍ×短軸（東－西）2.15ｍで、確認面からの深さは1.85ｍである。埋土は５層に分かれ、１層はオリーブ黒色粘質土でＳＫ17の２・３層に相当すると考えられる。２層は暗オリーブ灰色粘質土、３層は灰オリーブ色粘質土である。４層は３層と酷似するが粘性が強く、植物遺体や５層に由来する砂質土を含む。５層は暗オリーブ灰色の砂質土である。遺物は土師器片が７箱出土したほか、５層上位を中心に直径10㎝以上の礫94点、中位以下を中心に墨書土器１点を含む完形の土師器坏が40点余り、葛法窯跡の出土品に類似する完形の須恵器坏１点が出土した。完形の土師器坏には口縁部を意図的に打ち欠いたと考えられるものが含まれている。５層では斎串・木箆・木桶底板等の木製品が出土した。遺物の出土状態から、この井戸跡では廃棄の際に、完形の土師器坏、次に礫を投げ入れ祭祀を執り行なったと考えられる。土師器坏は同時期に使用されたにもかかわらず、器形・胎土・焼成が多様である。

土師器は坏（61～110）・有台坏（111～113）・皿（114）・甕（115～117）の56点を掲載した。坏はＳＤ05と同様の分類をした。Ａ－１類が61～67、Ａ－２類が68～74、Ａ－３類が75、Ｂ－１類が76～79、Ｂ－２類が80～89、Ｂ－３類が90～100、Ｃ－１類が101、Ｃ－２類が102～108、Ｃ－３類109・110である。切り離しは全て回転糸切りによる。口縁部は64・80・85・91が外反、87・88が内湾、74は内湾から口縁で外反、他はほぼ直線的に立ち上がる。75は外面に墨書、74・84・88は黒色処理が施されている。65・96は油痕から燈明皿として使用されたと考えられる。64・66・72・77・88・94・104等の口縁部は意図的に打ち欠かれた可能性がある。有台坏のうち111は底部に菊花文をもつ。甕のうち115は黒色処理が施され、116・117は長胴甕である。須恵器は坏（118・119）・甕（120・121）の４点を掲載した。坏のうち118は、土師器と同様の分類ではＡ－３類にあたり、口縁部はやや内湾気味に立ち上がる。119は底部中央に径５㎜の穿孔をもつ。底部は２点とも回転箆切りである。石器は石鏃（48）、楔形石器（49）、二次加工のある剥片（50・51）、凹石（52）、打ち欠き石器（53・54）の７点を掲載した。石鏃の48は茎を有している。凹石の52は表裏両面に凹部を有し、隣接するＳＤ18に起因する可能性がある。打ち欠き石器の53・54は周縁を打ち欠き円形にしたもので、ＳＤ18から類似品が出土しており、54は被熱している。52～54は平安時代の井戸廃棄の際に投げ込まれた礫群に含まれていた。木製品は斎串（31）、木箆（32）、木桶底板（33）、割材（34）、矢板（35）の５点を掲載した。掲載遺物は全て第５層からの出土である。遺構は礫や土師器の出土状況や31の出土から、廃棄の際に祭祀が行われた井戸跡と考えられる。

（４）土坑

ＳＫ17（第39・46～48・56・108図、図版５・12）

ＬＱ41・42、ＬＲ41・42グリッドに位置する。Ⅴ層精査中に黒褐色のプランを確認した。下部にＳＥ30があり、廃棄された井戸跡の湧水が再度利用されたと考えられる。遺構の形状は湧水による浸食のため不整形である。西側が攪乱を受けているため全体の規模は不明だが、長軸（東－西）7.8ｍ×短軸（南－北）1.91ｍで、確認面からの深さは0.24ｍの不整楕円形を呈する。埋土は５層に分かれ、１層は黒褐色シルト質土で植物遺体を極僅かに含む。２層はオリーブ黒色シルト質土で植物遺体を少量含む。３層は２層と同質土だがしまりがゆるく、大粒の地山塊を少量含む。４層は灰色シルト質で大粒の地山塊を少量含む。５層は灰色粘質土で地山粒子を極僅かに含む。遺物は２・３層を中心に縄

文土器２箱、土師器３箱、須恵器片 11 点、剥片石器 0.5 箱、凹石１点、木製品 2.5 箱、礫 23 点が出土した。土師器は坏（122 ～ 133）の 12 点を掲載した。坏はＳＤ 05 と同様の分類をした。Ａ－２類が 122、Ａ－３類が 123・124、Ｂ－２類が 125 ～ 127、Ｂ－３類が 128、Ｃ－２類が 129、Ｃ－３類が 130 である。切り離しは全て回転糸切りによる。口縁部は 123・125・126・130 が外反、122・129 がやや内湾､他はほぼ直線的に立ち上がる。他の遺構に比べ器形が小さい傾向がある。須恵器は坏(134)・長頸瓶（135）の２点を掲載した。134 は土師器と同様の分類ではＡ－３類にあたり、かなり急に立ち上がる。135 は長頸瓶の頸部である。石器は表裏両面に凹部を有し、ＳＤ18に起因すると考えられる凹石（55）１点を掲載した。木製品は割材（36)、板状（37 ～ 39)、曲げ物側板（40 ～ 42)、棒状（43)、付木（44・45)、用途不明（46）の 11 点を掲載した。43 は下部が股状に開いており、抽象的な人形の可能性が考えられる。放射性炭素年代測定の結果、出土した木材から９世紀の数値が得られた。出土遺物から小規模な捨て場や祭祀関連の場であったと考えられるが、詳細は不明である。

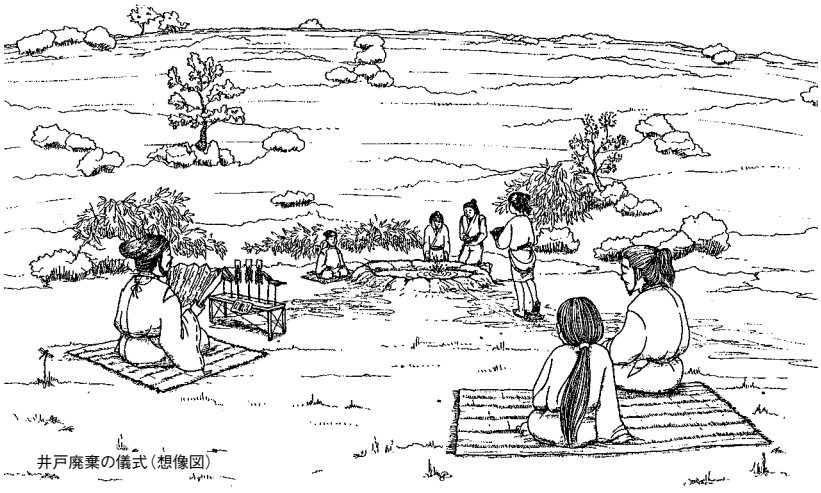
ＳＫ27（第 34・37・47・56 図、図版 12）

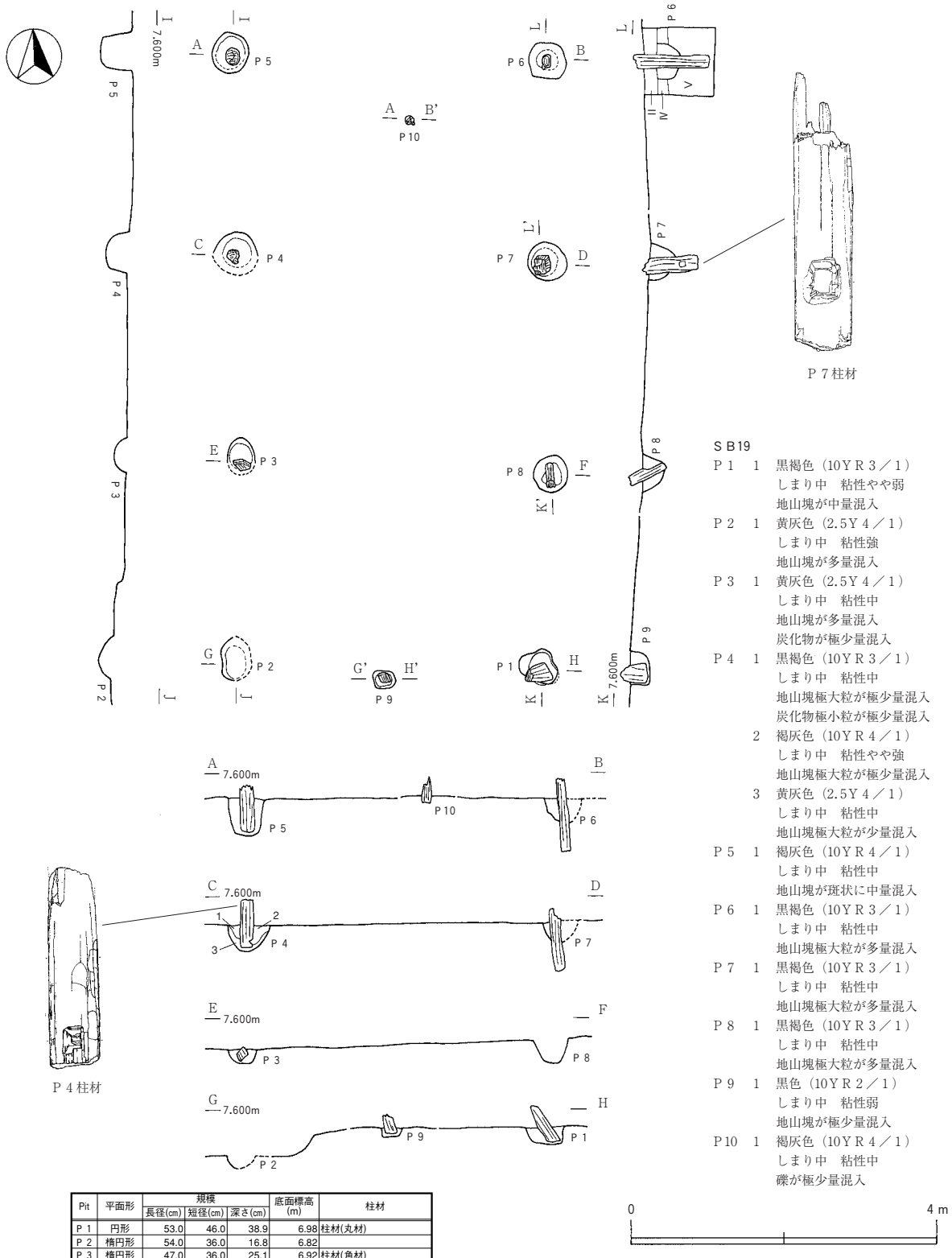
ＭＣ56グリッドに位置する。ＳＤ25の精査中にⅡｂ層で土師器片等を含んだプランを確認した。長軸（東－西）2.54 ｍ×短軸（南－北）1.7 ｍで、確認面からの深さは 0.17 ｍの楕円形を呈する。ＳＤ25を切っているが、遺物の出土状況等から一連の施設である可能性が高い。当遺構の北側にも溝跡が続く可能性があるが、攪乱のため検出することができなかった。埋土は２層に分かれ、いずれも粘質土で、１層は黒褐色で火山灰を極少量含み、２層は灰色である。遺物は黒色処理された坏や甕を含む土師器 0.5 箱、須恵器片１点、箸・付木等の木製品１箱が出土した。土師器は坏（136）の１点を掲載した。136 はＳＤ05と同様の分類でＢ－１類にあたり、切り離しは回転糸切りによる。口縁部はやや内湾気味に立ち上がる。須恵器は長頸瓶（137）の１点を掲載した。135 は長頸瓶の口縁～頸部で、赤褐色の胎土である。木製品は付木（47）を掲載した。

（４）性格不明遺構

ＳＸ03（第 40 図）

ＬＯ～ＬＱ16グリッドに位置する。Ⅱ層精査中に黒色の溝状プランを確認した。西側はＳＬ06・14に隣接する。遺構の東・南側は調査区外に広がっており全体の規模は不明だが、長軸（東－西）7.6 ｍ×短軸（南－北）2.8 ｍで、確認面からの深さは 0.08 ～ 0.4 ｍである。埋土は黒色粘質土の単一層で、黄灰色土を斑状に少量含む。また、粒状の火山灰を少量含み、一部は帯状に堆積している。他に植物遺体を多く含む。遺物は土師器片７点、須恵器片１点、須恵器系陶器の擂鉢１点、剥片石器２点が出土した。遺構の特徴から蛇行した流路をもつＳＬ06の延長部分である可能性が高いが、攪乱が激しく確認に至らなかった。


井戸廃棄の儀式（想像図）



SB19

P 1　1　黒褐色（10Y R 3／1）
しまり中　粘性やや弱
地山塊が中量混入

P 2　1　黄灰色（2.5Y 4／1）
しまり中　粘性強
地山塊が多量混入

P 3　1　黄灰色（2.5Y 4／1）
しまり中　粘性中
地山塊が多量混入
炭化物が極少量混入

P 4　1　黒褐色（10Y R 3／1）
しまり中　粘性中
地山塊極大粒が極少量混入
炭化物極小粒が極少量混入
2　褐灰色（10Y R 4／1）
しまり中　粘性やや強
地山塊極大粒が極少量混入
3　黄灰色（2.5Y 4／1）
しまり中　粘性中
地山塊極大粒が少量混入

P 5　1　褐灰色（10Y R 4／1）
しまり中　粘性中
地山塊が斑状に中量混入

P 6　1　黒褐色（10Y R 3／1）
しまり中　粘性中
地山塊極大粒が多量混入

P 7　1　黒褐色（10Y R 3／1）
しまり中　粘性中
地山塊極大粒が多量混入

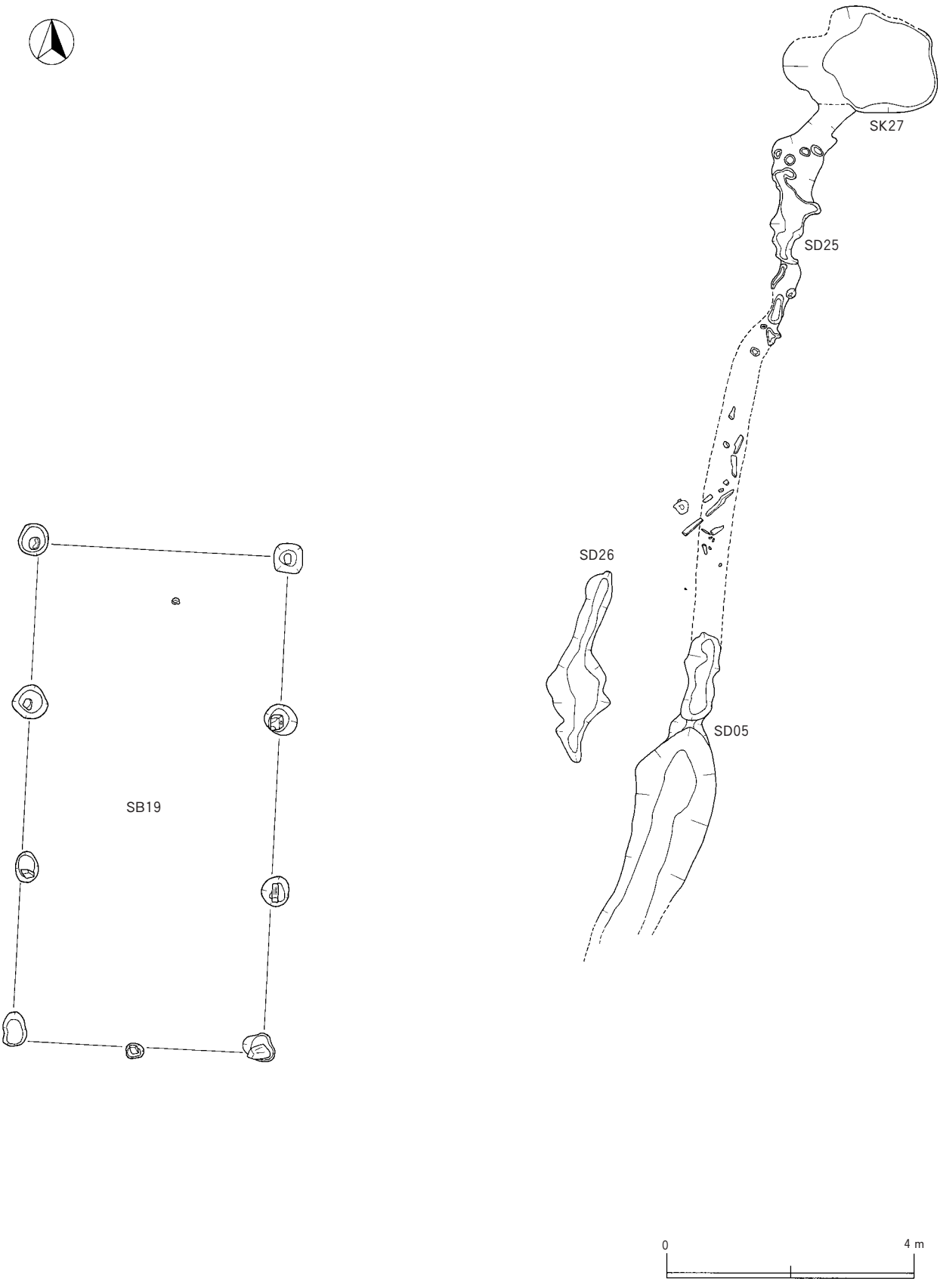
P 8　1　黒褐色（10Y R 3／1）
しまり中　粘性中
地山塊極大粒が多量混入

P 9　1　黒色（10Y R 2／1）
しまり中　粘性弱
地山塊が極少量混入

P10　1　褐灰色（10Y R 4／1）
しまり中　粘性中
礫が極少量混入

Pit	平面形	規模 長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	底面標高 (m)	柱材
P 1	円形	53.0	46.0	38.9	6.98	柱材(丸材)
P 2	楕円形	54.0	36.0	16.8	6.82	
P 3	楕円形	47.0	36.0	25.1	6.92	柱材(角材)
P 4	円形	59.0	54.0	35.6	6.85	柱材(丸材、筏穴)
P 5	円形	52.0	46.0	47.8	6.79	柱材(丸材)
P 6	隅丸方形	56.0	54.0	30.6	6.94	柱材(角材)
				[70.0]	[6.54]	[柱材の深さ・底面標高]
P 7	円形	52.0	47.0	35.6	6.96	柱材(角材、筏穴)
				[66.0]	[6.60]	[柱材の深さ・底面標高]
P 8	円形	49.0	44.0	39.5	6.93	柱材(角材)
P 9	隅丸方形	32.0	30.0	15.6	7.22	柱材(丸材)
P10	(角材)	(13.6)	(12.4)	(10.3)	(7.23)	柱材(丸材)のみ

第33図　掘立柱建物跡（ＳＢ19）



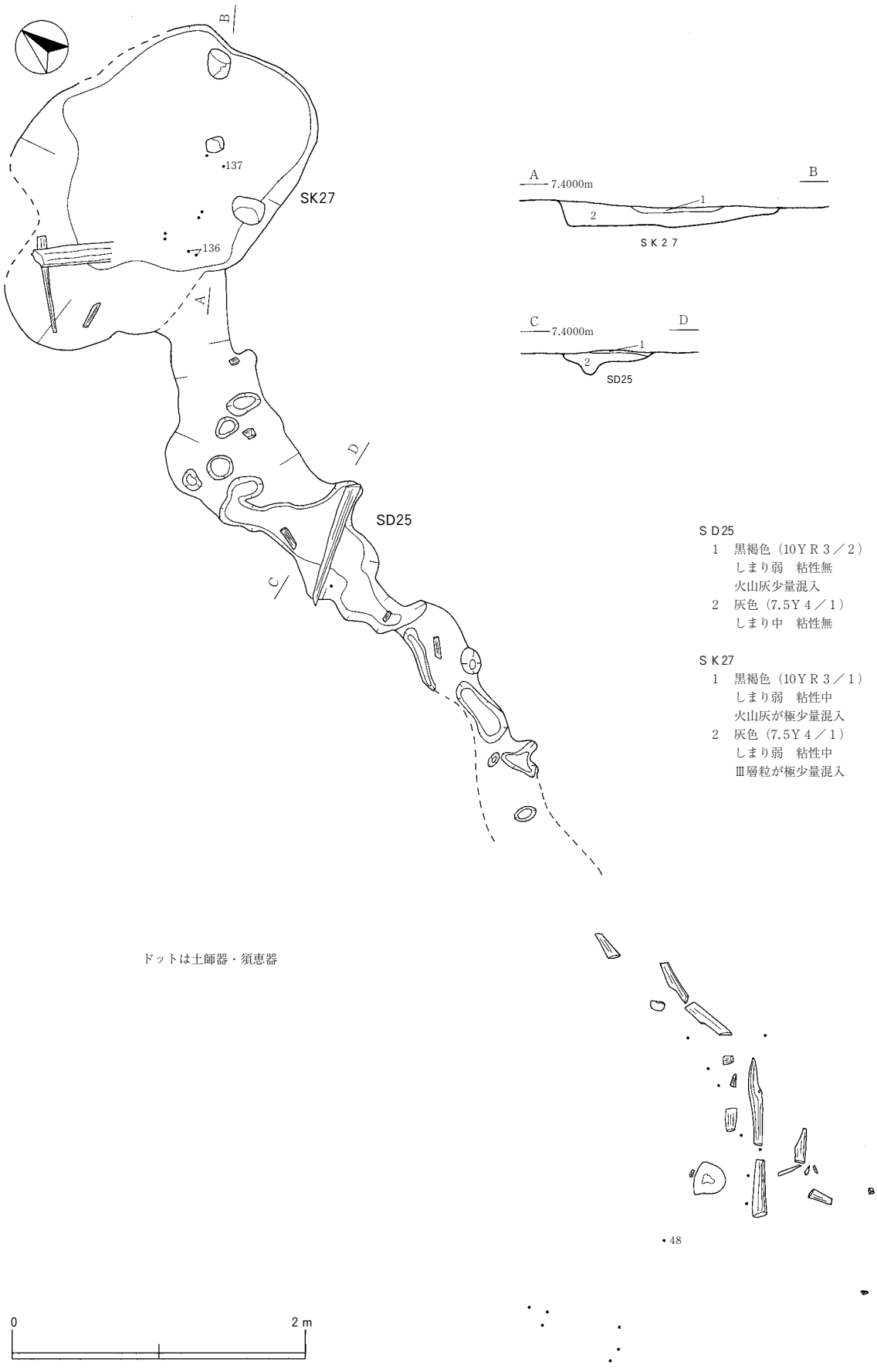
第34図　調査区南側の遺構配置

SD05
1　黒色（10YR2／1）砂質土
　しまり強　粘性無
　炭化物中粒が少量混入
2　黒褐色（10YR3／1）砂質土
　しまり強　粘性無
　炭化物中粒が極少量混入
　火山灰小粒が極少量混入
3　灰色（7.5YR6／1）
　しまり中　粘性中
4　黒褐色（2.5Y3／1）
　しまり中　粘性中

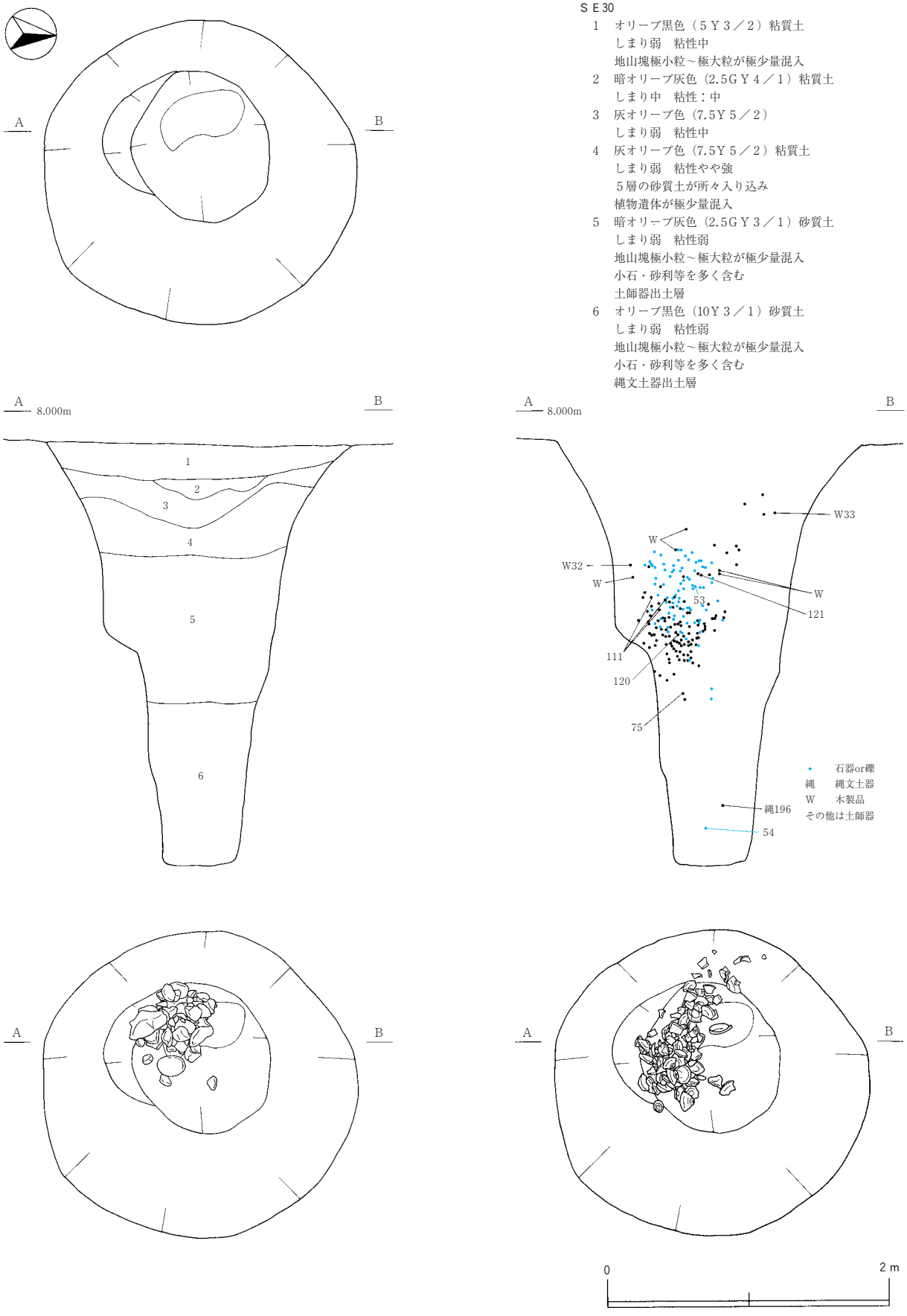
SD26
1　黒褐色（10YR3／1）
　しまり強　粘性無
　炭化物大粒が少量混入
　火山灰大粒が極少量混入
　黒色土が斑状に少量混入

第35図　溝跡（SD05・26）

第36図　ＳＤ05・26遺物出土状況

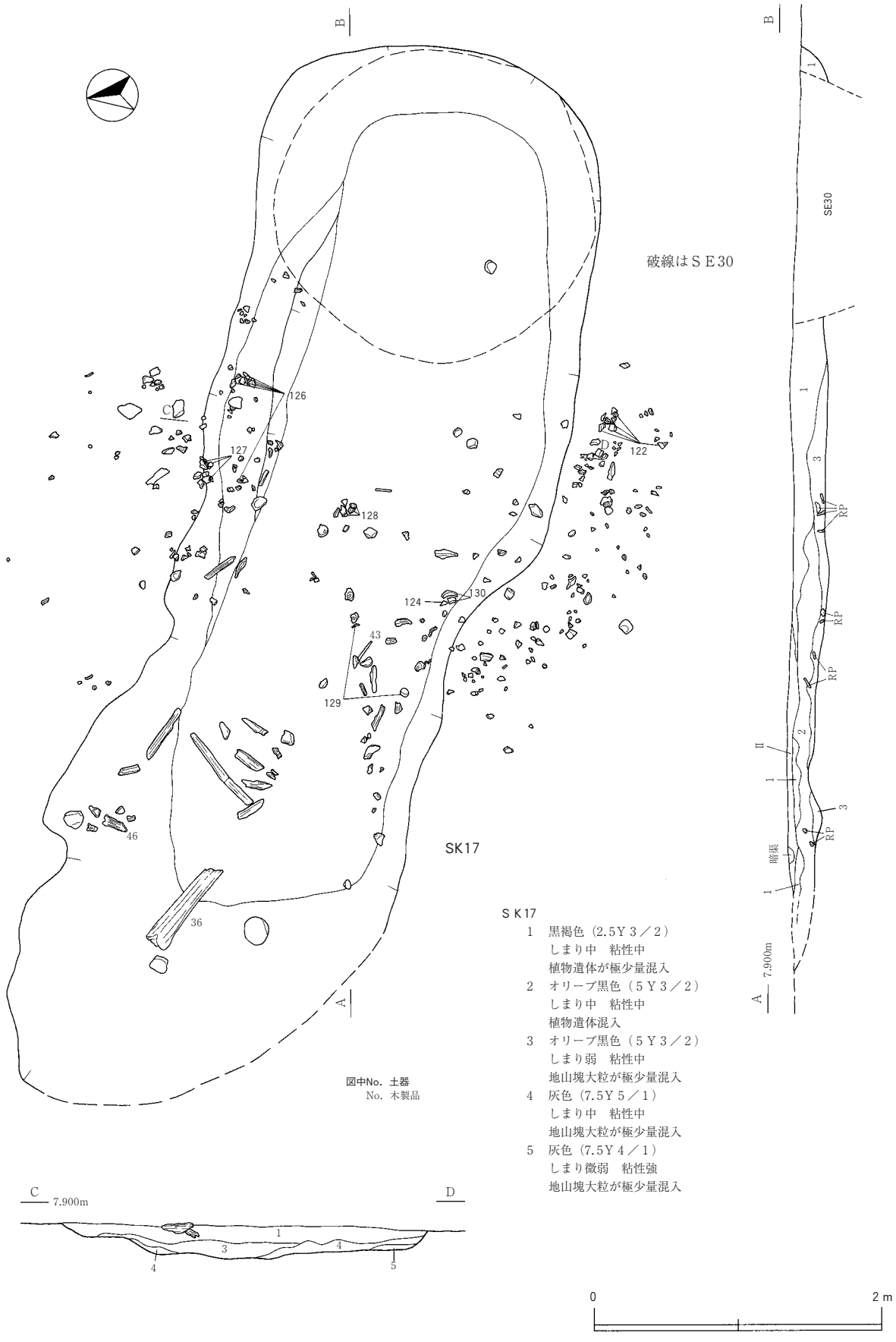


第37図　溝跡（ＳＤ25）・土坑（ＳＫ27）



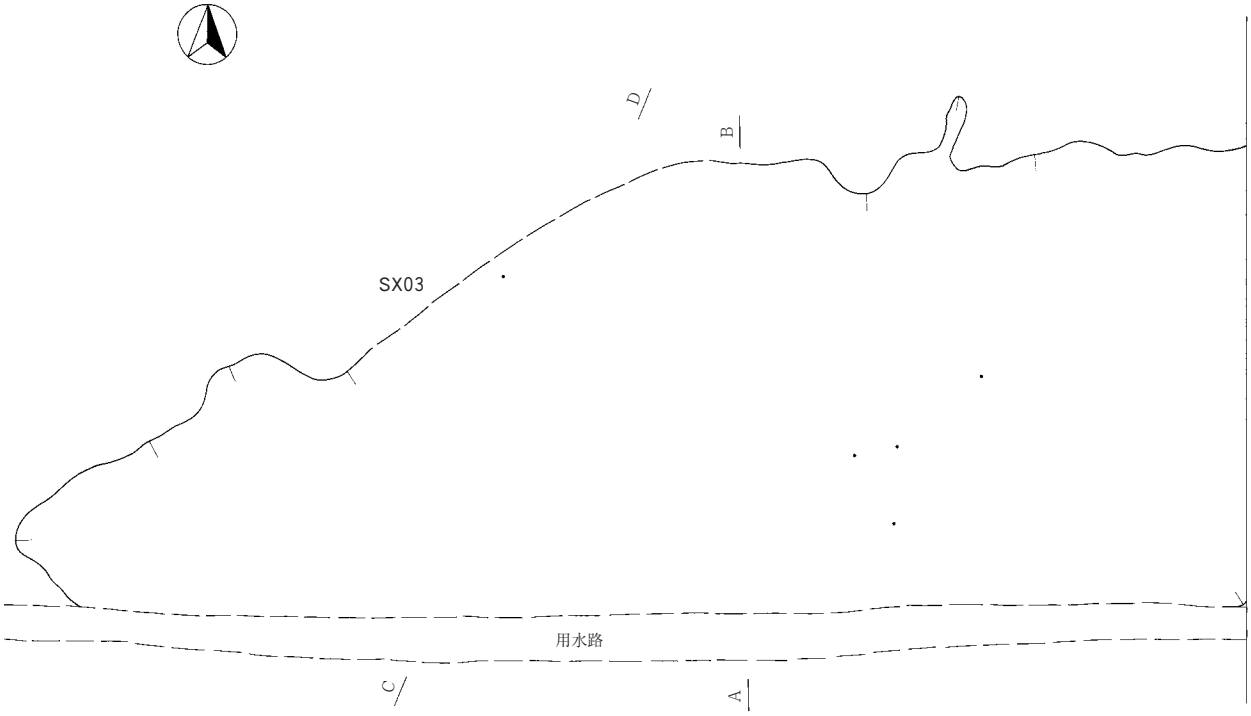
ＳＥ30
1　オリーブ黒色（５Ｙ３／２）粘質土
しまり弱　粘性中
地山塊極小粒～極大粒が極少量混入
2　暗オリーブ灰色（2.5Ｇ Ｙ４／１）粘質土
しまり中　粘性：中
3　灰オリーブ色（7.5Ｙ５／２）
しまり弱　粘性中
4　灰オリーブ色（7.5Ｙ５／２）粘質土
しまり弱　粘性やや強
５層の砂質土が所々入り込み
植物遺体が極少量混入
5　暗オリーブ灰色（2.5Ｇ Ｙ３／１）砂質土
しまり弱　粘性弱
地山塊極小粒～極大粒が極少量混入
小石・砂利等を多く含む
土師器出土層
6　オリーブ黒色（10Ｙ３／１）砂質土
しまり弱　粘性弱
地山塊極小粒～極大粒が極少量混入
小石・砂利等を多く含む
縄文土器出土層

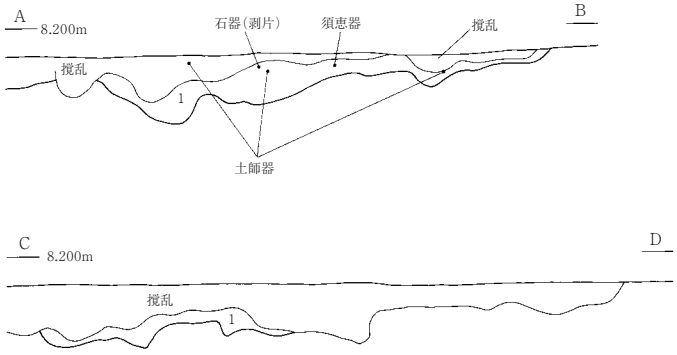
第38図　井戸跡（ＳＥ30）



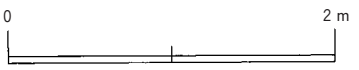
ＳＫ17
1　黒褐色（2.5Ｙ３／２）
　しまり中　粘性中
　植物遺体が極少量混入
2　オリーブ黒色（５Ｙ３／２）
　しまり中　粘性中
　植物遺体混入
3　オリーブ黒色（５Ｙ３／２）
　しまり弱　粘性中
　地山塊大粒が極少量混入
4　灰色（7.5Ｙ５／１）
　しまり中　粘性中
　地山塊大粒が極少量混入
5　灰色（7.5Ｙ４／１）
　しまり微弱　粘性強
　地山塊大粒が極少量混入

第39図　土坑（ＳＫ17）

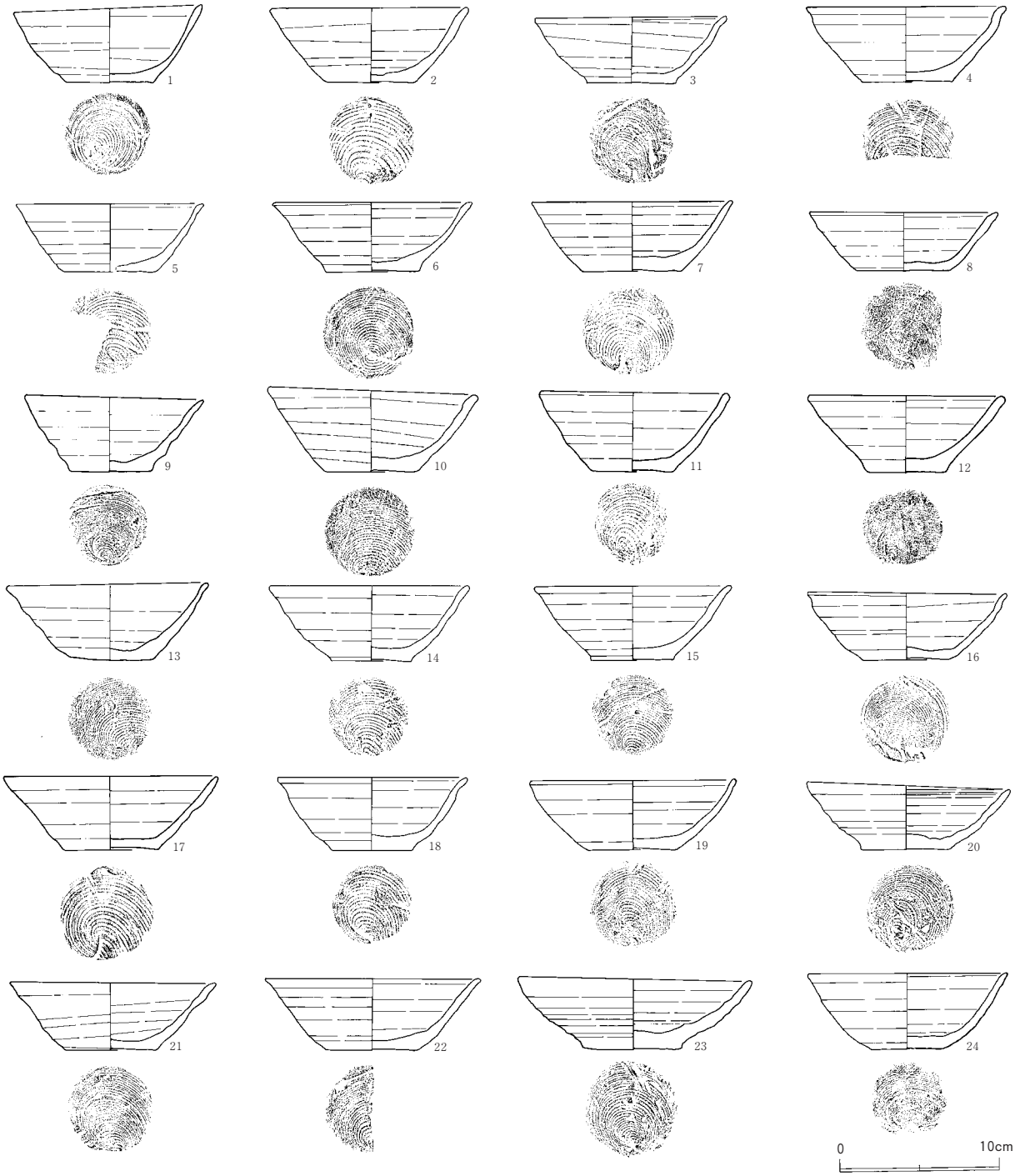




ＳＸ03
　1　黒色（５Ｙ２／１）粘質土
　　しまり中　粘性中
　　火山灰が粒状・帯状に混入
　　黄灰色土（2.5Ｙ４／１）が斑状に混入
　　植物遺体混入

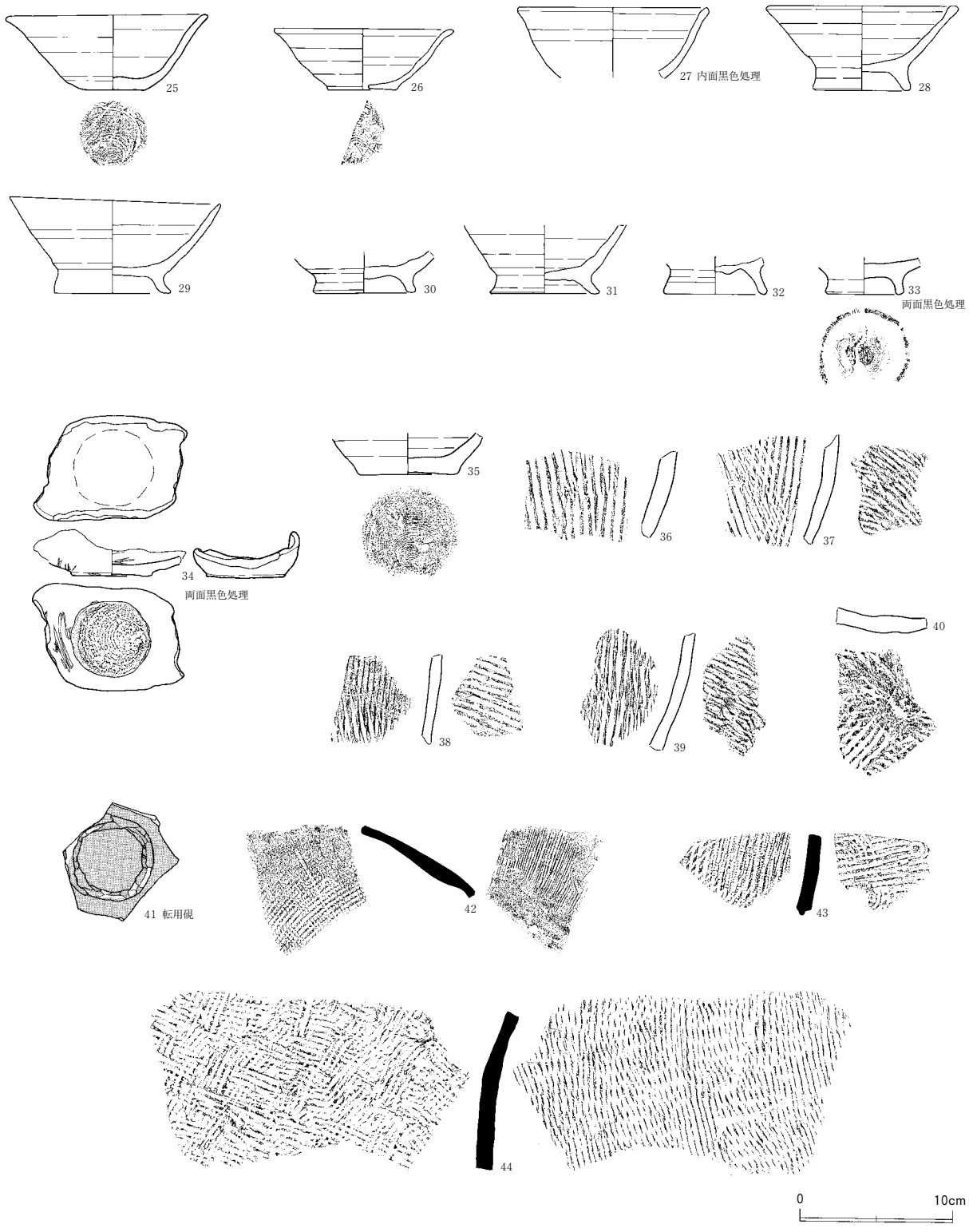


第40図　性格不明遺構（ＳＸ03）



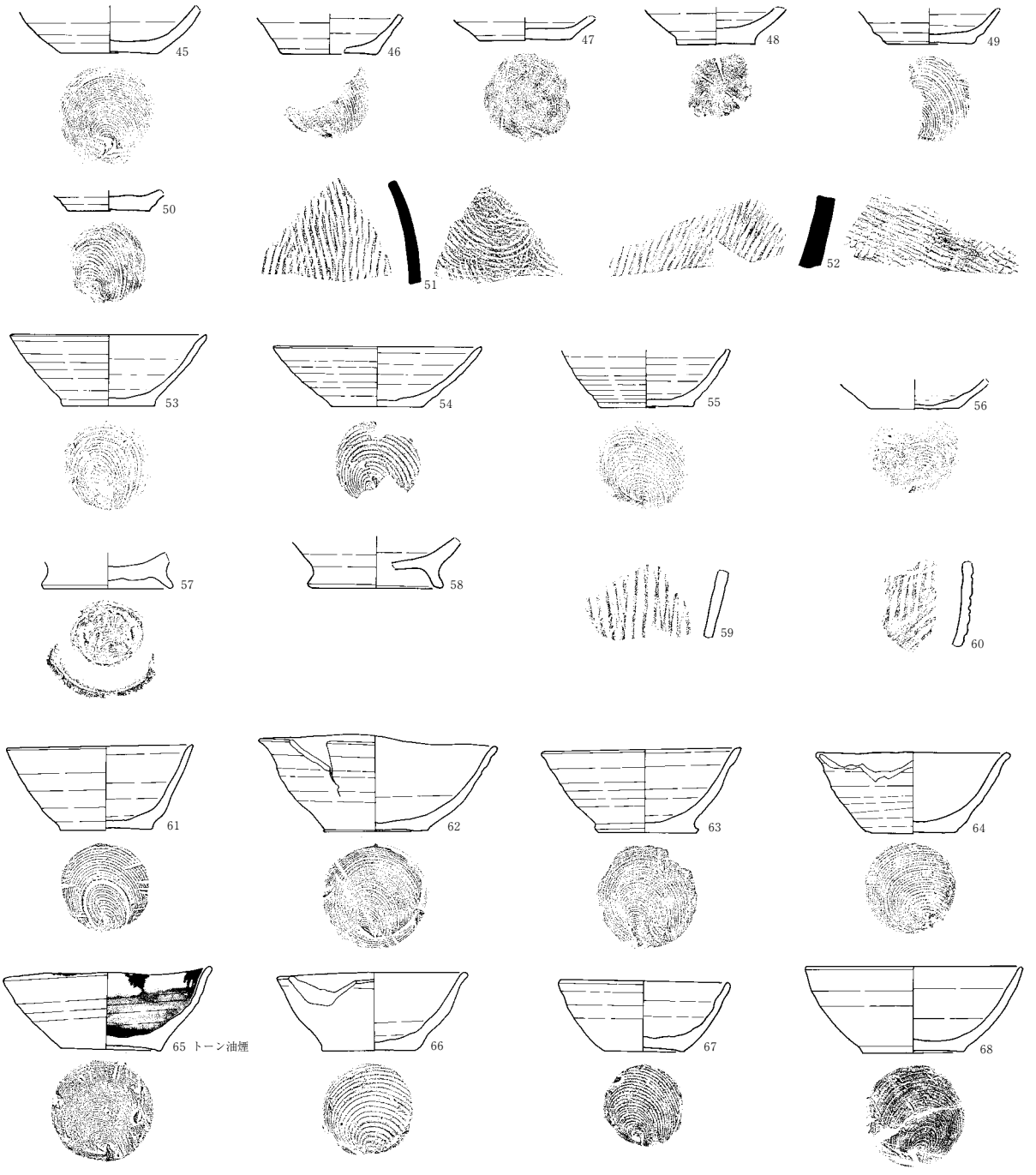
遺物No.	図版No.	出土位置	層位	種別	器種	部位	器高	口径	底径	底径指数	高径指数	外底部	調整・施文	その他
1	—	SD05	2	土師器	坏	ほぼ完形	5.0	11.9	5.4	45.4	42.0	回転糸	ロクロ	
2	10	SD05	3	土師器	坏	ほぼ完形	5.0	12.2	5.6	45.9	41.0	回転糸	ロクロ（ヘラ）	側面に木炭痕
3	—	SD05	2	土師器	坏	ほぼ完形	4.3	11.0	5.6	50.9	39.1	回転糸	ロクロ（ヘラ）	側面に木炭痕
4	—	SD05	2	土師器	坏	口縁部～底部	4.7	12.6	5.8	46.0	37.3	回転糸	ロクロ	径７㎜の砂礫混入
5	—	SD05	2	土師器	坏	口縁部～底部	4.3	11.8	5.6	47.5	36.4	回転糸	ロクロ	
6	10	SD05	2	土師器	坏	ほぼ完形	4.4	12.3	5.9	48.0	35.8	回転糸	ロクロ	
7	—	SD05	2	土師器	坏	口縁部～底部	4.4	12.6	6.2	49.2	34.9	回転糸	ロクロ	
8	10	SD05	2	土師器	坏	ほぼ完形	3.7	11.8	5.8	49.1	31.4	回転糸	ロクロ	
9	—	SD05	2	土師器	坏	ほぼ完形	5.8	11.3	5.0	44.2	51.3	回転糸	ロクロ	
10	10	SD05	3	土師器	坏	ほぼ完形	5.4	12.9	5.8	45.0	41.9	回転糸	ロクロ（ヘラ）	
11	—	SD05	2	土師器	坏	ほぼ完形	5.0	12.0	5.2	43.3	41.7	回転糸	ロクロ	焼き膨れ
12	—	SD05	2	土師器	坏	ほぼ完形	4.9	12.0	5.0	41.7	40.8	回転糸（摩滅）	ロクロ	胎土に径１㎜の砂含
13	—	SD05	2	土師器	坏	ほぼ完形	5.0	12.7	5.1	40.2	39.4	回転糸	ロクロ	底部焼膨
14	10	SD05	3	土師器	坏	ほぼ完形	4.8	12.6	5.1	40.5	38.1	回転糸	ロクロ	口縁部内面に油煙
15	—	SD05	2	土師器	坏	ほぼ完形	4.6	12.4	5.2	41.9	37.1	回転糸	ロクロ	
16	—	SD05	4	土師器	坏	ほぼ完形	4.5	12.5	5.5	44.0	36.0	回転糸	ロクロ	
17	—	SD05	2	土師器	坏	ほぼ完形	4.7	13.5	6.0	44.4	34.8	回転糸	ロクロ	径５㎜の砂礫混入、木炭痕
18	—	SD05	2	土師器	坏	ほぼ完形	4.1	12.0	5.1	42.5	34.2	回転糸	ロクロ	
19	—	SD05	2	土師器	坏	口縁部～底部	4.4	13.0	5.6	43.1	33.8	回転糸	ロクロ	
20	10	SD05	2	土師器	坏	完形	4.3	12.8	5.6	43.8	33.6	回転糸	ロクロ	内面に煤、径５㎜の砂礫多
21	10	SD05	2	土師器	坏	ほぼ完形	4.3	13.0	5.8	44.6	33.1	回転糸	ロクロ	楕円歪み、内面に煤
22	—	SD05	2	土師器	坏	口縁部～底部	4.5	13.6	5.8	42.6	33.1	回転糸	ロクロ	やや摩滅
23	—	SD05	2	土師器	坏	ほぼ完形	4.6	14.7	6.2	42.2	31.3	回転糸	ロクロ	砂礫による焼き膨れ
24	—	SD05	2	土師器	坏	口縁部～底部	4.8	12.6	4.6	36.5	38.1	回転糸	ロクロ	径１㎝の粘土付着

第41図　ＳＤ05出土土師器（１）



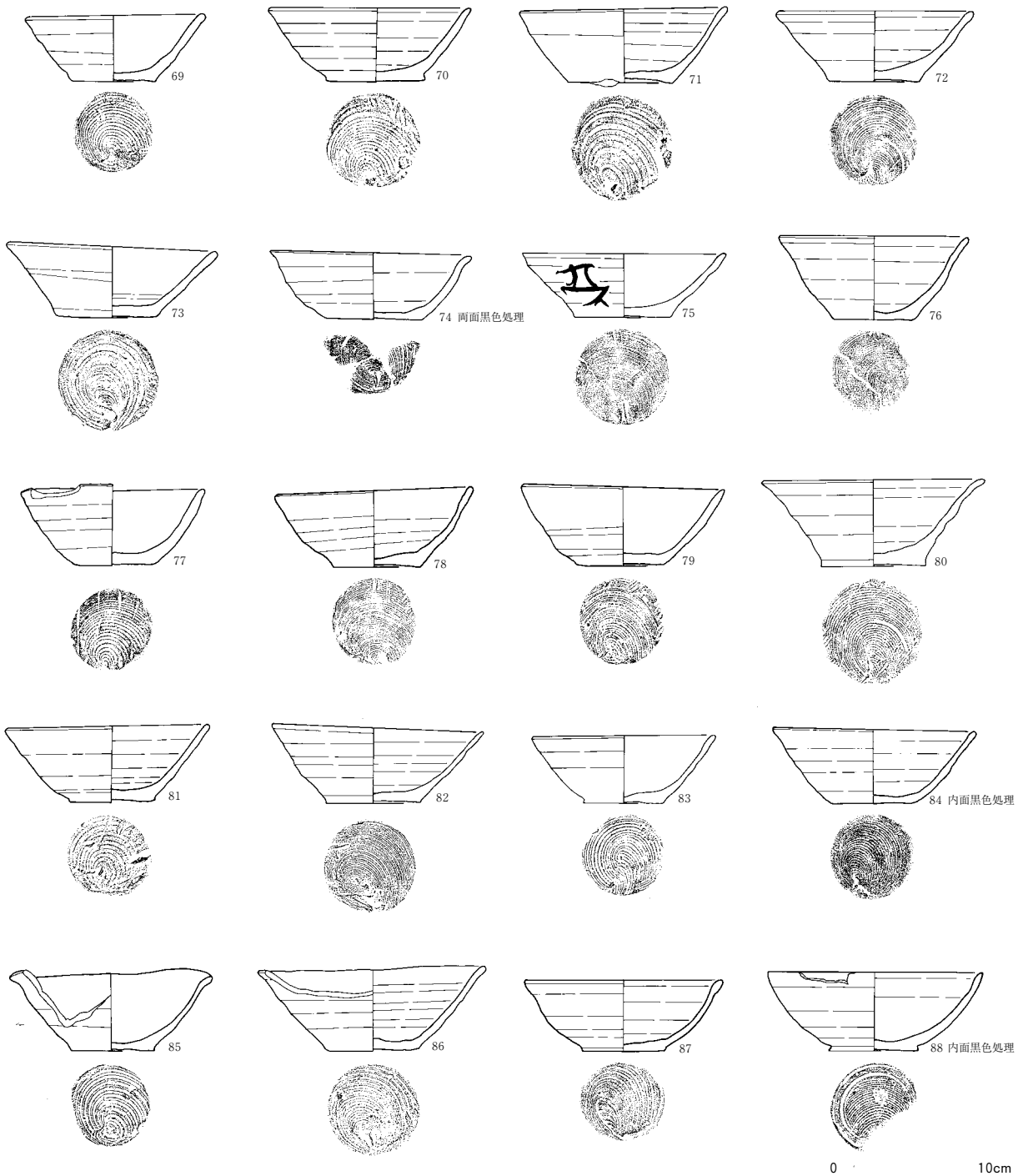
遺物No.	図版No.	出土位置	層位	種別	器種	部位	器高	口径	底径	底径指数	高径指数	外底部	調整・施文	その他
25	10	SD05	3	土師器	坏	ほぼ完形	5.0	13.3	4.4	33.1	37.6	回転糸	ロクロ	口縁部打欠？
26	—	SD05	2	土師器	坏	口縁部～底部	4.0	11.8	4.1	34.7	33.9	回転糸	ロクロ	
27	10	SD05	2	土師器	坏	口縁部～胴部	〔4.7〕	12.2	—	—	—	—	ロクロ・内黒→磨き	
28	—	SD05	2	土師器	有台坏	口縁部～底部	5.6	11.9	6.2	52.1	47.1	高台	ロクロ	砂礫による焼き膨れ
29	10	SD05	2	土師器	有台坏	ほぼ完形	6.4	13.9	7.6	54.7	46.0	高台	ロクロ	赤錆状の付着物
30	—	SD05	2	土師器	有台坏	底部	〔2.7〕	—	6.6	—	—	高台	ロクロ	
31	—	SD05	2	土師器	有台坏	体部下半～底部	〔4.5〕	—	7.2	—	—	高台	ロクロ	
32	—	SD05	2	土師器	有台坏	底部	〔2.0〕	—	6.8	—	—	高台	ロクロ	
33	—	SD05	4	土師器	有台坏	底部	〔2.4〕	—	4.7	—	—	高台	両黒	高台付
34	11	SD05	2	土師器	耳皿	口縁部～底部	3.1	〔9.9〕	〔6.9〕	—	—	回転糸	両黒→磨き	径は残存値（長径・短径）
35	—	SD05	2	土師器	甕	底部	2.7	—	6.4	—	—	回転糸	摩滅	胎土に径１㎜の砂含

第42図　ＳＤ05出土土師器（２）・須恵器



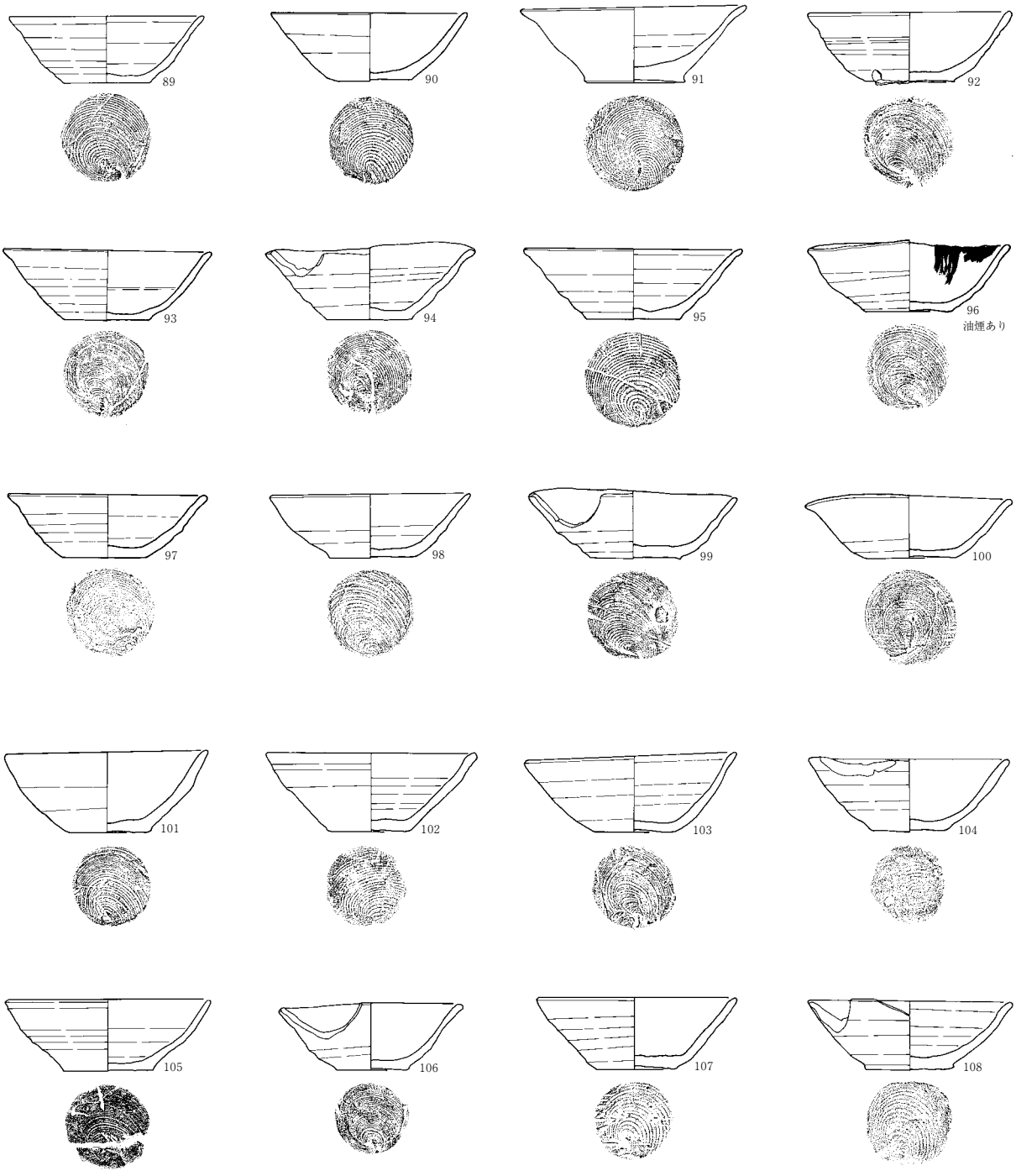
遺物No.	図版No.	出土位置	層位	種別	器種	部位	器高	口径	底径	底径指数	高径指数	外底部	調整・施文	その他
45	—	SD25	2	土師器	坏	体部下半～底部	(2.9)	—	6.0	—	—	回転糸	ロクロ	
46	—	SD25	2	土師器	坏	底部	(2.5)	—	5.9	—	—	回転糸	ロクロ	
47	—	SD25	2	土師器	坏	底部	(1.5)	—	5.6	—	—	回転糸	摩滅	
48	—	SD25	2	土師器	坏	体部下半～底部	(2.3)	—	5.3	—	—	回転糸	摩滅	
49	—	SD25	2	土師器	坏	底部	(2.2)	—	5.2	—	—	回転糸	ロクロ	
50	—	SD25	2	土師器	坏	底部	(1.3)	—	5.0	—	—	回転糸	ロクロ	内面に油煙
53	—	SD26	1	土師器	坏	ほぼ完形	4.4	12.0	5.6	46.7	36.7	回転糸	ロクロ	
54	—	SD26	1	土師器	坏	口縁部～底部	3.7	12.8	5.6	43.8	28.9	回転糸	ロクロ	
55	—	SD26	1	土師器	坏	体部下半～底部	(3.5)	—	5.6	—	—	回転糸	ロクロ	
56	—	SD26	1	土師器	坏	底部	(1.8)	—	5.4	—	—	回転糸	ロクロ	
57	—	SD26	1	土師器	有台坏	底部	(2.2)	—	7.8	—	—	回転糸、高台	ロクロ	
58	—	SD26	1	土師器	有台坏	底部	(3.1)	—	7.8	—	—	高台	摩滅	
61	—	SE30	5	土師器	坏	ほぼ完形	5.2	11.3	5.6	49.6	46.0	回転糸	ロクロ	口縁部欠、歪み大
62	11	SE30	5	土師器	坏	ほぼ完形	5.7	13.0	6.4	49.2	43.8	回転糸	ロクロ（ヘラ）	胎土赤強、口縁焼膨
63	—	SE30	5	土師器	坏	ほぼ完形	5.2	12.1	5.9	48.8	43.0	回転糸	ロクロ	切り離し粗雑、胎土に砂礫
64	11	SE30	5	土師器	坏	完形	5.0	12.0	5.6	46.7	41.7	回転糸	ロクロ	口縁部打欠
65	11・12	SE30	5	土師器	坏	ほぼ完形	5.25	12.7	6.1	48.0	41.3	回転糸	ロクロ（ヘラ）	内側に油煙（燈明？）
66	11	SE30	5	土師器	坏	完形	4.8	11.7	5.8	49.6	41.0	回転糸	ロクロ（ヘラ）	口縁部打欠
67	—	SE30	5	土師器	坏	ほぼ完形	4.3	10.5	5.0	47.6	41.0	回転糸	ロクロ（ヘラ）	胎土に砂礫含む
68	—	SE30	5	土師器	坏	ほぼ完形	5.3	13.3	6.2	46.6	39.8	回転糸	ロクロ	

第43図　ＳＤ25・26出土土器、ＳＥ30出土土師器（１）



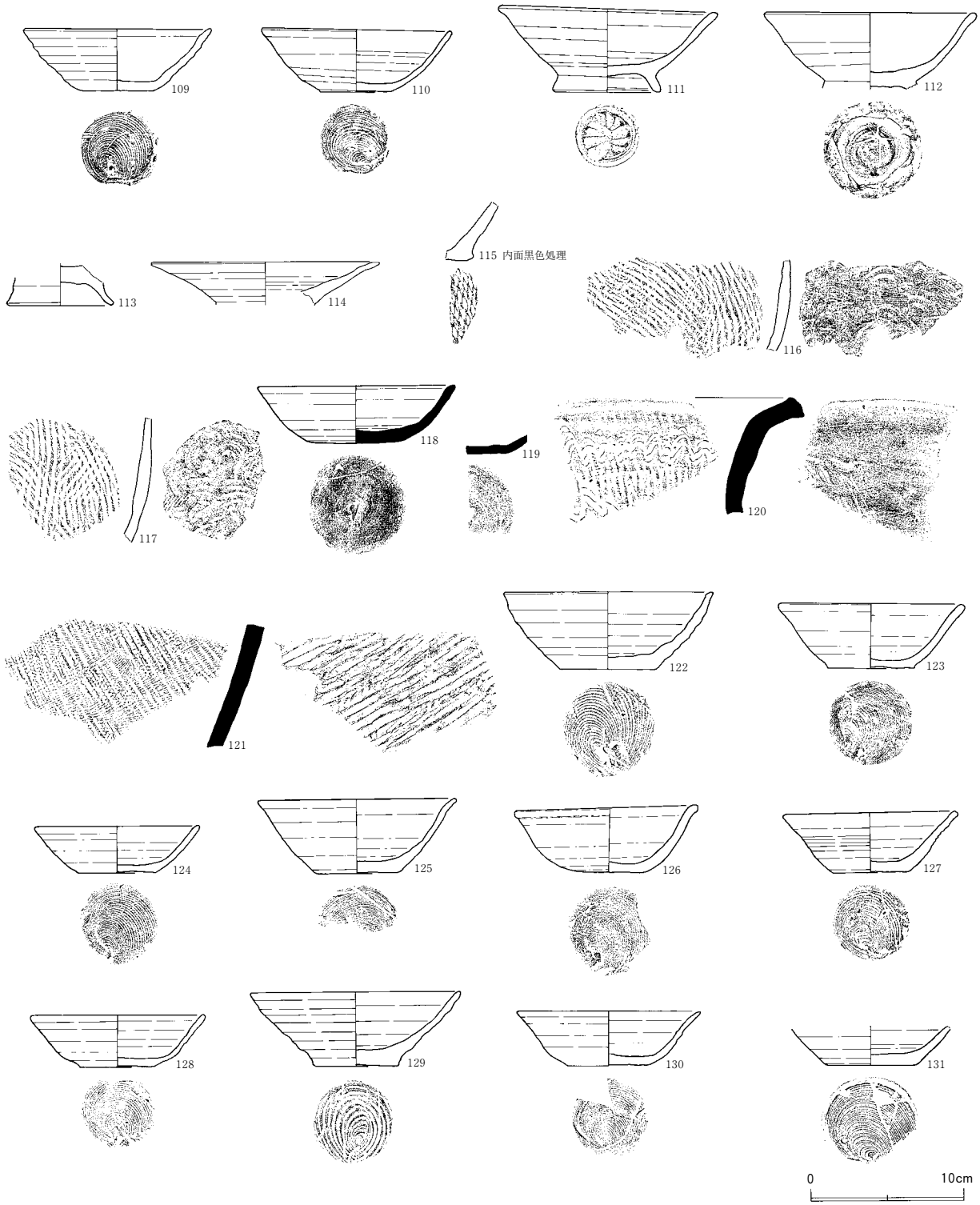
遺物No.	図版No.	出土位置	層位	種別	器種	部位	器高	口径	底径	底径指数	高径指数	外底部	調整・施文	その他
69	11	SE30	5	土師器	坏	完形	4.3	11.5	5.2	45.2	37.4	回転糸	ロクロ	やや歪み、砂礫による焼膨
70	—	SE30	5	土師器	坏	完形	4.7	12.6	6.2	49.2	37.3	回転糸	ロクロ	やや厚手
71	11	SE30	5	土師器	坏	完形	4.9	13.2	6.5	49.2	37.1	回転糸	ロクロ	胎土・成形粗雑
72	11	SE30	5	土師器	坏	完形	4.5	12.5	5.8	46.4	36.0	回転糸	ロクロ	口縁部打欠
73	—	SE30	5	土師器	坏	完形	4.75	13.3	6.3	47.4	35.7	回転糸	ロクロ	胎土に砂礫含む、歪み
74	11	SE30	5	土師器	坏	口縁部～底部	4.5	12.7	5.8	45.7	35.4	回転糸	ロクロ	口縁部を除き両黒
75	11	SE30	5	土師器	坏	完形	4.1	12.8	6.2	48.4	32.0	回転糸	ロクロ	墨書、底部焼膨
76	—	SE30	5	土師器	坏	ほぼ完形	5.3	11.7	5.0	42.7	45.3	回転糸	ロクロ	側面の1/3が黒色
77	11	SE30	5	土師器	坏	完形	4.9	11.6	5.1	44.0	42.2	回転糸	ロクロ	口縁部打欠、胎土赤強
78	11	SE30	5	土師器	坏	完形	5.2	12.6	5.5	43.7	41.3	回転糸	ロクロ	胎土に砂礫含む
79	—	SE30	5	土師器	坏	完形	5.2	12.8	5.6	43.8	40.6	回転糸	ロクロ	径1～５㎜の砂礫混入
80	—	SE30	5	土師器	坏	ほぼ完形	5.4	13.6	6.0	44.1	39.7	回転糸	ロクロ	砂礫による焼き膨れ
81	11	SE30	5	土師器	坏	完形	5.0	12.8	5.3	41.4	39.1	回転糸	ロクロ	径1～５㎜の砂礫混入
82	11	SE30	5	土師器	坏	完形	5.1	13.1	5.9	45.0	38.9	回転糸	ロクロ	歪み
83	—	SE30	5	土師器	坏	完形	4.4	11.6	5.2	44.8	37.9	回転糸	ロクロ	
84	—	SE30	5	土師器	坏	ほぼ完形	4.7	12.5	5.2	41.6	37.6	回転糸	ロクロ	体部下半～底部黒色
85	—	SE30	5	土師器	坏	ほぼ完形	4.8	12.8	5.2	40.6	37.5	回転糸	ロクロ	砂礫による焼き膨れ
86	—	SE30	5	土師器	坏	ほぼ完形	5.3	14.2	5.8	40.8	37.3	回転糸	ロクロ	胎土に砂礫含む、口縁部欠
87	11	SE30	5	土師器	坏	完形	4.5	12.1	5.1	42.1	37.2	回転糸	ロクロ	胎土に砂礫含む
88	11	SE30	5	土師器	坏	ほぼ完形	5.0	13.6	5.6	41.2	36.8	回転糸、調整	ロクロ、内黒、磨き	口縁部打欠、底部円柱作り

第44図　ＳＥ30出土土師器（２）



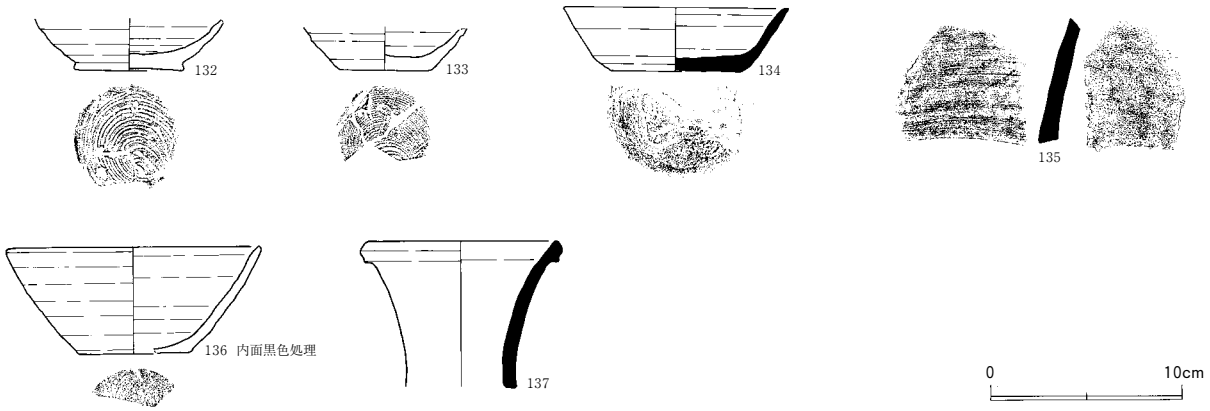
遺物No.	図版No.	出土位置	層位	種別	器種	部位	器高	口径	底径	底径指数	高径指数	外底部	調整・施文	その他
89	—	SE30	5	土師器	坏	ほぼ完形	4.2	12.0	5.4	45.0	35.0	回転糸	ロクロ	口縁部欠
90	—	SE30	5	土師器	坏	ほぼ完形	4.3	12.4	5.3	42.7	34.7	回転糸	ロクロ（ヘラ）	口縁部欠
91	—	SE30	5	土師器	坏	ほぼ完形	4.8	14.2	6.3	44.4	33.8	回転糸	ロクロ	口縁部欠
92	—	SE30	5	土師器	坏	完形	4.4	13.0	5.6	43.1	33.8	回転糸	ロクロ（ヘラ）	
93	—	SE30	5	土師器	坏	ほぼ完形	4.4	13.1	5.5	42.0	33.6	回転糸	ロクロ	
94	11	SE30	5	土師器	坏	ほぼ完形	4.4	13.1	5.3	40.5	33.6	回転糸	ロクロ	口縁部打欠
95	—	SE30	4・5	土師器	坏	ほぼ完形	4.5	13.6	6.0	44.1	33.1	回転糸	ロクロ	胎土に砂礫含む
96	11・12	SE30	5	土師器	坏	完形	4.1	12.7	5.5	43.3	32.3	回転糸	ロクロ	口縁部に油煙（燈明？）
97	11	SE30	5	土師器	坏	完形	4.0	12.6	5.4	42.9	31.7	回転糸	ロクロ	
98	—	SE30	5	土師器	坏	ほぼ完形	4.0	12.6	5.4	42.9	31.7	回転糸	ロクロ	口縁部欠
99	—	SE30	5	土師器	坏	ほぼ完形	4.1	13.0	5.7	43.8	31.5	回転糸	ロクロ	胎土に砂礫含む、口縁部欠
100	—	SE30	5	土師器	坏	完形	3.9	12.9	5.7	44.2	30.2	回転糸	ロクロ	胎土に砂礫含む、楕円歪み
101	11	SE30	5	土師器	坏	完形	5.2	12.7	5.0	39.4	40.9	回転糸	ロクロ	調整やや緻密
102	—	SE30	5	土師器	坏	完形	5.05	13.2	5.1	38.6	38.3	回転糸	ロクロ（ヘラ）	調整やや緻密
103	—	SE30	5	土師器	坏	完形	5.0	13.3	5.1	38.3	37.6	回転糸	ロクロ（ヘラ）	
104	11	SE30	5	土師器	坏	完形	4.6	12.4	4.8	38.7	37.1	回転糸	ロクロ	口縁部打欠
105	—	SE30	5	土師器	坏	ほぼ完形	4.5	12.3	4.5	36.6	36.6	回転糸	ロクロ、摩滅	
106	11	SE30	5	土師器	坏	ほぼ完形	4.2	11.5	4.5	39.1	36.5	回転糸	ロクロ（ヘラ）	口縁部欠
107	11	SE30	5	土師器	坏	完形	4.5	12.6	4.9	38.9	35.7	回転糸	ロクロ	径5～10mmの砂礫混入
108	—	SE30	5	土師器	坏	ほぼ完形	4.5	12.8	4.6	35.9	35.2	回転糸	ロクロ	口縁部欠

第45図　ＳＥ30出土土師器（３）

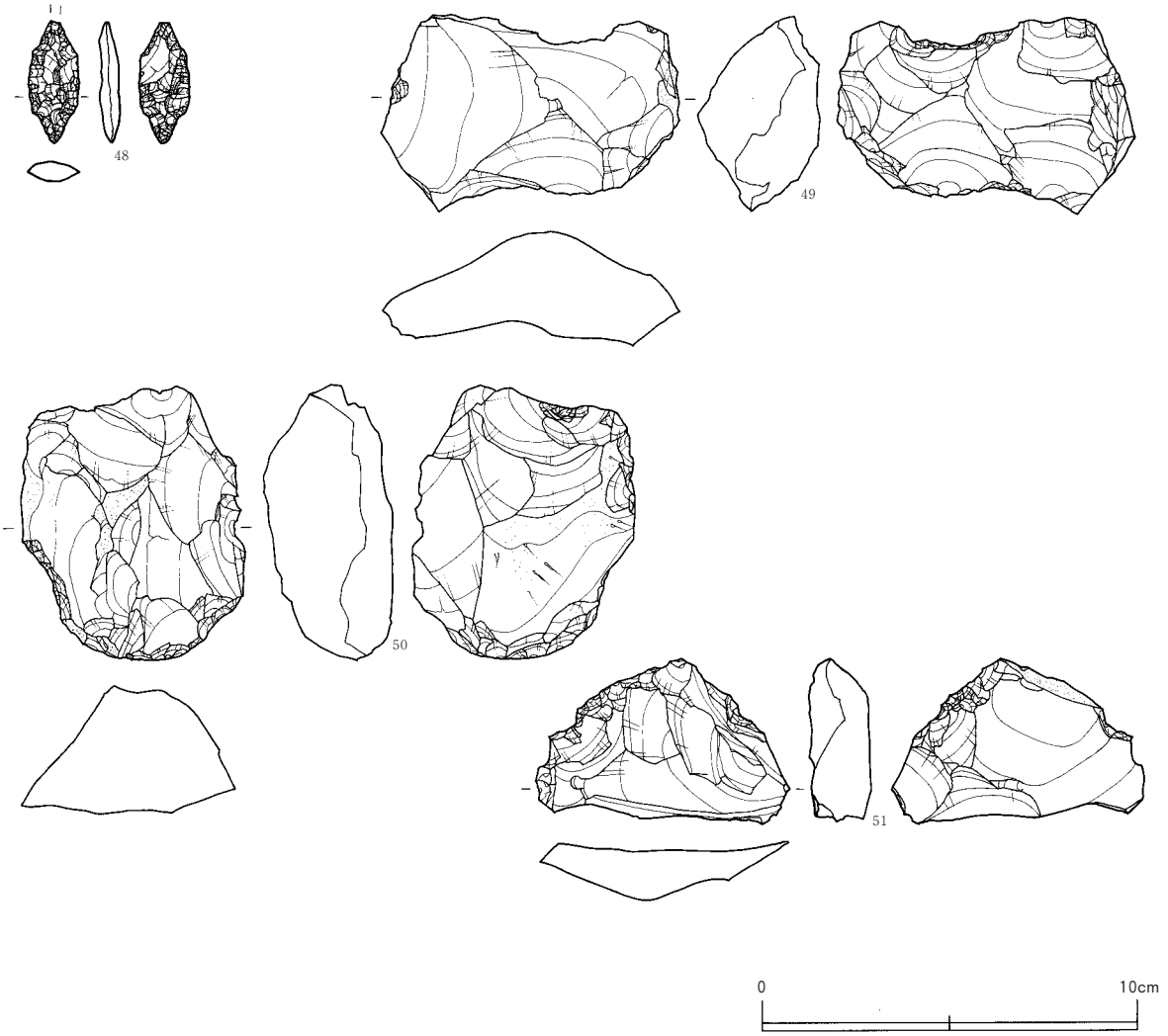


遺物No.	図版No.	出土位置	層位	種別	器種	部位	器高	口径	底径	底径指数	高径指数	外底部	調整・施文	その他
109	—	SE30	5	土師器	坏	ほぼ完形	4.1	12.2	4.8	39.3	33.6	回転糸	ロクロ	口縁部欠
110	11	SE30	5	土師器	坏	ほぼ完形	4.2	12.6	4.8	38.1	33.3	回転糸	ロクロ（ヘラ）	口縁部欠
111	12	SE30	5	土師器	有台坏	完形	5.7	14.2	7.0	49.3	40.1	回転糸	菊花文	ロクロ	胎土に砂礫含む
112	—	SE30	5	土師器	有台坏	ほぼ完形	(5.5)	13.8	(6.2)	—	—	回転糸	ロクロ	付高台、台部分打欠
113	—	SE30	5	土師器	有台坏	台部	(2.8)	—	7.1	—	—	回転糸		付高台
114	12	SE30	5	土師器	皿	ほぼ完形	(2.8)	15.0	—	—	—	台付き？	ロクロ	底部欠損
118	12	SE30	5	須恵器	坏	ほぼ完形	3.8	12.9	6.4	49.6	29.5	回転篦	ロクロ	乳白色、調整緻密
122	12	SK17	2・3	土師器	坏	口縁部～底部	5.1	13.6	6.2	45.6	37.5	回転糸	ロクロ	切り離し粗雑
123	—	SK17	2・3	土師器	坏	口縁部～底部	4.2	12.2	5.7	46.7	34.4	回転糸	ロクロ	調整緻密
124	12	SK17	2・3	土師器	坏	口縁部～底部	3.1	10.6	5.0	47.2	29.2	回転糸	ロクロ	胎土に砂礫含む、調整緻密
125	—	SK17	2・3	土師器	坏	口縁部～底部	4.8	12.8	5.6	43.8	37.5	回転糸、調整	ロクロ	調整緻密
126	—	SK17	2・3	土師器	坏	口縁部～底部	4.5	12.0	4.8	40.0	37.5	回転糸	ロクロ	胎土に砂礫含む、調整緻密
127	12	SK17	2・3	土師器	坏	ほぼ完形	3.9	11.1	4.8	43.2	35.1	回転糸	ロクロ（ヘラ）	調整緻密
128	12	SK17	2・3	土師器	坏	口縁部～底部	3.4	11.1	5.0	45.0	30.6	回転糸	ロクロ	調整緻密
129	—	SK17	2・3	土師器	坏	口縁部～底部	4.9	13.6	5.4	39.7	36.0	回転糸	ロクロ	砂礫混入、調整緻密
130	12	SK17	2・3	土師器	坏	口縁部～底部	3.6	12.0	3.2	26.7	30.0	回転糸	ロクロ	調整緻密
131	—	SK17	5	土師器	坏	体部下半～底部	(2.6)	—	5.8	—	—	回転糸	ロクロ	

第46図　ＳＥ30出土土師器（４）・須恵器、ＳＫ17出土土師器

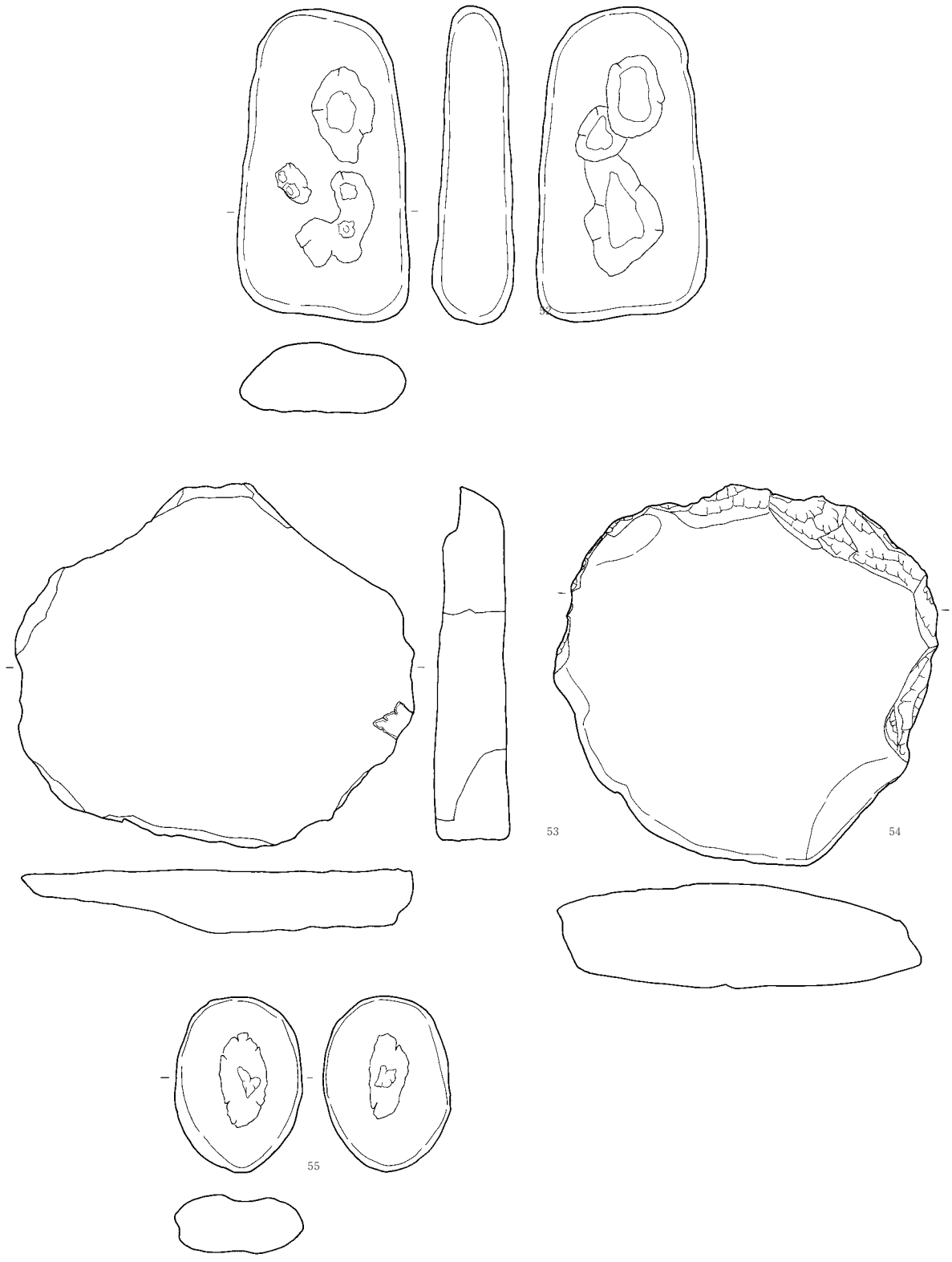


遺物No.	図版No.	出土位置	層位	種別	器種	部位	器高	口径	底径	底径指数	高径指数	外底部	調整・施文	その他
132	—	SK17	2・3	土師器	坏	体部下半～底部	〔2.7〕	—	5.8	—	—	回転糸	ロクロ	
133	—	SK17	2・3	土師器	坏	体部下半～底部	〔2.2〕	—	4.8	—	—	回転糸	外黒	
134	12	SK17	2・3	須恵器	坏	口縁部～底部	3.3	11.8	7.0	59.3	28.0	回転篦	ロクロ	
136	12	SK27	—	土師器	坏	口縁部～底部	5.6	13.2	5.8	43.9	42.4	回転糸	内黒、磨き	外面摩滅
137	12	SK27	—	須恵器	長頸瓶	口縁部～頸部	〔7.6〕	9.8	—	—	—	—	ロクロ	赤褐色



遺物No.	図版No.	出土遺構	層位	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石質	その他
48	—	SE30	5	石鏃	3.2	1.4	0.5	1.9	珪質頁岩	石錐に転用？
49	—	SE30	5	楔形石器	5.2	7.9	3.2	107.4	珪質頁岩	
50	—	SE30	5	R F	7.8	5.7	3.5	142.5	珪質頁岩	
51	—	SE30	5	R F	4.3	6.7	1.7	40.2	珪質頁岩	

第47図　ＳＫ17・27出土土師器・須恵器、ＳＥ30出土石器（２）

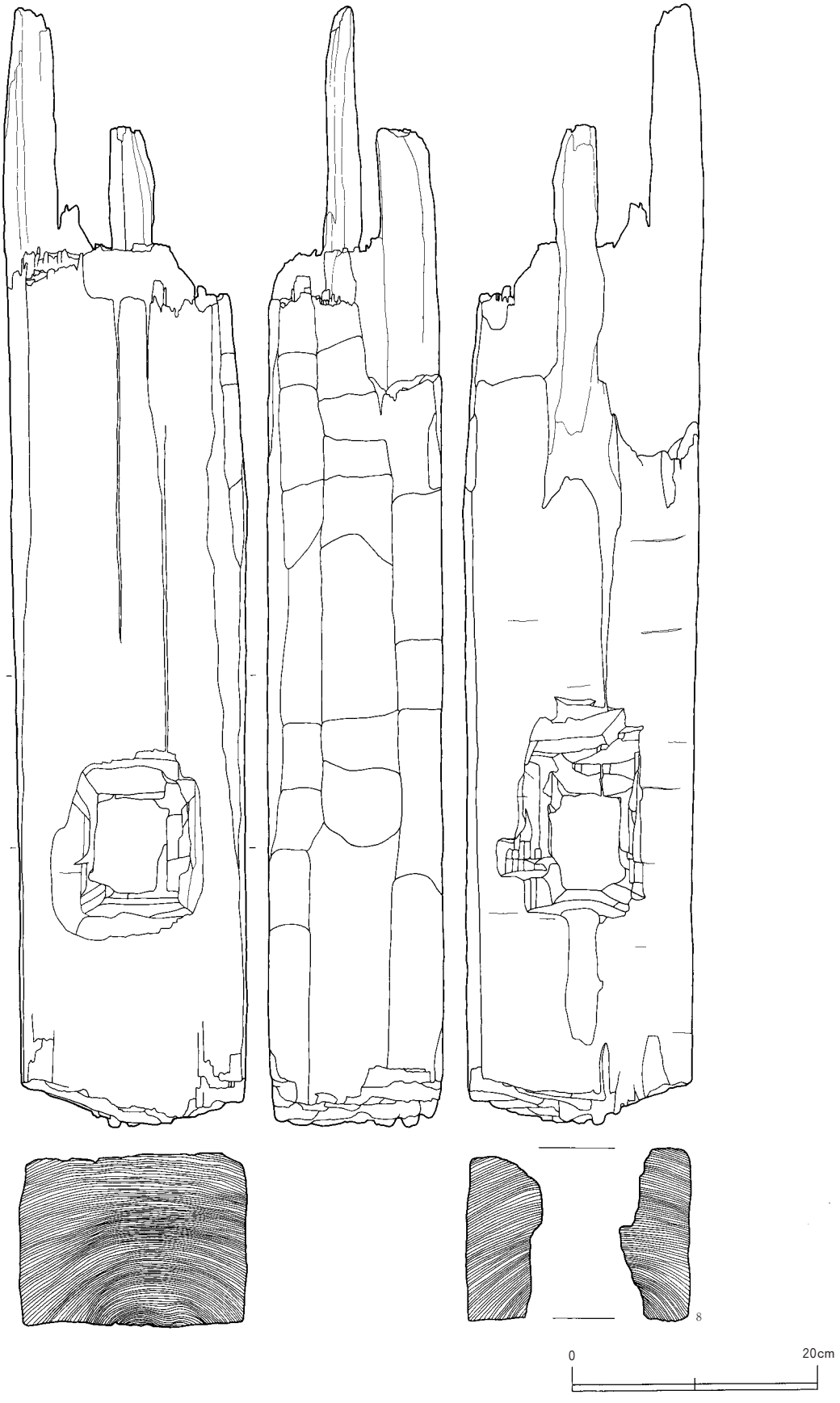


遺物No.	図版No.	出土遺構	層位	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石質	その他
52	―	SE30	5	凹石	15.6	8.5	3.5	774.0	安山岩	井戸廃棄時に投棄
53	―	SE30	5	打ち欠き石器	17.9	19.5	3.7	1502.0	輝石安山岩	井戸廃棄時に投棄
54	―	SE30	5	打ち欠き石器	18.4	18.8	5.7	1040.0	輝石安山岩	井戸廃棄時に投棄
55	―	SK17	2・3	凹石	8.7	6.3	2.9	160.0	輝石安山岩	SD18に起因？

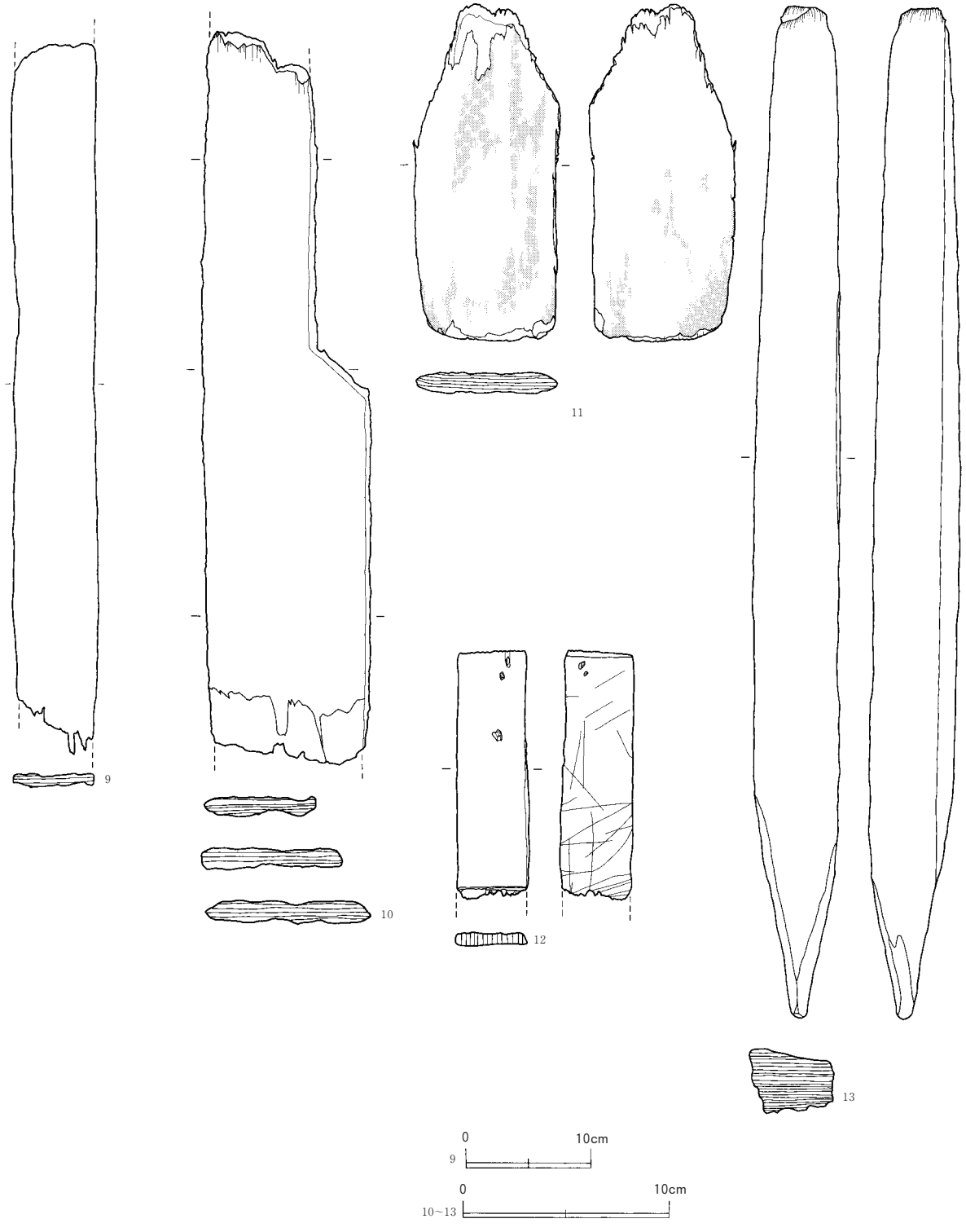
第48図　ＳＥ30出土石器（３）・ＳＫ17出土石器

遺物No.	図版No.	出土位置	層位	器種	長さ	幅	厚さ	樹種	その他
7	2・14	SB19	―	柱材	〔65.0〕	18.7	17.7	ヒノキ科アスナロ属	P７筏穴
8	14	SB19	―	柱材	〔90.6〕	19.2	14.3	ヒノキ科アスナロ属	P４筏穴

第49図　ＳＢ19柱材（Ｐ７）

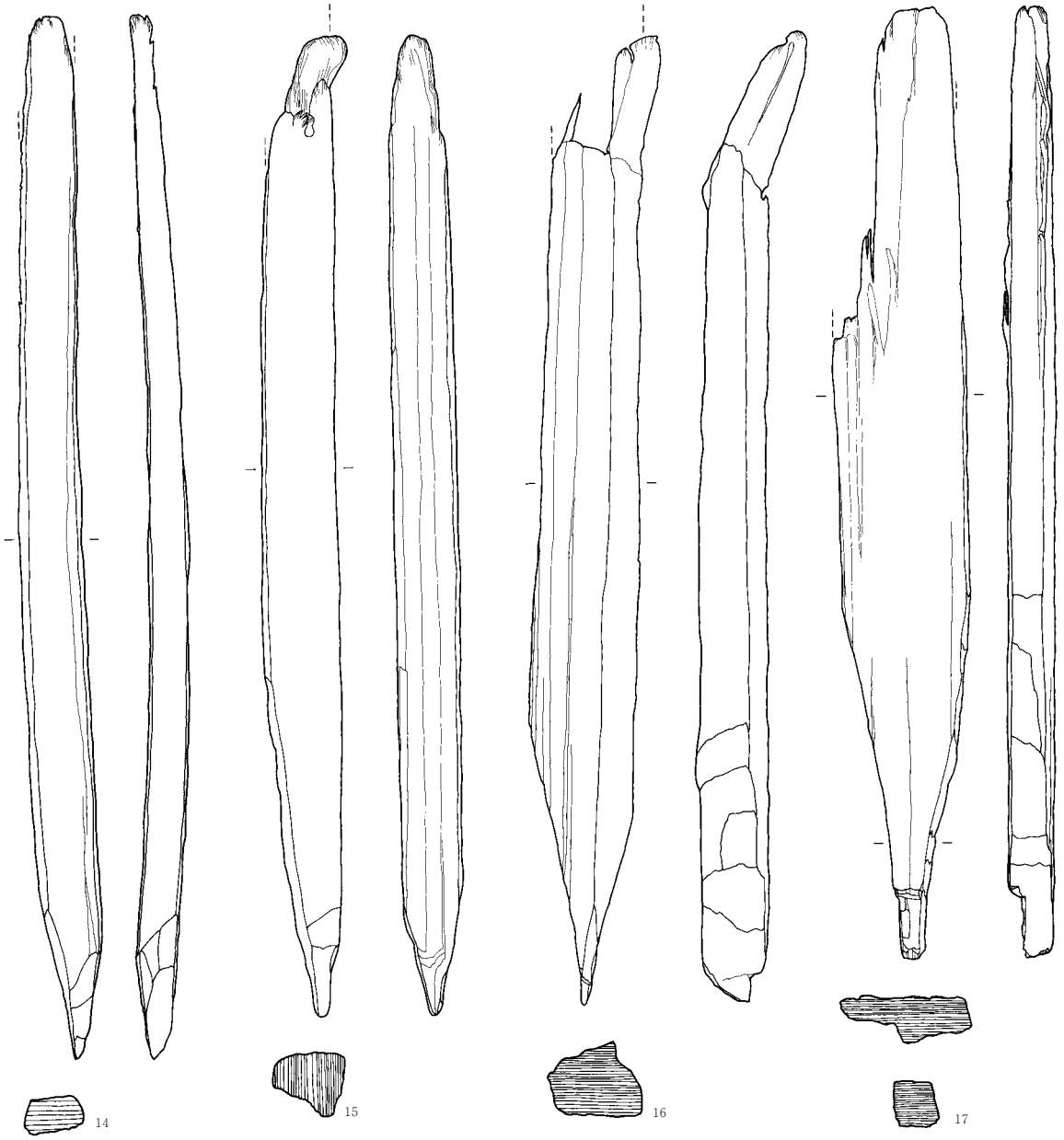


第50図　ＳＢ19柱材（Ｐ４）



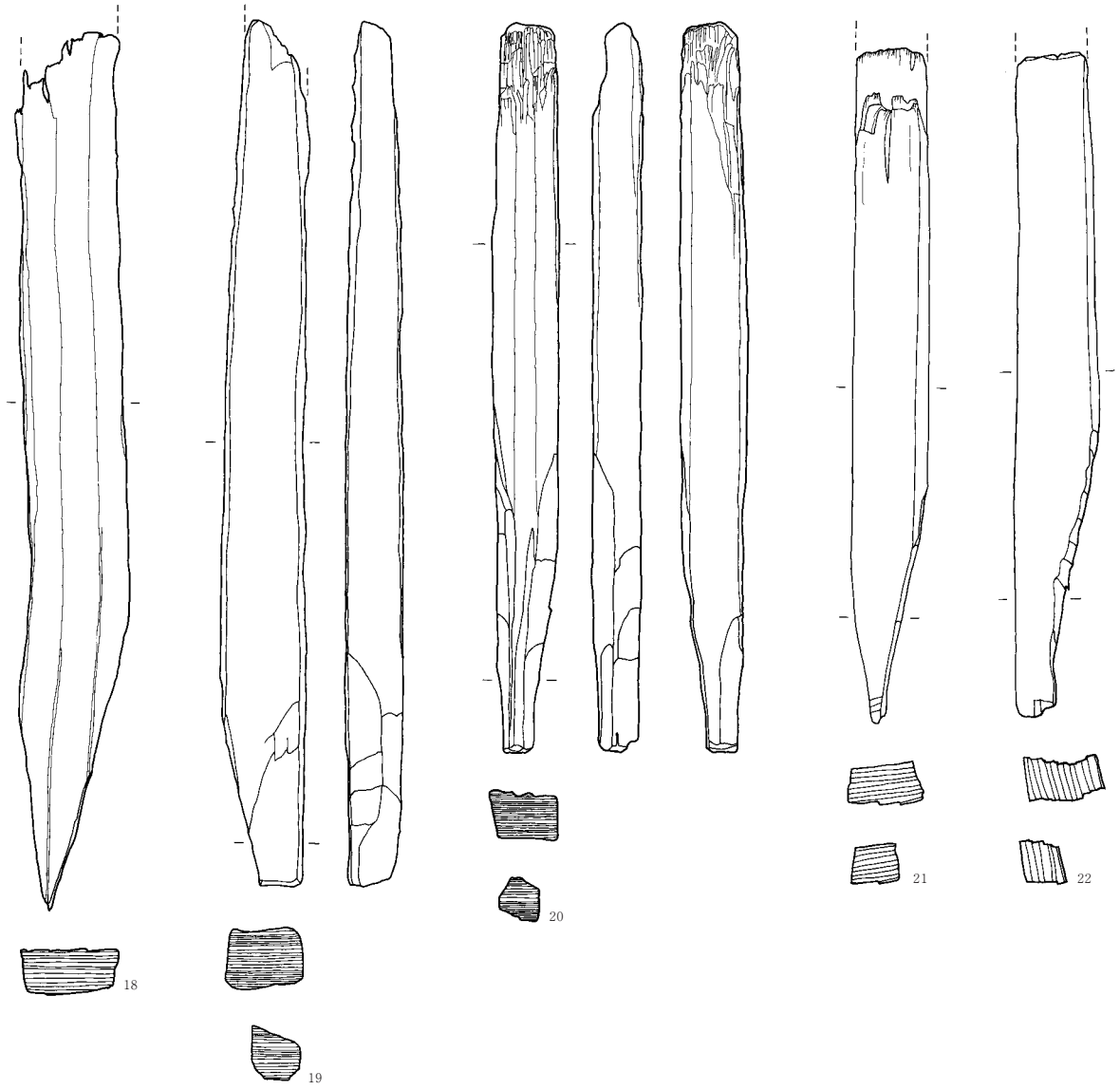
遺物No.	図版No.	出土位置	層位	器種	長さ	幅	厚さ	樹種	その他
9	―	SD05	―	板材	〔58.1〕	7.2	1.1	―	
10	―	SD05	―	板材	〔35.2〕	8.0	1.0	―	
11	―	SD05	―	板材	16.3	7.1	1.0	―	両面被熱
12	―	SD05	―	板状	〔12.0〕	3.5	0.7	―	木札状、穿孔
13	―	SD05	―	杭	〔48.6〕	4.2	3.0	―	

第51図　ＳＤ05出土木製品（１）



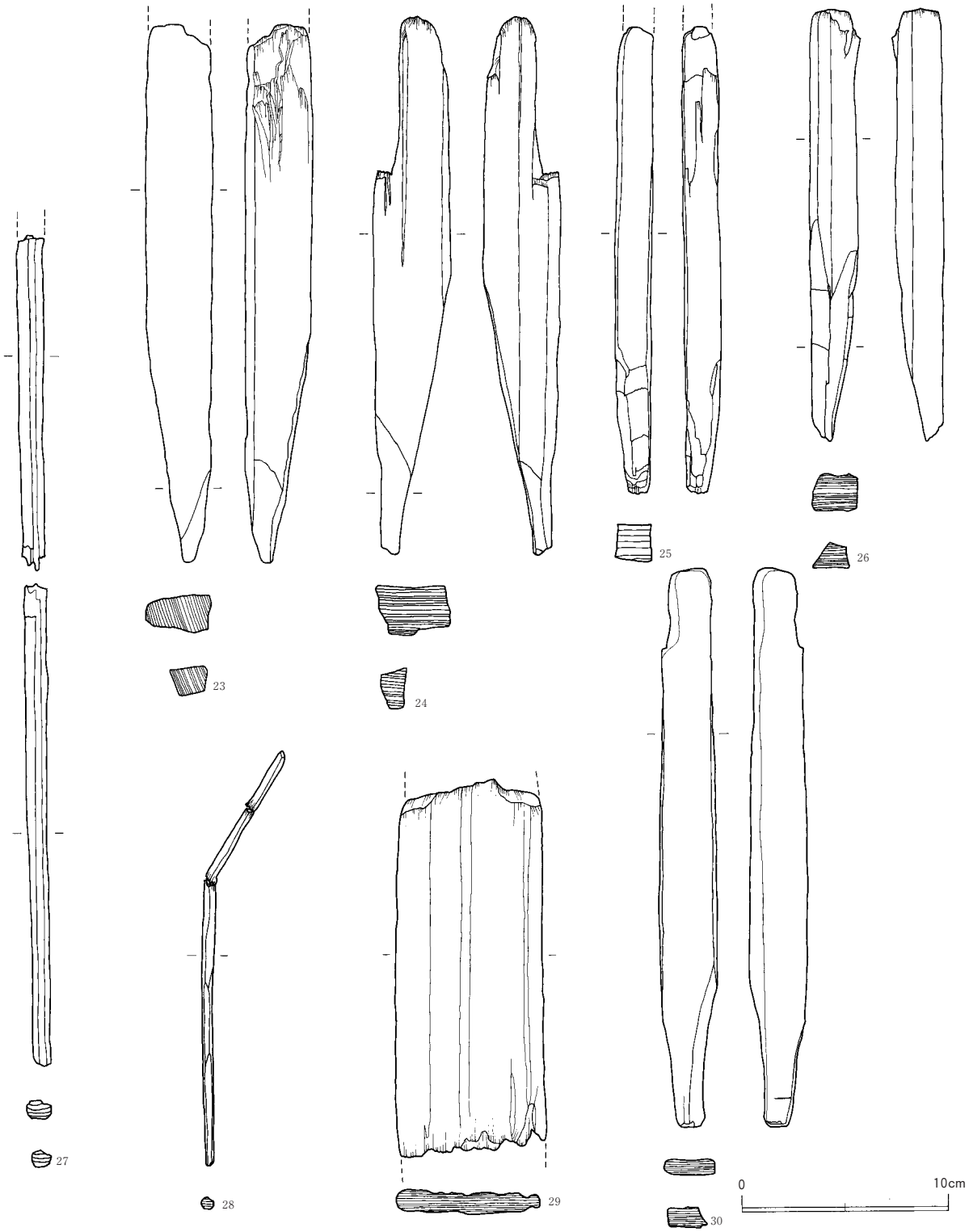
遺物No.	図版No.	出土位置	層位	器種	長さ	幅	厚さ	樹種	その他
14	―	SD05	―	杭	〔44.3〕	3.5	1.7	―	
15	―	SD05	―	杭	〔41.5〕	4.1	2.7	―	
16	―	SD05	―	杭	〔41.2〕	7.3	3.1	―	
17	―	SD05	―	杭	〔41.9〕	5.8	2.1	―	

第52図　ＳＤ05出土木製品（２）



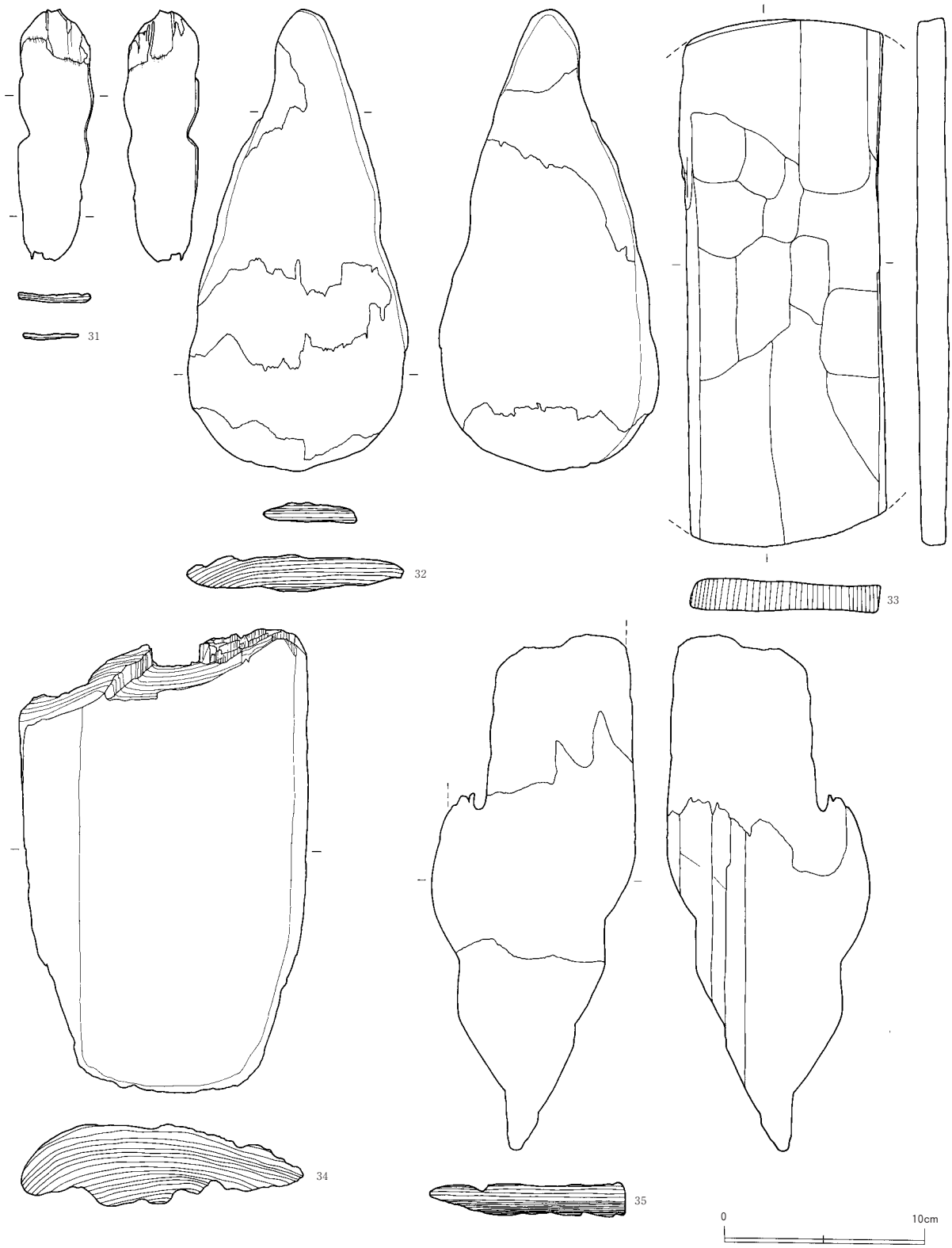
遺物No.	図版No.	出土位置	層位	器種	長さ	幅	厚さ	樹種	その他
18	―	SD05	―	杭	〔36.2〕	5.0	2.0	―	
19	―	SD05	―	杭	〔35.7〕	3.7	2.6	―	
20	―	SD05	―	杭	30.2	2.8	2.1	―	
21	―	SD05	―	杭	〔27.8〕	3.1	1.7	―	
22	―	SD05	―	杭	〔27.3〕	3.4	1.9	―	

第53図　ＳＤ05出土木製品（３）



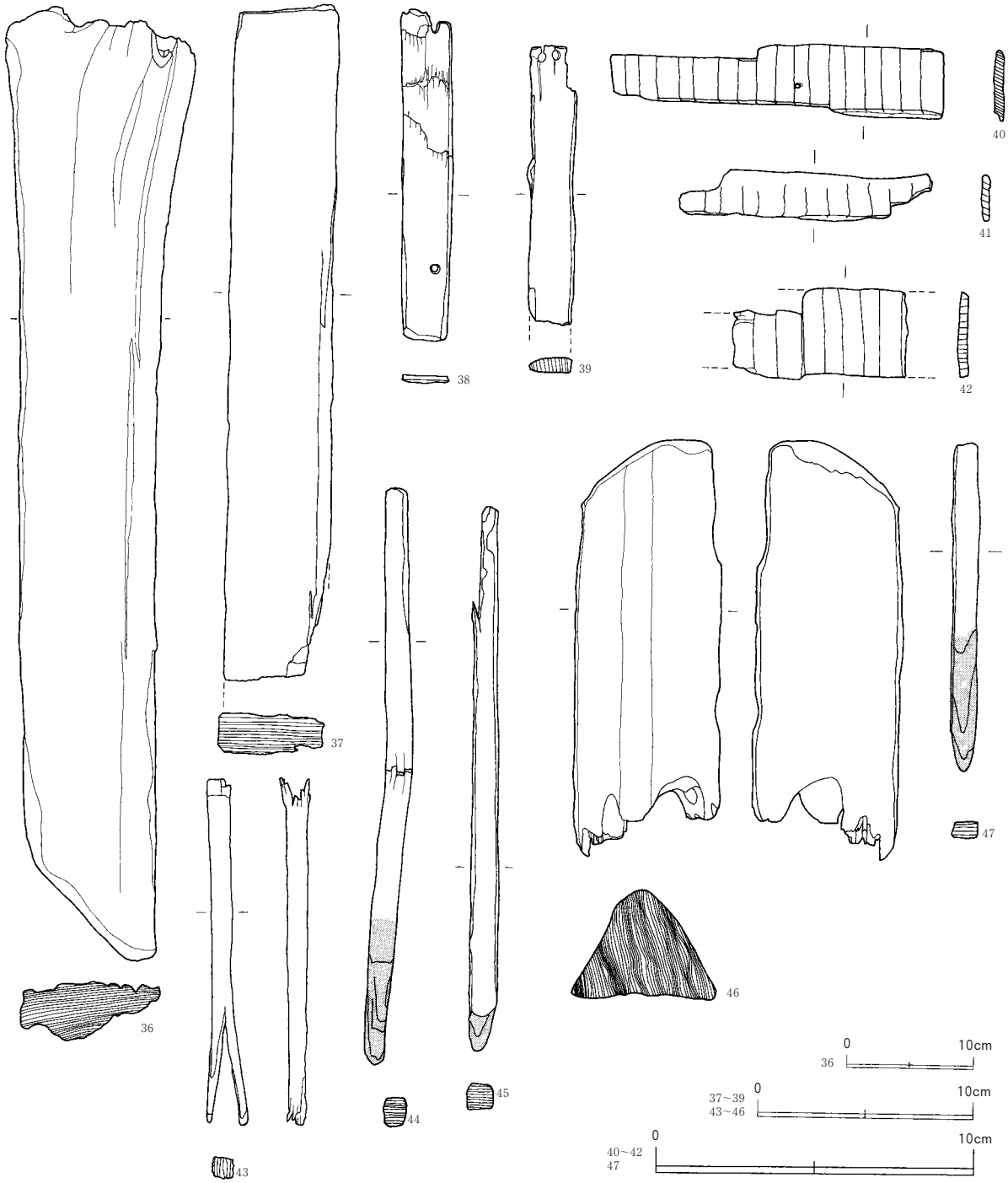
遺物No.	図版No.	出土位置	層位	器種	長さ	幅	厚さ	樹種	その他
23	―	SD05	―	杭	〔26.1〕	3.3	1.9	―	
24	―	SD05	―	杭	〔26.1〕	3.8	2.5	―	
25	―	SD05	―	杭	〔22.6〕	1.9	1.8	―	
26	―	SD05	―	杭	20.9	1.9	1.8	―	
27	―	SD05	―	棒状	〔38.8〕	1.4	0.8	―	接合可
28	―	SD05	―	箸	21.1	0.6	0.6	―	
29	―	SD26	―	板状	〔18.4〕	7.4	1.0	―	
30	―	SD26	―	杭	27.2	2.8	0.9	―	

第54図　ＳＤ05出土木製品（４）・ＳＤ26出土木製品



遺物No.	図版No.	出土位置	層位	器種	長さ	幅	厚さ	樹種	その他
31	14	SE30	5	斎串	12.4	3.7	0.5	スギ科スギ属スギ	
32	14	SE30	5	木箆	22.8	10.7	1.9	スギ科スギ属スギ	先端の使用痕、握り痕
33	—	SE30	5	桶底	26.1	〔9.9〕	1.7	—	
34	—	SE30	5	割材	23.0	14.0	4.1	—	用途不明
35	—	SE30	5	矢板	〔25.5〕	9.9	1.9	—	

第55図　ＳＥ30出土木製品



遺物No.	図版No.	出土位置	層位	器種	長さ	幅	厚さ	樹種	その他
36	—	SK17	—	割材	75.2	14.8	4.5	—	
37	—	SK17	—	板状	〔31.5〕	5.0	1.8	—	
38	—	SK17	—	板状	15.5	2.5	0.5	—	穿孔２箇所
39	—	SK17	—	板状	〔13.0〕	2.3	7.5	—	穿孔２箇所
40	—	SK17	—	曲げ物	10.5	2.2	0.3	—	切込17本、穿孔１箇所
41	—	SK17	—	曲げ物	7.9	1.5	0.3	—	切込11本
42	—	SK17	—	曲げ物	〔5.5〕	2.8	0.4	—	切込７本
43	—	SK17	—	棒状	16.0	1.0	1.0	—	人形？
44	—	SK17	—	付木	26.8	1.2	1.4	—	先端被熱
45	—	SK17	—	付木	25.3	1.5	1.2	—	先端被熱
46	—	SK17	—	用途不明	19.5	6.8	5.0	—	
47	—	SK27	—	付木	10.2	0.9	0.5	—	先端被熱

第56図　ＳＫ17・27出土木製品

3　中世以降の遺構と遺物（時期不明を含む）

（1）溝跡

ＳＤ09（第57図）

ＭＦ26･ＭＧ26グリッドに位置する。Ｖ層精査中に黒褐色の溝状プランを確認した。ともに検出したＳＤ10を切り、ＳＸ07に隣接する。長さ（東－西）1.56ｍ、幅（南－北）0.35ｍで、確認面からの深さは約0.04ｍである。底面はほぼ平坦で、壁の立ち上がりは緩やかである。埋土は黒褐色砂質土の単一層で、炭化物を極僅かに含む。遺物は出土しなかった。

ＳＤ10（第57図）

ＭＦ26グリッドに位置する。Ｖ層精査中に褐色の溝状プランを確認した。ともに検出したＳＤ09に切られ、ＳＸ07に隣接する。長軸（北西－南東）1.8ｍ、短軸（北東－南西）0.4～0.42ｍで、確認面からの深さは約0.09ｍで、底面は平坦である。埋土はにぶい黄褐色砂質土の単一層で炭化物を極僅かに含む。遺物は木片が3点出土した。

ＳＤ11（第57図）

ＭＤ25グリッドに位置する。Ｖ層精査中に褐色の溝状プランを確認した。長さ（北－南）2.0ｍ、幅（東－西）40.0～0.54ｍで、確認面からの深さは約0.1ｍである。底面は一部で盛り上がっているがほぼ平坦で、壁はやや急に立ち上がる。埋土はにぶい黄褐色粘質土の単一層で炭化物を極僅かに含む。遺物は出土しなかった。

ＳＤ15（第58図）

ＭＣ24・25、ＭＤ24・25グリッドに位置する。Ｖ層精査中に歪んだ溝状プランを確認した。東側部分は現代の農業用水路があるため全長は不明だが、長さ（東－西）2.2ｍ、幅（北－南）1.3～1.8ｍで、確認面からの深さは約0.2ｍである。底面はほぼ平坦で、東に向かって幅が広がりつつ南東方向にやや蛇行する。埋土は3層に分かれ、1層は灰オリーブ色粘質土、2層は灰オリーブ色粘質土で炭化物を極少量含み、3層はオリーブ黒色砂質土である。全ての層に地山塊が少量混入している。遺物は直径8㎝、長さ約23㎝の木材が垂直に突き刺さった状態で出土した。

（2）階段状遺構

ＳＭ31（第58図、図版4）

ＬＭ～ＬＯ44・ＬＯ45グリッドに位置する。ＳＫＰ70に切られている。斜面精査中に階段状に岩盤を切り土した地形を確認した。長さ（東－西）3.5ｍ、幅（南－北、北東－南西）0.82～1.9ｍで、東西方向の高低差は1.4ｍである。黒褐色シルト質土（現表土）、黄褐色シルト質土に覆われており、幅0.28～0.88ｍの平坦に切り出された面が4面、幅0.6～1.0ｍの緩やかに傾斜した面が4面確認された。遺物は出土しなかった。斜面の裾には、縄文時代後期のＳＤ18や平安時代のＳＥ30がある。斜面上方に広がる平坦面では、本荘市教育委員会の調査で縄文時代後期と平安時代の遺物包含層が確認されており、いずれかの時代に往来のために構築されたと考えられるが、丘陵には近年まで寺社があったといわれており、これに関連したものである可能性もある。

（3）性格不明遺構

ＳＸ02（第59図）

ＭＥ25・ＭＦ25グリッドに位置する。Ｖ層精査中に褐色の溝状プランを確認した。ＳＸ07及びＳＤ

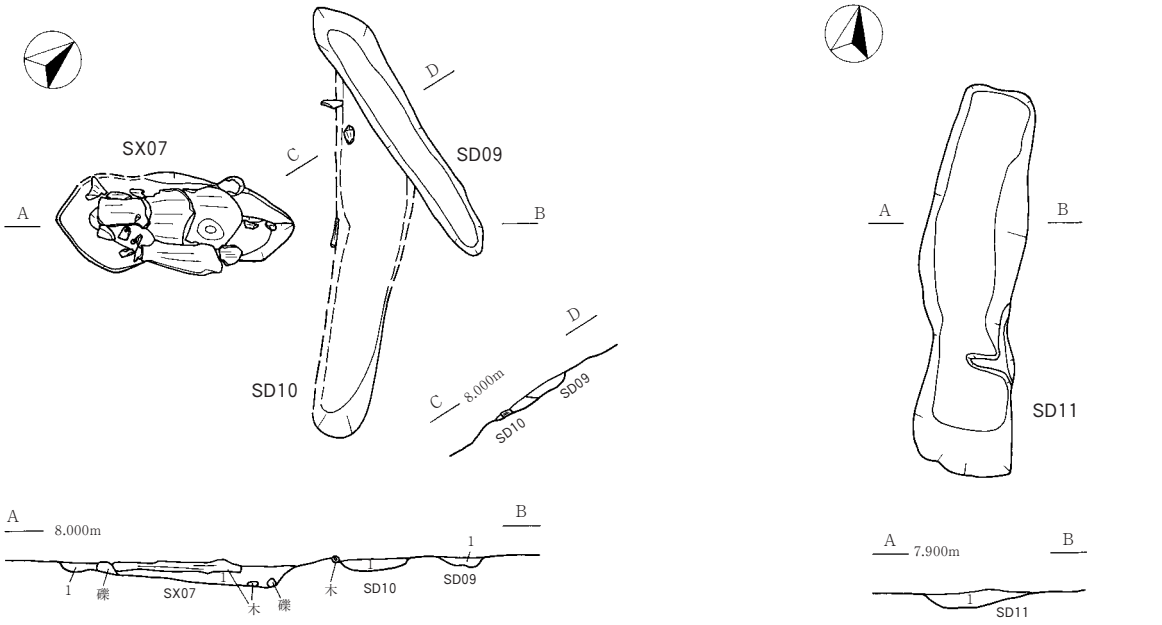
11・15と隣接する。長軸（北西－南東）14.1ｍ×短軸（北東－南西）0.92ｍで、確認面からの深さは最深部で0.36ｍである。埋土は単一層で自然堆積と考えられ、暗オリーブ灰色砂質土である。底面から人為的に敷設されたと思われる直径約20～40㎝の多量の礫と周辺に杭状の木製品30点が検出され､そのうち14本は環状に刺さった状態で検出された｡この木製品は放射性炭素年代遺測定の結果、17～18世紀の数値が得られている。遺物は須恵器片１点、磁器３点、陶器５点、石鏃１点、剥片１点、釘状の鉄製品２点が出土した。

ＳＸ07（第57図）

ＭＦ26・ＭＧ26グリッドに位置する。Ｖ層精査中に炭化した板状の木材とともに褐色の溝状プランを確認した。ＳＤ09・10と隣接する。長軸（北東－南西）1.25ｍ×短軸（北西－南東）0.5ｍで、確認面からの深さは0.1ｍである。埋土は黒褐色砂質土の単一層である。遺物は、板状の木材が２点、木片２点、礫16点、剥片１点、鍛冶滓１点が出土した。

ＳＸ16（第59図）

ＭＢ・ＭＣ31グリッドに位置する。Ｖ層精査中に暗灰色の溝状プランを確認した。長軸（北西－南東）4.5ｍ×短軸（北東－南西）0.9～1.3ｍで、確認面からの深さは0.05～0.3ｍである。一部で深さ0.3ｍの土坑状の窪みがある。埋土は３層に分かれ、１層は暗緑灰色で砂質土と粘質土が混合した土、２層は黒褐色粘質土、３層は黄灰色粘質土で、２・３層は炭化物を極僅か含む。遺物は炭化した角材と木片が各１点出土した。



ＳＤ09
1　黒褐色（10ＹＲ３／２）
しまり中　粘性微弱
炭化物が極少量混入

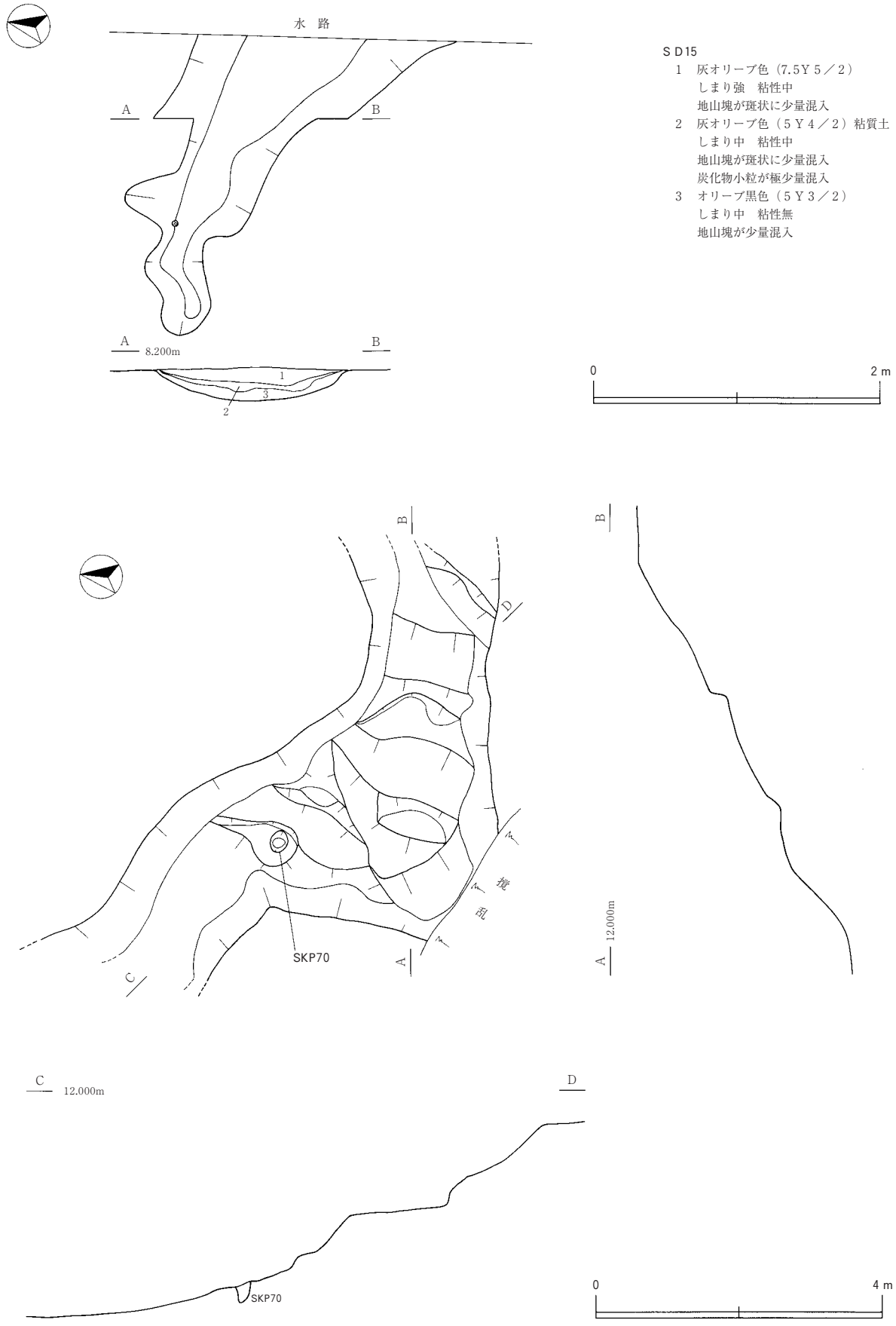
ＳＸ07
1　黒褐色（10ＹＲ３／２）
しまり中　粘性微弱
炭化物極少量、礫（径１～２㎝）少量混入

ＳＤ11
1　にぶい黄褐色（10ＹＲ４／３）
しまり中　粘性弱
地山塊少量、炭化物極少量混入

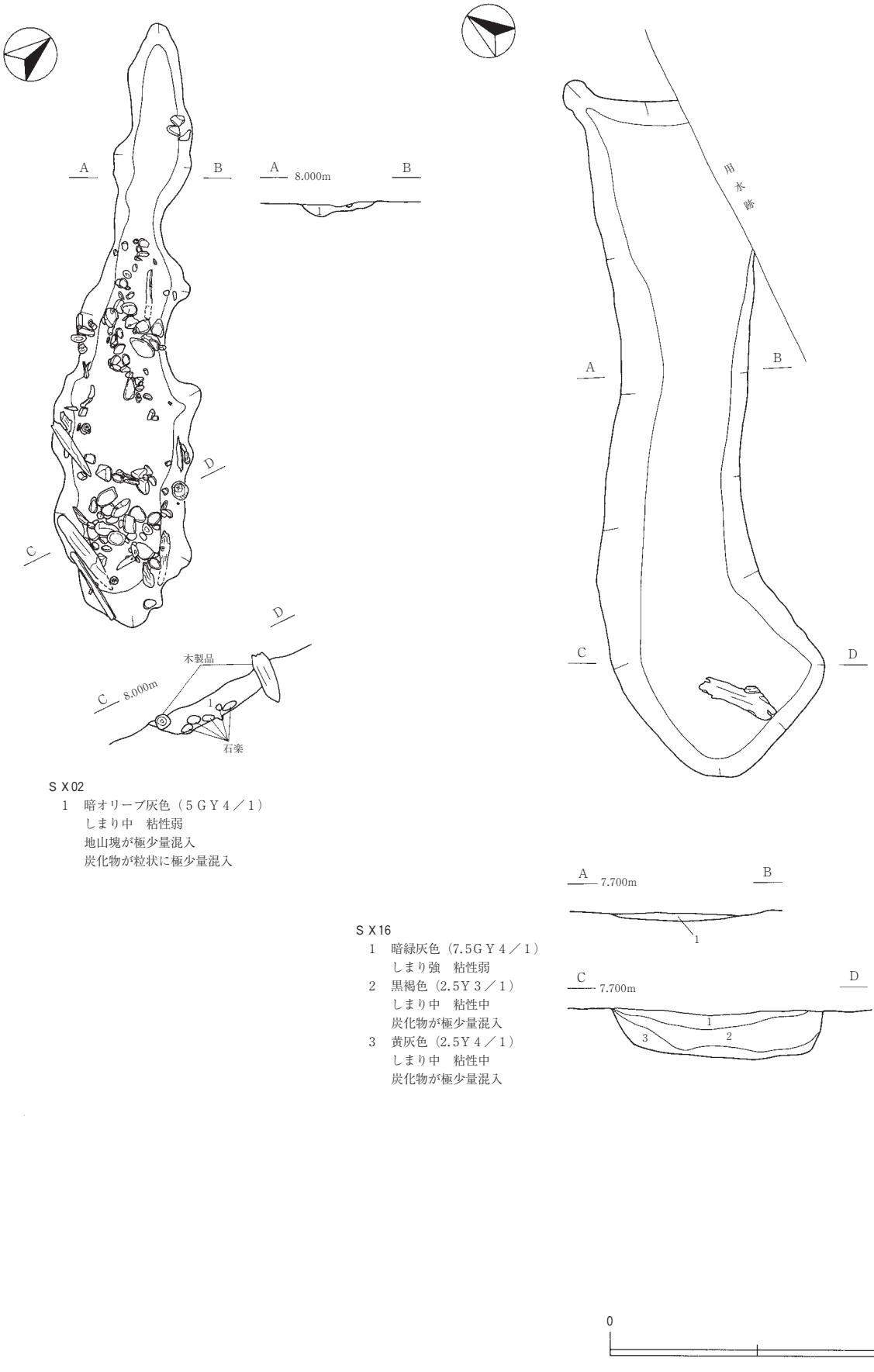
ＳＤ10
1　にぶい黄褐色（10ＹＲ４／３）
しまり中　粘性無
地山塊が中量、炭化物が極少量混入

0　2ｍ

第57図　溝跡（ＳＤ09～11）・性格不明遺構（ＳＸ07）



第58図 溝跡（ＳＤ15）・階段状遺構（ＳＭ31）



ＳＸ02
1　暗オリーブ灰色（５ＧＹ４／１）
　しまり中　粘性弱
　地山塊が極少量混入
　炭化物が粒状に極少量混入

ＳＸ16
1　暗緑灰色（7.5ＧＹ４／１）
　しまり強　粘性弱
2　黒褐色（2.5Ｙ３／１）
　しまり中　粘性中
　炭化物が極少量混入
3　黄灰色（2.5Ｙ４／１）
　しまり中　粘性中
　炭化物が極少量混入

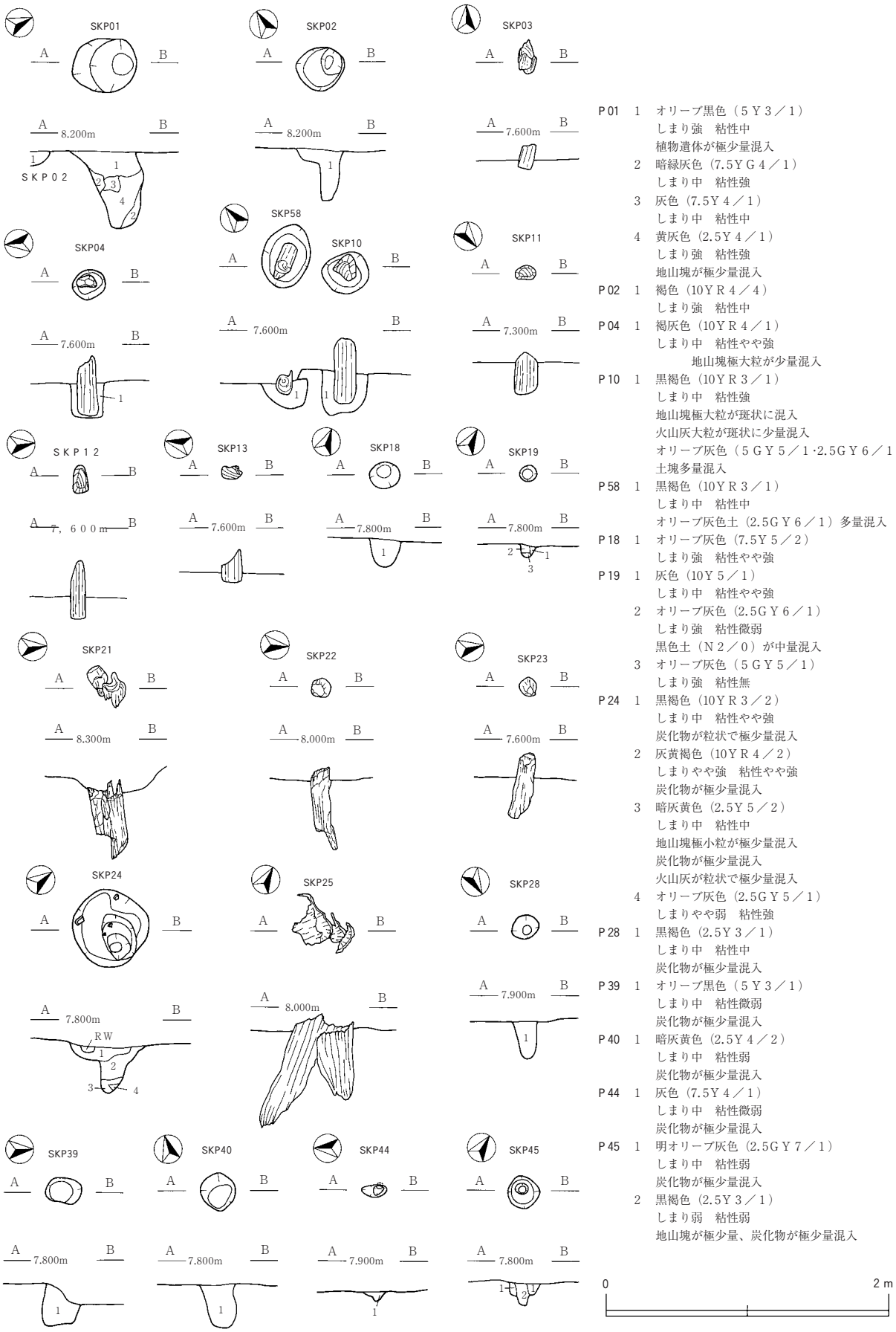
第59図　性格不明遺構（ＳＸ02・16）

4　柱穴様ピット（第25・60・61図）

沖積地部分ではＳＢ19に属する10基を除き、38基の柱穴様ピットを検出した。これらは検出位置や出土遺物から主として平安時代に帰属すると考えられる。個々の検出グリッド・平面形・規模・底面標高・出土遺物・他遺構との考察等は以下の第3表に示した。

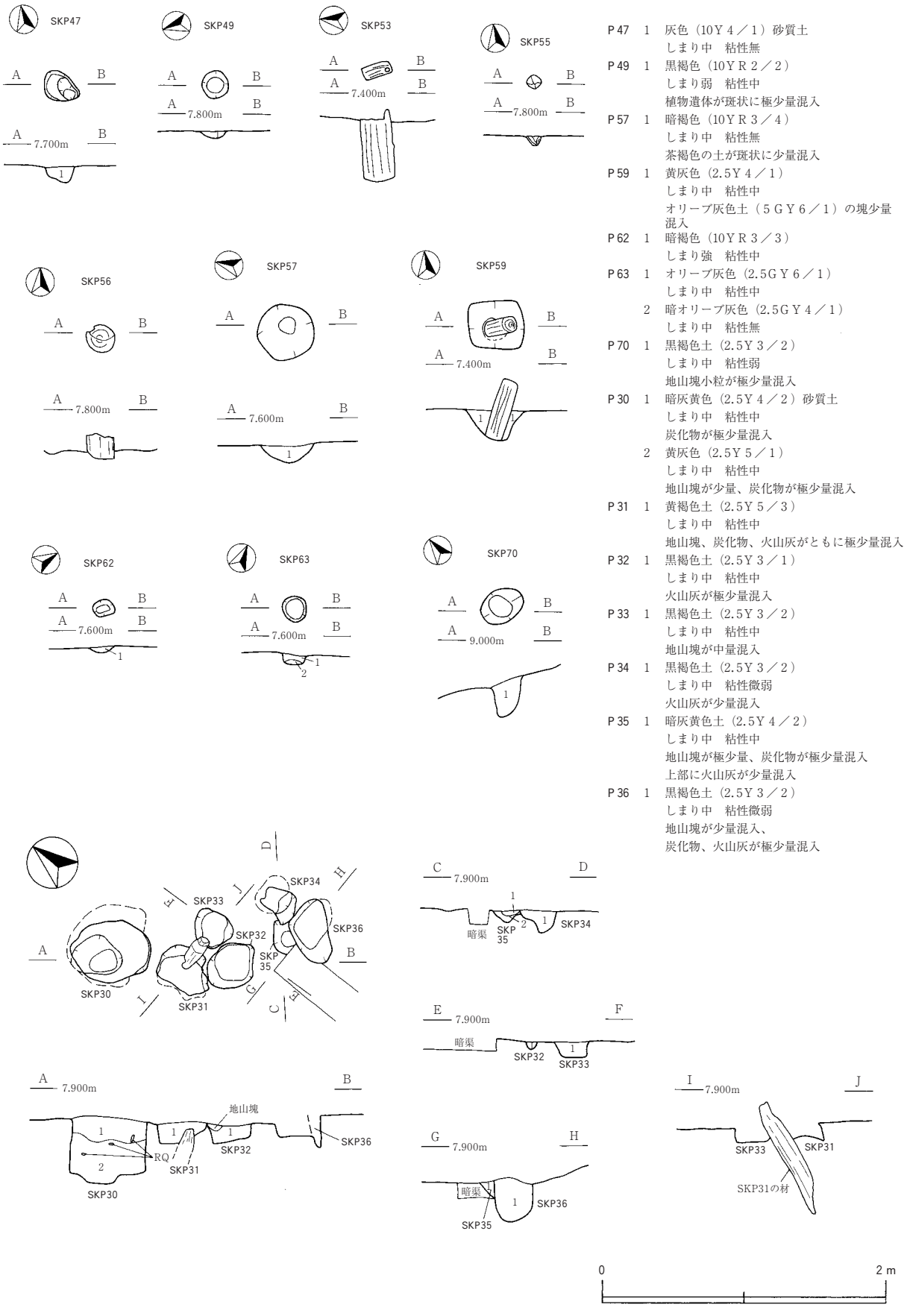
No	検出グリット	平面形	規模			底面標高（m）	出土遺物	備考
			長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)			
01	LO18	円形	47.0	38.0	55.8	7.51		
02	LO18	円形	34.0	31.0	37.8	7.70		
03	ME53	（角材）	(14.0)	(13.0)	(12.5)	(7.32)	柱材	掘形なし
04	ME54	円形	24.0	20.2	27.0	7.05	柱材	
10	MD56	円形	33.8	32.0	33.8	7.00	柱材	
11	ME57	（丸材）	(15.0)	(9.6)	(25.0)	(6.83)	柱材	掘形なし
12	MG57	（角材）	(18.8)	(10.0)	(18.3)	(6.92)	柱材	掘形なし
13	MF61	（角材）	(15.6)	(8.0)	(7.7)	(7.19)	柱材	掘形なし
18	MG25	円形	12.8	11.6	19.0	7.52		
19	MG25	円形	21.2	17.6	11.4	7.56		
21	LQ・LR18	（丸材）	(14.0)	(12.0)	(不明)	(7.49)	柱材	掘形なし
22	LP18	（丸材）	(14.0)	(13.6)	(49.0)	(7.23)	柱材	掘形なし
23	LP17	（丸材）	(14.0)	(9.8)	(31.0)	(7.00)	柱材	掘形なし
24	MD30	円形	50.8	48.6	59.0	7.06	土師器	
25	LR19	（丸材）	(44.0)	(25.0)	(68.0)	(7.14)	柱材	SL14内､掘形なし
28	ME28・29	円形	20.0	16.0	26.9	7.42		
30	MD30	楕円形	52.0	47.0	47.1	7.23	土師器､剥片石器	火山灰より下層
31	MD30	不整円形	33.0	27.0	18.5	7.48	柱材､土師器	長軸は推定､火山灰混入
32	MD30	不整楕円形	40.0	30.4	15.0	7.51		火山灰混入
33	MD30	不整楕円形	40.0	28.4	11.8	7.52	須恵器	
34	MD30	不整形	25.0	18.0	52.4	7.13		火山灰混入
35	MD29・30	不整形	24.0	18.0	9.7	7.54		長軸は推定
36	MD29・30	不整形	43.0	27.6	39.5	7.32	陶器､剥片石器	長軸は推定
39	ME29	楕円形	26.0	17.4	30.8	7.32	石錐	
40	MD30	不整円形	27.0	25.0	33.9	7.32		
44	ME28	楕円形	18.0	8.5	6.3	7.61		
45	ME29	不整円形	23.2	22.0	15.0	7.42		
47	LR40	楕円形	27.0	20.0	13.3	7.41		
49	LS42	円形	20.0	19.0	10.5	7.57		SD18に切られる
53	MG61	（角材）	(20.4)	(9.2)	(51.8)	(6.78)	柱材	掘形なし
55	LQ42	（丸材）	(10.4)	(9.8)	(6.9)	(7.62)	柱材	掘形なし
56	LS49	（丸材）	(20.0)	(19.0)	(6.7)	(7.44)	柱材	掘形なし
57	MB49・50	円形	40.2	40.0	14.0	7.28		
58	MD・ME56	楕円形	46.0	34.0	30.4	6.95	柱材	
59	MF57	隅丸方形	40.8	31.6	23.5	6.83	柱材	
62	MC56	楕円形	16.8	9.8	10.3	7.18		SD25に切られる
63	MC56	円形	18.0	16.2	7.3	7.21		SD25に切られる
70	LN44	楕円形	30.0	25.0	32.1	9.042		SM31を切っている

第3表　柱穴様ピット一覧（低地部分）



P01　1　オリーブ黒色（５Ｙ３／１）
しまり強　粘性中
植物遺体が極少量混入
2　暗緑灰色（7.5ＹＧ４／１）
しまり中　粘性強
3　灰色（7.5Ｙ４／１）
しまり中　粘性中
4　黄灰色（2.5Ｙ４／１）
しまり強　粘性強
地山塊が極少量混入
P02　1　褐色（10ＹＲ４／４）
しまり強　粘性中
P04　1　褐灰色（10ＹＲ４／１）
しまり中　粘性やや強
地山塊極大粒が少量混入
P10　1　黒褐色（10ＹＲ３／１）
しまり中　粘性強
地山塊極大粒が斑状に混入
火山灰大粒が斑状に少量混入
オリーブ灰色（５ＧＹ５／１･2.5ＧＹ６／１）
土塊多量混入
P58　1　黒褐色（10ＹＲ３／１）
しまり中　粘性中
オリーブ灰色土（2.5ＧＹ６／１）多量混入
P18　1　オリーブ灰色（7.5Ｙ５／２）
しまり強　粘性やや強
P19　1　灰色（10Ｙ５／１）
しまり中　粘性やや強
2　オリーブ灰色（2.5ＧＹ６／１）
しまり強　粘性微弱
黒色土（Ｎ２／０）が中量混入
3　オリーブ灰色（５ＧＹ５／１）
しまり強　粘性無
P24　1　黒褐色（10ＹＲ３／２）
しまり中　粘性やや強
炭化物が粒状で極少量混入
2　灰黄褐色（10ＹＲ４／２）
しまりやや強　粘性やや強
炭化物が極少量混入
3　暗灰黄色（2.5Ｙ５／２）
しまり中　粘性中
地山塊極小粒が極少量混入
炭化物が極少量混入
火山灰が粒状で極少量混入
4　オリーブ灰色（2.5ＧＹ５／１）
しまりやや弱　粘性強
P28　1　黒褐色（2.5Ｙ３／１）
しまり中　粘性中
炭化物が極少量混入
P39　1　オリーブ黒色（５Ｙ３／１）
しまり中　粘性微弱
炭化物が極少量混入
P40　1　暗灰黄色（2.5Ｙ４／２）
しまり中　粘性弱
炭化物が極少量混入
P44　1　灰色（7.5Ｙ４／１）
しまり中　粘性微弱
炭化物が極少量混入
P45　1　明オリーブ灰色（2.5ＧＹ７／１）
しまり中　粘性弱
炭化物が極少量混入
2　黒褐色（2.5Ｙ３／１）
しまり弱　粘性弱
地山塊が極少量、炭化物が極少量混入

第60図　柱穴様ピット（１）



P47　1　灰色（10Y４／１）砂質土
　　しまり中　粘性無
P49　1　黒褐色（10YR２／２）
　　しまり弱　粘性中
　　植物遺体が斑状に極少量混入
P57　1　暗褐色（10YR３／４）
　　しまり中　粘性無
　　茶褐色の土が斑状に少量混入
P59　1　黄灰色（2.5Y４／１）
　　しまり中　粘性中
　　オリーブ灰色土（５GY６／１）の塊少量混入
P62　1　暗褐色（10YR３／３）
　　しまり強　粘性中
P63　1　オリーブ灰色（2.5GY６／１）
　　しまり中　粘性中
　　2　暗オリーブ灰色（2.5GY４／１）
　　しまり中　粘性無
P70　1　黒褐色土（2.5Y３／２）
　　しまり中　粘性弱
　　地山塊小粒が極少量混入
P30　1　暗灰黄色（2.5Y４／２）砂質土
　　しまり中　粘性中
　　炭化物が極少量混入
　　2　黄灰色（2.5Y５／１）
　　しまり中　粘性中
　　地山塊が少量、炭化物が極少量混入
P31　1　黄褐色土（2.5Y５／３）
　　しまり中　粘性中
　　地山塊、炭化物、火山灰がともに極少量混入
P32　1　黒褐色土（2.5Y３／１）
　　しまり中　粘性中
　　火山灰が極少量混入
P33　1　黒褐色土（2.5Y３／２）
　　しまり中　粘性中
　　地山塊が中量混入
P34　1　黒褐色土（2.5Y３／２）
　　しまり中　粘性微弱
　　火山灰が少量混入
P35　1　暗灰黄色土（2.5Y４／２）
　　しまり中　粘性中
　　地山塊が極少量、炭化物が極少量混入
　　上部に火山灰が少量混入
P36　1　黒褐色土（2.5Y３／２）
　　しまり中　粘性微弱
　　地山塊が少量混入、
　　炭化物、火山灰が極少量混入

第61図　柱穴様ピット（２）

５　河川跡

ＳＬ14（第 62・64 ～ 85 図、付図２、図版５・９・10・13・14）

調査区の南端部に位置する。Ⅱ層精査中にＭＡ～ＭＤ20・ＬＲ17・18でオリーブ色の溝状プランを確認し、土層の状況から河川跡であると判断した。ＭＤ19以西は平安時代のＳＬ06と流路が重なるが直接の重複はない。両端が調査区外まで続くことから全長は不明だが、検出した長さは約 50.0 ｍ、幅は約 1.5 ～ 5.0 ｍ、確認面からの深さは約 0.5 ～ 1.0 ｍである。ＬＲ・ＬＳ19で大きく東に湾曲し、それ以西は西南方向に延びている。河床面は地山面で起伏があり、ＳＴ20と酷似している。堆積土はＳＬ06と共有のＳＰ．Ａ－ＢとＳＰ．Ｃ－Ｄを含む６本のベルトを設定して観察を行った。ＳＰ．Ａ－Ｂでは灰オリーブ色（７層）の単一層である。ＳＰ．Ｃ－Ｄでは２層に分かれ、４層は灰黄褐色の粘質土を基調にａ～ｃ層に細分され、５層は灰色の砂質土を基調にａ～ｔ層に細分される。ＳＰ．Ｅ－Ｆでは灰オリーブ色（１層）の単一層である。ＳＰ．Ｇ－Ｈでは灰オリーブ色を基調に 13 層（１～ 13 層）に分かれ、植物遺体の混入が顕著である。ＳＰ．Ｉ－Ｊも灰オリーブ色を基調に 11 層（１～ 11 層）に分かれる。ＳＰ．Ｋ－Ｌも灰オリーブ色を基調に 16 層（１～ 14・16・18 層）に分かれる。遺物は、ほぼ完形の注口土器を含む縄文時代後期を主体とする土器が 226 点、石器は 229 点が出土した。遺物のほとんどが河床面からの出土で、中位より上は植物遺体が多く含まれていたが遺物の出土は希薄であった。平面的には、ＭＢ・ＭＣ19、ＭＢ20で遺物が多く出土している。河床面からは幼果を含むトチの内殻も多く出土した。縄文土器は早期末葉～前期：深鉢（398・399）、後期中～後葉：深鉢（400 ～ 409）・注口土器（410）、の 13 点を掲載した。早期末葉～前期の 398・399 は異条縄文をもつ。後期中～後葉の深鉢は縄文・沈線文・磨きが施され、このうち 400 は沈線に並行する刺突列をもつ。405・406 は縄文・沈線が施されているが施文は粗い。407 は刺突文が施されている。注口土器は磨きのうえ沈線が施され、底部には簾条圧痕をもつ。石器は石鏃（110 ～ 115）、石槍（116 ～ 118）、石篦（119 ～ 131）、石匙（132 ～ 142）、掻器（143 ～ 149）、石錐（150 ～ 155）、異形石器（156・157）、二次加工のある剥片（158・159）、使用痕のある剥片（160）、石錘（161・162）、凹石（163 ～ 166）、石皿（167）、敲打痕のある石器（168）の 59 点を掲載した。石鏃のうち 110 ～ 112 は茎が無く基部が凹状、113 は茎を有し基部は尖り、114・115 は未成品である。石槍のうち 116 は細長で両面加工が施され、両側縁の上半が突出する。117 は幅広で両面加工が施されている。118 は未成品と考えられ、表面に自然面を残す。石篦は 119 ～ 126 が撥形で裏面は周縁加工のみである。127 ～ 131 は細長で、127・128 は両面加工が施されている。石匙は 132 ～ 141 が素材剥片の側縁に刃部を設け、142 は未成品である。掻器のうち 143・144 は刃部が片側縁のみで、143 の石材は玉随である。145 は片側縁から先端に、146 ～ 149 は両側縁に刃部を有する。石錐のうち 150 のみ、つまみと錐部の境界が明確で、いずれも錐部は短く、151・152 は両面調整が施されている。異形石器は 156 が雁袴状、157 は錨状で共に石材は鉄石英である。石錘は２点とも上下に切目を入れただけの簡易な加工である。凹石は 163 ～ 165 が表裏両面に凹部を有し、163 は両面に擦痕も認められる。166 は片面のみに凹部を有し、側面に敲打痕もみられる。167 は平面形は不定形、断面形が凹状の石皿である。168 は側面に使用の際に残ったと考えられる敲打痕を有し、基部は欠損している。植物遺体のうちトチの内殻は放射性炭素年代測定の結果から、縄文時代中期の数値が得られた。

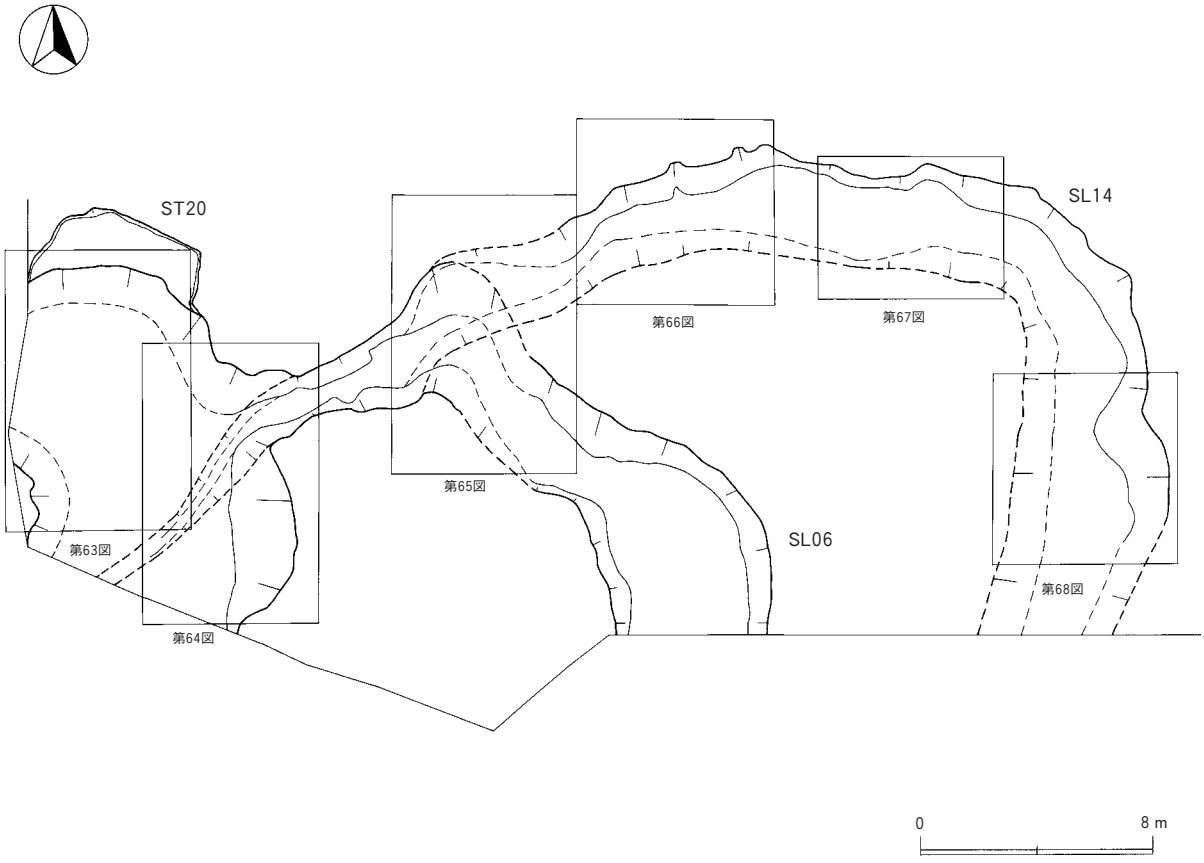
土層観察のうちＳＰ．Ａ－Ｂから最低４段階の流路の変化が観察され、それぞれ 21 層、25 層、30・

33・37・38層、34・39層をそれぞれ河床面とする時期があったと推察される。これらの河川跡は、大きな沢地であったものが次第に埋没し、経過とともに河川として流れ出し、堆積作用を繰り返しながら流路を様々に変えながら最終的にＳＬ14の流れを形成したと考えられる。

ＳＬ14より下位の遺物を包含する堆積層（以下ＳＬ）からは、縄文時代早期末～後期の土器11箱、剥片石器3箱、礫石器2箱が出土した。縄文土器は早期末葉～前期：深鉢（234 ～ 314）、前期：深鉢（315 ～ 350）、中期：深鉢（351 ～ 371）、中～後期前葉：深鉢（372 ～ 376）、後期中～後葉：深鉢（377 ～ 389）・鉢（390・391）・台付鉢（392）・壺（393 ～ 397）の73点を掲載した。早期末葉～前期のうち235 ～ 241は羽状縄文、247 ～ 259は短い縄文原体で施文し、244は補修孔、256は右側に縦列の刺突文をもつ。260・261はループ文、262 ～ 277は刺突文をもち、262 ～ 266は底部で渦状に刺突が施されている。278 ～ 287・308は綾操文、288・289は異条縄文、290・291は撚糸文をもつ。292は口縁部下に隆帯を貼付け、刺突が施されている。303・304は折り返し口縁、310は内面に横位の条痕をもつ。前期のうち315 ～ 320は沈線文をもち、315･316は波状、317 ～ 319は鋸歯状である。322は隆帯の下位に押圧縄文、323 ～ 326は撚糸側面圧痕文、327・328は圧痕の下位にループ文、329は沈線の上から刺突が施されている。330は半裁竹管状工具による刺突、331 ～ 343は押引文、346 ～ 348は縦長の刺突文、349は補修孔をもつ。中期の351･352は半裁竹管状工具による沈線、353 ～ 358は押引文で353 ～ 355は下位に撚糸文が付され、354・355は瘤状の貼付けが施されている。359は鎖状及びボタン状の隆帯と沈線、360は木目状撚糸文、361 ～ 365･371は口縁部に瘤状の貼付けがあり、361 ～ 363・371には沈線文が施されている。366 ～ 368は摘み上げられた隆帯があり、366は押圧縄文、367は撚糸圧痕が施されている。369は沈線文、370は磨きが施されている。中～後期前葉のうち372は隆帯と沈線、373・374は鎖状隆帯と沈線文と磨き、375・376は磨きと沈線文で、375は刺突も施されている。後期中～後葉の深鉢のうち377 ～ 381は縄文・沈線文・磨きが施され、このうち377・378は沈線に並行する刺突列をもつ。382は磨きと沈線文が施されている。壺のうち393 ～ 395は縄文・沈線文・磨きが施され、396・397は磨きのみで、396には工具痕が残る。石器は石鏃（56 ～ 63）、石槍（64 ～ 66）、石篦（67 ～ 73）、石匙（74 ～ 87）、掻器（88 ～ 93）、石錐（94 ～ 97）、磨製石斧（98・99）、石錘（100 ～ 103）、凹石（104 ～ 107）、敲石（108）、石皿（109）の54点を掲載した。石鏃のうち56 ～ 58は茎が無く基部が凹状、59 ～ 62は茎が無く基部が平らで59を除き細長い。63は茎を有し基部は尖っている。石槍は64が細長、65・66はやや幅広でいずれも両面加工が施されている。石篦は67 ～ 69が撥形で、67のみ両面加工が施されている。70 ～ 73は細長で70のみ両面加工が施され、71はデイサイトで両面に自然面を残す。石匙の74 ～ 87は縦型で、このうち74は未成品である。掻器の88は刃部が片側縁のみ、89・90は片側縁から先端に連続する。91 ～ 93は両側縁に刃部を有する。石錐は4点ともつまみと錐部の境界は不明確で錐部は短い。94のみ両面加工が施されている。磨製石斧の98は断面形が扁平、99は断面形が不整三角形で削痕が残る。石材はともに安山岩である。石錘は全て上下に切目を入れたのみの簡易な加工で、100のみ小型で、103は表裏に敲打された痕があり、凹石としても使用されたと考えられる。凹石は104 ～ 106が表裏両面に凹部を有し、104・105の側面には敲打痕もみられる。107は片面のみに凹部を有する。敲石の108は上下両端に敲打痕がみられる。石皿の109は欠損のため平面形は不明、断面形は凹状と考えられる。

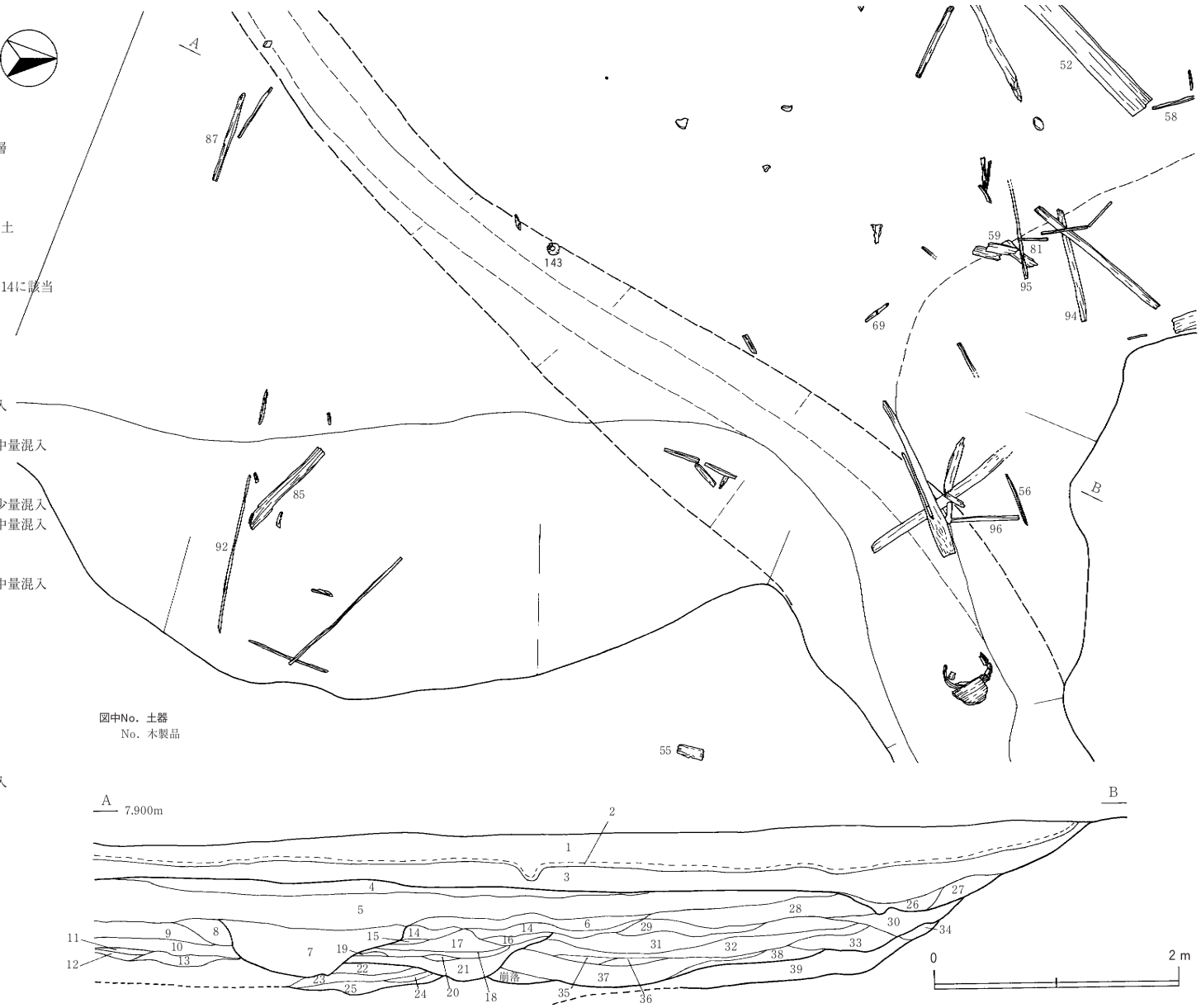
ＳＬ06（第 62 ～ 65・73・86 ～ 93・108 図、付図２、図版５・６・12・14・15）

調査区の南端部に位置する。Ⅱ層精査中に南東から西にかけて伸びる黒色の溝状プランを確認し、土層観察から、幅約 4.0 ｍ、厚さ約 0.1 ～ 0.7 ｍの黒色及び黒褐色の堆積を確認し、形状から河川跡であると判断した。一部で縄文時代の河川跡のＳＬ14と流路が重なるが直接の重複はない。川幅の広がる北側ではＳＬ06がＳＴ20を浸食したため、ＳＴ20の範囲が不明瞭になっている。調査区外まで続くことから全長は不明だが、検出した長さは約 25.0 ｍ、幅は約 1.7 ～ 6.0 ｍである。確認面からの深さは南東側では約 0.1 ～ 0.2 ｍ、西に向かって約 0.4 ～ 0.8 ｍと深くなる。ＳＬ14と流路が重なる地点から大きく南西方向に湾曲し、西側で幅が大きく広がる。堆積土はＳＬ14とともにＳＰ．Ａ－ＢとＳＰ．Ｃ－Ｄを設定して観察を行った。ＳＰ．Ａ－Ｂでは３層（１～３層）に分かれ、１層は黒色の粘質土、２層は最堆積した火山灰層、３層は黄灰色土である。ＳＰ．Ｃ－Ｄでは２層（２・３層）に分かれ、２層は黒色の粘質土、３層は黒褐色の粘質土で火山灰が混入してる。自然科学分析から火山灰は白頭山苫小牧火山灰と十和田ａ火山灰が混合し、再堆積したものと結論が出された。遺物は縄文土器１箱、長胴甕１点を含む土師器１箱、須恵器甕５片、須恵器系陶器の擂鉢２点、染付磁器１点、木製品約 15 箱・石器１箱が出土した。土師器には、墨書土器が２点含まれている。木製品は、漆器・曲げ物・刳り物・箸状木製品・ほぞ穴のついた板材、その他に用途不明な木製品も含めて、多量に出土している。土師器は坏（138 ～ 144）・有台坏（145）・長胴甕（146 ～ 148）の 11 点を掲載した。坏はＳＤ05と同様の分類をした。Ａ－２類が 138、Ｂ－１類が 139、Ｂ－２類が 140・141、Ｂ－３類が 142、Ｃ－１類が 143 である。切り離しは全て回転糸切りによる。口縁部は 138 が外反、139 が内湾か



第62図　河川跡（ＳＬ06・14）

第63図　ＳＬ06遺物出土状況

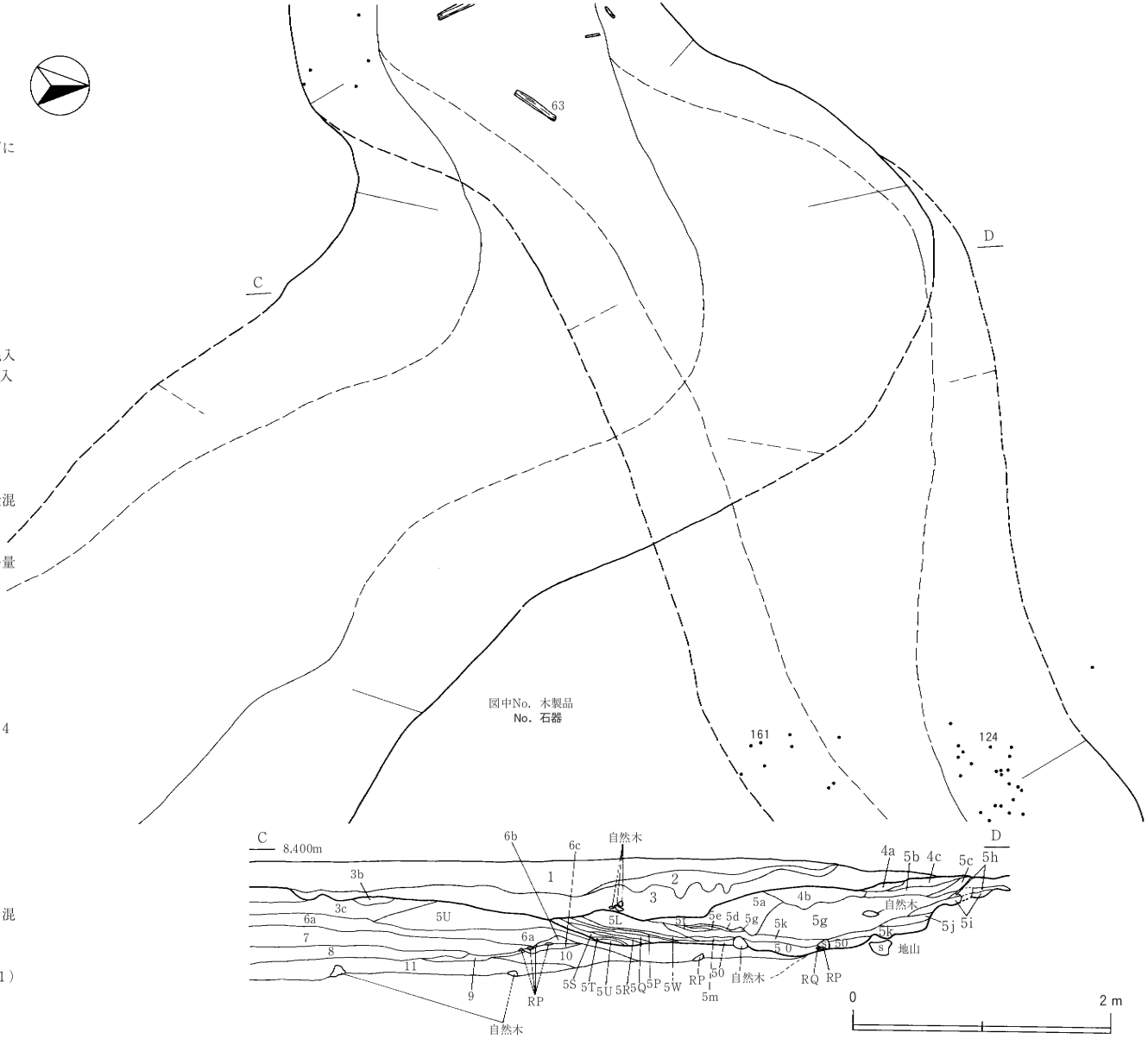


ＳＬ06・14
Ａ－Ｂ

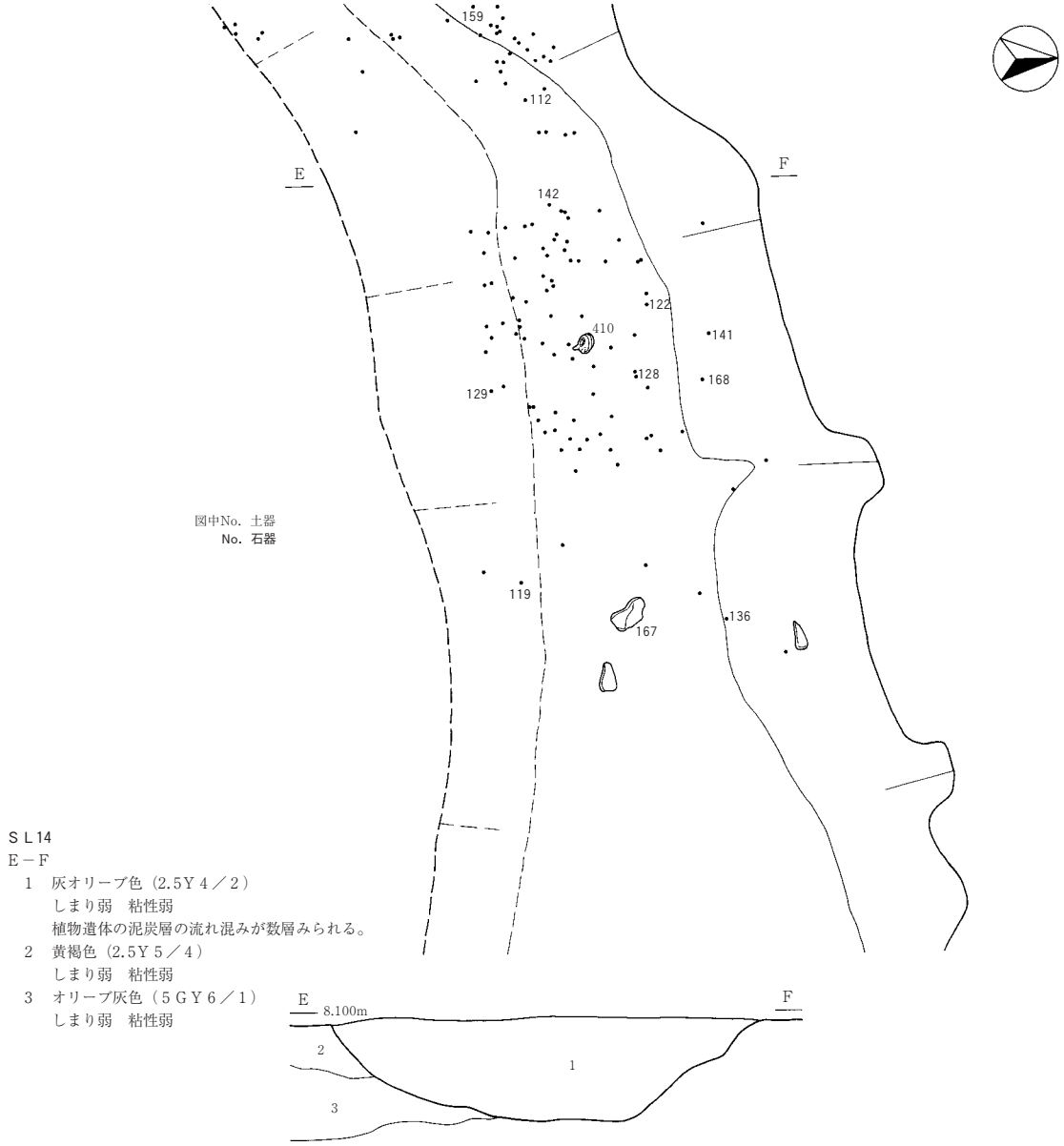
1　黒色（10ＹＲ２／１）粘質土
2　にぶい黄橙色（10ＹＲ７／２）火山灰層
3　灰黄褐色土（10ＹＲ４／２）
4　灰オリーブ色（7.5Ｙ５／２）粘質土
　　‥‥ＳＬ06河床面に該当
5　灰オリーブ色（7.5Ｙ５／２）シルト質土
　　粘性やや強
6　灰色細粒砂
7　灰オリーブ色（2.5Ｙ４／２）‥‥ＳＬ14に該当
8　灰色（10Ｙ５／１）砂質土
9　灰色（10Ｙ５／１）粘質土
10　黄灰色（2.5Ｙ４／１）粘質土
11　不明
12　不明
13　灰色（10Ｙ５／１）粘質土　粗粒砂混入
　　植物遺体少量混入
14　灰色（10Ｙ５／１）粘質土　植物遺体中量混入
15　灰色（10Ｙ５／１）細粒砂
16　粘質土
17　灰色（10Ｙ５／１）粗粒砂　植物遺体少量混入
18　灰色（10Ｙ５／１）粗粒砂　植物遺体中量混入
19　オリーブ灰色（10ＹＲ５／２）粗粒砂
20　灰色細粒砂
21　灰色（10Ｙ５／１）粗粒砂　植物遺体中量混入
22　灰色（10Ｙ５／１）粗粒砂
23　灰色（10Ｙ５／１）細粒砂
24　灰色粗粒砂
25　灰色粘質土
26　黒色（10ＹＲ２／１）粘質土
27　オリーブ灰色（2.5ＧＹ５／１）粘質土
28　粘質土　細粒砂混入
29　粘質土　粗粒砂混入
30　灰色粘質土　植物遺体多量混入
31　粘質土　細粒砂混入　植物遺体中量混入
32　灰色細粒砂
33　灰色細粒砂　植物遺体少量混入
34　灰色細粒砂　植物遺体少量混入
35　植物遺体多量混入
36　灰色粗粒砂
37　灰色　砂層（粗粒砂･細粒砂混合）
　　植物遺体混入
38　砂層（粗粒砂･細粒砂混合）
39　灰色上部：粗粒砂　下部：細粒砂

第64図　ＳＬ06・14（１）

ＳＬ06・14
Ｃ－Ｄ
1　表土
2　黒色（10ＹＲ２／１）粘質土
3　黒褐色（10ＹＲ３／２）粘質土・・・・ＳＬ06河床面に該当
　火山灰混入（再堆積）
4層
a　灰黄褐色（10ＹＲ４／２）粘質土
b　灰黄褐色（10ＹＲ４／２）粘質土　（青砂＋灰色）
　灰オリーブ色（５Ｙ４／２）の砂が塊状に少量混入
　植物遺体：やや多量混入
c　黒褐色（10ＹＲ３／１）　粘質土
5層・・・・ＳＬ14に該当
a　灰色（7.5Ｙ４／１～５／１）砂　植物遺体やや多量混入
b　灰オリーブ色（５Ｙ５／２）細粒砂　植物遺体少量混入
c　褐灰色（10ＹＲ４／１）細粒砂（２～３㎜）少量混入
d　灰色（7.5Ｙ４／１）砂　植物遺体少量混入
e　灰色（7.5Ｙ４／１）砂
f　灰色（7.5Ｙ４／１）砂　植物遺体少量混入
g　褐灰色（10ＹＲ４／１）砂　植物遺体多量混入
h　褐灰色（10ＹＲ４／１）細粒砂（２～３ｍｍ）塊少量混入
i　灰色（５Ｙ４／１）シルト質土
　細粒砂（7.5ＧＹ５／１緑灰色）５㎜ 前後の塊やや多量混入
j　暗オリーブ灰色（2.5Ｙ４／１）
　地山（５Ｇ６／１緑灰色）塊混入
k　褐灰色（10ＹＲ４／１）砂　植物遺体多量混入
l　灰色（7.5Ｙ５／１）砂　植物遺体すじ状に堆積
m　灰色（7.5Ｙ５／１）砂
n　灰色（7.5Ｙ５／１）砂　植物遺体多量混入
o　オリーブ灰色（2.5ＧＹ６／１）砂質土と灰色（7.5Ｙ４／１）粘質土が混合
p　灰色（7.5Ｙ５／１）砂　植物遺体多量混入
q　灰色（7.5Ｙ５／１）砂　植物遺体少量混入
r　灰色（7.5Ｙ５／１）砂　植物遺体多量混入
s　灰色（7.5Ｙ５／１）砂
t　灰色（7.5Ｙ５／１）砂　植物遺体：多量混入
u　灰色（7.5Ｙ５／１）砂
6層
a　灰色（7.5Ｙ４／１）粘質土　灰色（7.5Ｙ４／１）砂混入
b　灰色（7.5Ｙ４／１）粘質土　植物遺体多量混入
c　灰色（7.5Ｙ５／１）砂　オリーブ灰色（2.5ＧＹ５／１）砂質土多量混入

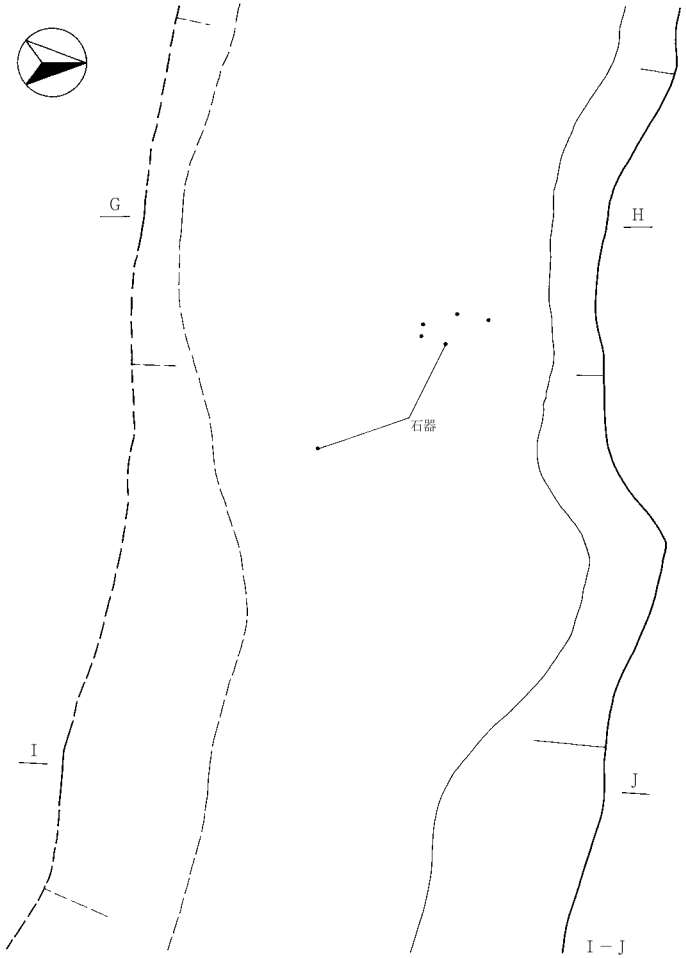


第65図　ＳＬ06・14（２）

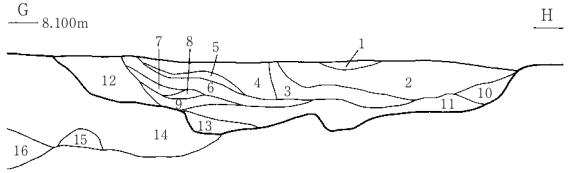


第66図　ＳＬ06・14（３）

ら口縁で外反、他はほぼ直線的に立ち上がる。他の遺構で出土した坏に比べ成形が丁寧で、142・144には墨書がなされている。須恵器は有台坏（149）を掲載した。石器は石鏃（169・170）、石鉾（171・172）、石匙（173）、石棒（174）の６点を掲載した。石鏃のうち169は茎が無く基部が凹状、170は茎を有し基部が直線で、共に側面は直線的である。石鉾は全て鉾形で裏面は周縁加工のみであり、171の石材は流紋岩である。173は縦型の石匙である。174は頭部にくびれを有し、断面形が円形の石棒で、線刻等はない。木製品は刳物（48）、皿（49）、漆器椀（50）、曲物（51）、板材（52・53）、柱材（59）、杭（56 ～ 58・93・94）、留め針（65）、糸巻（69）、斎串（67・68）、串状（66・70 ～ 74）、箸（75）、用途不明：板状（54・55・61 ～ 64・82 ～ 91）・鉾状（60）・棒状（76 ～ 81・92・95 ～ 97）の50点を掲載した。48は刳物椀の未成品で、付近で木器の生産が行われたことを示している。49の皿は口径に対して底径が広く、椀か皿を再加工した可能性があり、払田柵跡に類例がみられる。50の漆器椀は両面に黒漆、内面には朱漆が重ねられ、底部中央に「上」と朱書がなされている。52・53の板材は重なり合って出土しており、同様の目的をもった建築用材と考えられ、共に一辺にほぞ穴を有



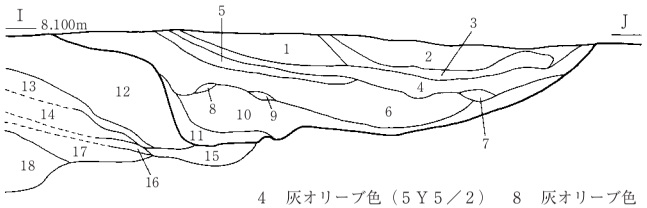
● は縄文土器



SL14

G－H

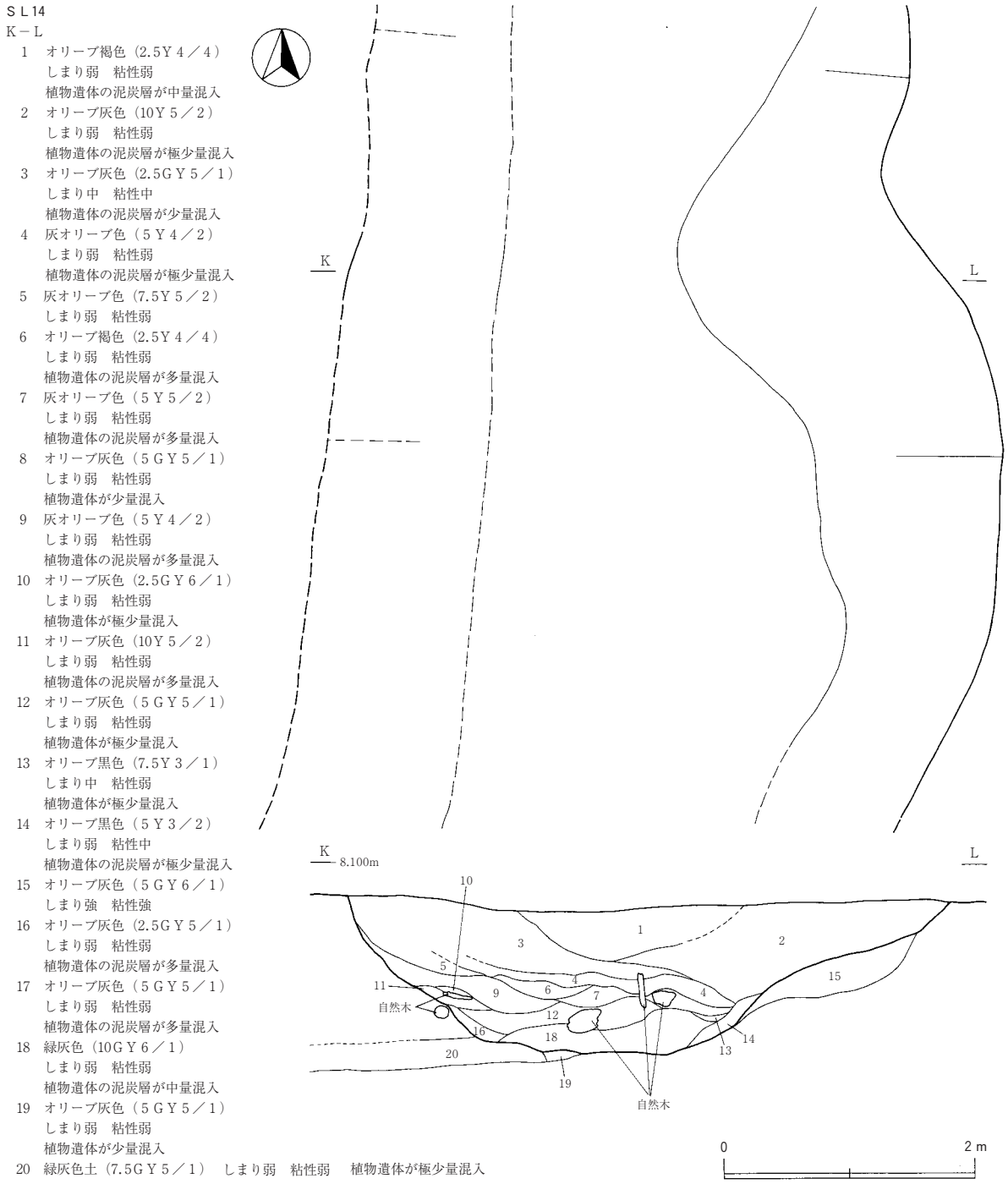
1　暗褐色（10YR３／３）
　しまり強　粘性強
　炭化物小粒が極少量混入
2　灰オリーブ色（５Y４／２）
　しまり弱　粘性弱
　植物遺体が少量混入
3　オリーブ灰色（10Y６／２）
　しまり弱　粘性弱
　植物遺体が少量混入
4　灰オリーブ色（５Y５／３）
　しまり弱　粘性弱
　植物遺体の泥炭層が極少量混入
5　灰オリーブ色（５Y４／２）
　しまり弱　粘性弱
　植物遺体の泥炭層が多量混入
6　灰オリーブ色（５Y４／２）
　しまり弱　粘性弱
　植物遺体が極少量混入
7　暗灰黄色（2.5Y４／２）
　しまり弱　粘性弱
　植物遺体が極少量混入
　木の腐食物が多量混入
8　灰オリーブ色（５Y５／２）
　しまり弱　粘性弱
　植物遺体の泥炭層が多量混入
9　灰オリーブ色（５Y６／２）
　しまり弱　粘性弱
　植物遺体が少量混入
10　灰オリーブ色（５Y５／２）
　しまり中　粘性弱
　植物遺体が極少量混入
11　灰オリーブ色（7.5Y５／２）
　しまり弱　粘性弱
　植物遺体が中量混入
12　にぶい黄色（2.5Y６／３）
　しまり中　粘性中
　炭化物小粒が極少量混入
13　灰オリーブ色（５Y５／２）
　しまり弱　粘性弱
　植物遺体が少量混入
14　灰オリーブ色土（５Y６／２）
　しまり中　粘性弱
　植物遺体の泥炭層が少量混入
15　明緑灰色（7.5GY７／１）地山層
　しまり強　粘性弱
16　灰オリーブ色（５Y５／２）
　しまり弱　粘性弱
　植物遺体の泥炭層多量混入



I－J

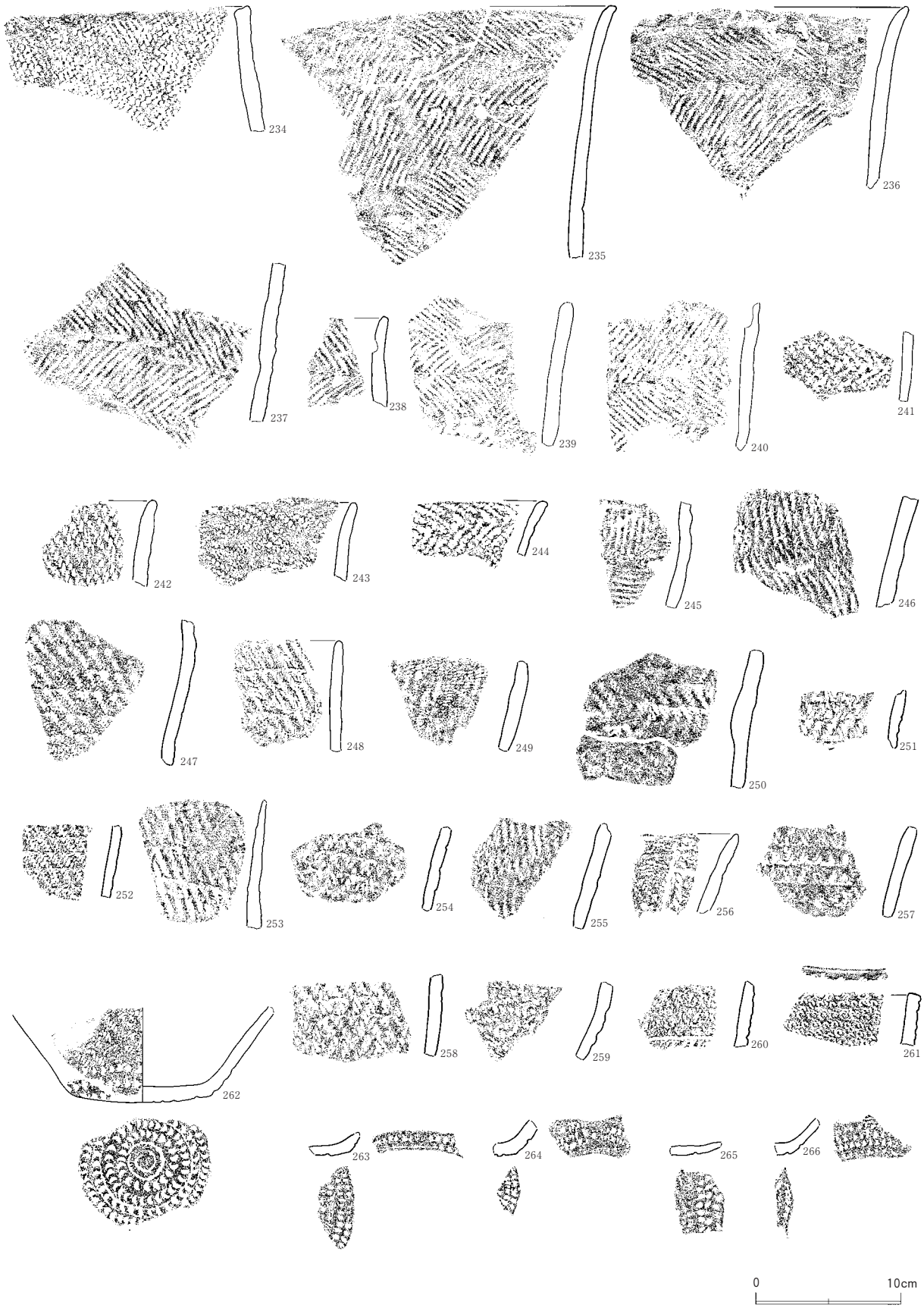
1　にぶい黄褐色（10YR４／３）
　しまり弱　粘性弱
　炭化物中粒が極少量混入
　にぶい黄褐色（2.5Y６／４）の流込層が数層
2　にぶい黄褐色（10YR４／３）
　しまり弱　粘性弱
　炭化物小粒が極少量混入
3　暗灰黄色（2.5Y４／２）
　しまり弱　粘性弱
　炭化物極小粒が極少量混入
4　灰オリーブ色（５Y５／２）
　しまり弱　粘性弱
　植物遺体が極少量混入
5　灰オリーブ色土（５Y５／３）
　しまり弱　粘性弱
　植物遺体の流込層
6　灰オリーブ色（５Y５／３）
　しまり弱　粘性弱
　植物遺体が極少量混入
7　暗灰黄色（2.5Y４／２）
　しまり弱　粘性弱
8　灰オリーブ色（５Y５／２）
　しまり弱　粘性弱
9　灰オリーブ色（５Y５／２）
　しまり弱　粘性弱
10　灰オリーブ色（7.5Y５／２）
　しまり弱　粘性弱
　植物遺体が極少量混入
11　暗オリーブ褐色（2.5Y３／３）
　しまり弱　粘性弱
　植物遺体が極少量混入
12　暗灰黄色（2.5Y４／２）
　しまり弱　粘性弱
13　オリーブ黒色（５Y３／２）
　しまり弱　粘性弱
14　灰オリーブ色（５Y５／２）
　しまり弱　粘性弱
15　灰オリーブ色（５Y４／２）
　しまり弱　粘性弱
　植物遺体（種実片）が極少量混入
16　灰オリーブ色（10Y５／２）
　しまり弱　粘性弱
17　オリーブ黒色（５Y３／２）
　しまり弱　粘性弱

第67図　ＳＬ06・14（４）



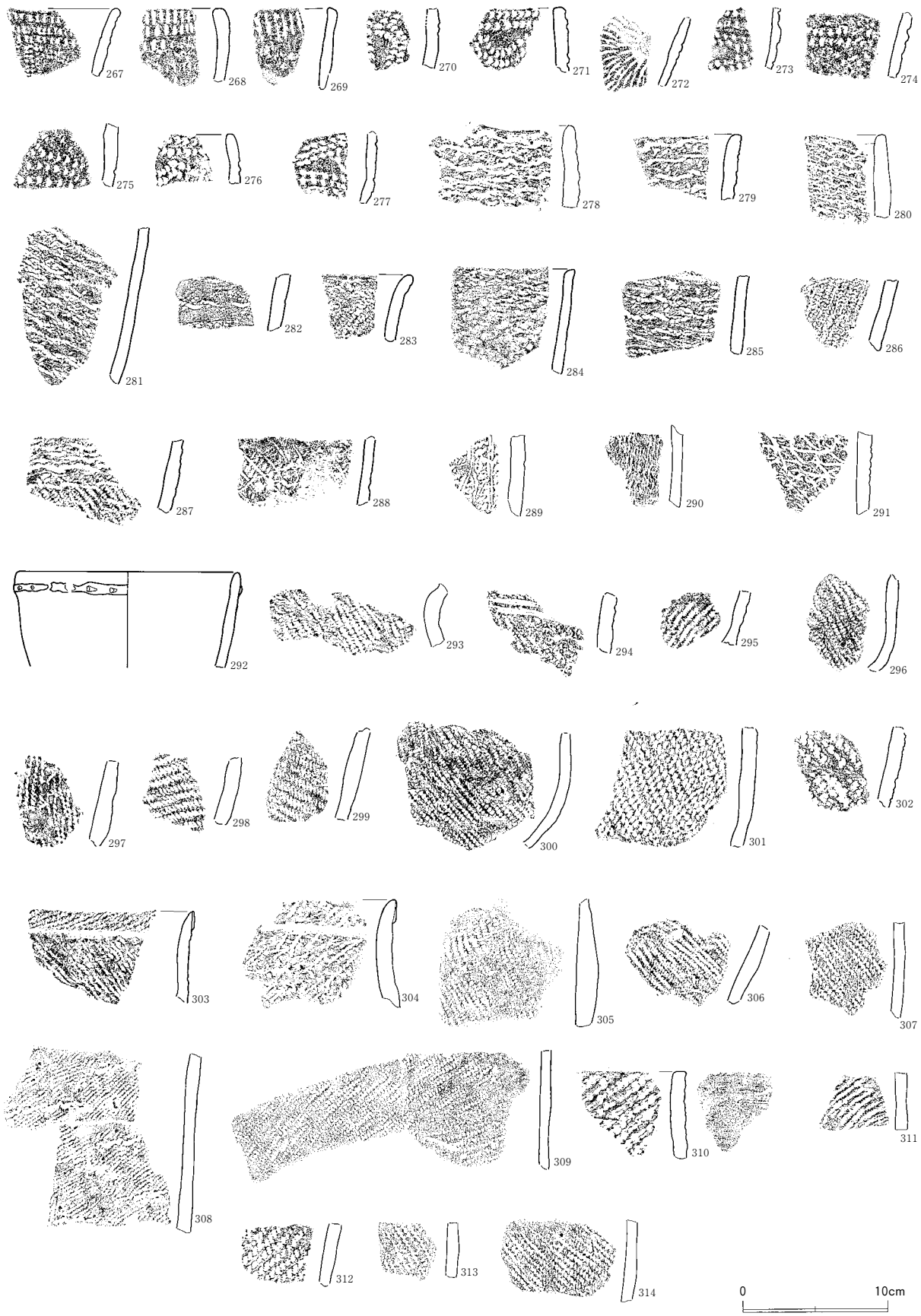
第68図　ＳＬ06・14（５）

する。54は一辺に５～10㎜の突起が切出され、下端は欠損しているが把手状に加工がされていたと考えられる。65・69は共に織具と考えられる。67・68は両端に加工を施した斎串で、66・70～74の串は上端の加工が簡易だが同様の性格を持つ可能性が考えられる。遺物の出土地点は、西側の川幅の広い箇所を中心に火山灰層の前後に出土が集中している。この河川跡の時期は、出土遺物や火山灰の堆積状況から10世紀であると考えられ、川底が浅いことや湾曲していることから、流れは緩やかであったと思われる。調査区の西側では、本荘市教育委員会によってＳＬ06の下流と考えられる河川跡が検出され、その中で流れを堰き止めたと考えられる杭列跡が検出されている。このことから、ＳＬ06の西側部分は堰き止められた水が溜り、ここに遺物の出土が集中していることから、洗い場や捨て場等として利用されたと推測される。



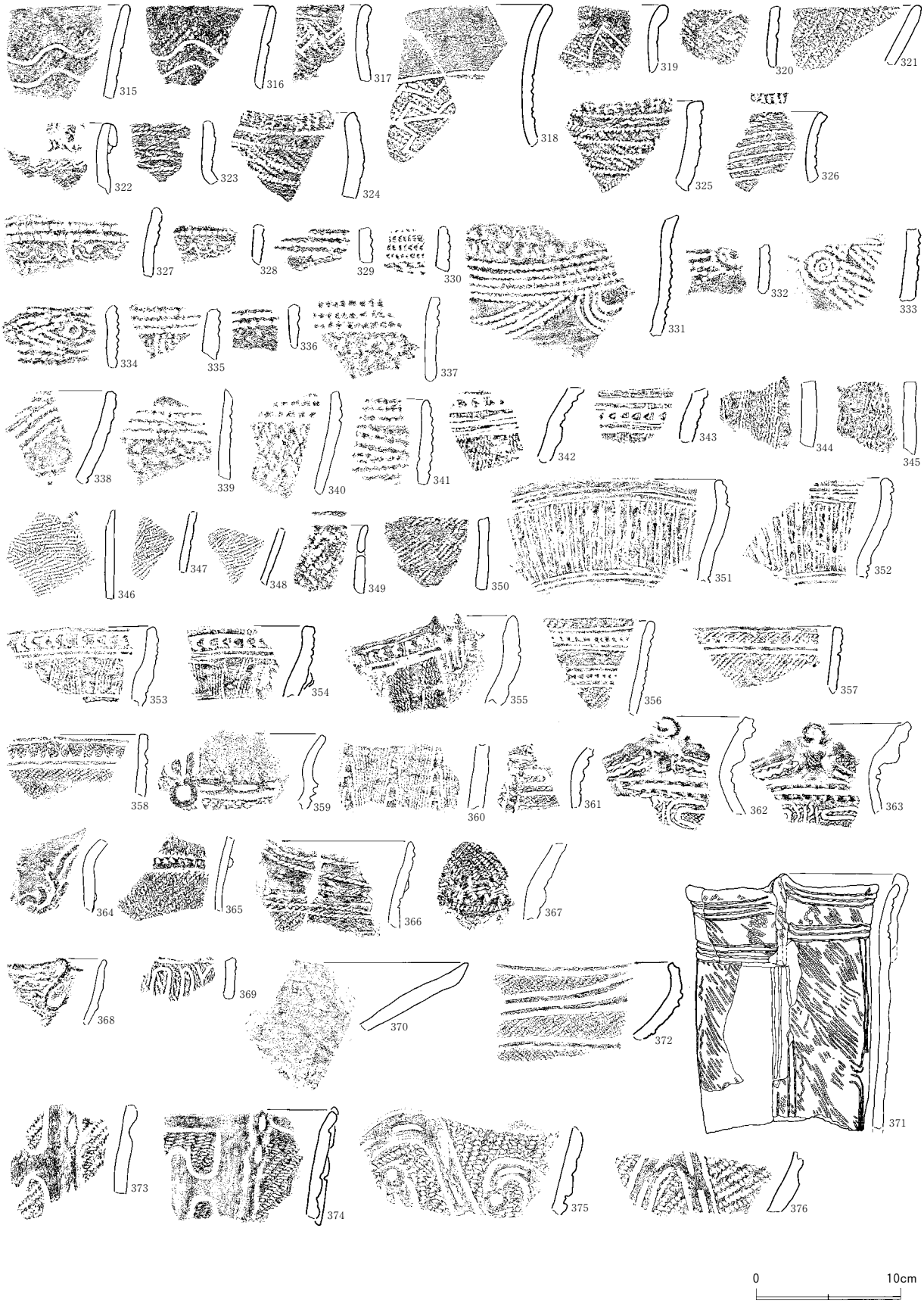
遺物No.	図版No.	出土遺構	層位	時期	器種	部位	器高	口径	底径	外底部	調整・施文	その他
262	9	SL	-	早末～前期	深鉢	体～底部	〔6.6〕	―	9.3	渦状刺突文・沈線	縄文・刺突文	

第69図　ＳＬ出土縄文土器（早期末～前期１）



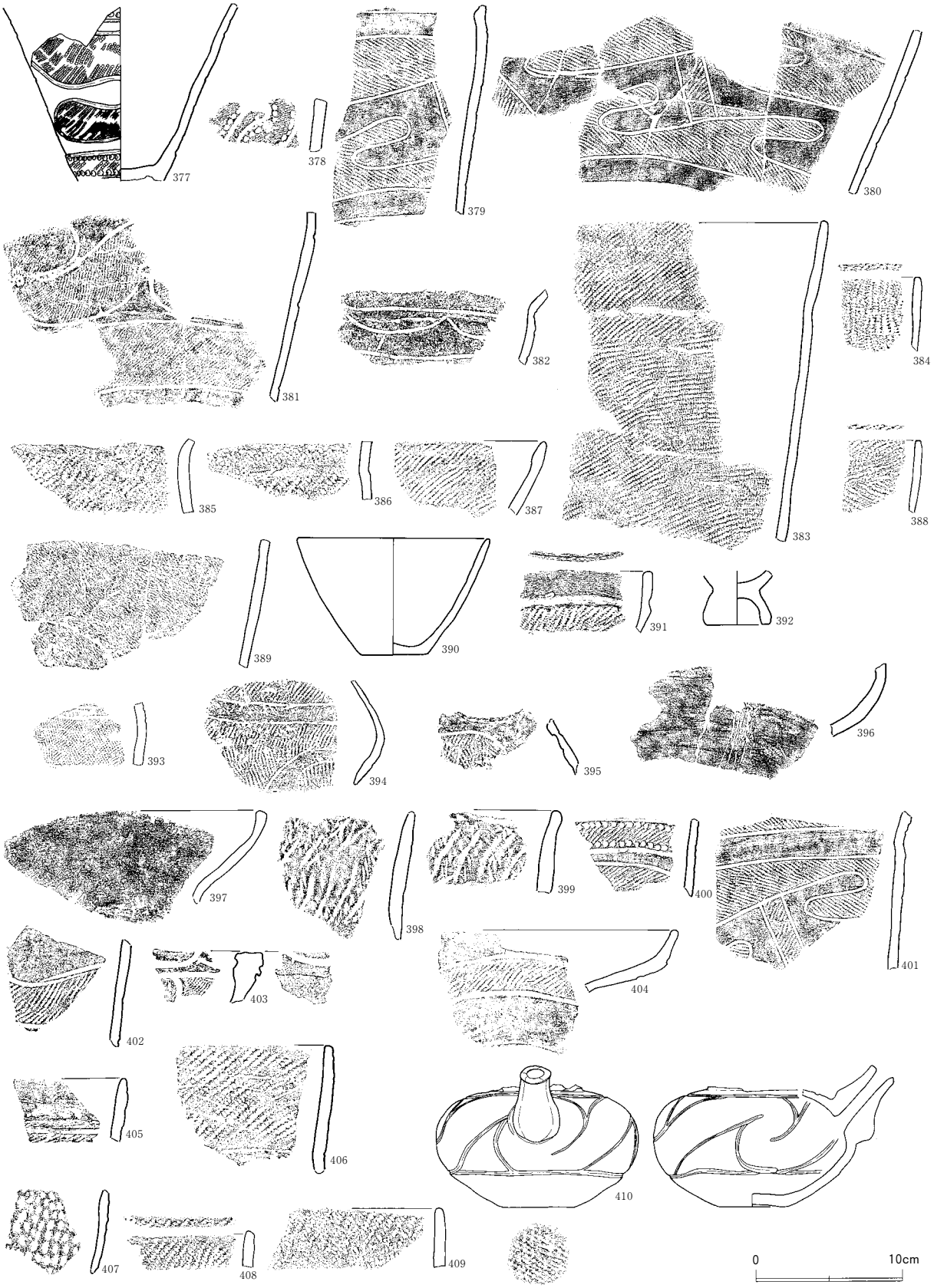
遺物No.	図版No.	出土遺構	層位	時期	器種	部位	器高	口径	底径	外底部	調整・施文	その他
292	9	SL	-	早末～前期	深鉢	口縁～体部	〔6.6〕	15.4	―	―	磨き・隆帯に刺突文	

第70図　ＳＬ出土縄文土器（早期末～前期２）



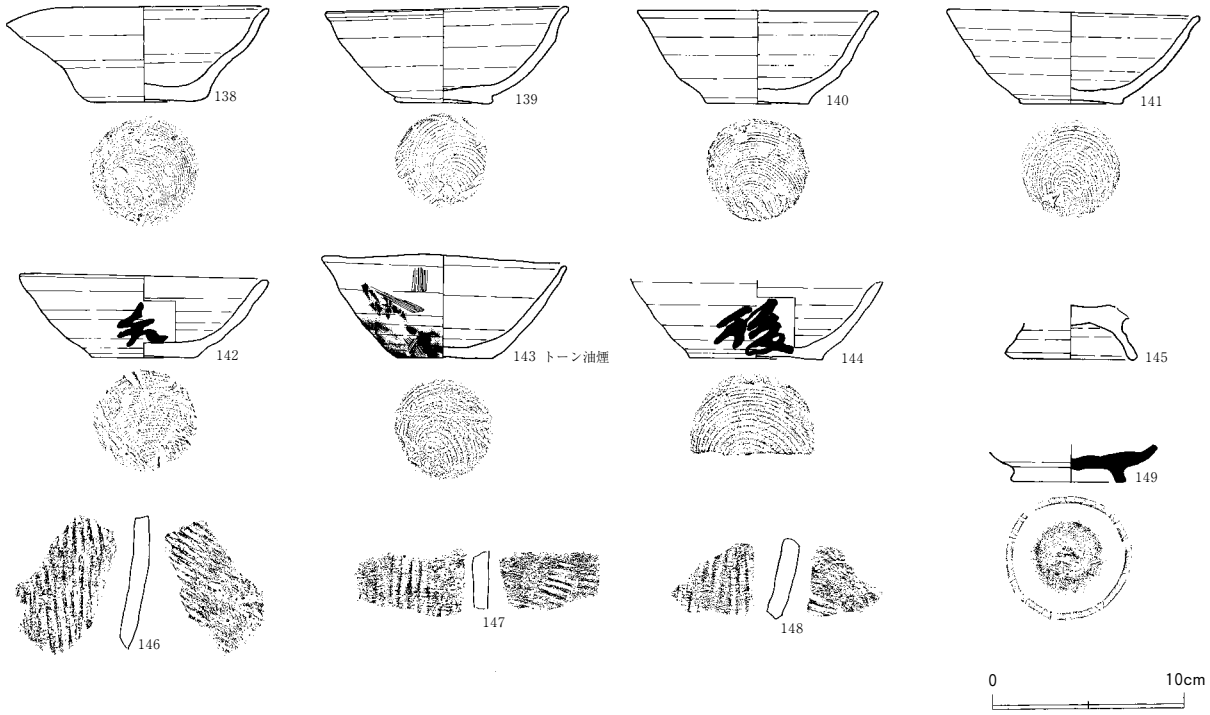
遺物No.	図版No.	出土遺構	層位	時期	器種	部位	器高	口径	底径	外底部	調整・施文	その他
371	9	SL	-	中期	深鉢	口縁～体部	〔 〕		—	—	縄文・隆帯・沈線	

第71図　ＳＬ出土縄文土器（前期～後期）

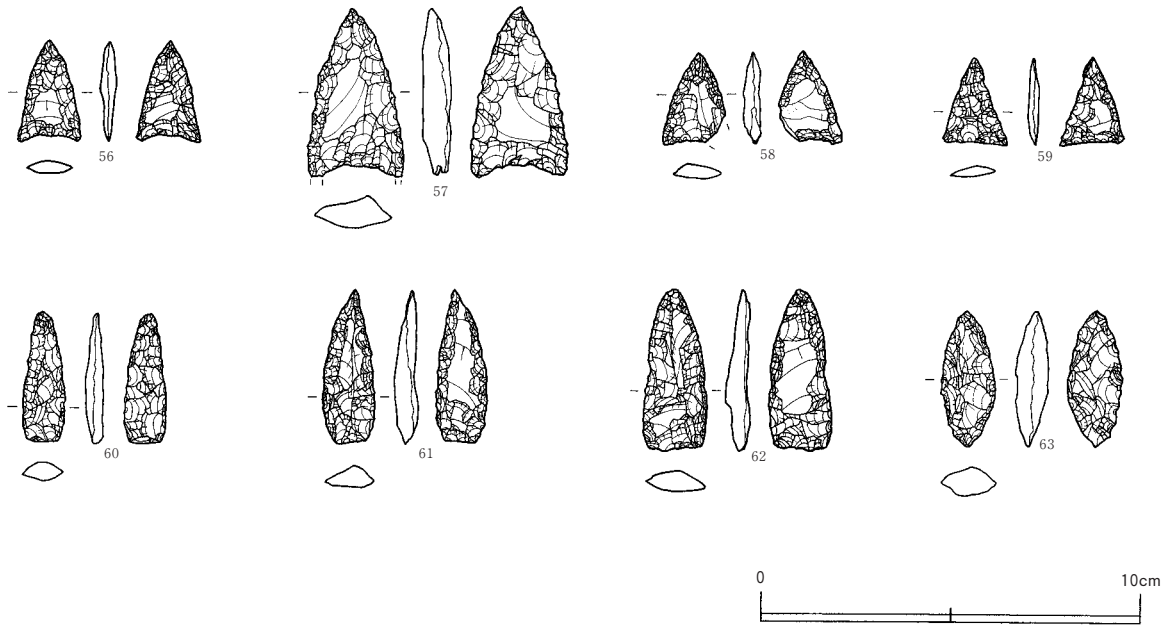


遺物No.	図版No.	出土遺構	層位	時期	器種	部位	器高	口径	底径	外底部	調整・施文	その他
377	9	SL	-	後期	深鉢	体部下半	〔11.9〕	—	—	—	縄文・沈線・刺突・磨き	
390	10	SL	-	後期	鉢	ほぼ完形	8.0	13.2	4.6	磨き	磨き	
392	10	SL	-	後期	台鉢？	底部（台）	〔3.7〕	—	4.4	上げ底	磨き	
410	5・10	SL14	-	後期	注口土器	ほぼ完形	9.7	—	4.6	簾状痕	磨き・沈線	

第72図　ＳＬ出土縄文土器（後期）・ＳＬ14出土縄文土器（前期・後期）

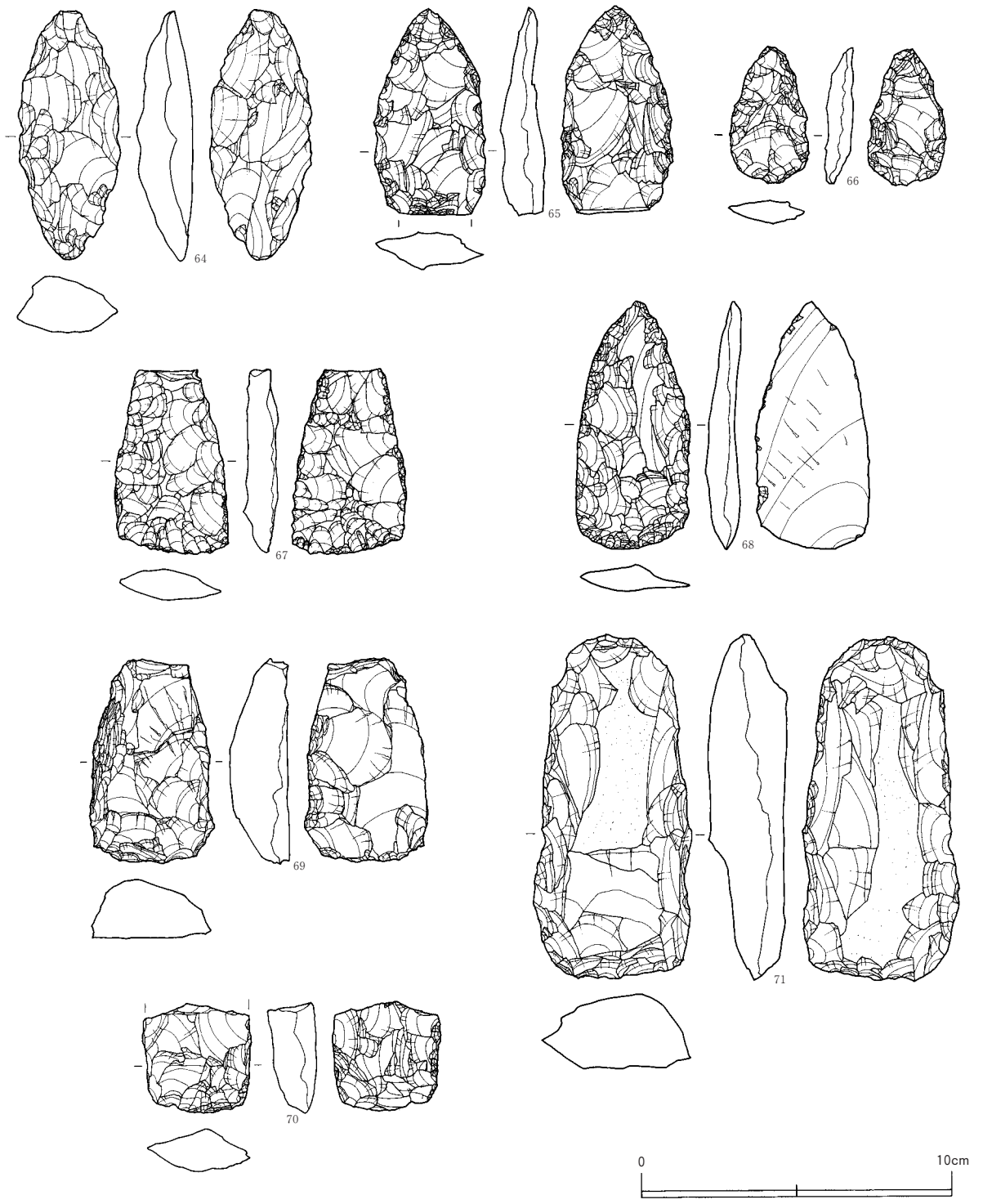


遺物No.	図版No.	出土位置	層位	種別	器種	部位	器高	口径	底径	底径指数	高径指数	外底部	調整・施文	その他
138	―	SL06	2	土師器	坏	口縁部～底部	5.0	13.7	6.5	47.4	36.5	回転糸	ロクロ（ヘラ）	
139	―	SL06	1	土師器	坏	口縁部～底部	5.1	12.7	5.2	40.9	40.2	回転糸	ロクロ（ヘラ）	調整緻密
140	―	SL06	2	土師器	坏	ほぼ完形	4.9	12.6	5.4	42.9	38.9	回転糸	ロクロ	やや歪み
141	12	SL06	―	土師器	坏	ほぼ完形	5.0	13.3	5.4	40.6	37.6	回転糸	ロクロ	胎土に砂礫含む
142	12	SL06	1	土師器	坏	完形	4.4	13.0	5.5	42.3	33.8	静止糸	ロクロ	胎土に砂礫含む、墨書土器
143	12	SL06	2	土師器	坏	ほぼ完形	5.4	12.8	5.1	39.8	42.2	回転糸	ロクロ（ヘラ）	調整緻密、外側に煤
144	12	SL06	2	土師器	坏	体部下半～底部	〔4.1〕	〔13.1〕	6.9	―	―	回転糸	ロクロ	調整緻密、墨書土器「後」
145	―	SL06	1	土師器	有台坏	台部	〔2.8〕	―	6.8	―	―	―	ロクロ	付高台
149	―	SL06	―	須恵器	有台坏	底部	〔1.95〕	―	5.9	―	―	高台	ロクロ	



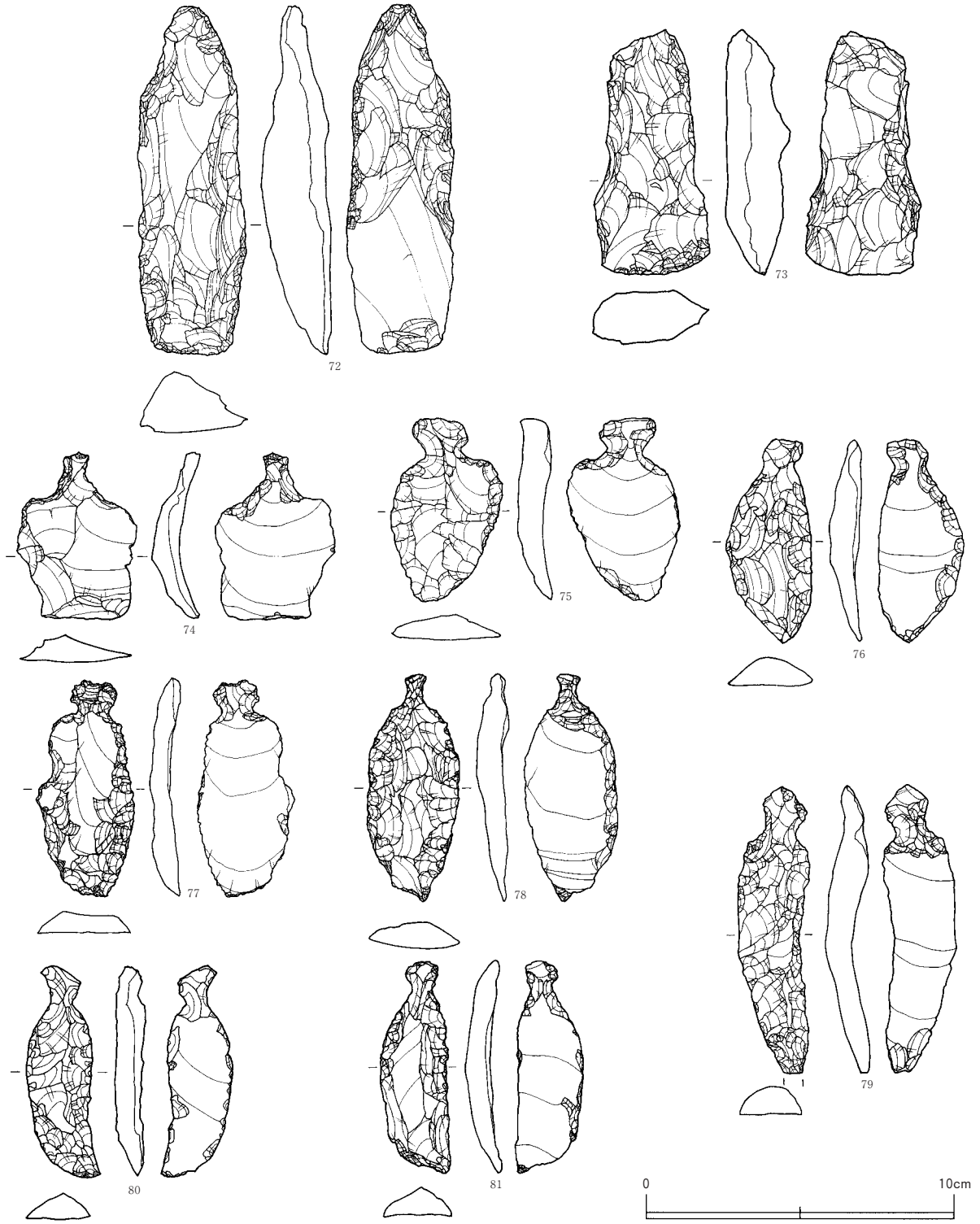
遺物No.	図版No.	出土遺構	層位	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石質	その他
56	13	ＳＬ	―	石鏃	2.6	1.7	0.4	1.1	珪質頁岩	
57	13	ＳＬ	―	石鏃	4.4	2.5	0.8	7.3	珪質頁岩	
58	13	ＳＬ	―	石鏃	2.4	1.6	0.5	1.4	珪質頁岩	
59	13	ＳＬ	―	石鏃	2.3	1.7	0.4	0.9	珪質頁岩	
60	13	ＳＬ	―	石鏃	3.4	1.1	0.5	1.9	珪質頁岩	
61	13	ＳＬ	―	石鏃	4.0	1.4	0.6	2.7	珪質頁岩	
62	13	ＳＬ	―	石鏃	4.2	1.7	0.6	3.6	珪質頁岩	
63	13	ＳＬ	―	石鏃	3.5	1.45	0.8	3.7	珪質頁岩	

第73図　ＳＬ06出土土師器・須恵器、ＳＬ出土石器（１）



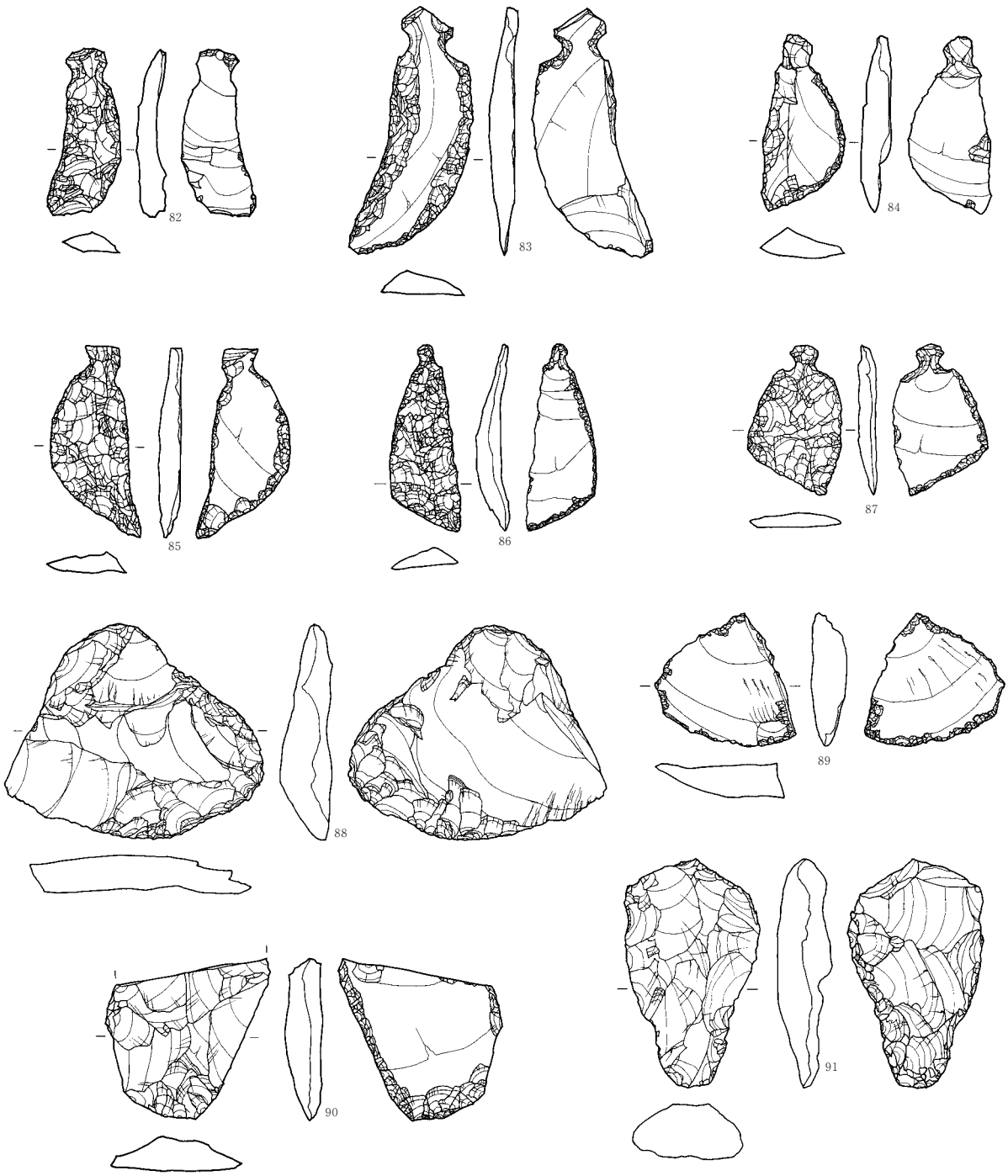
遺物No.	図版No.	出土遺構	層位	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石質	その他
64	13	ＳＬ	―	石槍	8.0	3.3	1.8	41.8	珪質頁岩	
65	13	ＳＬ	―	石槍	6.7	3.6	1.4	28.1	珪質頁岩	
66	13	ＳＬ	―	石槍	4.4	2.5	0.9	9.4	珪質頁岩	
67	―	ＳＬ	―	石篦	5.9	3.7	1.0	22.5	珪質頁岩	
68	13	ＳＬ	―	石篦	8.0	3.7	1.1	27.7	珪質頁岩	
69	―	ＳＬ	―	石篦	6.6	4.0	1.9	56.6	珪質頁岩	
70	―	ＳＬ	―	石篦	〔3.5〕	3.5	1.6	20.7	珪質頁岩	付け根欠損
71	13	ＳＬ	―	石篦	11.0	5.1	2.6	148.2	デイサイト	両面に自然面

第74図　ＳＬ出土石器（２）



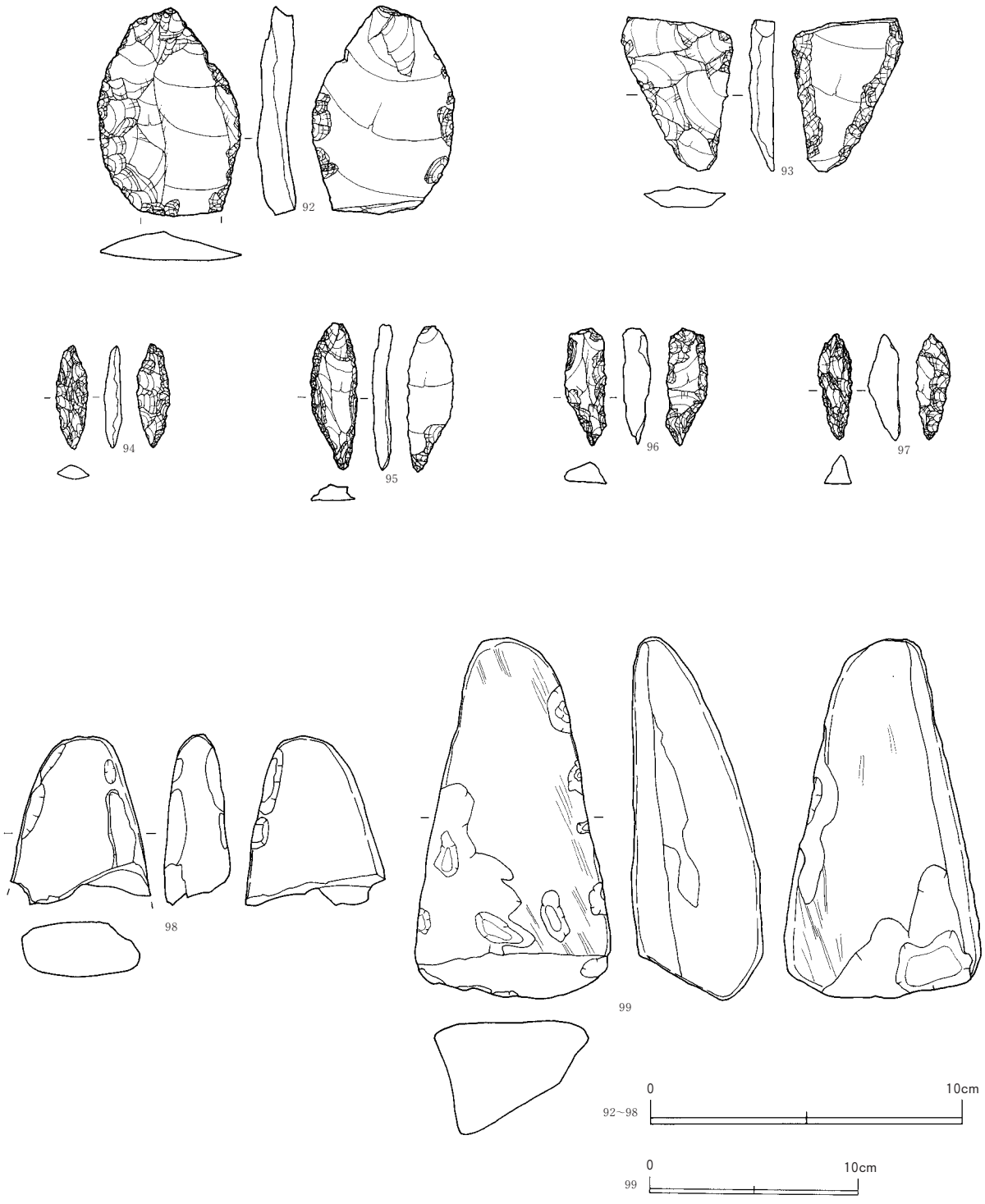
遺物No.	図版No.	出土遺構	層位	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石質	その他
72	—	ＳＬ	—	石篦	11.2	3.5	2.3	79.1	珪質頁岩	
73	—	ＳＬ	—	石篦	7.8	3.8	2.1	57.8	珪質頁岩	
74	13	ＳＬ	—	石匙	5.4	3.9	1.6	14.6	珪質頁岩	未成品
75	—	ＳＬ	—	石匙	5.9	3.5	0.95	16.8	珪質頁岩	
76	—	ＳＬ	—	石匙	6.5	2.8	1.0	13.4	珪質頁岩	
77	—	ＳＬ	—	石匙	6.95	3.15	0.8	18.5	珪質頁岩	
78	13	ＳＬ	—	石匙	7.35	3.0	0.95	17.3	珪質頁岩	
79	13	ＳＬ	—	石匙	9.3	2.3	1.1	19.3	珪質頁岩	
80	—	ＳＬ	—	石匙	6.85	2.1	0.9	12.8	珪質頁岩	表面摩滅
81	—	ＳＬ	—	石匙	6.9	2.1	0.8	11.6	珪質頁岩	

第75図　ＳＬ出土石器（３）



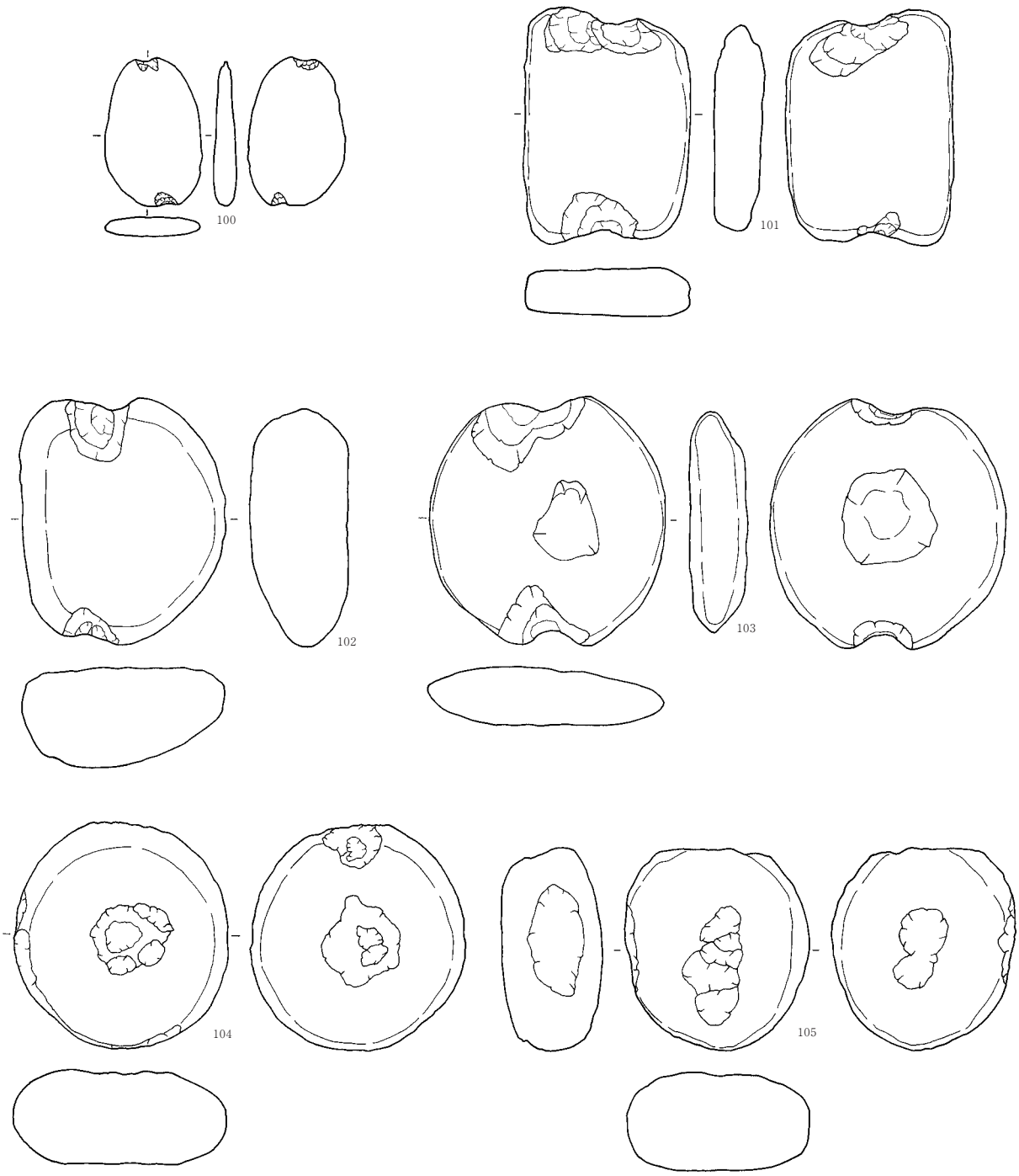
遺物No.	図版No.	出土遺構	層位	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石質	その他
82	—	ＳＬ	—	石匙	5.2	2.3	0.9	6.2	珪質頁岩	
83	—	ＳＬ	—	石匙	7.8	3.8	0.8	16.7	珪質頁岩	
84	—	ＳＬ	—	石匙	5.5	2.6	0.9	9.3	珪質頁岩	
85	—	ＳＬ	—	石匙	6.0	2.9	0.7	10.0	珪質頁岩	
86	13	ＳＬ	—	石匙	5.8	2.2	1.0	6.6	珪質頁岩	
87	13	ＳＬ	—	石匙	4.7	2.9	0.6	7.0	珪質頁岩	
88	13	ＳＬ	—	掻器	6.8	8.1	1.6	66.8	珪質頁岩	
89	—	ＳＬ	—	掻器	4.1	4.4	1.1	15.2	珪質頁岩	
90	—	ＳＬ	—	掻器	5.1	5.1	1.1	29.5	珪質頁岩	付け根欠損
91	13	ＳＬ	—	掻器	7.2	4.3	1.8	35.9	珪質頁岩	

第76図　ＳＬ出土石器（４）



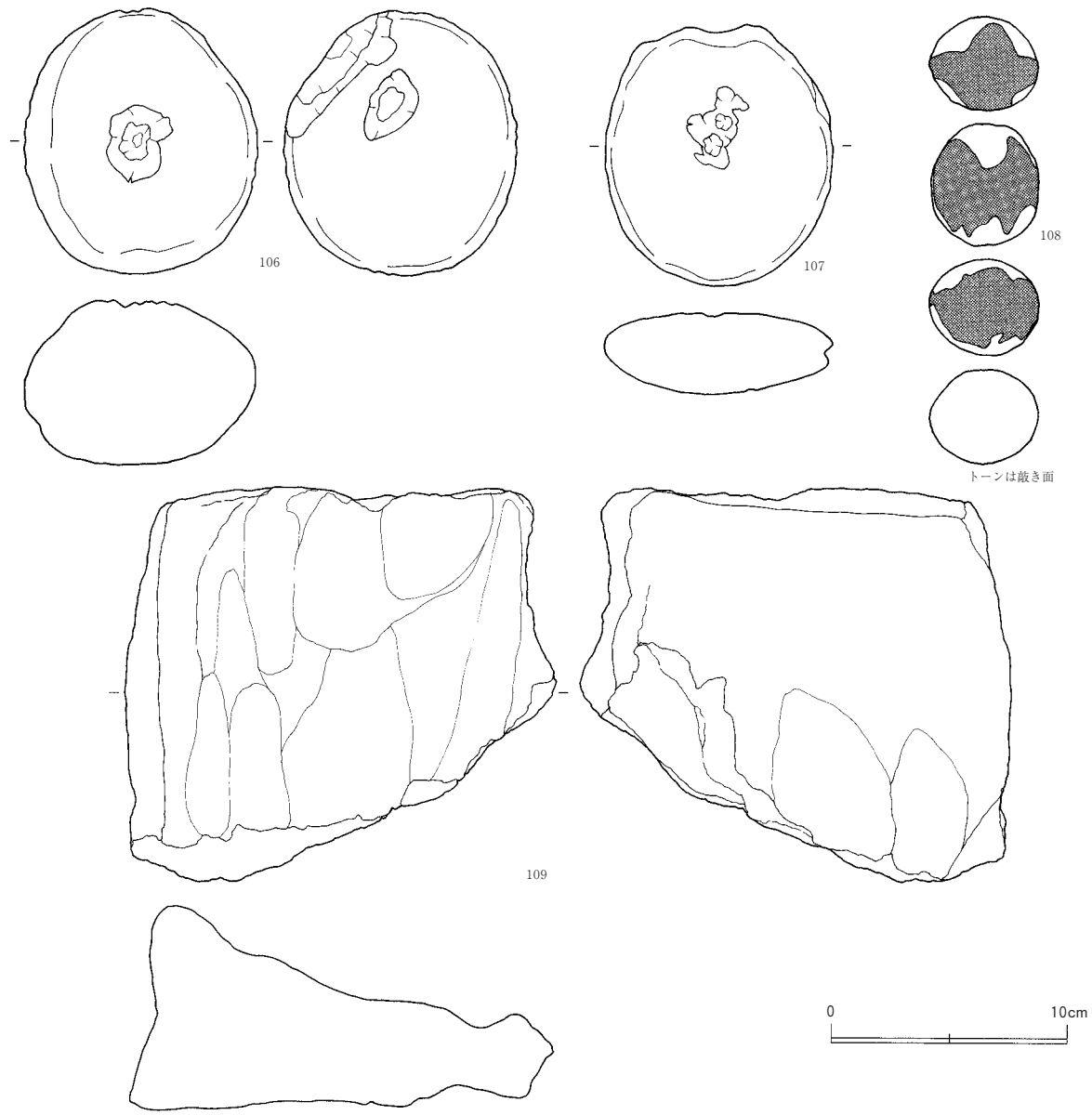
遺物No.	図版No.	出土遺構	層位	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石質	その他
92	—	ＳＬ	—	掻器	6.7	4.6	1.3	30.2	珪質頁岩	
93	—	ＳＬ	—	掻器	4.9	3.6	0.8	14.6	珪質頁岩	付け根欠損
94	13	ＳＬ	—	石錐	3.3	1.0	0.6	1.8	珪質頁岩	
95	13	ＳＬ	—	石錐	4.7	1.5	0.6	3.8	珪質頁岩	
96	13	ＳＬ	—	石錐	3.7	1.3	0.9	4.2	珪質頁岩	
97	13	ＳＬ	—	石錐	3.4	1.1	1.0	3.2	珪質頁岩	
98	—	ＳＬ	—	磨製石斧	〔5.5〕	4.5	1.8	57.6	安山岩	刃部欠損
99	14	ＳＬ	—	磨製石斧	17.3	9.5	6.3	1045.0	変質安山岩	

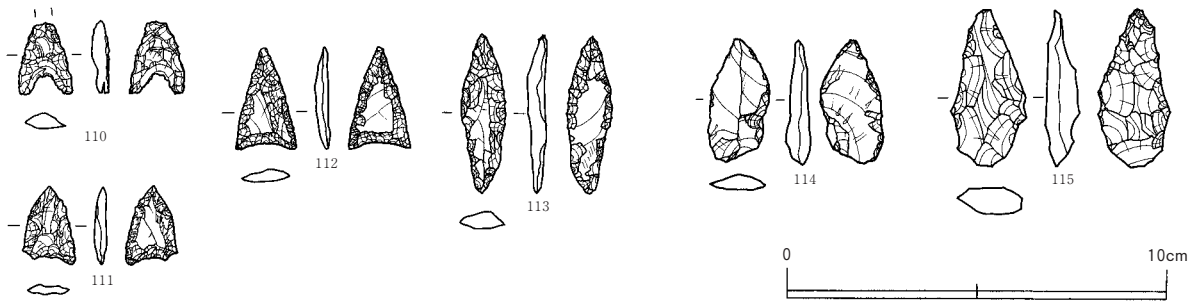
第77図　ＳＬ出土石器（５）



遺物No.	図版No.	出土遺構	層位	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石質	その他
100	14	ＳＬ	―	石錘	7.0	4.6	1.1	47.6	変質安山岩	
101	14	ＳＬ	―	石錘	11.2	7.9	2.3	300.0	輝石安山岩	被熱
102	―	ＳＬ	―	石錘	11.7	9.8	4.7	660.0	安山岩	
103	14	ＳＬ	―	石錘	11.7	11.3	2.9	440.0	安山岩	凹石にも転用
104	14	ＳＬ	―	凹石	10.6	10.1	4.3	690.0	安山岩	敲石にも転用
105	―	ＳＬ	―	凹石	9.5	8.7	4.7	540.0	安山岩	敲石にも転用

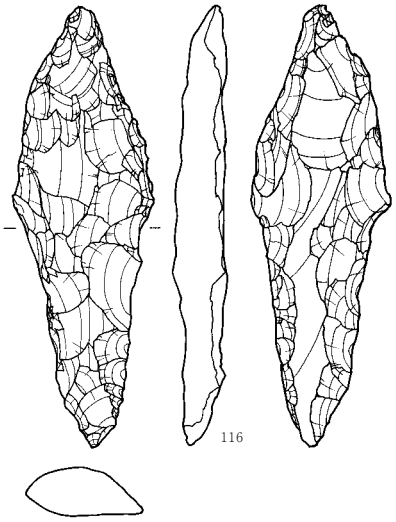
第78図　ＳＬ出土石器（６）

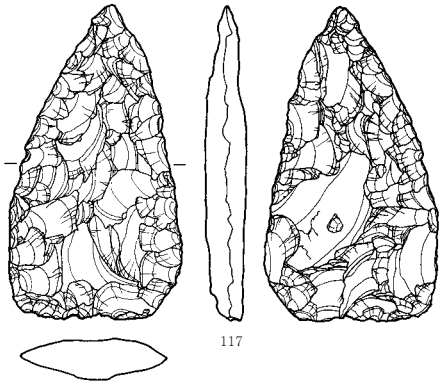


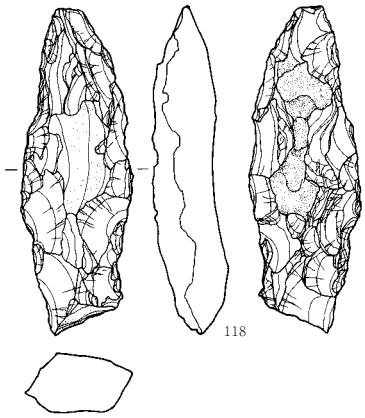


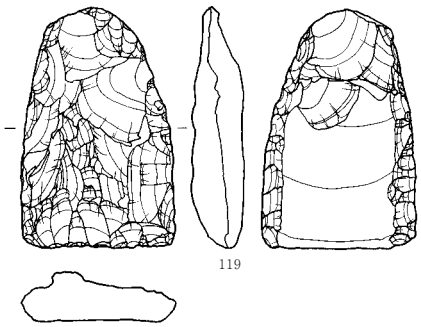
遺物No.	図版No.	出土遺構	層位	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石質	その他
106	—	ＳＬ	—	凹石	11.3	10.0	7.0	900.0	安山岩	
107	—	ＳＬ	—	凹石	11.1	9.8	3.7	450.0	安山岩	
108	14	ＳＬ	—	敲石	5.2	4.7	4.1	131.4	—	付着物
109	—	ＳＬ	—	石皿	〔17.5〕	〔18.7〕	8.6	2100.0	デイサイト	
110	14	ＳＬ14	—	石鏃	〔1.9〕	1.4	0.4	0.6	珪質頁岩	先端欠損
111	14	ＳＬ14	—	石鏃	2.1	1.4	0.3	0.7	珪質頁岩	
112	14	ＳＬ14	—	石鏃	2.7	1.6	0.4	1.0	珪質頁岩	
113	14	ＳＬ14	—	石鏃	4.1	1.2	0.5	1.8	珪質頁岩	
114	—	ＳＬ14	—	石鏃	3.2	1.6	0.7	2.4	珪質頁岩	未成品、石錐に転用？
115	—	ＳＬ14	—	石鏃	4.3	1.9	0.9	4.8	珪質頁岩	未成品

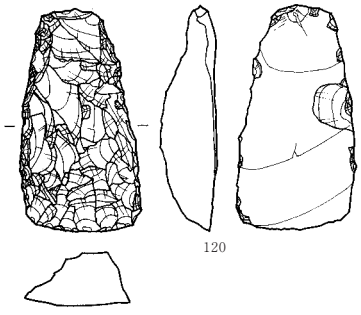
第79図　ＳＬ出土石器（７）・ＳＬ14出土石器（１）

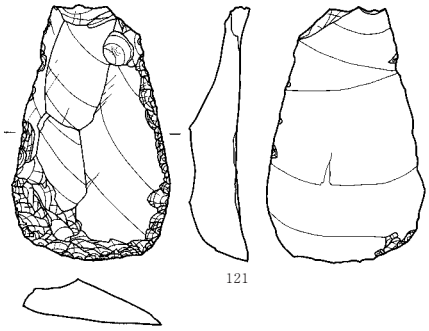


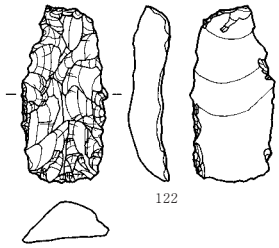


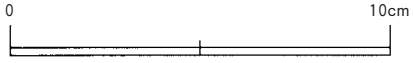






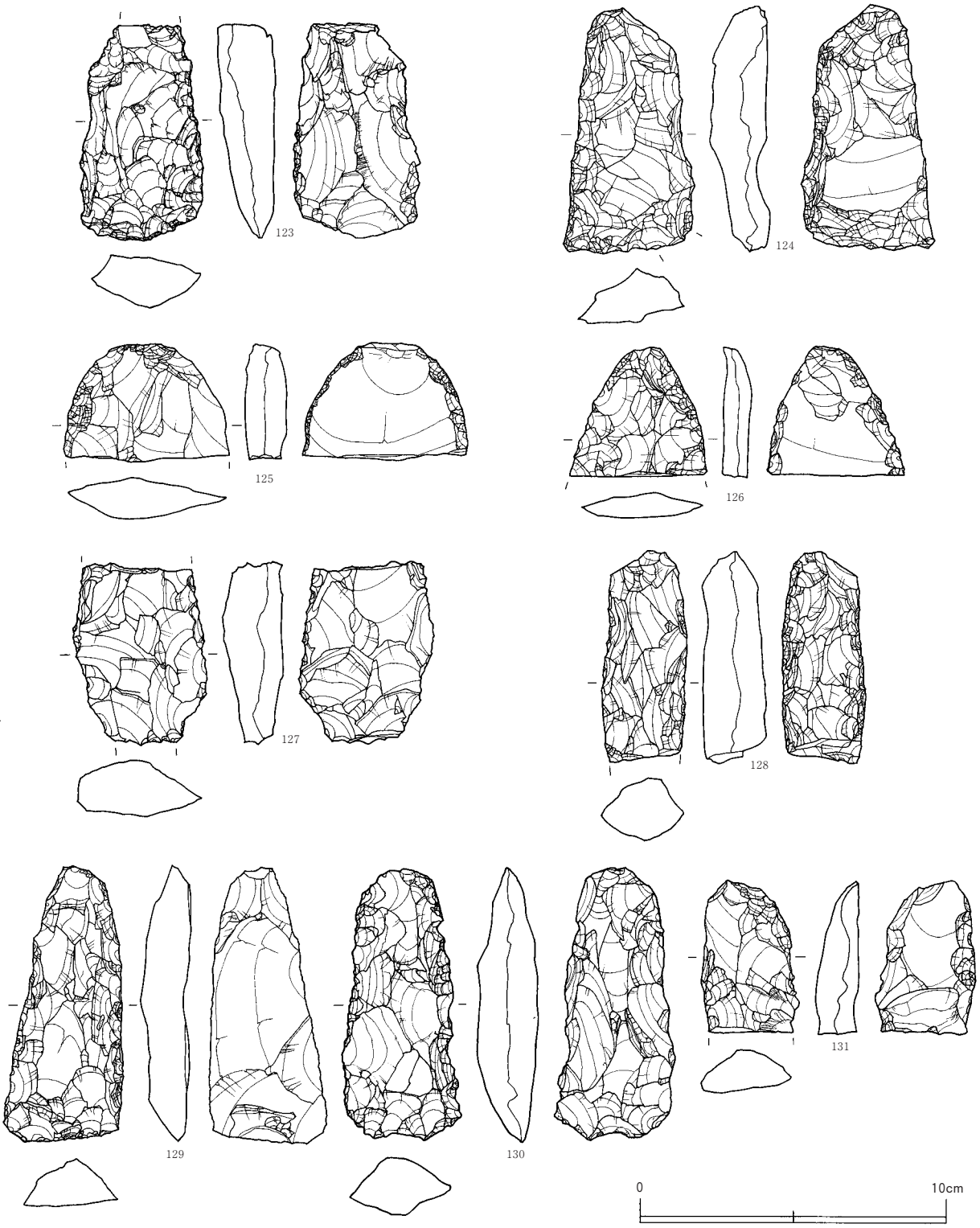






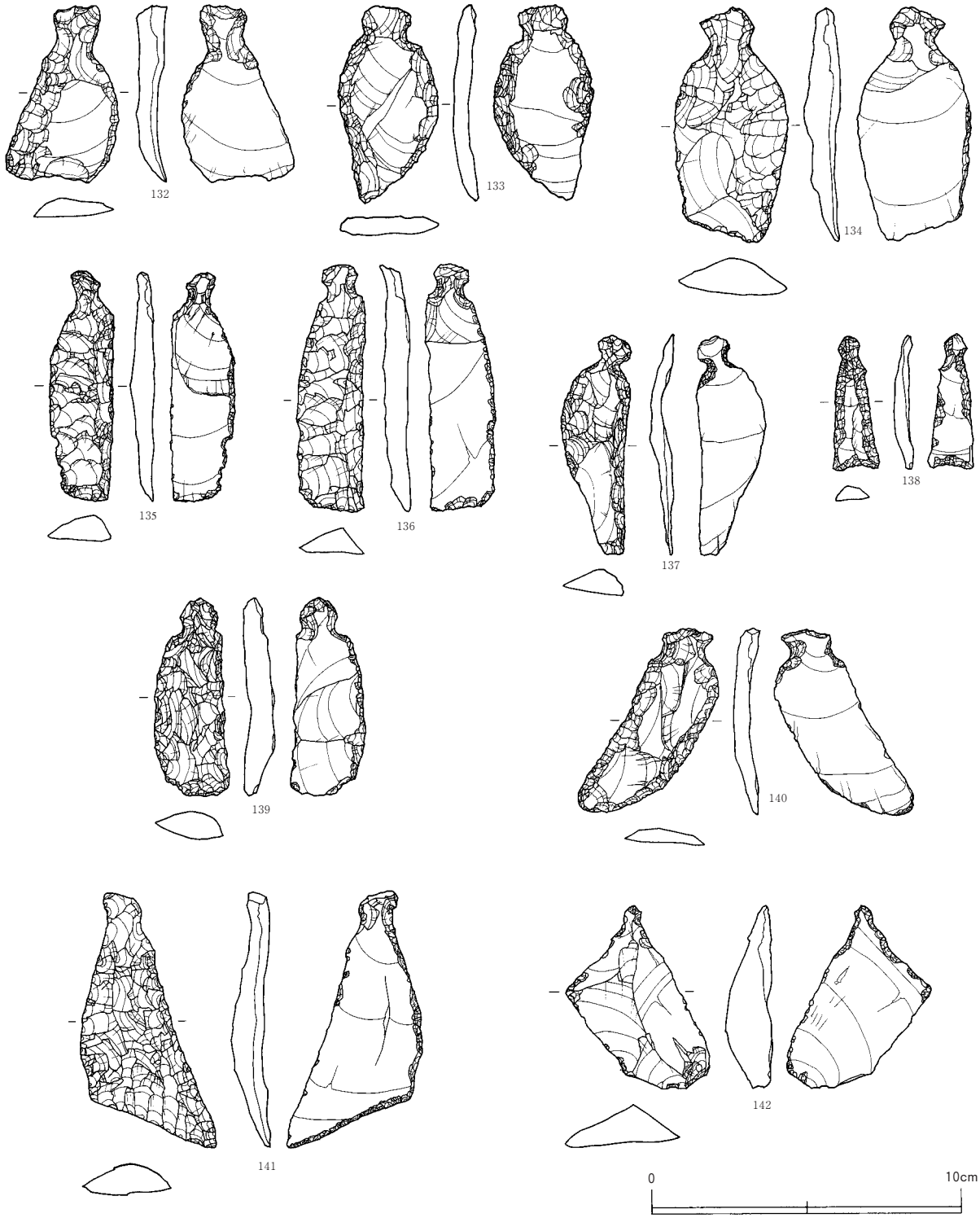
遺物No.	図版No.	出土遺構	層位	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石質	その他
116	14	ＳＬ14	―	石槍	11.6	3.8	1.5	47.9	珪質頁岩	有肩
117	14	ＳＬ14	―	石槍	8.3	4.5	1.1	39.4	珪質頁岩	木葉型
118	14	ＳＬ14	―	石槍	8.5	3.0	2.0	42.1	珪質頁岩	木葉型
119	14	ＳＬ14	―	石篦	6.3	4.1	1.4	39.0	珪質頁岩	
120	14	ＳＬ14	―	石篦	5.9	3.2	1.5	28.9	珪質頁岩	
121	―	ＳＬ14	―	石篦	6.7	4.2	1.6	28.3	珪質頁岩	
122	―	ＳＬ14	―	石篦	4.6	2.3	0.9	11.6	珪質頁岩	

第80図　ＳＬ14出土石器（２）



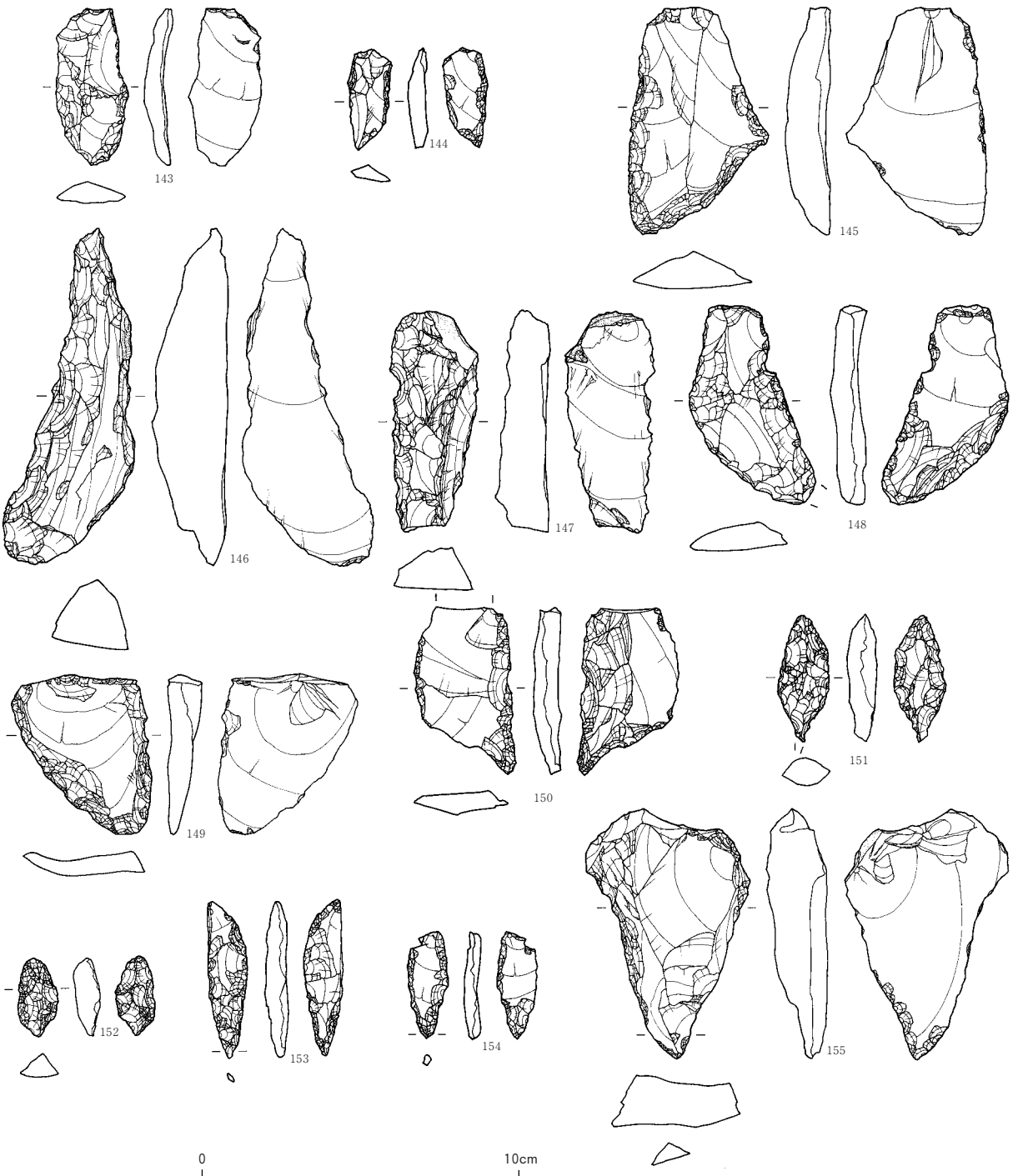
遺物No.	図版No.	出土遺構	層位	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石質	その他
123	—	ＳＬ14	—	石篦	7.0	4.1	1.9	51.2	珪質頁岩	
124	—	ＳＬ14	—	石篦	8.0	4.35	1.75	59.5	珪質頁岩	
125	—	ＳＬ14	—	石篦	〔3.8〕	5.4	1.4	29.8	珪質頁岩	先端欠損
126	—	ＳＬ14	—	石篦	〔4.2〕	4.5	1.0	17.1	珪質頁岩	先端欠損
127	—	ＳＬ14	—	石篦	〔5.8〕	4.3	1.9	52.3	珪質頁岩	付け根欠損
128	—	ＳＬ14	—	石篦	〔6.9〕	2.8	2.1	46.4	珪質頁岩	先端欠損
129	14	ＳＬ14	—	石篦	9.1	4.0	1.7	51.6	珪質頁岩	
130	—	ＳＬ14	—	石篦	8.9	3.7	1.9	56.8	珪質頁岩	
131	—	ＳＬ14	—	石篦	〔5.0〕	1.4	1.4	21.6	珪質頁岩	先端欠損

第81図　ＳＬ14出土石器（３）



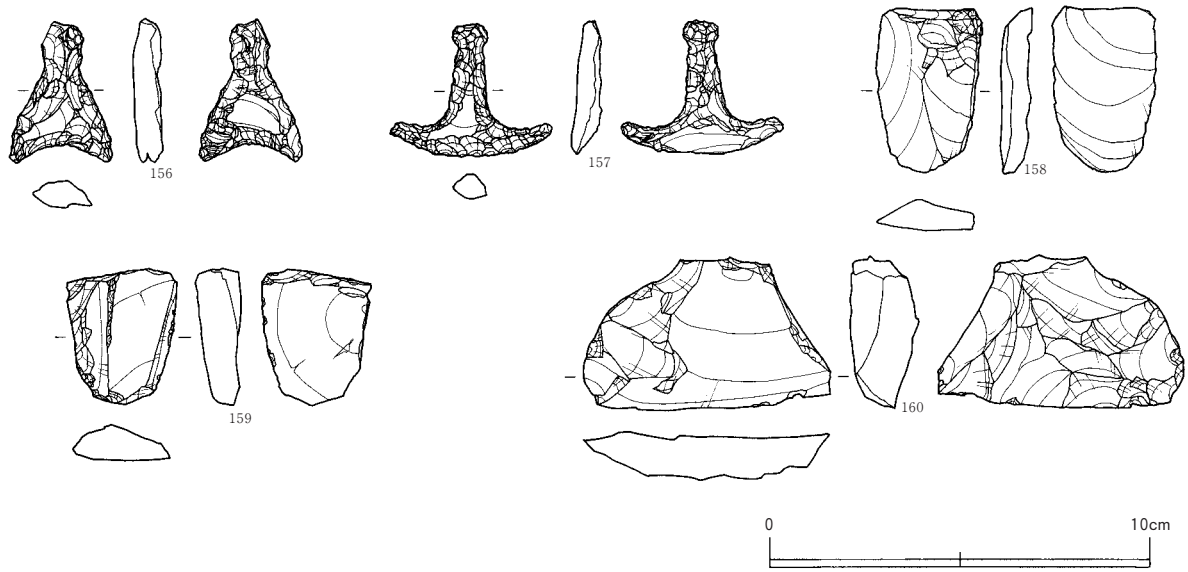
遺物No.	図版No.	出土遺構	層位	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石質	その他
132	14	ＳＬ14	―	石匙	5.7	3.6	1.0	12.1	珪質頁岩	
133	―	ＳＬ14	―	石匙	6.3	3.3	0.6	11.5	珪質頁岩	
134	―	ＳＬ14	―	石匙	7.6	3.6	1.2	25.0	珪質頁岩	
135	14	ＳＬ14	―	石匙	7.4	2.1	0.8	10.0	珪質頁岩	
136	―	ＳＬ14	―	石匙	8.0	2.2	0.9	14.1	珪質頁岩	
137	14	ＳＬ14	―	石匙	7.3	2.3	0.8	6.3	珪質頁岩	
138	14	ＳＬ14	―	石匙	4.4	1.5	0.6	2.6	珪質頁岩	
139	―	ＳＬ14	Ⅰ	石匙	6.9	2.4	1.0	14.0	珪質頁岩	
140	14	ＳＬ14	―	石匙	6.0	4.5	0.8	10.2	珪質頁岩	
141	14	ＳＬ14	―	石匙	8.3	4.4	1.3	19.9	珪質頁岩	
142	14	ＳＬ14	―	石匙	5.9	4.7	1.5	20.4	珪質頁岩	未成品

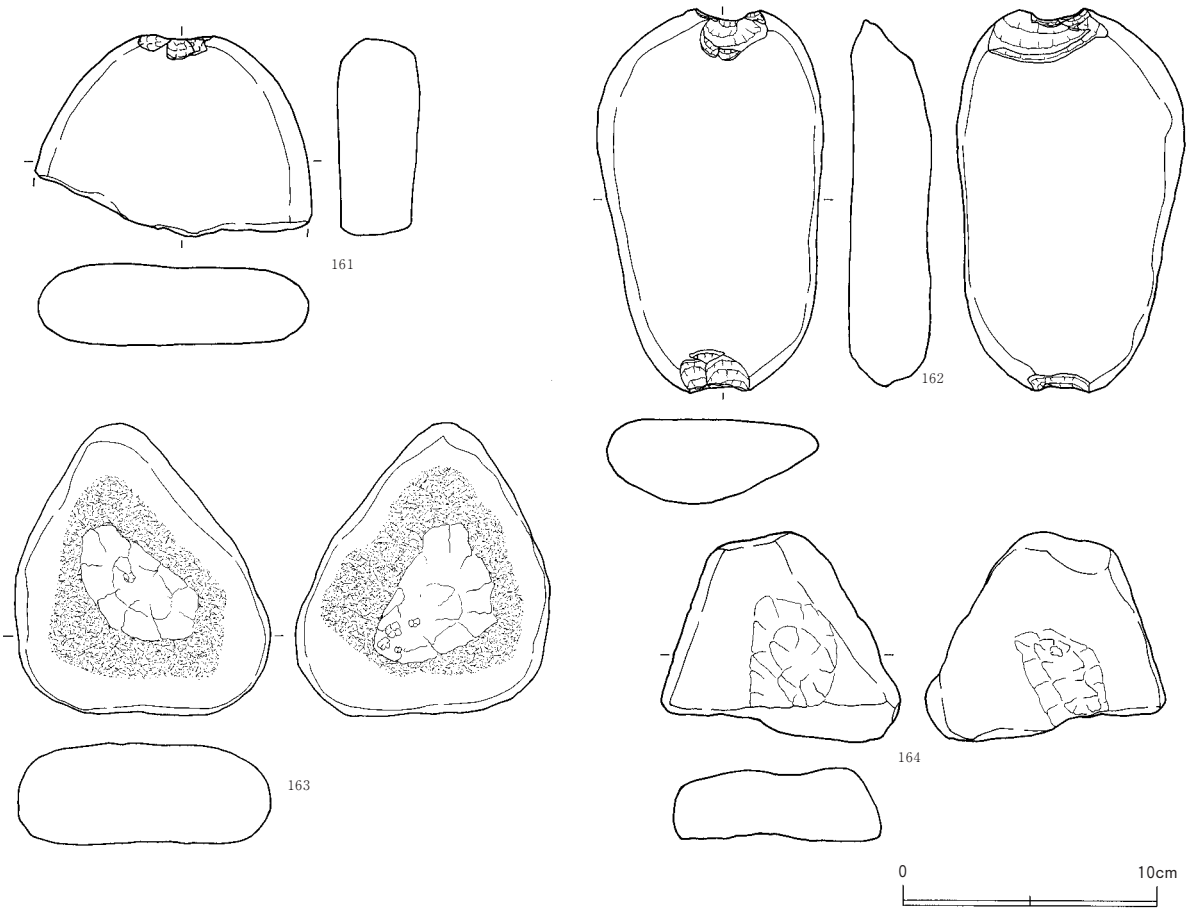
第82図　ＳＬ14出土石器（４）



遺物No.	図版No.	出土遺構	層位	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石質	その他
143	14	ＳＬ14	—	掻器	4.95	2.3	0.7	7.4	玉髄	
144	—	ＳＬ14	—	掻器	3.2	1.4	0.6	2.2	珪質頁岩	
145	—	ＳＬ14	—	掻器	7.1	4.5	1.5	36.7	珪質頁岩	
146	—	ＳＬ14	—	掻器	10.6	4.1	2.4	63.9	珪質頁岩	
147	—	ＳＬ14	—	掻器	7.0	2.8	1.7	31.2	珪質頁岩	
148	—	ＳＬ14	—	掻器	6.3	4.0	1.1	19.5	珪質頁岩	
149	—	ＳＬ14	—	掻器	5.1	4.4	1.1	17.3	珪質頁岩	
150	14	ＳＬ14	—	石錐	5.3	3.2	0.9	12.9	珪質頁岩	
151	14	ＳＬ14	—	石錐	〔4.0〕	1.7	1.0	5.4	珪質頁岩	
152	—	ＳＬ14	—	石錐	2.5	1.3	0.8	2.5	珪質頁岩	
153	14	ＳＬ14	—	石錐	5.0	1.3	0.7	4.2	珪質頁岩	
154	—	ＳＬ14	—	石錐	3.4	1.3	0.5	1.8	珪質頁岩	
155	14	ＳＬ14	II	石錐	7.8	5.2	1.9	61.8	珪質頁岩	

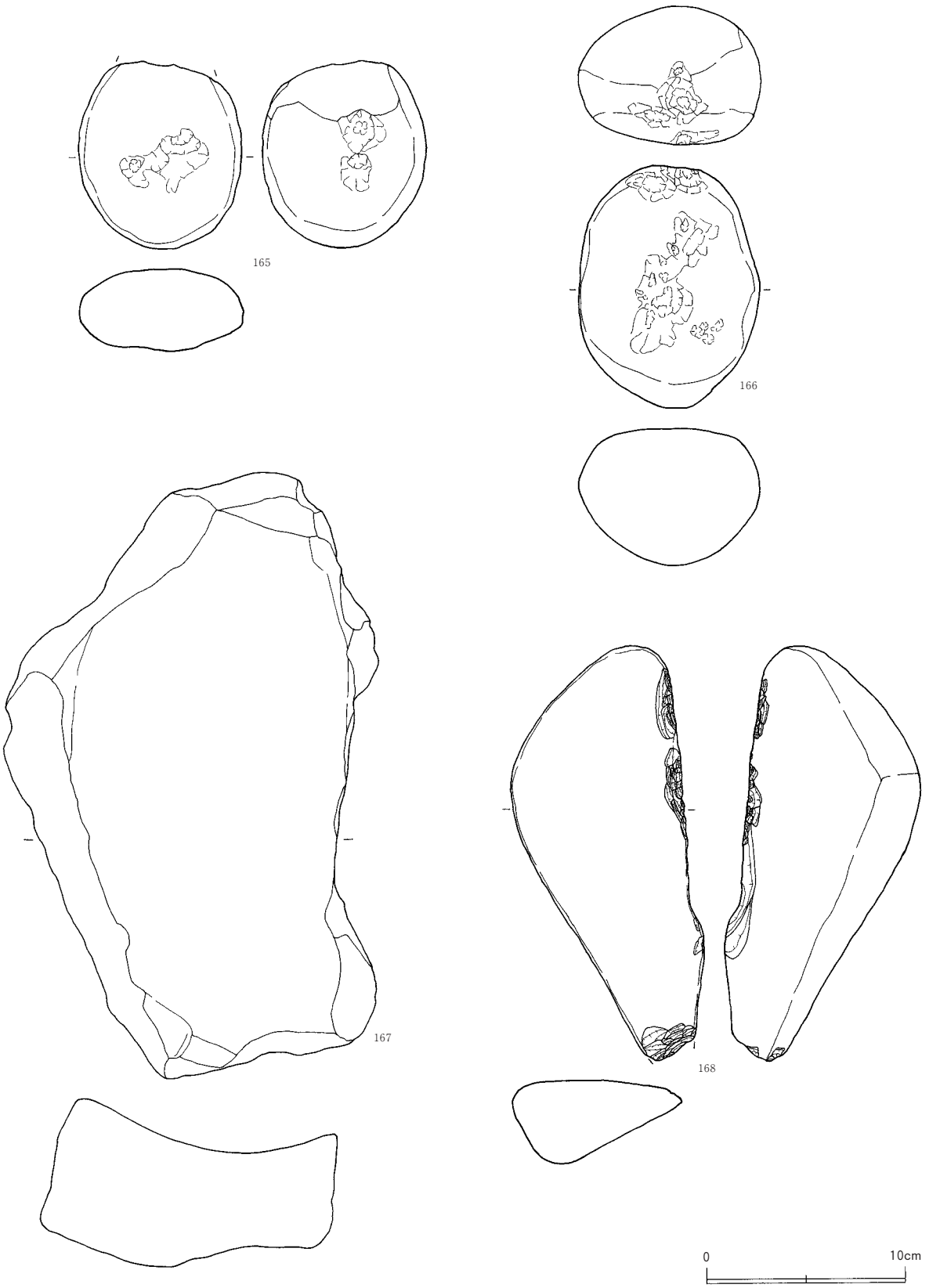
第83図　ＳＬ14出土石器（５）





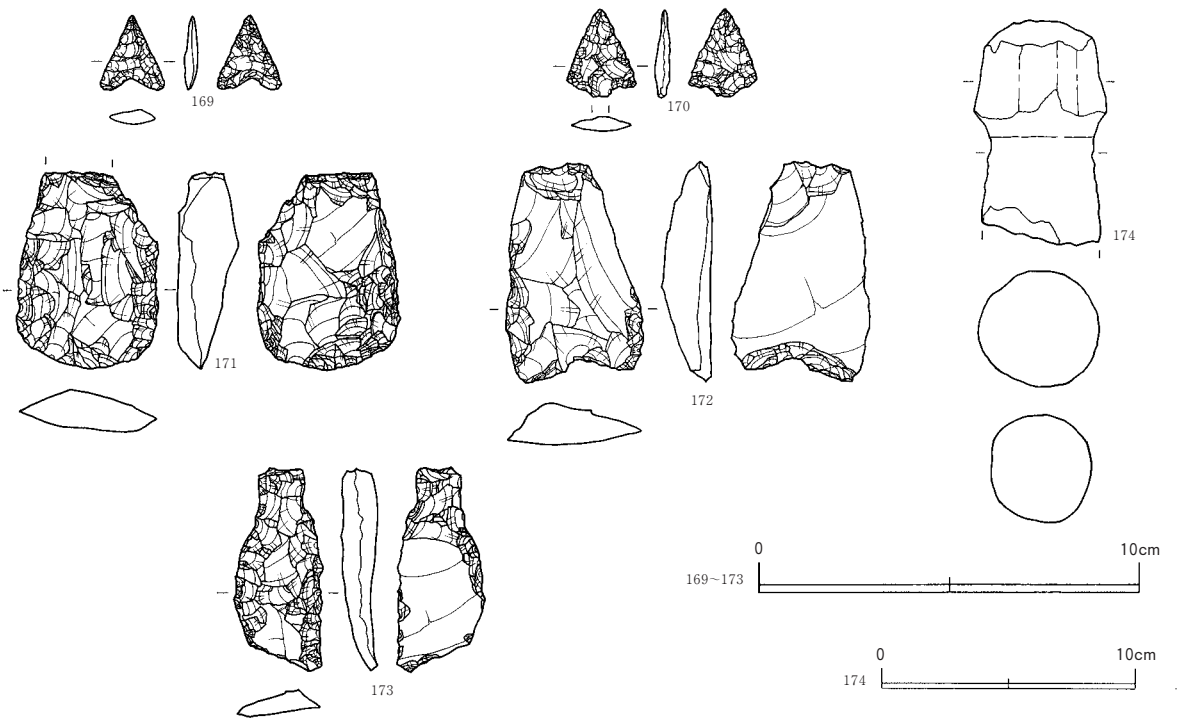
遺物No.	図版No.	出土遺構	層位	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石質	その他
156	14	ＳＬ14	―	異形石器	3.7	2.7	0.8	5.7	赤玉（鉄石英）	雁袴状?
157	14	ＳＬ14	―	異形石器	3.5	4.3	0.8	4.1	赤玉（鉄石英）	碇状?
158	―	ＳＬ14	―	UF	4.25	2.7	0.8	11.5	珪質頁岩	
159	―	ＳＬ14	―	UF	3.6	2.9	1.2	11.2	珪質頁岩	
160	―	ＳＬ14	―	ＲＦ	4.0	6.5	1.8	42.8	珪質頁岩	
161	―	ＳＬ14	―	石錘	〔8.0〕	10.9	3.3	550.0	安山岩	
162	―	ＳＬ14	―	石錘	15.0	9.0	3.4	400.0	安山岩	
163	14	ＳＬ14	―	凹石	11.5	10.0	4.3	700.0	安山岩	擦り石からの転用
164	―	ＳＬ14	―	凹石	8.3	9.4	2.8	200.0	砂岩	

第84図　ＳＬ14出土石器（６）

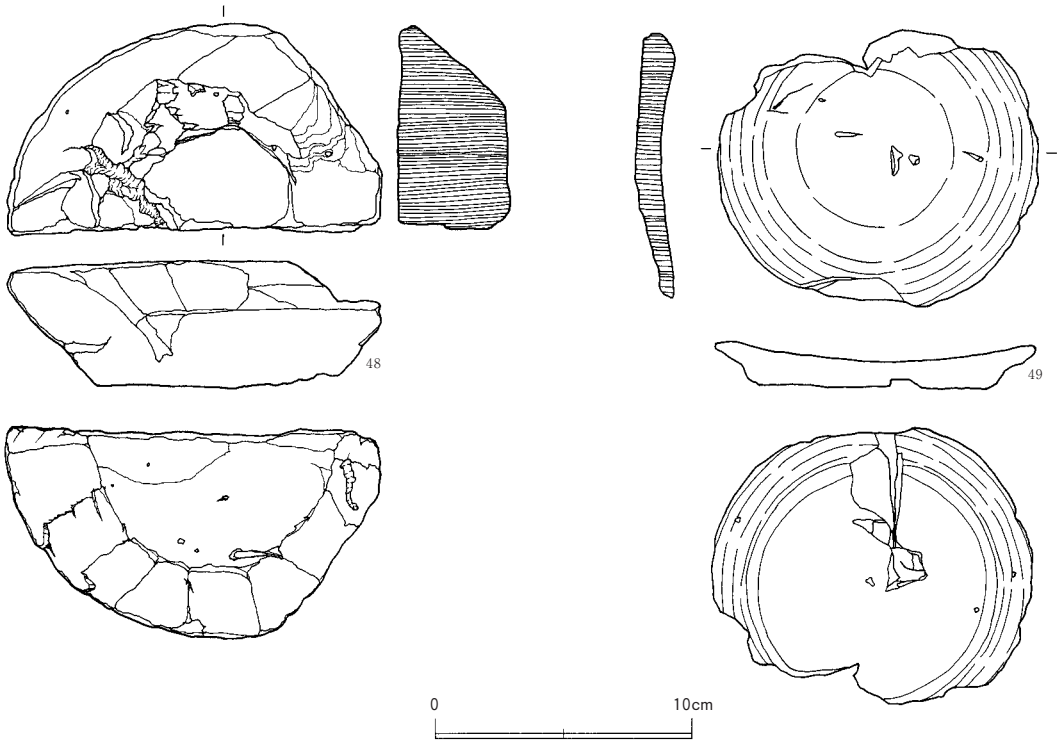


遺物No.	図版No.	出土遺構	層位	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石質	その他
165	―	ＳＬ14	―	凹石	9.4	8.2	4.2	360.0	安山岩	
166	―	ＳＬ14	―	凹石	12.2	9.1	7.0	900.0	変質安山岩	敲石に転用
167	14	ＳＬ14	―	石皿	30.2	18.8	10.0	4550.0	砂岩	
168	14	ＳＬ14	―	敲打のある石	〔20.7〕	9.8	4.2	700.0	変質安山岩	基部欠損

第85図　ＳＬ14出土石器（７）

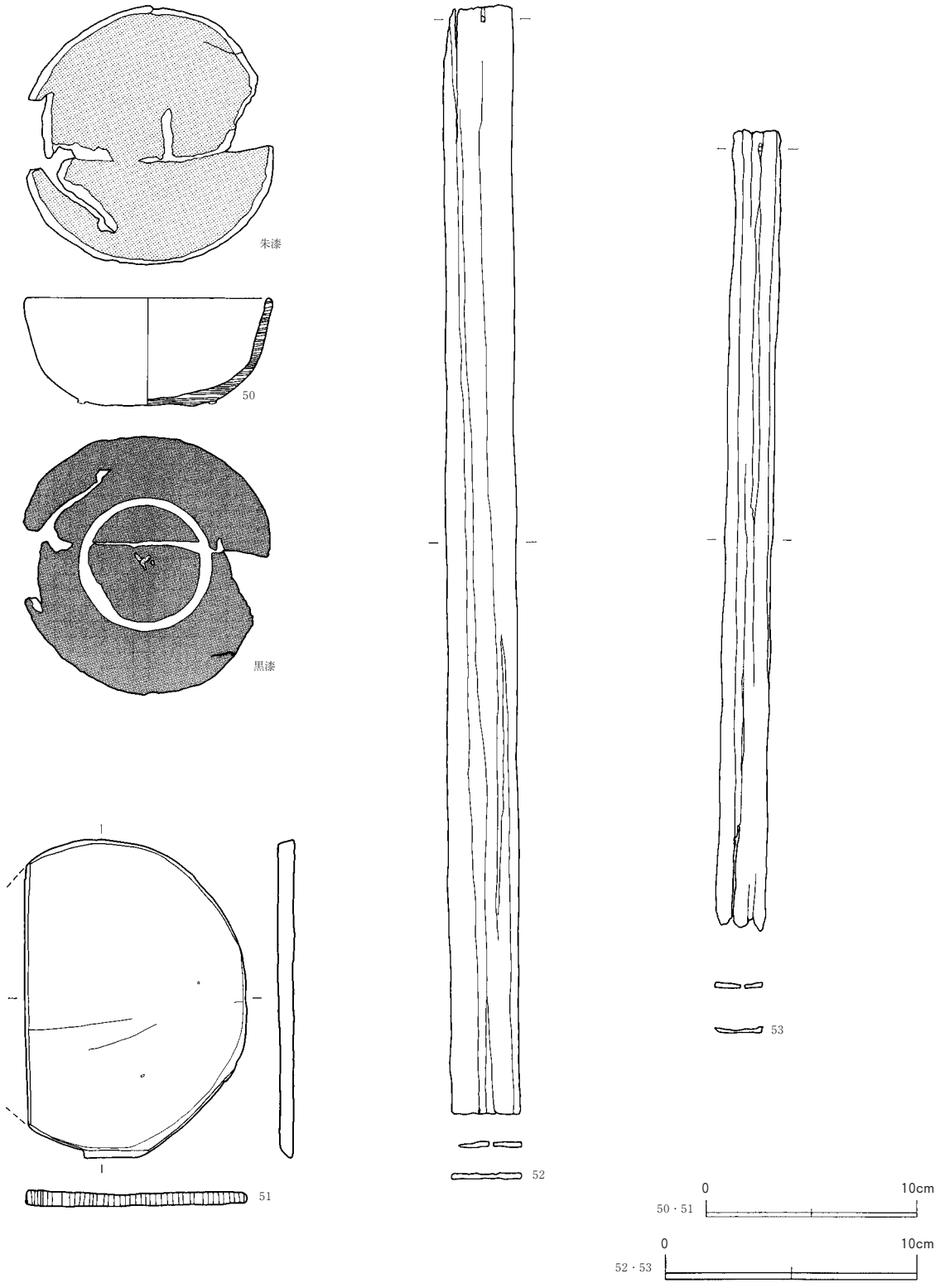


遺物No.	図版No.	出土遺構	層位	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石質	その他
169	14	SL06	2	石鏃	2.0	1.7	0.4	0.8	珪質頁岩	
170	14	SL06	―	石鏃	〔2.3〕	1.8	0.4	0.8	珪質頁岩	茎部欠損
171	14	SL06	―	石篦	5.2	3.7	1.6	29.8	流紋岩	
172	14	SL06	2	石篦	5.7	3.6	1.3	22.2	珪質頁岩	
173	14	SL06	―	石匙	〔5.3〕	2.3	1.0	9.5	珪質頁岩	つまみ欠損
174	14	SL06	―	石棒	〔8.8〕	5.3	4.9	190.0	凝灰岩（グリーンタフ）	括れ有、線刻等なし



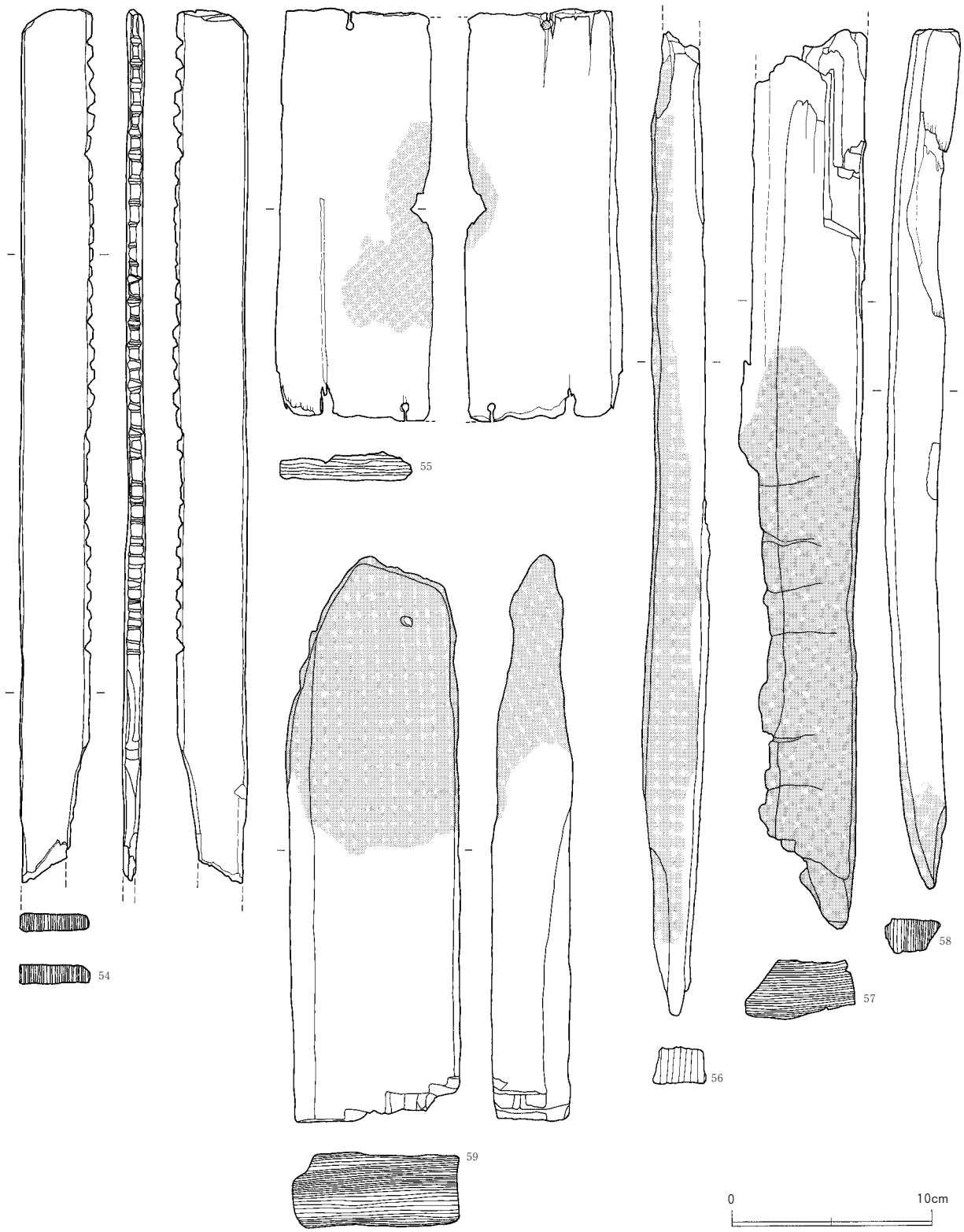
遺物No.	図版No.	出土位置	層位	器種	口径	底径	器高	樹種	その他
48	14	SL06		刳物	〔14.7〕	9.7	5.0	ニレ科ケヤキ属ケヤキ	未製品
49	14	SL06	2	皿	12.7	9.0	1.6	ニレ科ケヤキ属ケヤキ	椀ｏｒ皿から二次加工

第86図　ＳＬ06出土石器・木製品（１）



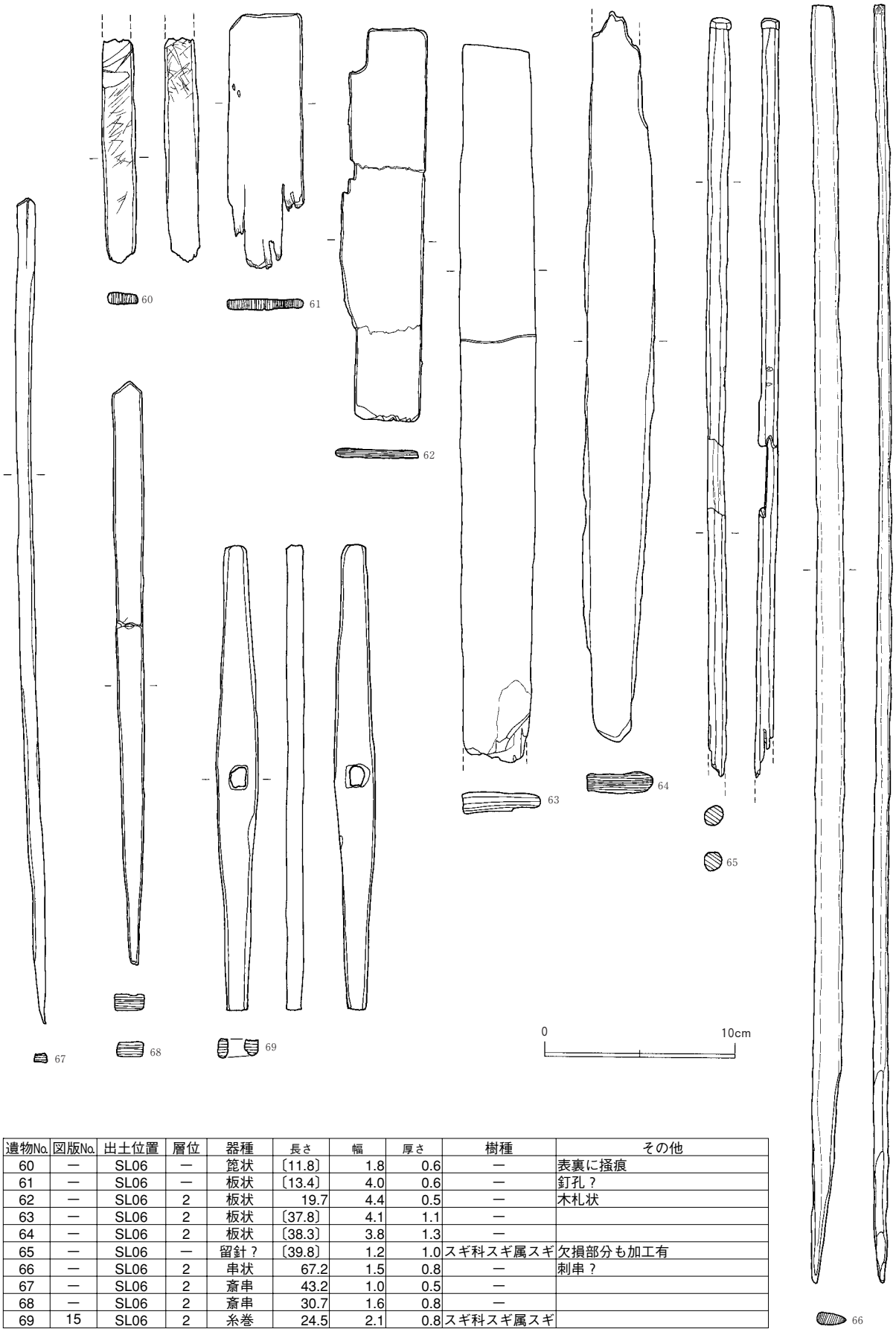
遺物No.	図版No.	出土位置	層位	器種	長さ・口径	幅・底径	厚さ・器高	樹種	その他
50	15	SL06	―	漆器椀	11.8	〔6.3〕	〔5.0〕	ブナ科ブナ属	外：黒漆、内：黒漆→朱漆 高台欠損、底に「上」朱書
51	―	SL06	2	曲物底板	15.0	〔10.5〕	0.8	―	
52	5	SL06	2	板材	351.0	22.0	2.0	―	一辺にほぞ穴
53	5	SL06	2	板材	254.0	15.0	1.8	―	一辺にほぞ穴

第87図　ＳＬ06出土木製品（２）



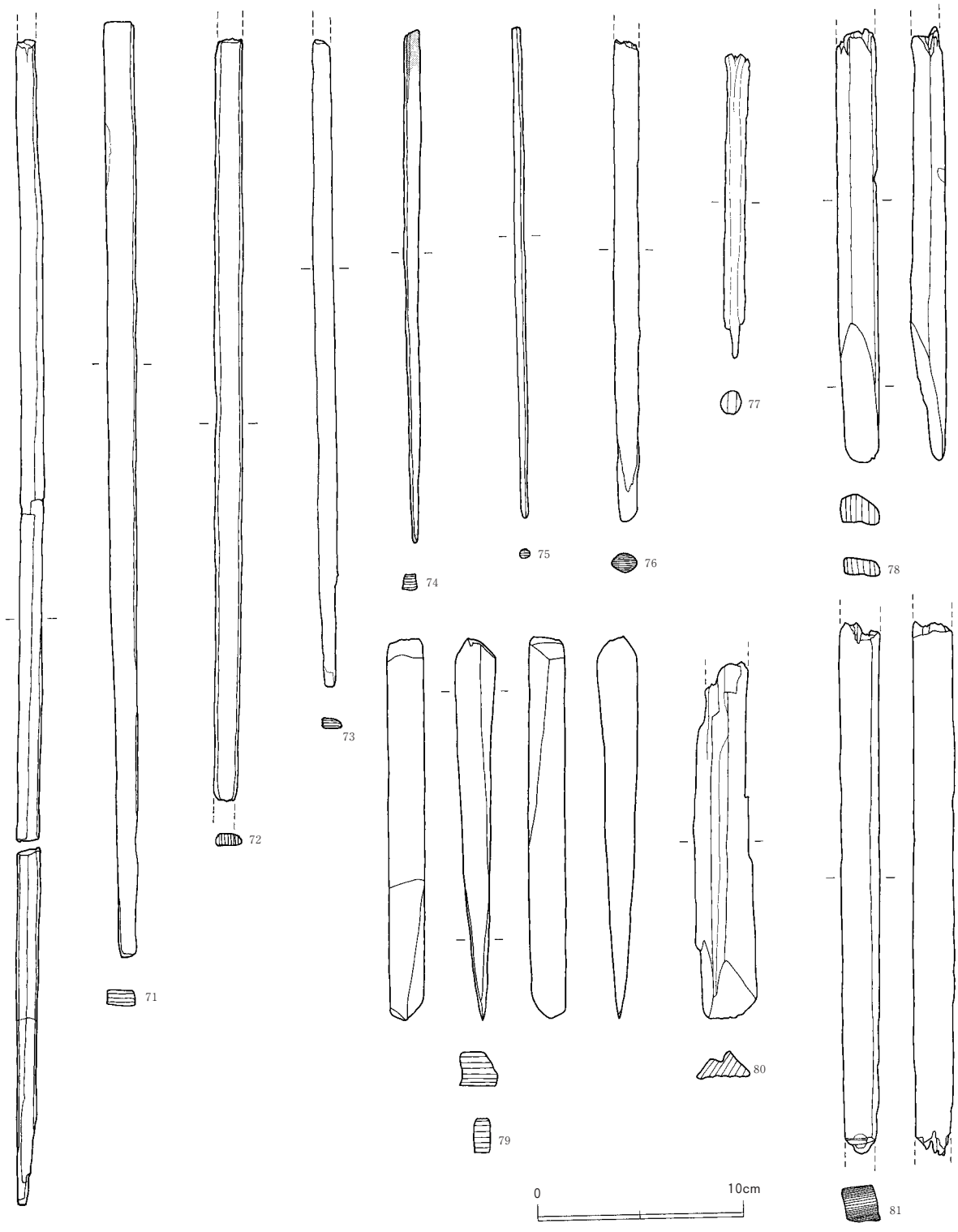
遺物No.	図版No.	出土位置	層位	器種	長さ	幅	厚さ	樹種	その他
54	6・15	SL06	2	用途不明	〔43.3〕	3.7	1.1	スギ科スギ属スギ	片刃鋸状の形状
55	―	SL06	―	板状	20.6	〔7.9〕	1.4	―	中央に被熱、上下に釘孔？
56	―	SL06	2	杭状	〔48.8〕	3.1	2.6	―	側面被熱
57	―	SL06	2	杭状	44.7	6.3	4.9	―	先端被熱
58	―	SL06	2	杭状	42.7	2.8	1.7	―	先端被熱
59	―	SL06	2	柱材？	28.2	8.6	4.1	―	上部焼失

第88図　ＳＬ06出土木製品（３）



遺物No.	図版No.	出土位置	層位	器種	長さ	幅	厚さ	樹種	その他
60	—	SL06	—	箆状	〔11.8〕	1.8	0.6	—	表裏に掻痕
61	—	SL06	—	板状	〔13.4〕	4.0	0.6	—	釘孔？
62	—	SL06	2	板状	19.7	4.4	0.5	—	木札状
63	—	SL06	2	板状	〔37.8〕	4.1	1.1	—	
64	—	SL06	2	板状	〔38.3〕	3.8	1.3	—	
65	—	SL06	—	留針？	〔39.8〕	1.2	1.0	スギ科スギ属スギ	欠損部分も加工有
66	—	SL06	2	串状	67.2	1.5	0.8	—	刺串？
67	—	SL06	2	斎串	43.2	1.0	0.5	—	
68	—	SL06	2	斎串	30.7	1.6	0.8	—	
69	15	SL06	2	糸巻	24.5	2.1	0.8	スギ科スギ属スギ	

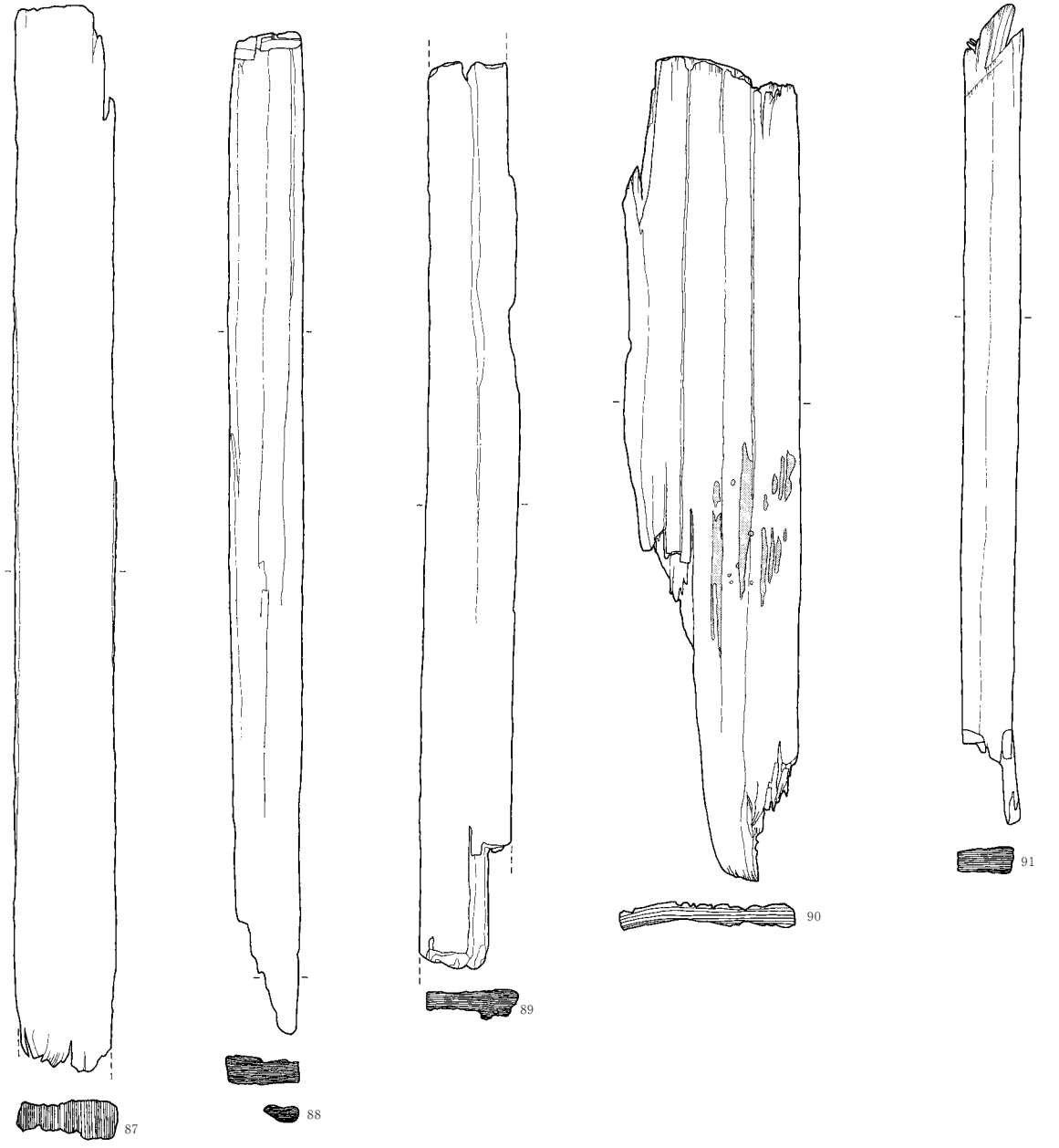
第89図　ＳＬ06出土木製品（４）



遺物No.	図版No.	出土位置	層位	器種	長さ	幅	厚さ	樹種	その他
70	—	SL06	2	串状	〔55.7〕	1.0	1.0	—	
71	—	SL06	2	串状	44.9	1.5	0.8	—	
72	—	SL06	2	串状	〔36.7〕	1.4	0.6	—	
73	—	SL06	2	串状	〔31.2〕	0.9	0.4	—	
74	—	SL06	2	串状	24.7	0.9	0.8	—	両端被熱
75	—	SL06	1	箸	23.7	0.6	0.5	—	
76	—	SL06	2	棒状	〔23.3〕	1.4	0.9	—	
77	—	SL06	2	棒状	14.7	1.2	1.2	—	先端加工（65と類似）
78	—	SL06	2	棒状	〔21.0〕	2.0	1.7	—	木楔？
79	—	SL06	2	棒状	18.4	2.0	1.8	—	木楔？斎串？
80	—	SL06	2	棒状	〔17.3〕	3.0	1.9	—	
81	—	SL06	1	棒状	〔25.7〕	2.0	2.0	—	

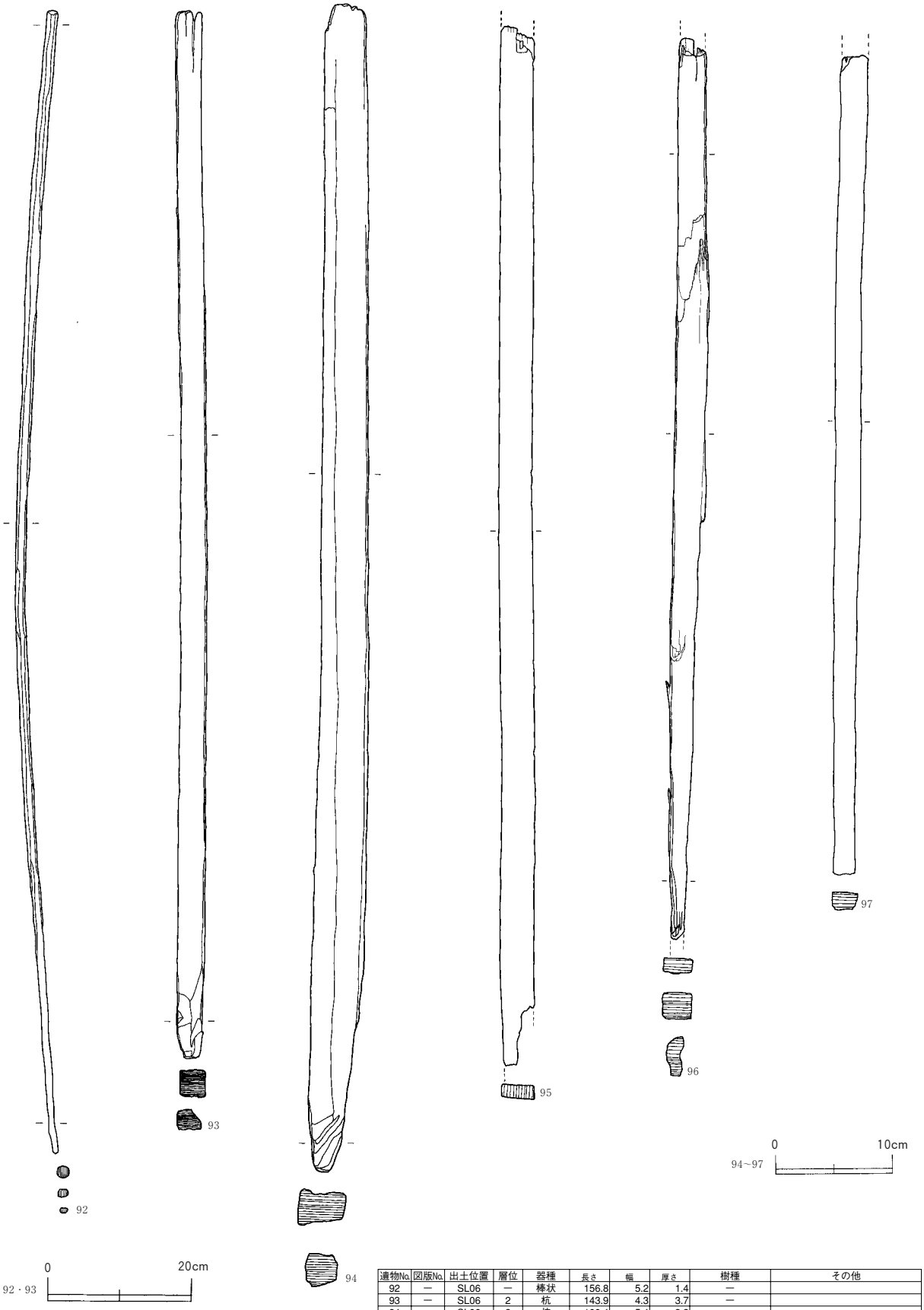
第90図　ＳＬ06出土木製品（５）

第91図　ＳＬ06出土木製品（６）



遺物No.	図版No.	出土位置	層位	器種	長さ	幅	厚さ	樹種	その他
82	—	SL06	—	板材	108.9	21.7	6.8	—	
83	—	SL06	2	板材	〔101.4〕	〔6.5〕	2.1	—	
84	—	SL06	2	板材	89.6	6.2	3.1	—	樹皮付き
85	—	SL06	1	板材	88.2	13.4	1.7	—	
86	—	SL06	2	板材	81.1	〔9.0〕	3.0	—	被熱
87	—	SL06	2	板材	76.2	7.6	2.8	—	
88	—	SL06	2	板材	71.5	〔5.3〕	1.9	—	
89	—	SL06	2	板材	〔64.8〕	〔7.3〕	2.1	—	
90	—	SL06	2	板材	58.6	12.7	1.6	—	被熱
91	—	SL06	2	板材	〔58.2〕	4.1	1.9	—	

第92図　ＳＬ06出土木製品（７）



遺物No.	図版No.	出土位置	層位	器種	長さ	幅	厚さ	樹種	その他
92	—	SL06	—	棒状	156.8	5.2	1.4	—	
93	—	SL06	2	杭	143.9	4.3	3.7	—	
94	—	SL06	2	杭	100.4	5.4	3.2	—	
95	—	SL06	1	棒状	〔88.1〕	3.1	1.3	—	
96	—	SL06	2	棒状	〔77.2〕	〔2.5〕	3.3	—	
97	—	SL06	2	棒状	〔70.4〕	2.5	1.5	—	

第93図　ＳＬ06出土木製品（８）

第３節　遺構外出土遺物

沖積地部分の遺構外出土遺物は縄文時代の土器３箱、土師器32箱、須恵器４箱、陶磁器２箱、石器４箱、木製品７箱、銭貨を含む金属製品１箱、鍛冶関連遺物が３箱出土した。鍛冶関連遺物のみは構成の都合上遺構内及び丘陵部分のものも併せて掲載した。

１　縄文時代

（１）**縄文土器**（第94図、図版10）

縄文土器は前期：深鉢（411・412）、中期：深鉢（413）の３点を掲載した。

前期のうち411は異条縄文、412は爪形の刺突が施されている。中期の413は網目状撚糸文を施した後に磨き・沈線が施されている。

（２）**石器**（第97～103図、図版14）

石器は石鏃（175～179）、石匙（180～188）、掻器（189～206）、石錐（207～209）、異形石器（210）、剥片（211～217）、磨製石斧（218～224）、石皿（225・226）、半円状扁平打製石器（227～229）の55点を掲載した。石鏃のうち175～177は撥形で裏面は周縁加工のみで、175の石材は流紋岩である。178・179は細長で未成品と考えられる。石匙は180～185が縦型、186～188は横型で、このうち180は両面加工が施され、188は未成品である。掻器のうち189～199は刃部が片側縁のみ、200は片側縁から先端に連続し、190・194・199・201は自然面を残す。201～206は両側縁、または両側縁と先端にU字状に刃部を有する。203は上半が欠損しており全体の形状は不明だが、大型で両面に部分的に自然面を残す。石錐は207・208がつまみと錐部の境界が明確で、207は錐部がやや長い。209は境界が不明確で錐部は短い。全て裏面は周縁のみの加工である。210は両側面にノッチを有する糸巻き状の異形石器だが、ＳＬ14で出土した２点とは石質が異なり、裏面は周縁のみの加工である。211～213は使用痕のある剥片、214～216は二次加工のある剥片である。217は黒曜石の剥片である。磨製石斧は218が大型、219～221は中型、222～224は小型で断面形は全て扁平だが、221は厚く、220・222～224は薄い。220・223・224の石材は蛇紋岩である。石皿は225の断面形が不定形、226は欠損のため全体の形状は不明で、共に断面形は凹状である。227～228は側面に敲打痕を有する半円状扁平打製石器と考えられる。

２　平安時代

（１）**土師器**（第94図、図版12）

土師器は坏（150～153）・有台坏（154・155）・長胴甕（156～161）・土製品（162）の13点を掲載した。坏はＳＤ05と同様の分類をした。150はＡ－３類、151はＢ－２類で、切り離しは全て回転糸切りによる。口縁部は151がやや内湾気味、150はほぼ直線的に立ち上がる。153は側面に墨書がなされている。有台坏の２点は共に内面に黒色処理が施されている。162は口縁部が僅かに欠損しているほかはほぼ完形の壺形土製品である。外面は丁寧な調整のうえ、肩部に施釉の痕跡が残っている。内部は空洞になっており水滴と推測される。

（２）**須恵器**（第94～96図、図版13）

須恵器は坏（163～166）・鉢（167）・瓶（168～173）・甕（174～199）の37点を掲載した。坏の

うち166のみが回転篦切りによる切り離しで他は回転糸切りで、胎土・焼成はそれぞれ異なる。166は内面に墨痕・摺り痕があり転用硯と考えられ、外面には墨書がなされている。瓶のうち168は長頸瓶、169は短頸瓶である。172・173は外面に墨痕があり転用硯と考えられる。173の外面には焼成時に付着したと考えられる土塊がある。170・171は赤褐色の胎土で、甕の175～177も同様の傾向である。甕は179～186の頸部～肩部にかけて波状の施文があり、187・198には自然釉が付着している。194は内面に墨痕があり転用硯と考えられる。198・199は丸底である。

（3）**石製品**（第103図、図版14）

石製品は砥石（230～232）の3点を掲載した。230・231は砥面を4面、232は2面有する。形状や使用痕から古代以降の製品と考えられる。

（4）**木製品**（第104～106図、図版15）

木製品は漆器椀（98）、曲物（99～101）、部材（103）、人形（115）、脚（118・119）、箸（120～122）、用途不明のものは履物状（102）・板状（104～114）・棒状（123～125）・その他（116・117）の28点を掲載した。98は両面に黒漆を施した椀で、ＳＬ06で出土したものと比べ調整は簡易である。99～101は曲物の底板である。103の部材は一辺に（長さ×幅×厚）0.7～1.0㎝×1.2～1.5㎝×0.5㎝の「＝」状の差し込みと考えられる凹部を有する。115の人形は眉・目・鼻・口・耳が刻み込まれ、下方にくびれを有する。付近にはＳＥ30・ＳＫ17等の祭祀に関連したと考えられる遺構が検出されており、これらに関連するものと推察される。脚のうち118は膳脚、119は小型の台等の脚と考えられる。板状製品のうち104・105は片面に並行する切り込みを有し、曲物の側板と考えられる。107～109は斜め曲線、110・111は斜め直線に先端に加工が施されている。112・114は穿孔を有しており、扇等の用途が考えられる。棒状製品のうち124・125は表面が円柱状に磨き調整されている。102は片側が欠損しているが、裏面に並行する2本の凸部を有し、田下駄等の用途が考えられるが鼻緒を固定する箇所がなく断定を控える。116・117は細かな加工がみられるが用途は不明である。

3　中世

（1）**輸入磁器**（第96図、図版13）

輸入磁器は青磁の香炉皿（200）、染付け皿（201）の2点を掲載した。200は15世紀の龍泉窯産と考えられ、内面に施文をもつ。201は16世紀の景徳鎮窯産と考えられ、内面に濃淡をつけた青の草状施文をもち、台部は細く内湾している。

（2）**須恵器系中世陶器**（第96図、図版13）

須恵器系中世陶器は擂鉢（202・203）を2点掲載した。202は内面に卸目をもち胎土は鉛色で粗い。203は卸目は無いが使用によって磨耗しており、胎土はやや赤みを帯びた灰色で粗く、切り離し技法は摩滅のため不明である。

4　金属製品・鍛冶関連遺物

本遺跡からは、総重量4577.4ｇの金属製品及び鍛冶関連遺物（銭貨は統計に含まない）が出土している。これらは、形状・法量から古代と中世のものに分かれると判断した。全ての遺物について重量を計測し、観察表を第107～109図に付した。磁着度は、方眼台紙に6㎜を1単位とする同心円を10本以上描き、標準磁石（フェライト磁石）を糸につり下げて、広い側面側を台紙の中心に合わせる。遺物を手に持ち外側のランクから順次接近させて、磁石が急激に動き始める瞬間の数字を記録し

たものである。メタル度は、埋蔵文化財用特殊金属探知機ＭＲ－50Ｂ（基準値設定者穴澤義功）を用いた。金属の残留度の高い方から「特Ｌ（☆）」・「Ｌ（●）」・「Ｍ（◎）」・「Ｈ（○）」、鉄を含むが既に酸化したものについては「錆化（△）」と表示した。

本遺跡では鍛冶関連遺構は検出されなかった。この原因として、これらの遺物が付近からの流れ込みであるか、近年の耕作による削平のため遺構が失われた等が考えられる。

（１）**金属製品**（第 107 図、図版 15）

金属製品は和鋏（１）、雁袴鏃（２・３）、刀具（４～６）、銅製容器（７）、板状（８）、釘（９）の９点を掲載した。１の和鋏は約 5.0㎝の刃部を有し、片側が欠損している。２・３の雁袴鏃のうち２は小型で平らな形状で、３は丸みをもつ断面形である。４は中茎から刀身への形状が特異なことから太刀以外のものと考えられる。６の柄部は金色で表面には幾何学的な文様が彫られ、裏面は無文である。刀身と考えられる部分は鉛色で、共に金属の芯を包み込んだ形状をもつ。７は銅製の容器で底部中央に径約１㎜の穿孔を有する。９は釘と考えられ頭部が折れ曲がっている。

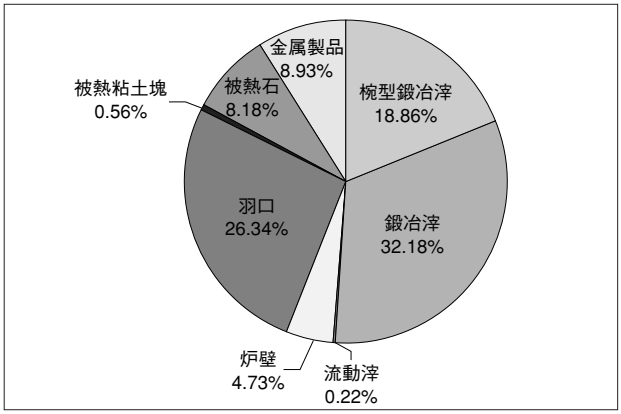
（２）**銭貨**（第 107 図、図版 15）

銭貨は 10 ～ 12 の３点を掲載した。10・11 は北宋銭の元豊通宝、12 は■状の凸部が２箇所のみで文字等はなく、無文銭と考えられる。この他に寛永通宝が４点出土した。

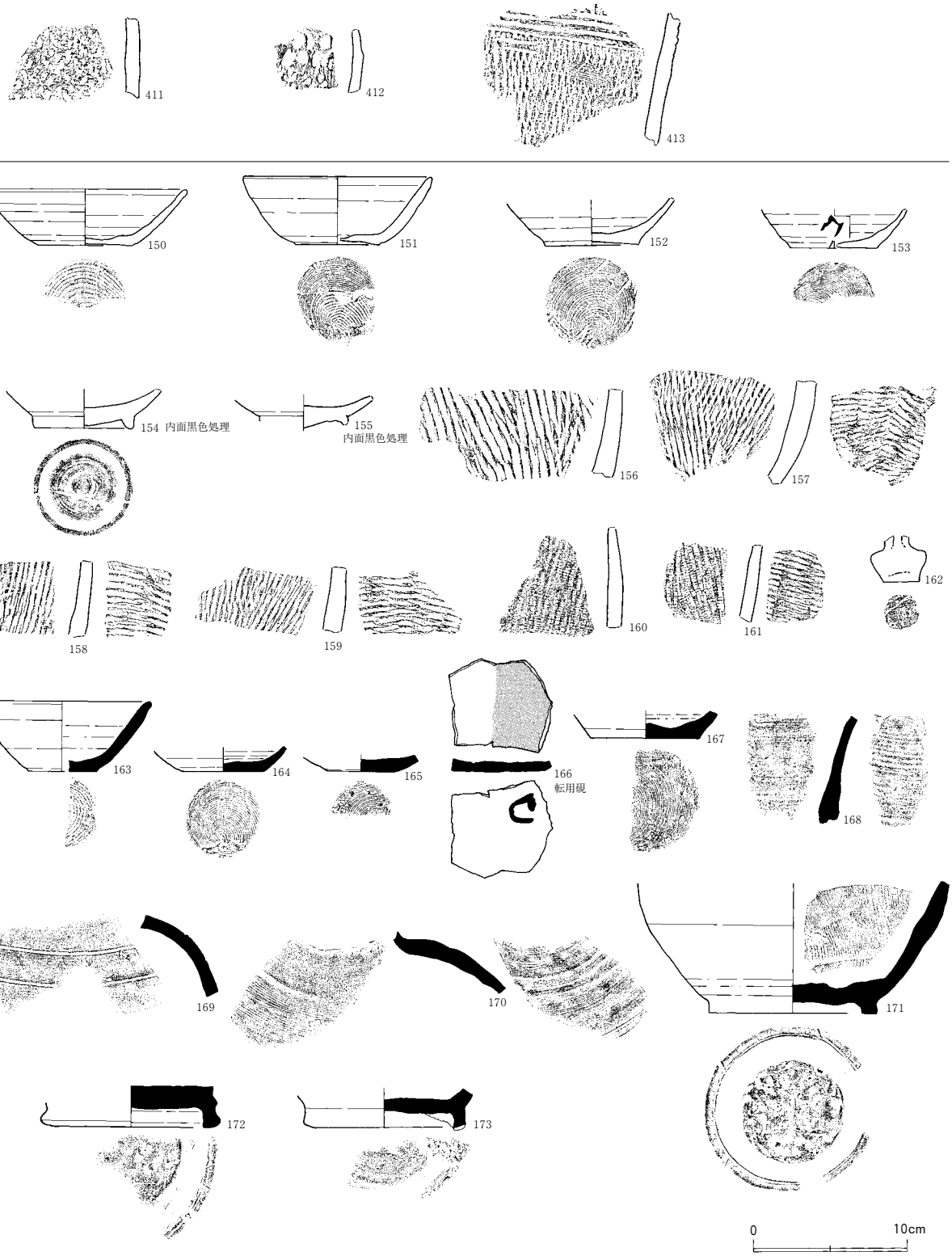
（３）**鍛冶関連遺物**（第 108・109 図、図版 15）

鍛冶関連遺物は椀形鍛冶滓（19・20、26 ～ 31）、不明滓（13 ～ 15、22 ～ 25）、炉壁（16・18・37・38）、羽口（17・21、32 ～ 36）、被熱石（39・40）の 28 点を掲載した。羽口のうち 21 は古代のものと考えられ､その他は中世のものと考えられる。このことから鍛冶生産は二時期の操業が考えられる。また古代の遺構から出土した中世の鍛冶滓等は、湧水等によって調査時に流れ込んだ可能性もあり、遺構の時期決定の要因からは除外した。

	重量（ｇ）	構成比（％）
椀形鍛冶滓	863.3	18.86
鍛冶滓	1472.9	32.18
流動滓	10.2	0.22
炉壁	216.7	4.73
羽口	1205.6	26.34
被熱粘土塊	25.6	0.56
被熱石	374.5	8.18
金属製品	408.6	8.93
計	4577.4	100.00

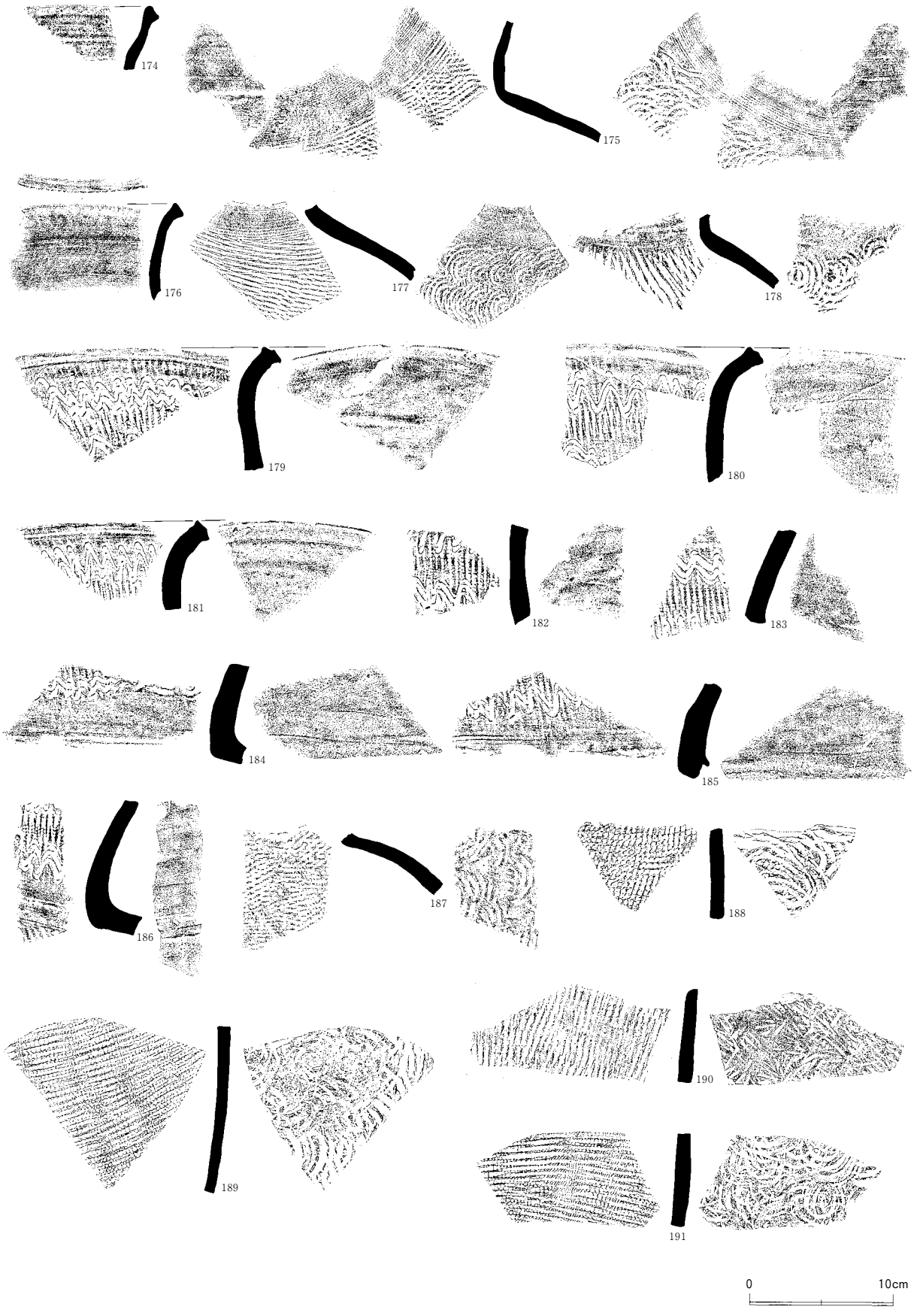


鍛冶関連遺物の構成比

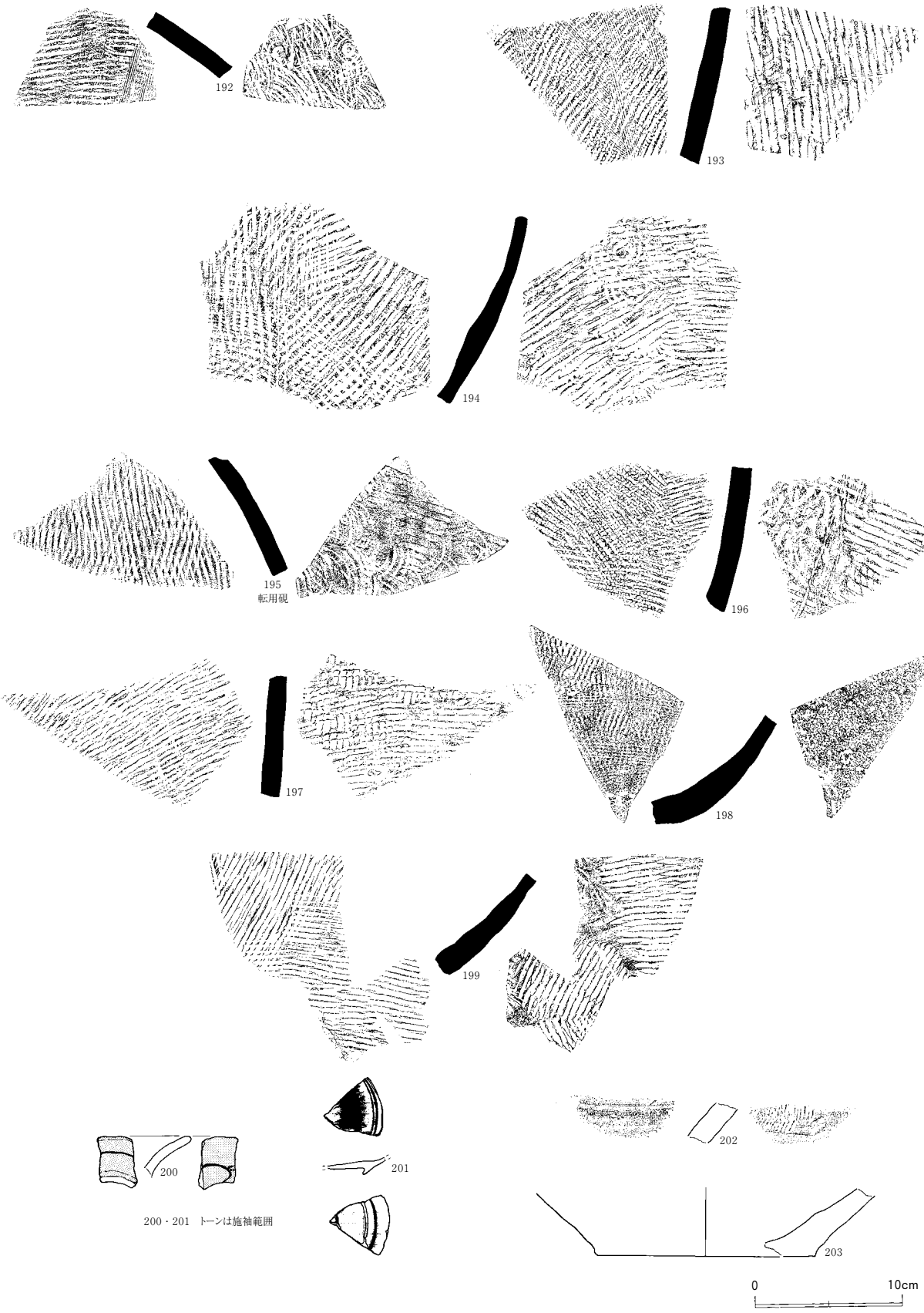


遺物No.	図版No.	出土位置	層位	種別	器種	部位	器高	口径	底径	底径指数	高径指数	外底部	調整・施文	その他
150	—	MC56	II	土師器	坏	口縁部～底部	3.6	13.0	6.0	46.2	27.7	回転糸	ロクロ（ヘラ）	底部に煤
151	—	LS45	II	土師器	坏	口縁部～底部	4.5	12.0	5.4	45.0	37.5	回転糸	ロクロ	砂礫混入
152	—	LQ44	II	土師器	坏	体部下半～底部	(3.0)	—	6.0	—	—	回転糸	ロクロ	調整緻密
153	—	LQ44	II	土師器	坏	体部下半～底部	(2.5)	—	5.6	—	—	回転糸	ロクロ	墨書土器
154	—	MA47.48	II	土師器	有台坏	底部	(2.6)	—	7.4	—	—	高台	内黒、磨き	
162	12	MD17	—	土師器	土製品	ほぼ完形	(3.0)	—	2.25	—	—	静止糸	ロクロ、施釉？	水滴？
163	—	MF55	II	須恵器	坏	口縁部～底部	4.6	11.1	4.5	40.5	41.4	回転糸	ロクロ	
164	—	M E 54	—	須恵器	坏	底部	(1.6)	—	5.2	—	—	回転糸	ロクロ	
165	—	MD29	—	須恵器	坏	底部	(1.1)	—	2.1	—	—	回転糸	ロクロ（ヘラ）	
167	13	MF51	—	須恵器	鉢	底部	(1.7)	—	7.0	—	—	回転糸	ロクロ	焼成不足
171	13	MC59他	II	須恵器	瓶	胴部下半～底部	(8.6)	—	10.8	—	—	高台	外ロクロ（ヘラ）、内ヘラ	赤褐色
172	13	MG53	II	須恵器	瓶	台部	(2.7)	—	11.6	—	—	高台	ロクロ	転用硯
173	13	MD54他	II	須恵器	瓶	台部	(2.1)	—	10.5	—	—	高台	ロクロ	焼成時の付着物・転用硯

第94図　遺構外出土縄文土器・土師器・須恵器（１）

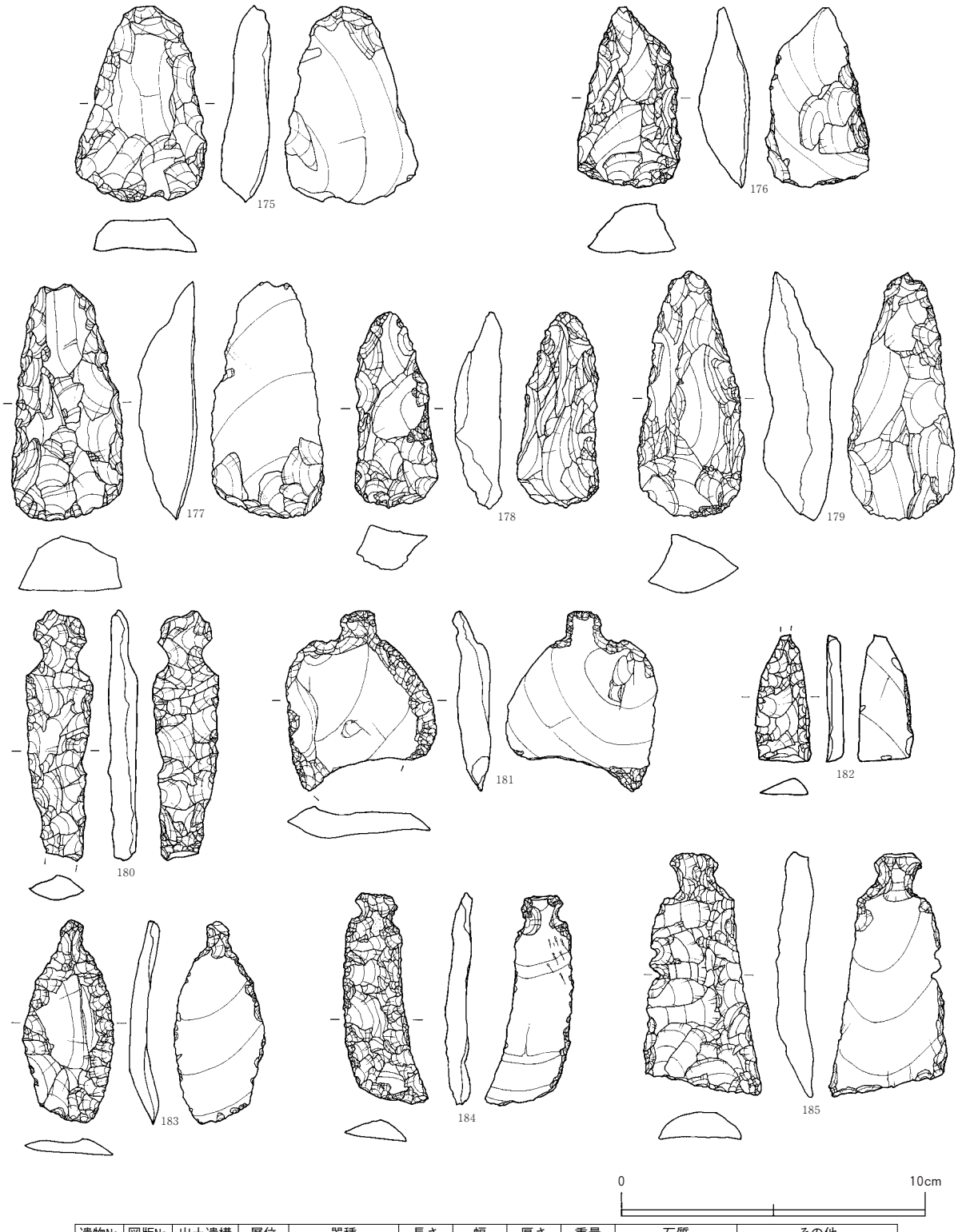


第95図　遺構外出土須恵器（２）



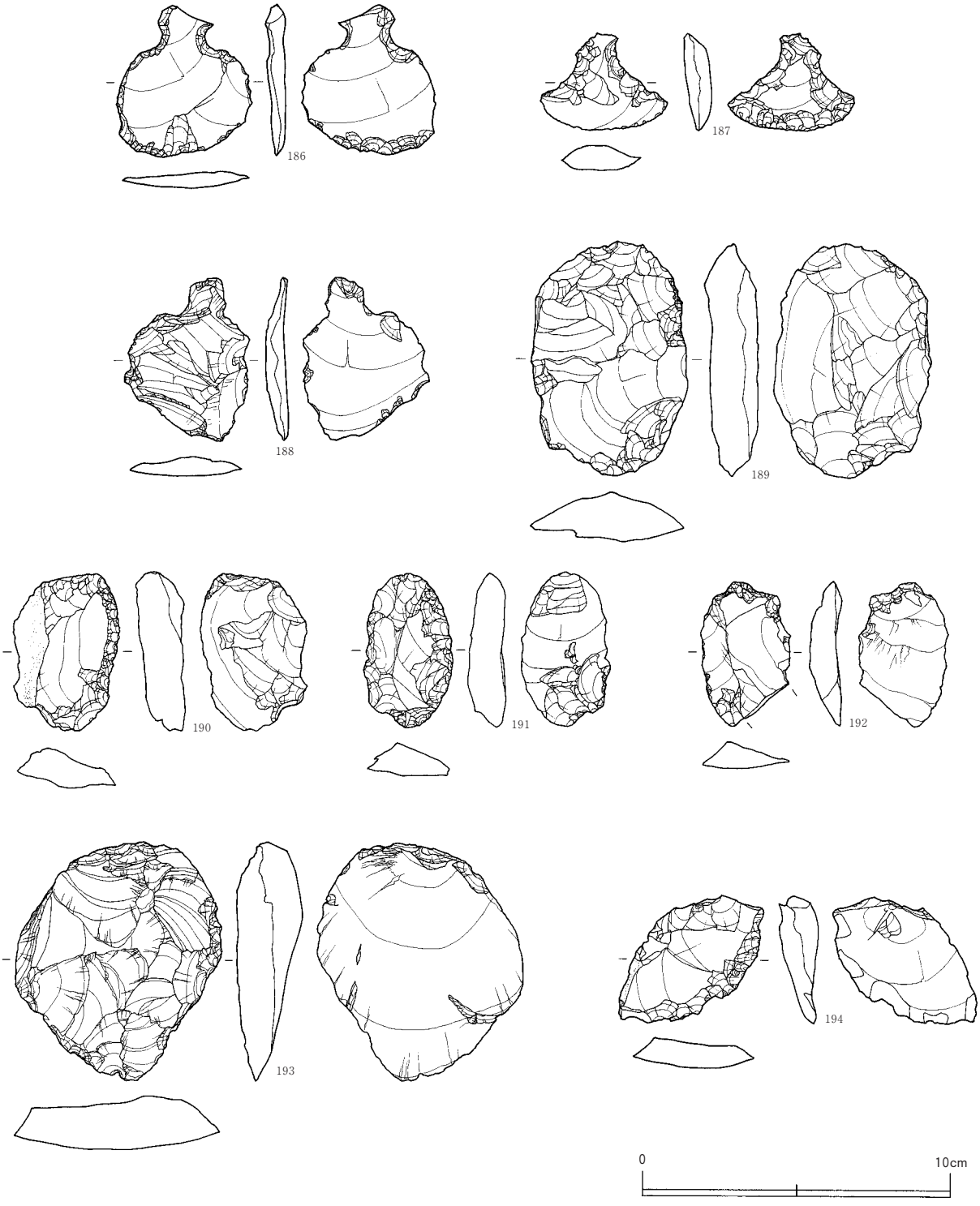
遺物No.	図版No.	出土位置	層位	種別	器種	部位	器高	口径	底径	底径指数	高径指数	外底部	調整・施文	その他
203	13	排土中	—	須恵系	?鉢	底部	〔4.7〕	—	14.8	—	—	摩滅	ロクロ、卸目なし	内面は使用による摩滅

第96図　遺構外出土須恵器（３）・中世陶磁器



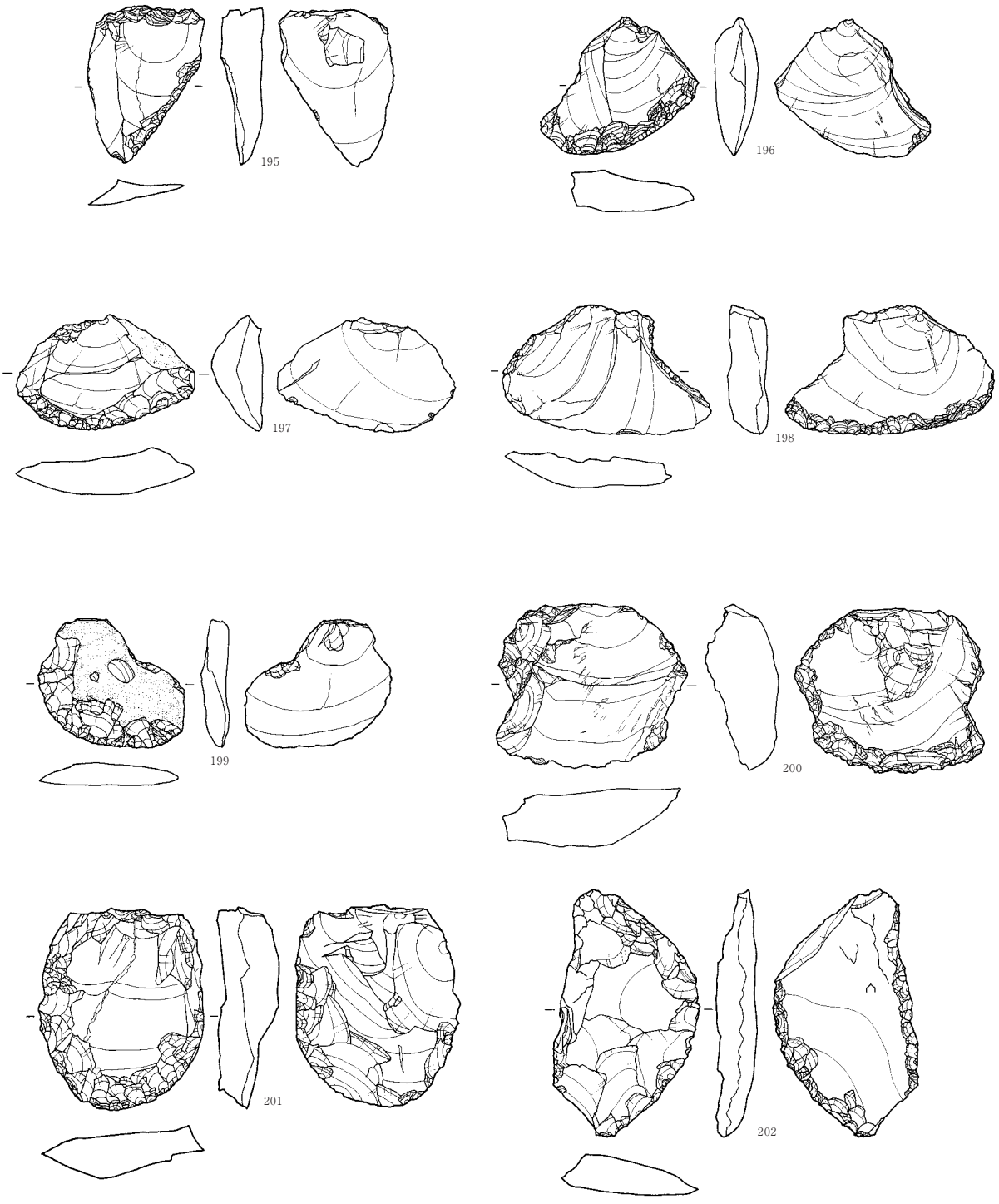
遺物No.	図版No.	出土遺構	層位	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石質	その他
175	14	MD18	—	石篦	6.5	4.3	1.6	41.2	流紋岩	
176	—	MD20	—	石篦	6.0	3.4	1.6	29.1	珪質頁岩	
177	14	表採	—	石篦	7.8	3.7	1.9	56.1	珪質頁岩	
178	—	MG27	—	石篦	6.5	2.8	1.6	24.3	珪質頁岩	
179	—	LP17	—	石篦	8.2	3.6	2.4	56.4	珪質頁岩	
180	14	MF27	—	石匙	8.2	2.2	1.0	16.9	珪質頁岩	
181	—	ME29	—	石匙	5.9	5.0	1.3	25.1	珪質頁岩	
182	—	MD34	—	石匙	4.1	1.8	0.6	4.5	珪質頁岩	
183	—	ME20	—	石匙	6.6	3.0	1.0	11.3	珪質頁岩	
184	—	LQ39	V	石匙	7.0	2.8	0.8	11.6	珪質頁岩	
185	14	MA50	IIa～b	石匙	8.1	3.6	1.1	28.3	珪質頁岩	

第97図　遺構外出土石器（１）



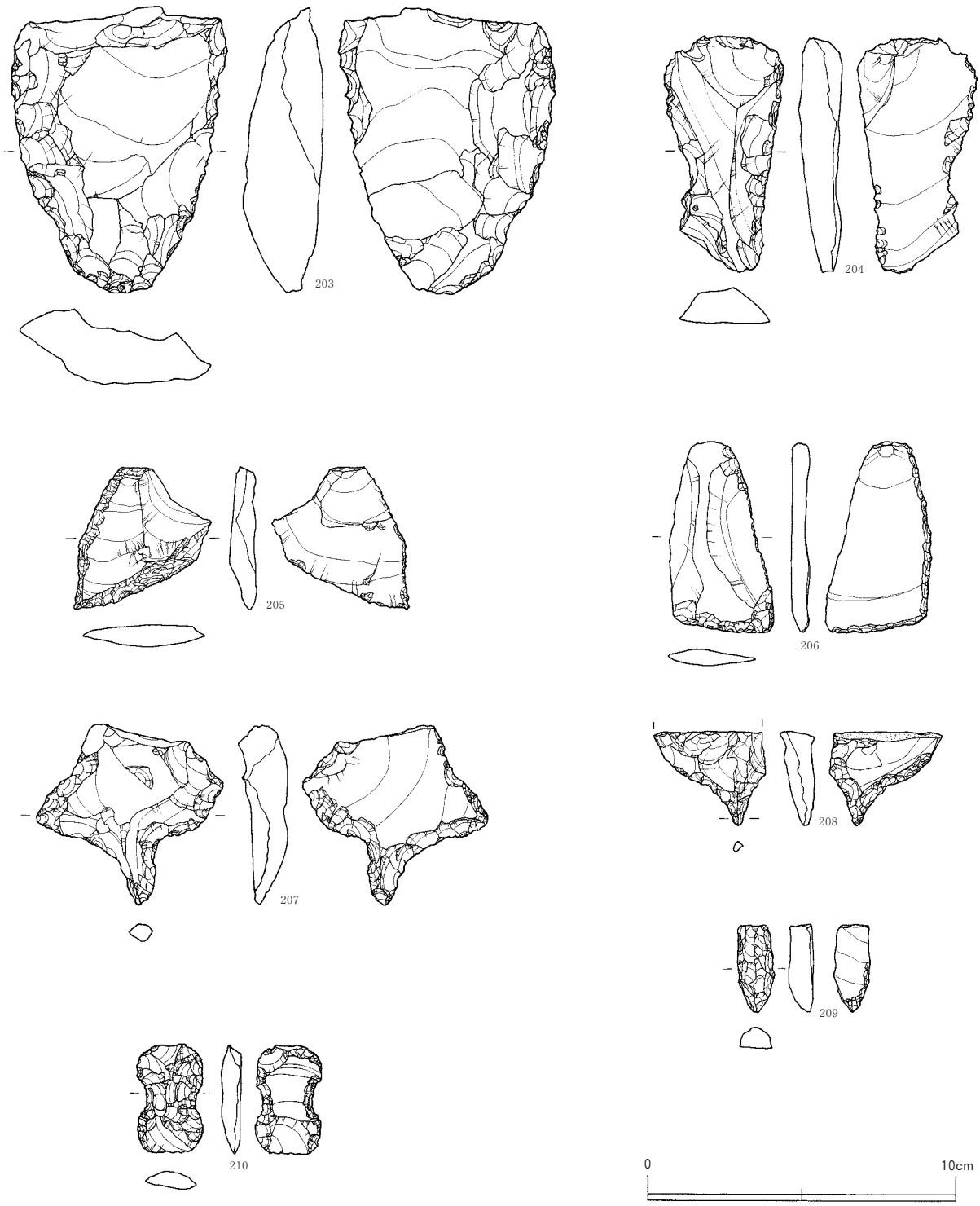
遺物No.	図版No.	出土遺構	層位	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石質	その他
186	14	LS40	—	石匙	4.8	4.4	0.6	9.8	珪質頁岩	
187	14	MF32	—	石匙	3.1	4.1	0.9	8.6	珪質頁岩	
188	—	LT38	—	石匙	5.3	4.1	0.8	11.7	珪質頁岩	
189	—	LS42	—	掻器	7.6	5.1	1.8	68.2	珪質頁岩	
190	14	MG29	—	掻器	4.6	4.5	0.9	13.4	珪質頁岩	
191	—	LS41	—	掻器	5.0	2.9	1.2	18.9	珪質頁岩	
192	—	MG31	—	掻器	4.7	3.0	1.1	10.5	珪質頁岩	
193	—	LR41	—	掻器	7.7	6.7	2.1	89.4	珪質頁岩	
194	—	MG29	—	掻器	4.1	4.7	1.2	18.9	珪質頁岩	

第98図　遺構外出土石器（２）



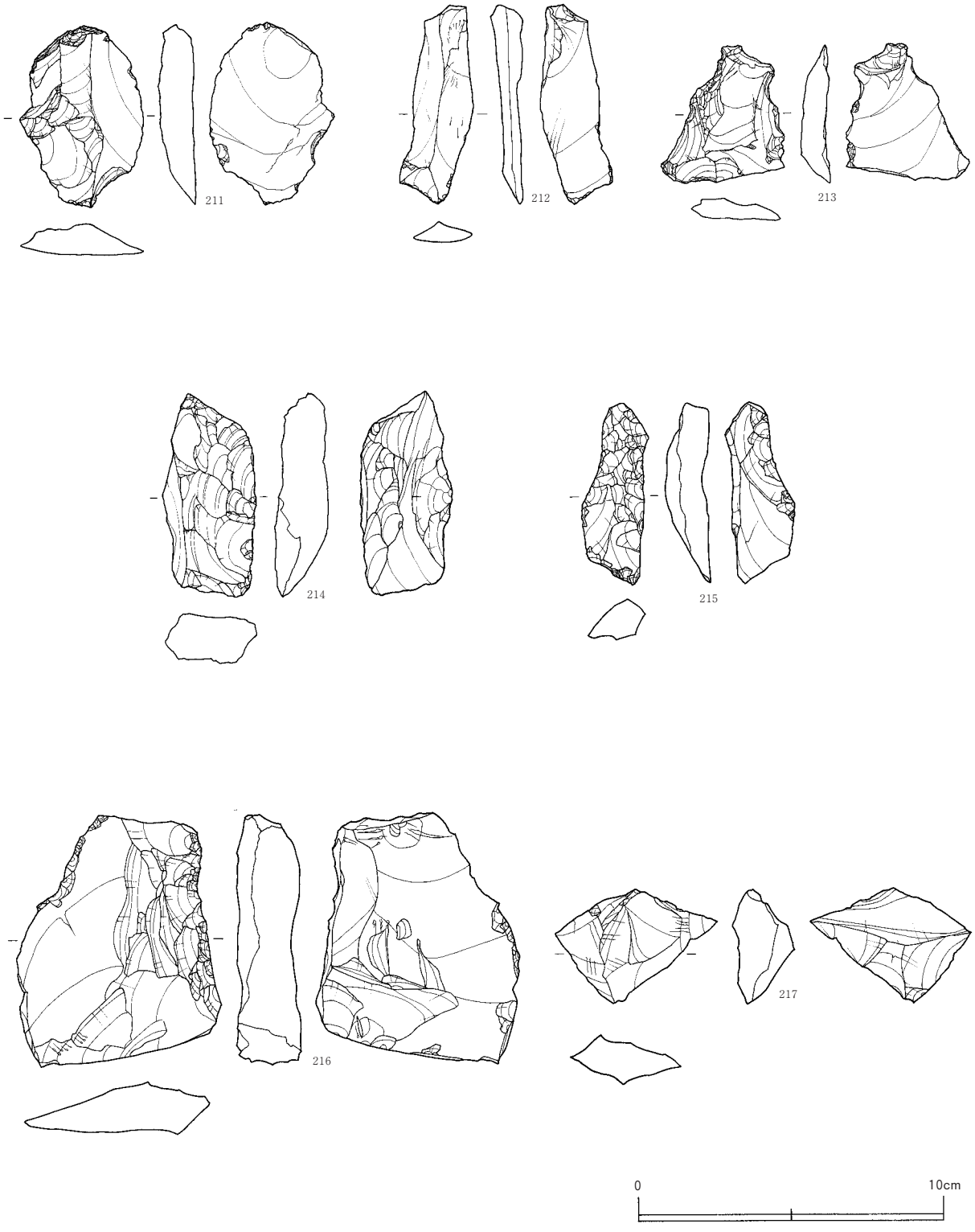
遺物No.	図版No.	出土遺構	層位	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石質	その他
195	—	MF19	—	掻器	5.0	3.7	1.4	14.0	珪質頁岩	
196	14	MF29	—	掻器	4.4	5.0	1.4	23.6	珪質頁岩	
197	—	MF32	—	掻器	5.2	3.5	1.6	27.0	珪質頁岩	
198	—	調査区外	—	掻器	4.1	6.6	1.3	25.1	珪質頁岩	
199	14	MG31	—	掻器	4.0	4.6	0.9	15.5	珪質頁岩	
200	—	LS43	—	掻器	5.2	6.1	2.3	60.2	珪質頁岩	
201	14	MG31	—	掻器	6.4	5.2	2.0	63.3	珪質頁岩	
202	—	LS44	II	掻器	7.9	4.7	1.3	42.4	珪質頁岩	

第99図　遺構外出土石器（３）



遺物No.	図版No.	出土遺構	層位	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石質	その他
203	—	排土中	—	掻器	9.3	6.5	2.6	132.0	珪質頁岩	
204	—	ME29	—	掻器	7.6	4.3	1.4	34.1	珪質頁岩	
205	14	MF32	—	掻器	3.6	5.7	1.6	22.0	珪質頁岩	
206	—	MD18	—	掻器	6.2	8.5	0.6	12.6	珪質頁岩	
207	14	MD40	—	石錐	6.0	6.0	1.6	35.3	珪質頁岩	
208	14	LT44	II	石錐	3.0	3.6	1.1	8.0	珪質頁岩	
209	14	MD20	—	石錐	2.8	1.2	0.8	3.3	珪質頁岩	
210	14	ME28	—	異形石器	3.6	2.2	0.7	5.8	珪質頁岩	

第100図　遺構外出土石器（４）

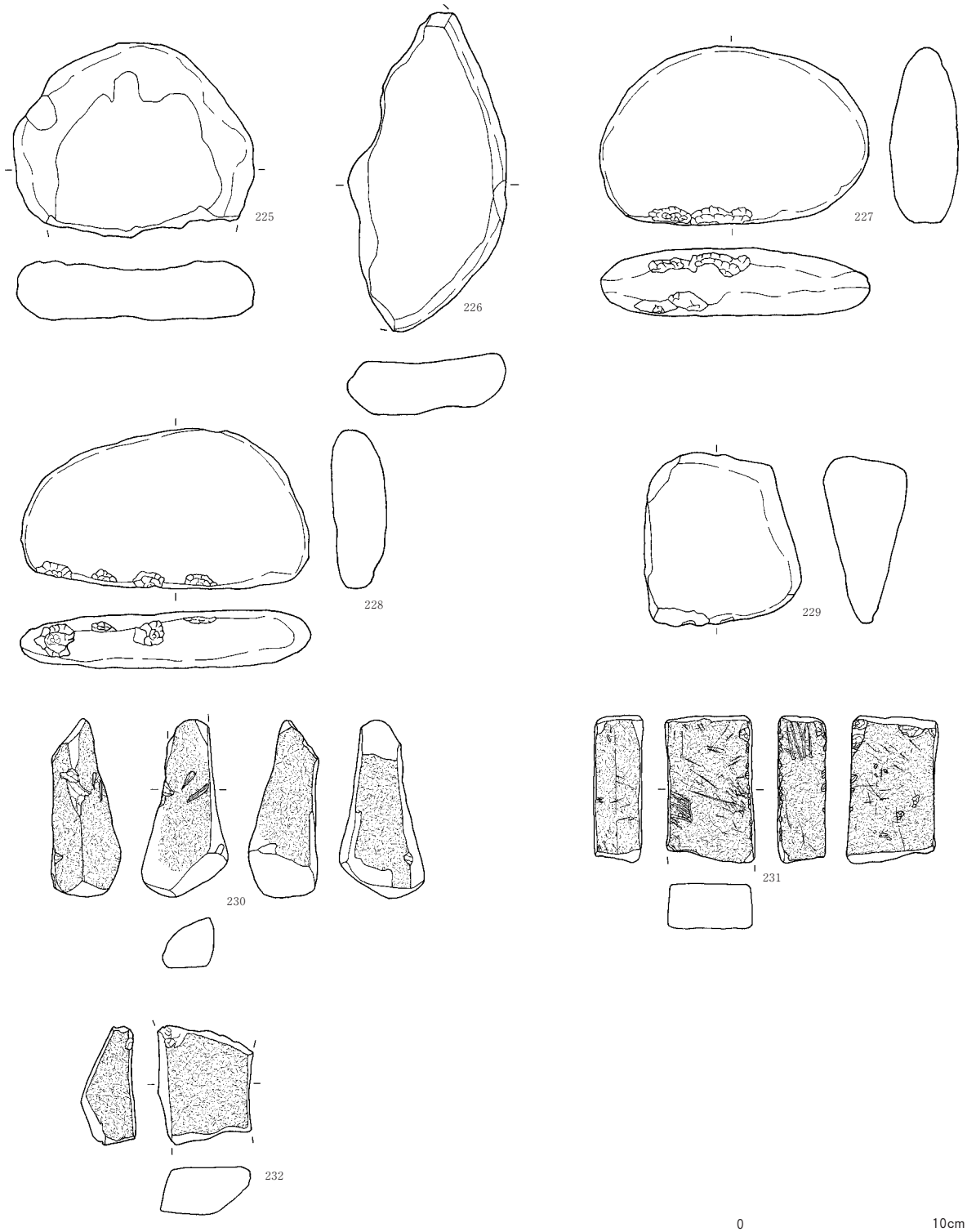


遺物No.	図版No.	出土遺構	層位	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石質	その他
211	—	MF27	—	UF	6.0	4.1	1.2	23.5	珪質頁岩	
212	—	LO18	—	UF	6.1	2.5	1.1	9.3	珪質頁岩	
213	—	MB19	—	UF	4.5	4.1	0.9	12.8	珪質頁岩	
214	—	MF33	—	R F	6.7	3.2	1.8	37.3	珪質頁岩	未成品
215	—	LS42	—	R F	6.0	2.2	1.5	15.0	珪質頁岩	
216	—	MF27	—	R F	8.2	6.7	2.1	129.0	珪質頁岩	
217	14	MG18	—	F	3.7	5.3	2.0	18.8	黒曜石	

第101図　遺構外出土石器（５）

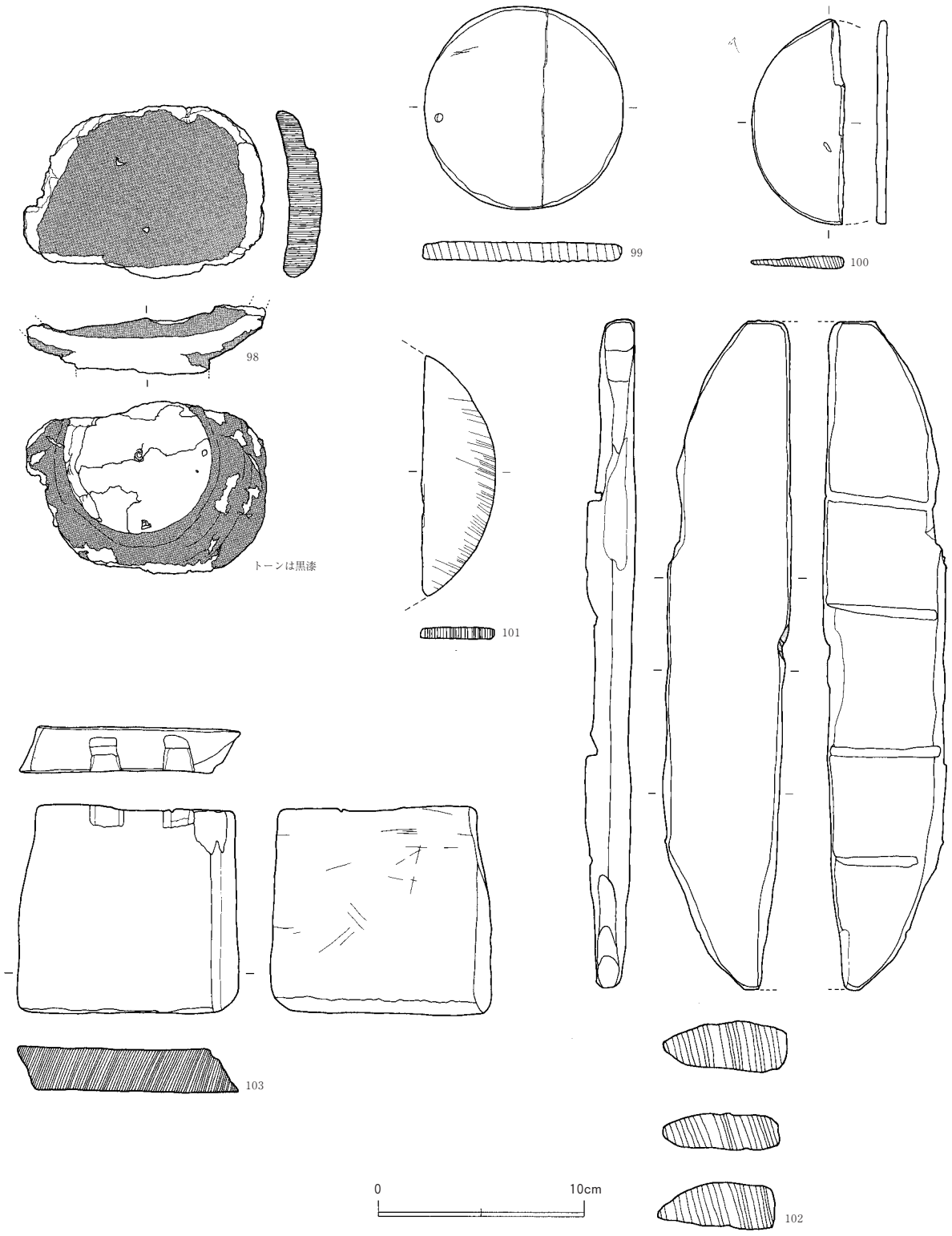
遺物No.	図版No.	出土遺構	層位	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石質	その他
218	14	表サイ	―	磨製石斧	〔9.1〕	5.6	3.0	200.0	デイサイト	基部欠損
219	14	MG28	―	磨製石斧	14.2	5.0	2.4	227.0	輝石安山岩	磨面剥げ、錆状付着物
220	14	MG31	―	磨製石斧	11.1	4.6	2.0	172.9	蛇紋岩	錆状付着物
221	―	MG26	―	磨製石斧	〔5.3〕	4.3	2.8	106.1	微斑レイ岩	基部・刃部欠損
222	14	MG19	―	磨製石斧	5.6	2.6	0.9	19.8	破砕岩	
223	14	11トレ	―	磨製石斧	4.9	2.7	1.0	19.6	蛇紋岩	範囲確認調査
224	14	MF30	―	磨製石斧	〔5.4〕	3.4	1.3	34.3	蛇紋岩	基部欠損

第102図　遺構外出土石器（６）



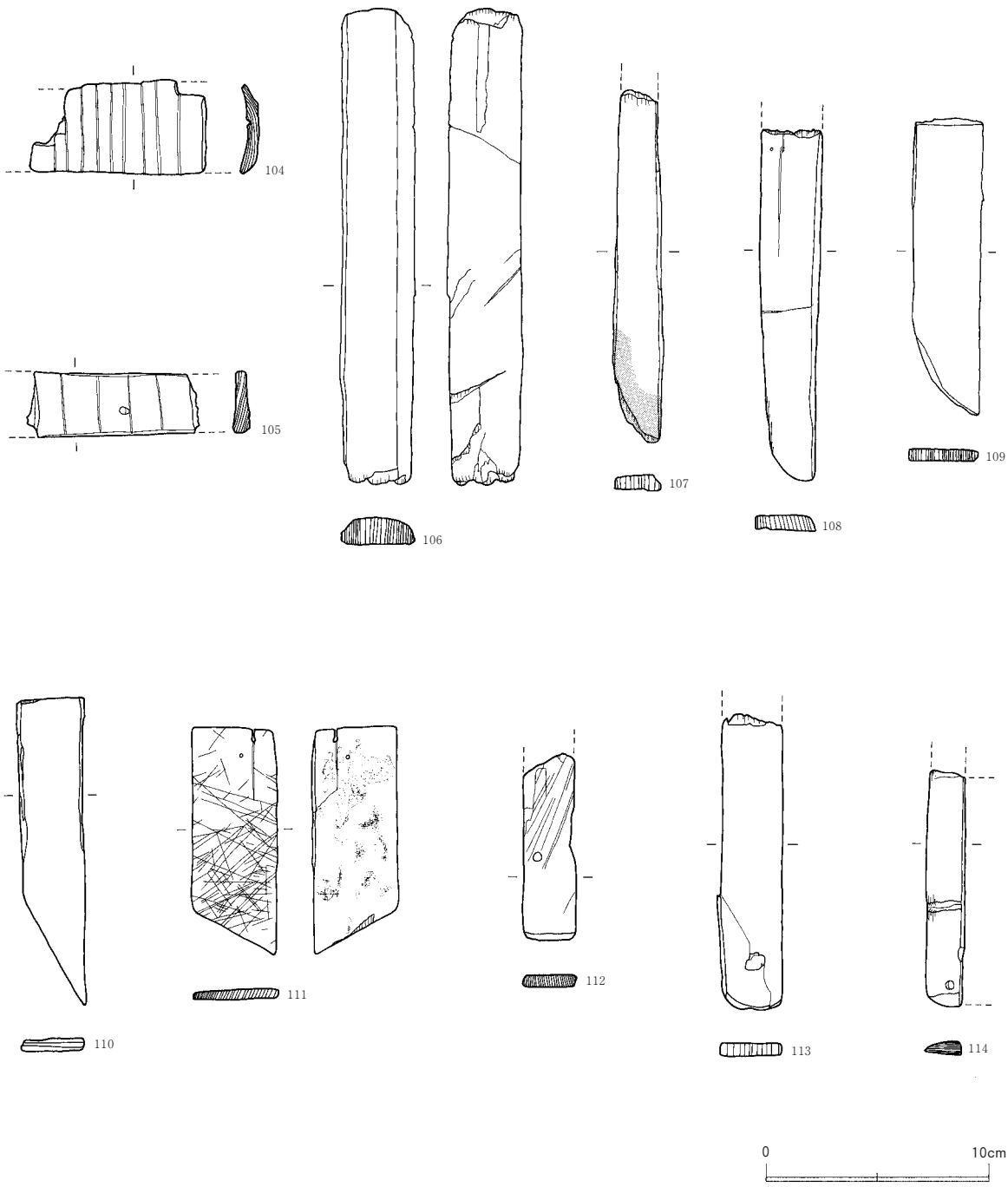
遺物No.	図版No.	出土遺構	層位	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石質	その他
225	―	LR40	―	石皿	9.4	11.7	3.0	449.4	輝石安山岩	
226	―	11トレ	―	石皿	〔15.4〕	〔7.7〕	3.5	338.7	デイサイト	範囲確認調査
227	―	未注記	―	半円状扁平石器	8.7	13.0	3.3	503.3	輝石安山岩	
228	14	MC19	―	半円状扁平石器	7.8	14.0	2.8	425.0	輝石安山岩	
229	―	表サイ	―	半円状扁平石器	8.4	7.6	4.2	323.7	輝石安山岩	
230	14	LR50	IIa	砥石	8.5	4.1	3.3	100.1	輝石安山岩	古代～
231	14	MC61	IIa	砥石	7.1	4.4	2.3	111.9	流紋岩	古代～
232	14	MD54	IIa	砥石	5.7	4.7	2.6	66.1	砂岩	古代～

第103図　遺構外出土石器（７）



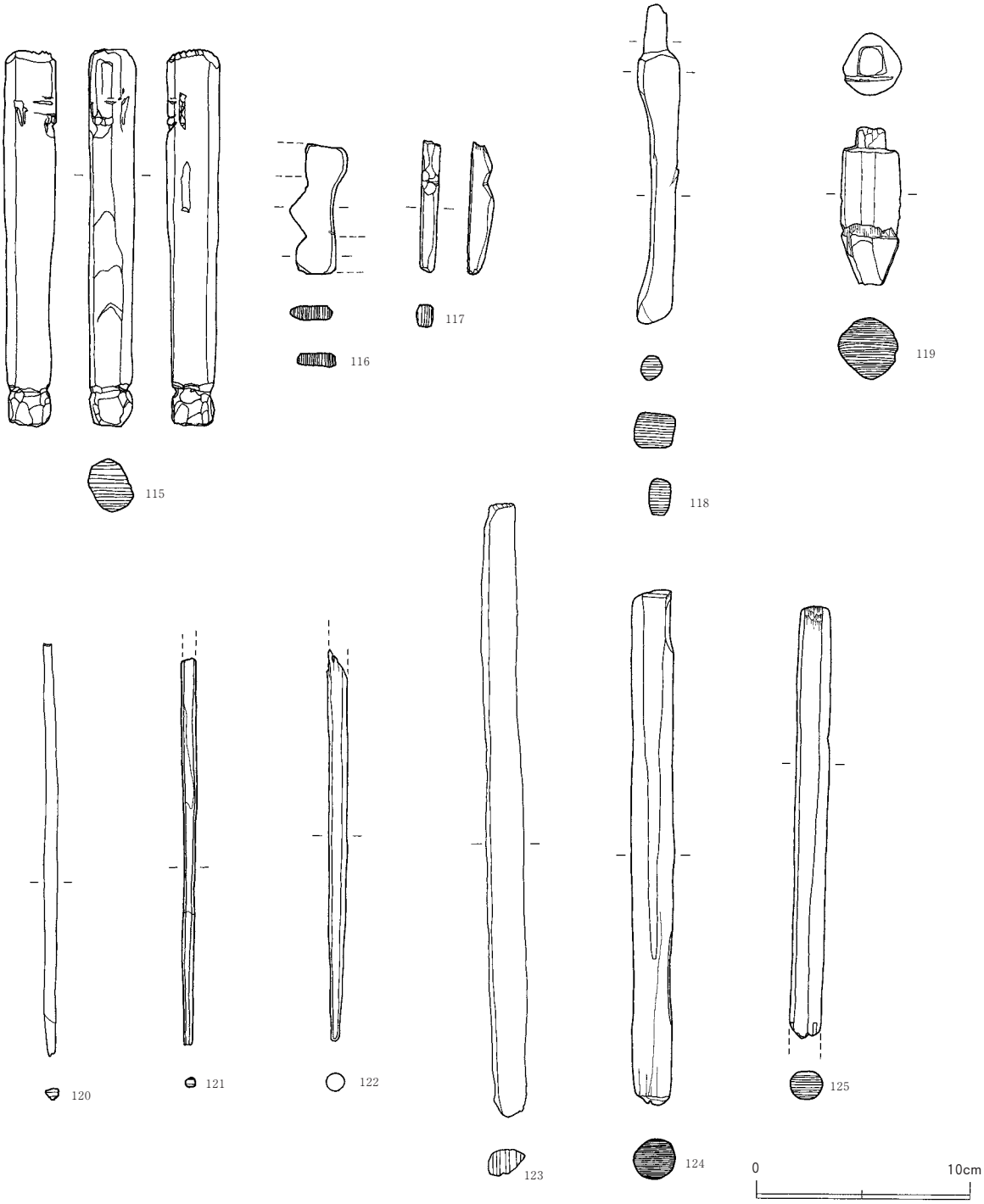
遺物No.	図版No.	出土位置	層位	器種	長さ・口径	幅・底径	厚さ・器高	樹種	その他
98	15	LQ41	—	漆器椀	—	〔7.4〕	〔3.3〕	ニレ科ケヤキ属ケヤキ	両面黒漆
99	—	表採	—	曲物底板	10.0	9.8	0.9	—	穿孔 1 箇所
100	—	LS39	—	曲物底板	〔4.6〕	10.0	0.6	—	
101	—	LS42	—	曲物底板	11.8	〔3.7〕	0.5	—	
102	15	ME61	II	用途不明	32.5	〔6.2〕	2.5	スギ科スギ属スギ	下駄？
103	15	表採	II	部材	10.2	10.9	2.3	—	側面に差し込み口 2 箇所

第104図　遺構外出土木製品（1）



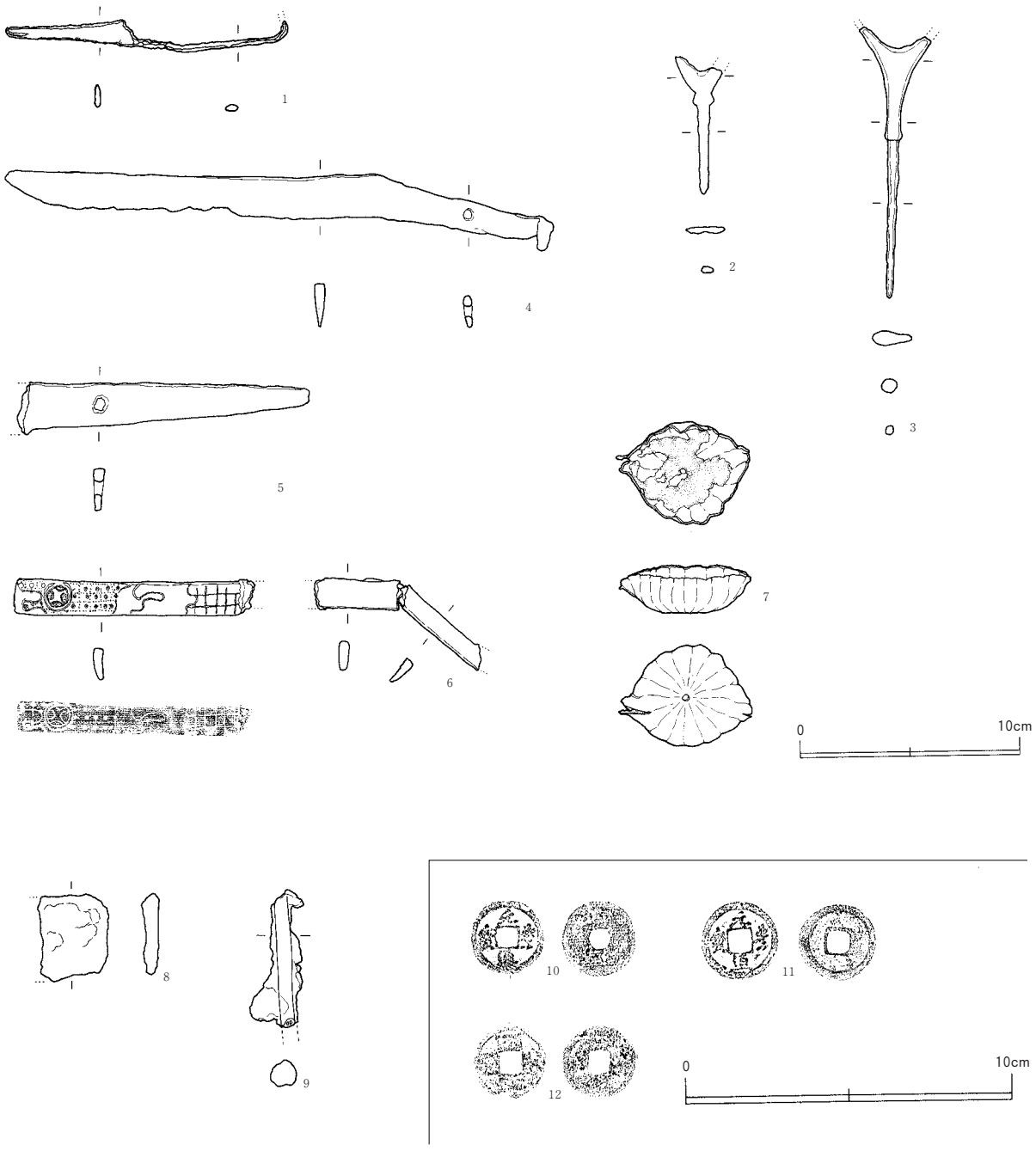
遺物No.	図版No.	出土位置	層位	器種	長さ	幅	厚さ	樹種	その他
104	—	LR40	—	曲物	8.0	4.3	0.7	—	切込９本
105	—	LS40	—	曲物	〔7.9〕	2.9	0.8	—	切込４本、穿孔１箇所
106	—	MB49	II	板状	〔21.4〕	3.3	1.2	—	断面蒲鉾状
107	—	MG26	—	板状	〔15.9〕	2.3	0.7	—	先端被熱
108	—	MB49	II	板状	〔15.9〕	2.8	0.7	—	先端加工、釘孔２箇所
109	—	表採	III	板状	13.4	3.2	0.6	—	下：加工、上：切断
110	—	LR45	II	板状	13.9	3.1	0.5	—	木札状
111	—	表採	—	板状	10.3	3.9	0.4	—	木札状、表：傷多、裏：墨状シミ
112	—	MA44	II	板状	〔8.5〕	2.4	0.5	—	檜扇？、穿孔１箇所、表：キズ
113	—	MB48	—	板状	〔13.4〕	3.0	0.6	—	檜扇？、穿孔１箇所
114	—	LT46	—	板状	〔10.7〕	〔1.2〕	0.9	—	穿孔１箇所、切込１本

第105図　遺構外出土木製品（２）



遺物No.	図版No.	出土位置	層位	器種	長さ	幅	厚さ	樹種	その他
115	2・15	LE41	II	人形	17.4	2.1	2.4	スギ科スギ属スギ	ＳＥ３０付近
116	15	LR43	―	用途不明	6.0	2.0	0.6	―	形代？
117	15	LT45	III	用途不明	6.1	0.85	1.1	―	形代？
118	15	MB45	―	膳脚	14.8	2.0	1.7	―	
119	15	LT45	II	脚	7.3	2.8	2.8	―	
120	―	MB41	―	箸	19.0	0.7	0.5	―	
121	―	表採	―	箸	〔17.8〕	0.7	0.4	―	
122	―	MG54	―	箸状	〔18.1〕	0.85	0.8	―	表面磨き
123	―	MD19	―	棒状	28.4	2.0	1.2	スギ科スギ属スギ	
124	―	MD54	―	棒状	23.8	2.0	2.0	―	表面磨き
125	―	MB34	―	棒状	〔21.5〕	1.5	1.3	―	表面磨き

第106図　遺構外出土木製品（３）



遺物No.	図版No.	出土位置	種別	長さ・外径	幅	厚さ・器高	重量	磁着度	メタル度	備考
1	15	表採	和鋏	12.9	1.5	0.2～0.5	3.8	6	特Ｌ（☆）	
2	15	ＬＴ40	雁袴鏃	2.1	6.2	0.3	3.1	6	特Ｌ（☆）	
3	15	表採	雁袴鏃	3.3	12.3	0.7	11.3	6	特Ｌ（☆）	
4	15	表採	小刀	26.0	3.6	0.5	60.6	7	特Ｌ（☆）	
5	15	表採	刀具（中茎）	13.4	2.4	0.7	49.5	8	特Ｌ（☆）	
6	15	ＭＦ52	刀子（柄）	11.1	1.7	0.5	44.0	4	特Ｌ（☆）	鉄芯？を薄い金属でくるんでいる
	15		刀子（刃？）	9.8	1.4	0.5				
7	15	ＭＥ40	銅製容器	6.0	4.6	2.2	16.0	1	Ｌ（●）	厚さ：0.7～0.8㎜
8	15	表採	板状鉄製品	3.3	3.9	0.8	11.9	4	Ｈ（○）	
9	15	ＬＥ28	釘	2.5	6.25	1.8	17	5	錆化（△）	頭部折れ曲がり
10	15	ＭＤ42	元豊通宝	2.3	―	0.15	2.7	1	特Ｌ（☆）	北宋（1078年初鋳）
11	15	ＭＤ54	元豊通宝	2.3	―	0.15	2.8	1	特Ｌ（☆）	北宋（1078年初鋳）
12	15	ＭＣ34	銭貨	2.3	―	〔0.05〕	1.5	1	特Ｌ（☆）	■状の凸が２箇所

第107図　遺構外出土金属製品

遺物No.	図版No.	出土位置	種別	長さ	幅	厚さ	重量	磁着度	メタル度	備考
13	—	ＳＥ30	不明滓	2.3	2.8	1.2	6.6	1	なし	製錬炉？
14	—	ＳＥ30	不明滓	2.7	2.1	1.4	6.8	1	なし	製錬炉？
15	—	ＳＥ30	不明滓	12.0	9.5	5.0	441.4	1	なし	製錬炉？
16	—	ＳＥ30	炉壁	5.3	4.9	3.4	36.5	1	なし	製錬炉？
17	15	ＳＥ30	羽口	16.0	9.7	5.5	432.2	1	なし	製錬炉？
18	—	ＳＫ17	炉壁	6.0	10.6	3.1	107.9	1	なし	製錬炉？
19	—	ＳＬ06	椀形鍛冶滓（中）	3.6	4.0	3.6	54.1	5	H（○）	
20	—	ＳＬ06	椀形鍛冶滓（中）	3.25	3.45	4.5	58.3	4	H（○）	
21	15	ＳＬ06	羽口	8.6	6.6	3.5	92.2	1	なし	
22	—	表採	不明滓	7.1	4.7	3.5	76.0	1	なし	製錬炉？
23	—	ＭＤ53	不明滓	9.4	5.8	4.0	147.8	4	なし	製錬炉？
24	—	排土中	不明滓	7.5	6.8	5.2	286.6	1	なし	製錬炉？
25	—	ＬＰ42	不明滓	5.9	8.1	5.4	222.4	6	錆化（△）	製錬炉？
26	—	ＭＢ49	椀形鍛冶滓（中）	5.6	8.6	3.8	208.4	7	H（○）	

第108図　鍛冶関連遺物（１）

遺物No.	図版No.	出土位置	種別	長さ	幅	厚さ	重量	磁着度	メタル度	備考
27	—	ＭＦ54	椀形鍛冶滓（中）	6.9	7.6	5.4	238.6	7	Ｈ（○）	
28	—	ＬＨ26	椀形鍛冶滓（中）	6.9	10.5	3.4	253.0	6	Ｈ（○）	丘陵部
29	—	ＬＧ27	椀形鍛冶滓（中）	4.1	5.6	3.5	80.0	6	錆化（△）	丘陵部
30	—	ＭＧ54	椀形鍛冶滓（小）	4.8	5.1	2.0	45.9	7	Ｈ（○）	
31	—	ＬＳ41	椀形鍛冶滓（小）	4.8	5.3	2.6	61.1	5	Ｈ（○）	
32	—	ＭＣ19	羽口	4.9	4.3	2.3	36.8	1	なし	
33	—	ＭＢ19	羽口	4.4	4.8	3.0	46.0	4	なし	
34	—	ＭＢ16	羽口	5.5	4.9	3.0	46.8	3	なし	
35	—	ＭＤ34	羽口	8.3	6.7	3.9	73.3	1	なし	
36	—	ＭＢ19	羽口	3.7	4.15	3.5	21.3	3	錆化（△）	
37	—	ＭＡ39	炉壁	4.1	3.9	2.3	20.9	1	なし	
38	—	ＭＧ54	炉壁	4.6	5.8	4.35	51.1	1	なし	
39	—	ＭＦ54	被熱石	5.6	5.3	3.5	45.6	1	なし	
40	—	ＭＣ54	被熱石	7.2	12.3	4.4	308.3	1	なし	

第109図　鍛冶関連遺物（２）

第３章　丘陵部分調査の記録

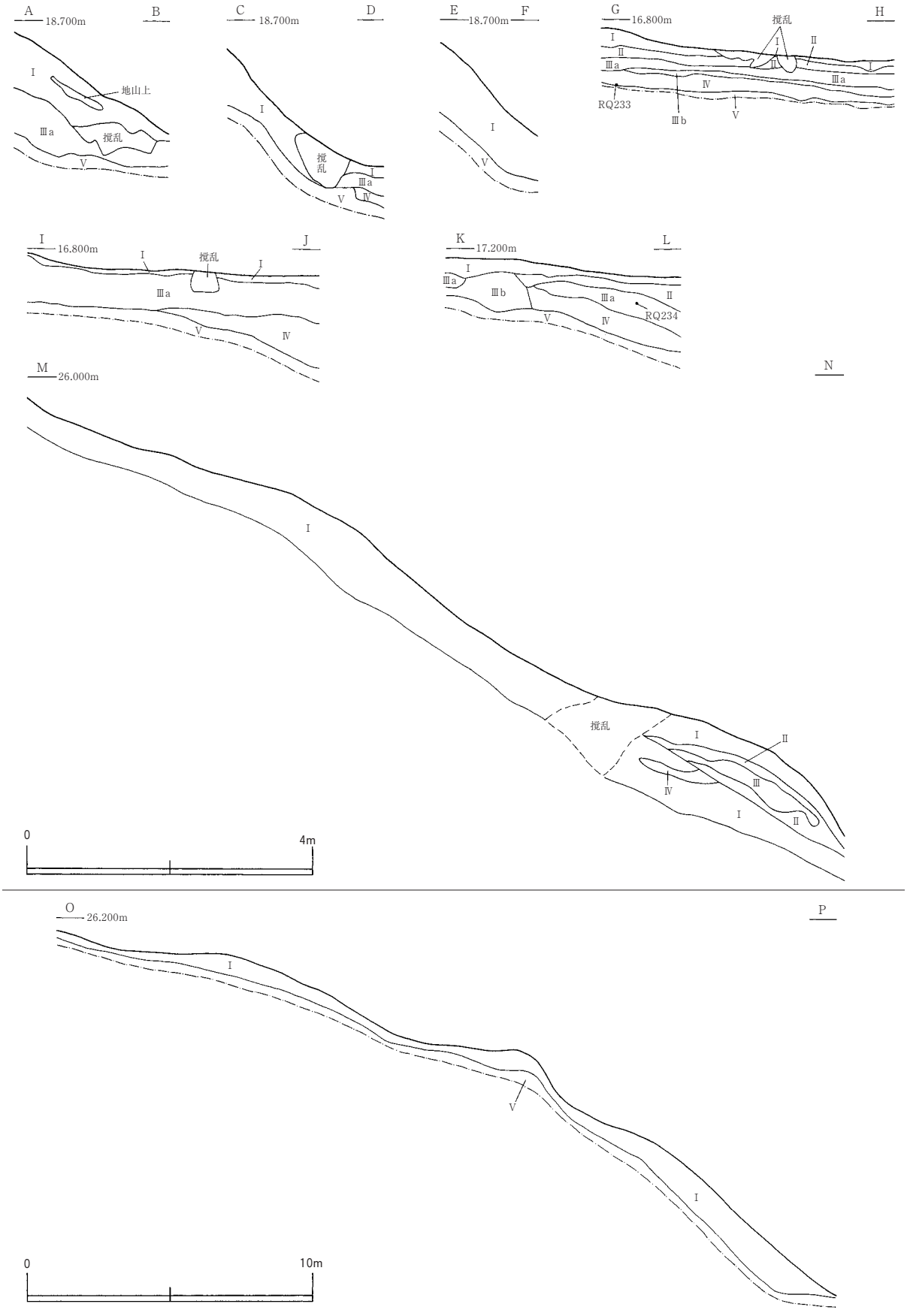
第１節　丘陵部分の基本土層

丘陵部分の基本土層は以下のＡ－Ｂ～Ｏ－Ｐのベルトを設定して観察を行った。この地区の多くはやや急な斜面地で、このうち切り土によって造られた平坦な面を中心に遺構が検出された。急斜面の下には地滑りのためと考えられる堆積も観られた。また調査区の間には林道が走っており、この敷設の際に斜面が大きく切り崩されている可能性が高い。

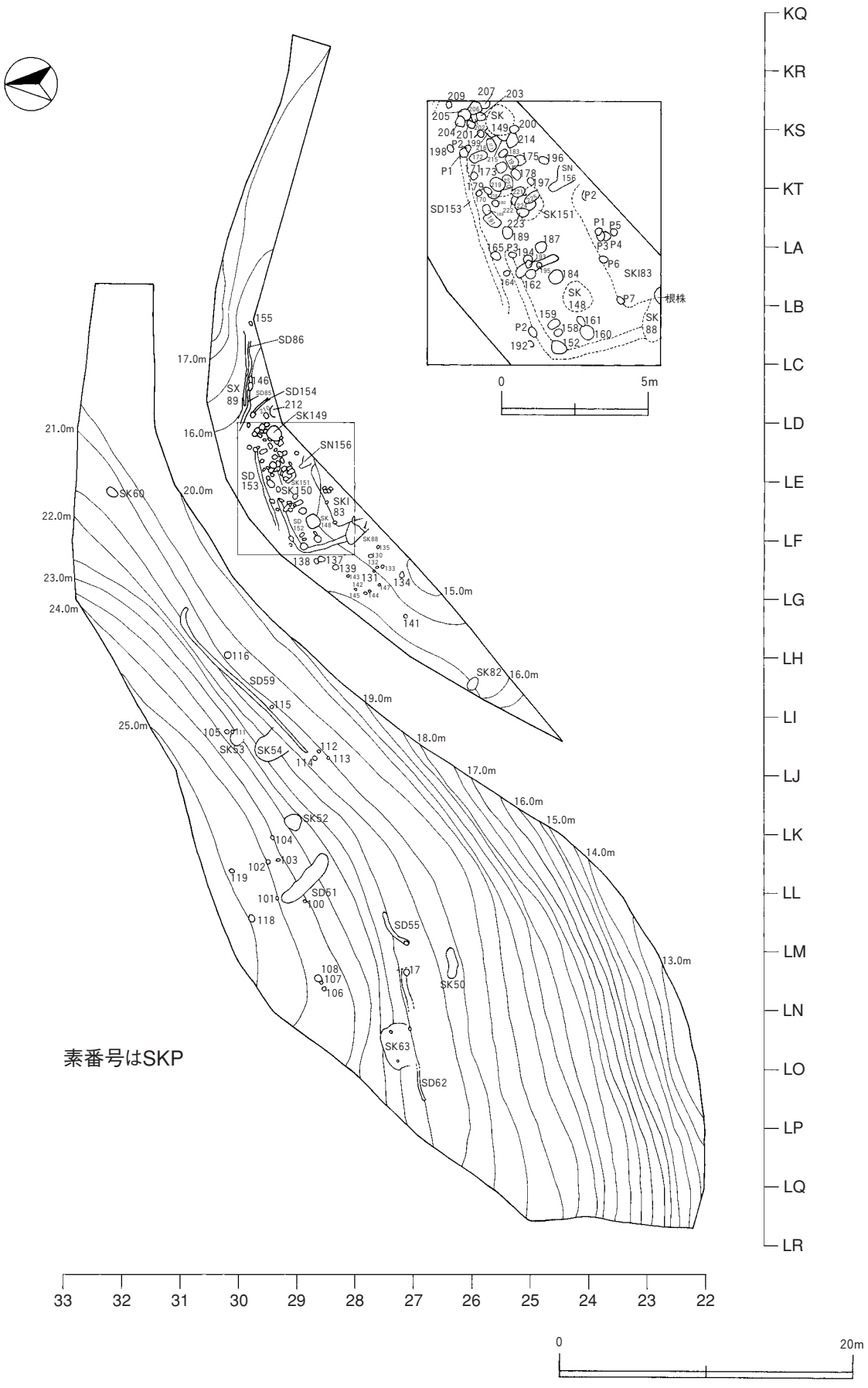
丘陵部分（Ａ－Ｂ～Ｏ－Ｐ）（第110・111図）

Ⅰ　層：10ＹＲ２／２　黒　褐　色　シルト質土・・・・表土層
Ⅱ　層：10ＹＲ４／３　にぶい黄褐色　シルト質土　炭化物、焼土粒が混入
Ⅲａ層：10ＹＲ３／４　暗　褐　色　シルト質土　炭化物、焼土粒、地山粒が混入
Ⅲｂ層：10ＹＲ３／４　暗　褐　色　シルト質土　炭化物、地山塊が混入
Ⅳ　層：10ＹＲ３／３　暗　褐　色　シルト質土　炭化物・焼土が混入・・・・遺構確認面
Ⅴ　層：7.5ＹＲ５／６　明　褐　色　シルト質土・・・・遺構確認面

第110図　グリッド配置とトレンチ位置図（丘陵部分）



第111図　基本土層図（丘陵部分）



第112図　遺構配置図（丘陵部分）

第２節　検出遺構と出土遺物

丘陵部分で検出した遺構は溝跡９条、竪穴状遺構１基、土坑13基、柱穴様ピット91基である。遺構の殆どがほぼ平坦な地域にあり、範囲は狭いが切り土による造成がされたと考えられ、このような地域は調査区内に３面ある。調査区の北側には広い平坦面が複数あり、確認調査で焼土遺構や中世の陶磁器等が検出されたほか、本荘市教育委員会の調査で縄文時代と古代の遺物包含層が確認されている。

（１）溝跡

ＳＤ55（第113図）

ＬＬ27グリッドに位置する。Ⅴ層精査中に黒色の緩やかに湾曲した溝状プランを確認した。長さ（南西－北東）1.9ｍ、幅（北西－南東）約0.25ｍで、確認面からの深さは0.06ｍである。埋土は２層に分かれる。１層は暗褐色のシルト質土、２層は褐色のやや粘性の強いシルト質土である。遺物は出土しなかった。ＳＤ59・63と同様に斜面の裾に掘られており、排水を目的としたものと考えられる。

ＳＤ59（第113図、図版６）

ＬＧ30、ＬＨ29、ＬＩ28・29グリッドに位置する。Ⅴ層精査中に黒褐色の溝状プランを確認した。ＳＫ54に隣接するが、直接の切り合いはない。長さ（南西－北東）13.4ｍ、幅（南東－北西）0.2～0.4ｍで、確認面からの深さは0.06～0.08ｍである。埋土は黒褐色のシルト質土の単一層である。遺物は出土しなかった。ＳＤ55・63と同様に斜面の裾に掘られており、北東端で鋭角に折れ曲がる。

ＳＤ62（第114図）

ＬＮ・ＬＯ26グリッドに位置する。Ⅴ層精査中に黒褐色の溝状プランを確認した。ＳＫ63に隣接する。ＳＫ63に隣接する部分で途切れる。西側部分は、長さ（東－西）2.3ｍ、幅（南－北）0.14ｍで、確認面からの深さは0.05ｍである。東側部分は、長さ（東－西）1.7ｍ、幅（南－北）0.29ｍで、確認面からの深さは0.05ｍである。途切れている部分の距離は約4.2ｍである。埋土は黒褐色のシルト質土の単一層である。遺物は出土しなかった。ＳＤ55・59と同様に斜面の裾に掘られている。

ＳＤ85（第113図）

ＬＣ29グリッドに位置する。Ⅴ層精査中にＳＸ89に並行する黒褐色の溝状プランを確認した。ＳＫＰ146に切られ、東端でＳＤ86と接する。調査区外に延びるため全長は不明だが、検出した長さ（東－西）3.54ｍ、幅（南－北）0.2ｍで、確認面からの深さは0.08ｍである。埋土は黒褐色のシルト質土の単一層である。遺物は出土しなかった。ＳＤ86と共にＳＸ89に関連した排水溝と考えられる。

ＳＤ86（第113図）

ＬＢ･ＬＣ29グリッドに位置する。Ⅴ層精査中にＳＸ89に並行する黒褐色の溝状プランを確認した。ＳＤ86の東端と接するが直接の切り合いはない。検出した長さ（東－西）4.32ｍ、幅（南－北）0.18ｍで、確認面からの深さは0.08ｍである。埋土は黒褐色のシルト質土の単一層である。遺物は出土しなかった。ＳＤ85と共にＳＸ89に関連した排水溝と考えられる。

ＳＤ152（第115図）

ＬＥ28・29、ＬＦ28・29グリッドに位置する。Ⅴ層精査中に褐色の溝状プランを確認した。ＳＤ155とＳＫ88に切られ、３基の柱穴を伴う。切り合いのため全長は不明だが、検出した長さ（東－西、南－北）約6.1ｍ、幅（南－北、東－西）0.36ｍで、確認面からの深さは0.08ｍである。東から3.9

mでほぼ直角に屈折する。埋土は暗褐色のシルト質土の単一層である。柱穴の埋土は暗褐色～にぶい黄褐色のシルト質土で地山塊を含んだ単一層である。遺物は出土しなかった。当初は形状から竪穴住居跡の壁溝を想定し調査したが、特定には至らなかった。ＳＤ153、ＳＫＩ83と主軸をともにする。

ＳＤ153（第115図）

ＬＤ・ＬＥ29グリッドに位置する。Ⅴ層精査中に褐色の溝状プランを確認した。ＳＫＰ165に切られ、２基の柱穴を伴い、Ｐ１がＰ２を切っている。検出した長さ（南西－北東）5.82ｍ、幅（南東－北西）0.13ｍで、確認面からの深さは0.06ｍである。埋土はにぶい黄褐色のシルト質土の単一層である。遺物は出土しなかった。ＳＤ152・ＳＫＩ83と主軸をともにする。

ＳＤ154（第115図）

ＭＣ29グリッドに位置する。Ⅴ層精査中に褐色の溝状プランを確認した。柱穴を１基伴っている。調査区外に延びるため全長は不明だが、検出した長さ（北西－南東）1.72ｍ、幅（北東－南西）0.18ｍで、確認面からの深さは0.06ｍである。埋土はにぶい黄褐色のシルト質土の単一層である。遺物は出土しなかった。ＳＤ153の延長上にあることから同一のものであった可能性が高い。

ＳＤ155（第115図）

ＬＥ28・29グリッドに位置する。Ⅴ層精査中に褐色の溝状プランを確認した。ＳＤ152を切り、ＳＫＰ162・192・194・195に切られている。長さ（南東－北西）1.56ｍ、幅（南西－北東）0.28ｍで、確認面からの深さは0.46ｍである。埋土は暗褐色のシルト質土の単一層で、遺物は出土しなかった。

（２）竪穴状遺構

ＳＫＩ83（第116図、図版６）

ＬＤ28、ＬＥ27・28グリッドに位置する。Ⅴ層精査中に褐色のプランを確認した。ＳＫ88を切り、７基の柱穴を伴っている。長軸（東－西）4.37ｍ×短軸（南－北）残存値1.12ｍで、確認面からの深さは0.36ｍである。南側が調査区外に延びるが、方形を呈すると考えられる。埋土は６層に分かれる。１層はにぶい黄褐色と黄褐色のシルト質土が混じり合って堆積し、炭化物等の混入により細分される。２層は暗褐色、３層は褐色、４層は暗褐色のいずれもシルト質土で、炭化物や地山塊、ＳＮに由来すると考えられる焼土を含んでいる。５・６層はⅣ層に由来すると考えられる暗褐色のシルト質土である。検出した炭化物は自然科学的分析から15世紀前半の数値が得られた。またＰ１からは径約10㎝の礫が多数出土した。ＳＤ152・153と主軸をともにする。

（３）土坑

ＳＫ50（第117図）

ＬＬ・ＬＭ26グリッドに位置する。Ⅴ層精査中に楕円形の黒色プランを確認した。長軸（南－北）2.8ｍ×短軸（東－西）0.52ｍで、確認面からの深さは0.41ｍである。底面はやや丸みをおび、壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は黒褐色のシルト質土の単一層で、赤褐色土と炭化物を僅かに含む。遺物は出土しなかった。

ＳＫ51（第117図）

ＬＫ28・29、ＬＬ28・29グリッドに位置する。Ⅴ層精査中に楕円形の黒色プランを確認した。長軸（北西－南東）4.46ｍ×短軸（北東－南西）0.98ｍで、確認面からの深さは0.2ｍである。底面はほぼ平らで、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は黒褐色のシルト質土の単一層で、暗赤褐色土と炭化物

を僅かに含む。遺物は出土しなかった。

ＳＫ52（第117図）

ＬＪ28・29グリッドに位置する。Ⅴ層精査中に円形の黒色プランを確認した。径約1.1ｍで、確認面からの深さは0.1～0.3ｍのほぼ円形である。斜面に掘り込まれており北西側の壁は僅かにあるのみである。底面は平らで南東側の壁はやや急に立ち上がる。埋土は黒褐色のシルト質土の単一層で、明黄褐色土と炭化物を僅かに含む。遺物は出土しなかった。

ＳＫ53（第117図）

ＬＴ29・30グリッドに位置する。Ⅱ層精査中に半円形の黒色プランを確認した。ＳＫＰ111に切られている。長軸（北東－南西）1.1ｍ×短軸（北西－南東）残存値0.6ｍで、確認面からの深さは0.4ｍである。壁は緩やかに立ち上がる。埋土は６層に分かれ、黒褐色と褐色のシルト質土が互層となっており、炭化物や地山塊の混入状況から分層した。遺物は出土しなかった。Ⅱ層で検出した遺構はこの１基のみであり、他の遺構とは時代を異にすると考えられる。

ＳＫ54（第118図）

ＬＩ29グリッドに位置する。Ⅴ層精査中に不整円形の黒色プランを確認した。長軸（北西－南東）2.0ｍ×短軸（北東－南西）1.7ｍで、確認面からの深さは1.3ｍである。斜面をコの字状に掘り込んだ形状で、開口部側は斜面が緩やかになりほぼ平坦な面に向いており、ＳＤ59が配置されている。埋土は５層に分かれる。１層は黒褐色、２層は褐色・浅黄色・黄褐色の混合土、３層は黄褐色、４層は黒色、５層は褐色でいずれもシルト質土である。遺物は出土しなかった。遺構の立地や形状、ＳＤ59との位置関係等からＳＫ63と同様の目的をもった遺構と考えられる。

ＳＫ60（第118図）

ＬＥ32グリッドに位置する。Ⅴ層精査中に円形の黒色プランを確認した。長軸（南－北）0.76ｍ×短軸（東－西）0.6ｍで、確認面からの深さは0.2ｍである。底面はほぼ平らで、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は黒褐色のシルト質土の単一層で、地山塊と炭化物を僅かに含む。遺物は出土しなかった。

ＳＫ63（第114図）

ＬＮ27グリッドに位置する。Ⅴ層精査中に方形の褐色プランを確認した。ＳＤ62と隣接し、３基の柱穴を伴う。長軸（南西－北東）3.2ｍ×短軸（北東－南西）1.5ｍで、確認面からの深さは最深部で1.0ｍである。ＳＫ54と同様に斜面をコの字状に掘り込んだ形状で、開口部側は斜面が緩やかになりほぼ平坦な面に向いており、ＳＤ62が配置されている。埋土は２層に分かれる。いずれも暗褐色のシルト質土で炭化物を含み、２層ではにぶい黄橙色土が混じる。遺物は出土しなかった。

ＳＫ82（第118図）

ＬＨ25・26グリッドに位置する。Ⅴ層精査中に楕円形の黒色プランを確認した。遺構の南東側が攪乱によって失われている。長軸（北西－南東）約0.8ｍ×短軸（北東－南西）0.62ｍで、確認面からの深さは0.42ｍである。埋土は黒褐色の粘性の強いシルト質土の単一層で、地山塊と焼土粒を僅かに含む。遺物は出土しなかった。

ＳＫ88（第116図）

ＬＥ27・28、ＬＦ27・28グリッドに位置する。Ⅴ層精査中に半楕円形の黒色プランを確認した。南

東側がＳＫＩ82に切られるとともに、攪乱によって失われている。切り合いや攪乱のため全体の規模は不明だが、長軸（北西－南東）残存値1.36ｍ×短軸（南西－北東）1.22ｍで、確認面からの深さは0.73ｍである。埋土は3層に分かれる。1層は黒褐色のシルト質土、2・3層はともに暗褐色のシルト質土で、3層は粘土塊を含んでいる。遺物は出土しなかった。

ＳＫ148（第118図）

ＬＥ28グリッドに位置する。Ⅴ層精査中に不整円形の黒色プランを確認した。長軸（東－西）1.0ｍ×短軸（南－北）0.92ｍで、確認面からの深さは0.37ｍである。埋土は暗褐色のシルト質土の単一層で、明黄褐色土と炭化物を僅かに含む。遺物は出土しなかった。

ＳＫ149（第119図）

ＬＤ29グリッドに位置する。Ⅴ層精査中に複数に切り合う円形の褐色プランを確認した。ＳＫＰ213・215・217を切り、ＳＫＰ200に切られる。長軸（北東－南西）1.02ｍ×短軸（北西－南東）0.97ｍで、確認面からの深さは0.36ｍである。埋土は褐色のシルト質土の単一層で、炭化物を僅かに含む。遺物は出土しなかった。遺構が検出されたのは丘陵部で最も遺構の濃い地域で、北側にＳＤ152・153、南側にＳＫＩ82がある。これらは住居跡等を構成する一連の遺構であった可能性が考えられる。

ＳＫ150（第119図）

ＬＤ29グリッドに位置する。Ⅴ層精査中で複数に切り合う円形の黒褐色プランを確認した。ＳＫＰ218～221に切られる。切り合いのため全体の規模は不明だが、長軸（北－南）残存値0.29ｍ×短軸（東－西）残存値0.15ｍで、確認面からの深さは0.1ｍである。埋土は黒褐色のシルト質土の単一層である。遺物は出土しなかった。ＳＫ149・151と同様の性格が考えられる。

ＳＫ151（第119図）

ＬＤ・ＬＥ29グリッドに位置する。Ⅴ層精査中で複数に切り合う円形の褐色プランを確認した。ＳＫＰ223～225に切られる。切り合いのため全体の規模は不明だが、長軸（東－西）1.04ｍ×短軸（南－北）約0.32ｍで、確認面からの深さは0.58ｍである。埋土はにぶい黄褐色のシルト質土の単一層で、地山塊と炭化物を僅かに含む。遺物は出土しなかった。ＳＫ149・150と同様の性格が考えられる。

（4）焼土遺構

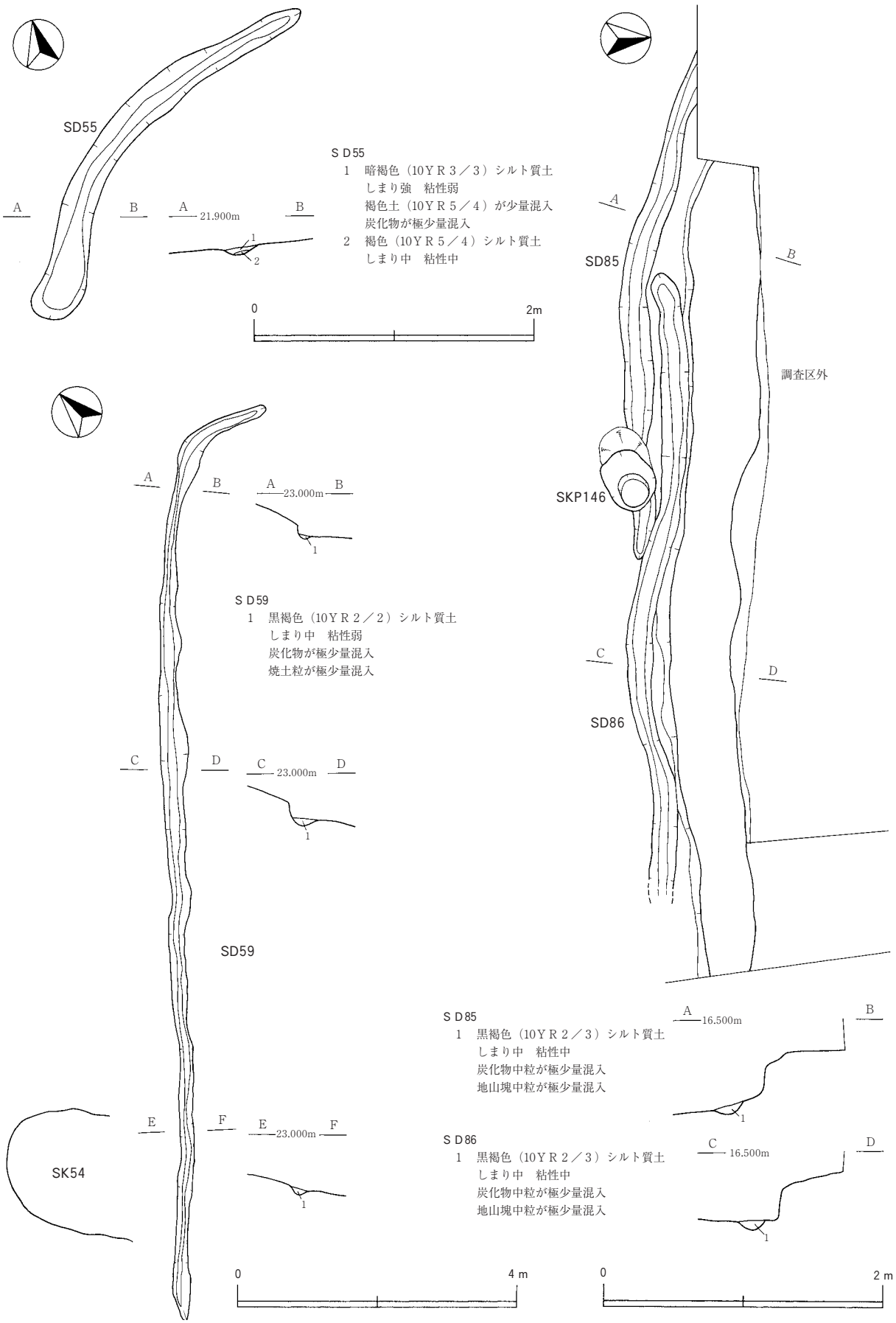
ＳＮ156（第116図）

ＬＤ28グリッドに位置する。Ⅴ層精査中に焼土を伴う不整形のプランを確認した。直接の切り合いはないが、西側にＳＫＩ83が隣接する。調査区外に延びるため全体の規模は不明だが、長軸（北西－南東）0.81ｍ×短軸（北東－南西）0.4ｍで、確認面からの深さは0.36ｍである。埋土はにぶい黄褐色のシルト質土の単一層で、上面で炭化物を伴う暗赤褐色の焼土を検出した。遺物は出土しなかった。

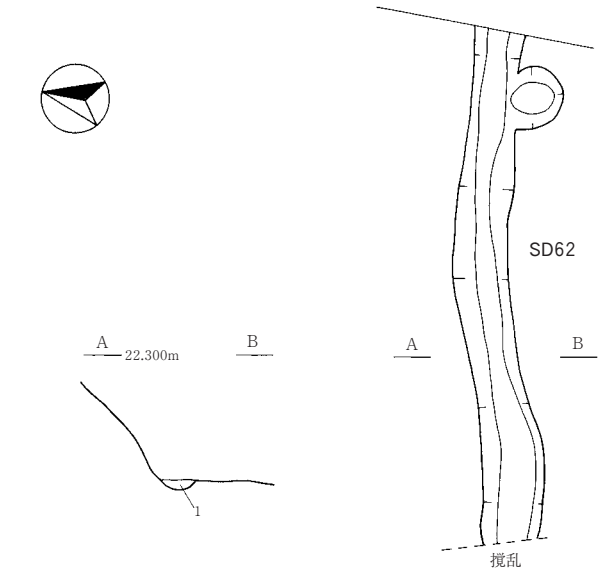
（5）性格不明遺構

ＳＸ89（第113図）

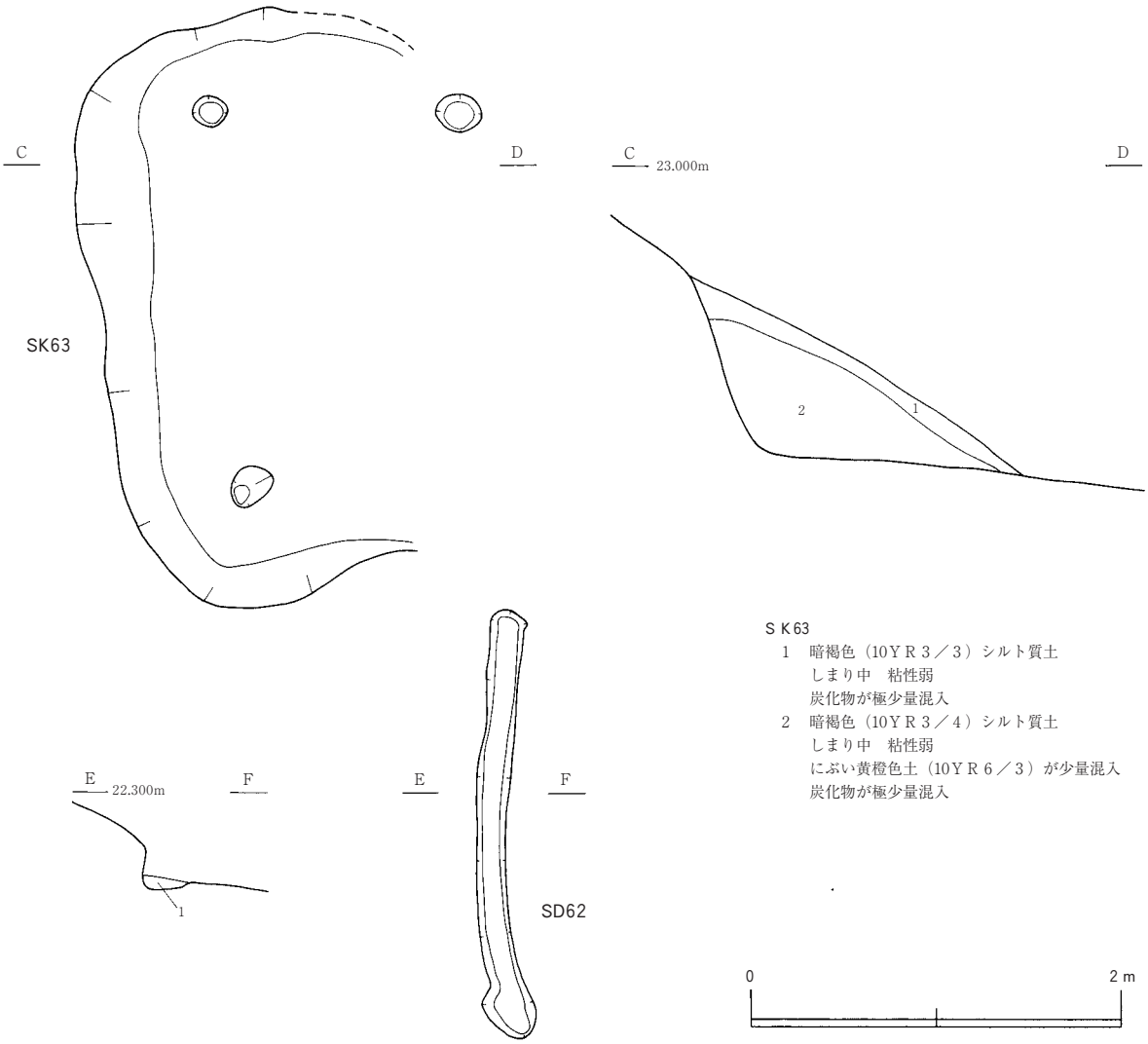
ＬＢ・ＬＣ29グリッドに位置する。Ⅴ層精査中に斜面の裾が段状に削り出された状態を確認した。南側に主軸を共にするＳＤ85・86が並行する。遺構の三方が調査区外に延びるため全体の規模は不明だが、検出した長軸（東－西）5.80ｍ×短軸（南－北）0.38ｍである。遺物は出土しなかった。この遺構の存在から土地利用のため、丘陵の地形造成が行われたことが推察される。



第113図　溝跡（ＳＤ55・59・85・86）・性格不明遺構（ＳＸ89）

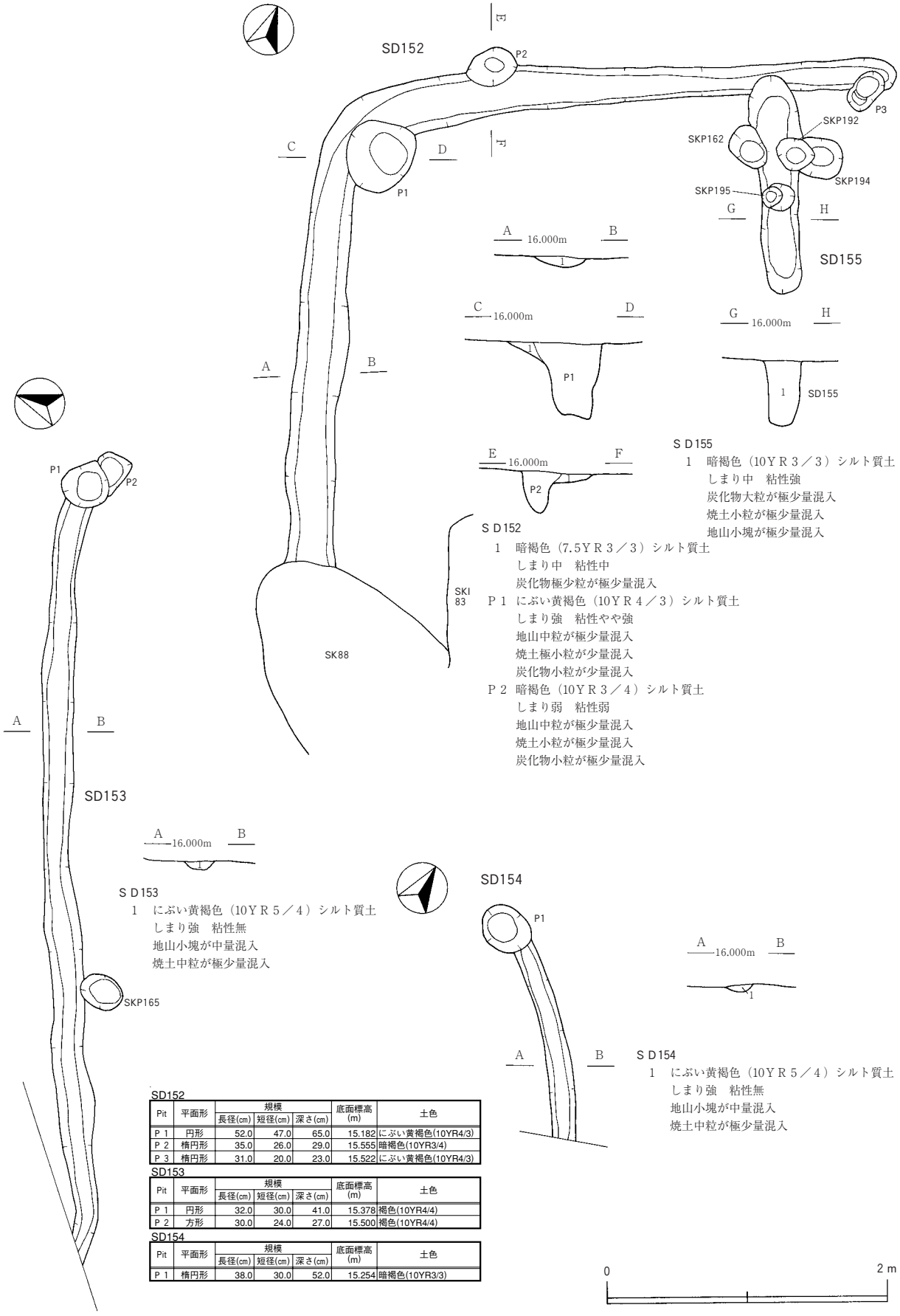


SD62
1　黒褐色（10YR３／２）シルト質土
　しまり強　粘性弱
　黒褐色土（10YR２／２）が少量混入
　にぶい黄色土（10YR５／３）大粒が少量混入
　炭化物が極少量混入



SK63
1　暗褐色（10YR３／３）シルト質土
　しまり中　粘性弱
　炭化物が極少量混入
2　暗褐色（10YR３／４）シルト質土
　しまり中　粘性弱
　にぶい黄橙色土（10YR６／３）が少量混入
　炭化物が極少量混入

第114図　溝跡（SD62）・土坑（SK63）



SD152

Pit	平面形	規模 長径(cm)	規模 短径(cm)	規模 深さ(cm)	底面標高 (m)	土色
Ｐ１	円形	52.0	47.0	65.0	15.182	にぶい黄褐色(10YR4/3)
Ｐ２	楕円形	35.0	26.0	29.0	15.555	暗褐色(10YR3/4)
Ｐ３	楕円形	31.0	20.0	23.0	15.522	にぶい黄褐色(10YR4/3)

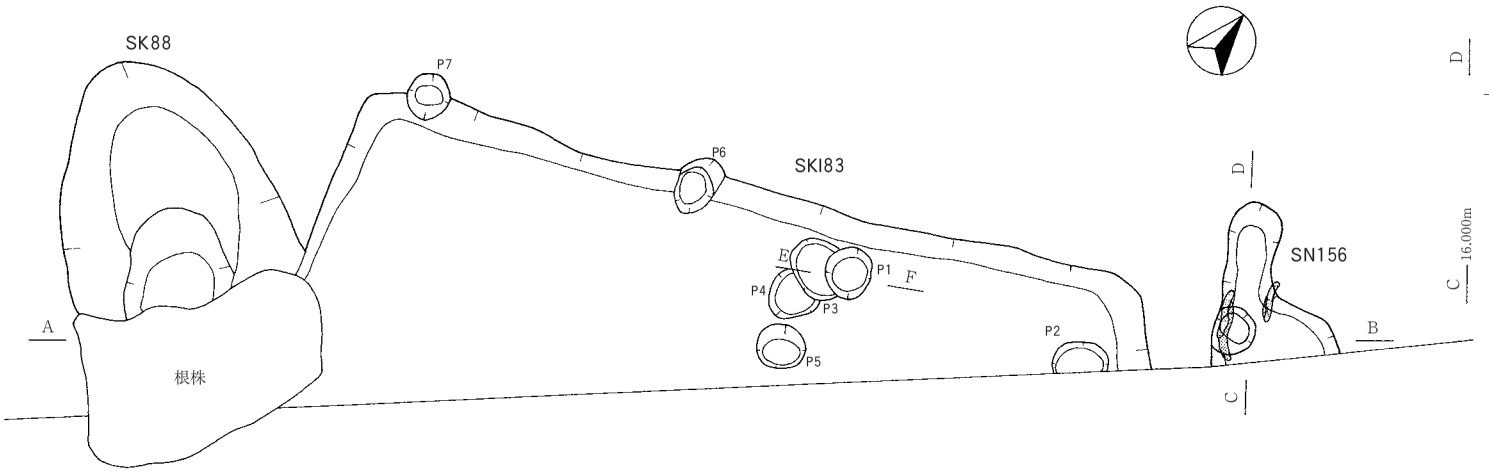
SD153

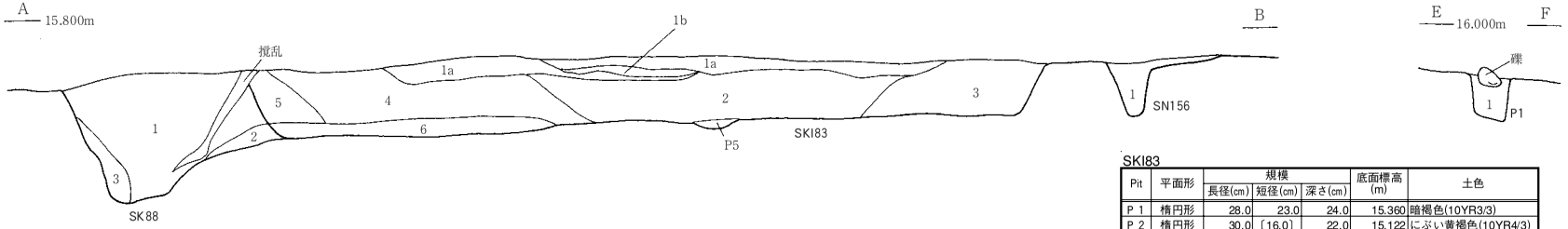
Pit	平面形	規模 長径(cm)	規模 短径(cm)	規模 深さ(cm)	底面標高 (m)	土色
Ｐ１	円形	32.0	30.0	41.0	15.378	褐色(10YR4/4)
Ｐ２	方形	30.0	24.0	27.0	15.500	褐色(10YR4/4)

SD154

Pit	平面形	規模 長径(cm)	規模 短径(cm)	規模 深さ(cm)	底面標高 (m)	土色
Ｐ１	楕円形	38.0	30.0	52.0	15.254	暗褐色(10YR3/3)

第115図　溝跡（ＳＤ152～155）





SKI83

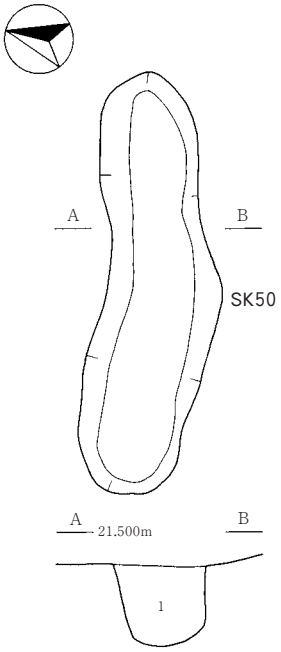
Pit	平面形	規模 長径(cm)	規模 短径(cm)	規模 深さ(cm)	底面標高 (m)	土色
P 1	楕円形	28.0	23.0	24.0	15.360	暗褐色(10YR3/3)
P 2	楕円形	30.0	(16.0)	22.0	15.122	にぶい黄褐色(10YR4/3)
P 3	楕円形	35.0	28.0	16.0	15.178	にぶい黄褐色(10YR4/3)
P 4	楕円形	(19.0)	26.0	8.0	15.261	褐色(10YR4/4)
P 5	楕円形	25.0	24.0	36.0	14.938	暗褐色(10YR3/4)
P 6	不整楕円形	32.0	21.0	55.0	15.153	暗褐色(10YR3/3)
P 7	楕円形	26.0	21.0	32.0	15.405	にぶい黄褐色(10YR4/3)

SK88
1　黒褐色（10YR2／3）シルト質土
しまり中　粘性強
炭化物極少量が極少量混入
焼土極小粒が極少量混入
2　暗褐色（10YR3／3）シルト質土
しまり強　粘性強
3　暗褐色（10YR3／4）シルト質土
しまり強　粘性強
粘土大塊（10YR5／3・にぶい黄褐色）が底部に混入

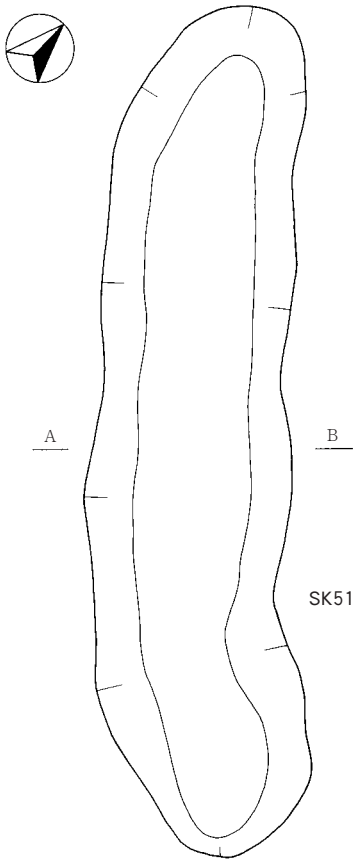
SKI83
1a　にぶい黄褐色（10YR4／3）・黄褐色土（10YR5／6）シルト質混合土
しまり弱　粘性中
炭化物が東側で帯状、西側で中粒が少量混入
焼土小粒が極小量混入
1b　にぶい黄褐色（10YR4／3）・黄褐色土（10YR5／6）シルト質混合土
しまり弱　粘性中
暗赤褐色（5YR3／4）焼土が混入
2　暗褐色（10YR3／3）シルト質土
しまり中　粘性中
炭化物極小粒が極少量混入
焼土塊極小粒が極少量混入
3　褐色（10YR4／4）シルト質土
しまり中　粘性弱
地山小塊が中量混入
4　暗褐色（10YR3／3）シルト質土
しまり中　粘性強
炭化物大粒が極少量混入
焼土極小粒が極少量混入
地山中塊が多量混入
5　暗褐色（10YR3／3）シルト質土
しまり弱　粘性強
6　暗褐色（10YR3／3）シルト質土
しまり中　粘性強

P1　暗褐色（10YR3／3）シルト質土
しまり中　粘性強
炭化物小粒が極少量混入
焼土極小粒が極少量混入
礫多数混入

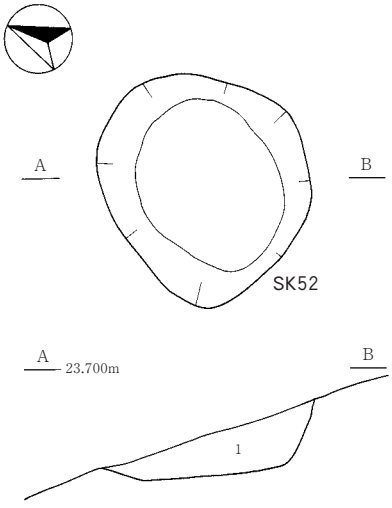
第116図　竪穴状遺構（ＳＫＩ83）・土坑（ＳＫ88）・焼土遺構（ＳＮ156）



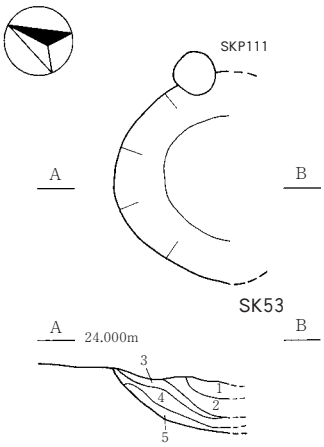
ＳＫ50
1　黒褐色（10ＹＲ２／２）シルト質土
　しまり中
　赤褐色土（５ＹＲ４／８）中粒が極少量混入
　炭化物が極少量混入



ＳＫ51
1　黒褐色（10ＹＲ２／３）シルト質土
　しまり強　粘性弱
　暗赤褐色土（５ＹＲ３／６）が極少量混入
　にぶい黄褐色土（10ＹＲ５／４）が極少量混入
　炭化物が極少量混入

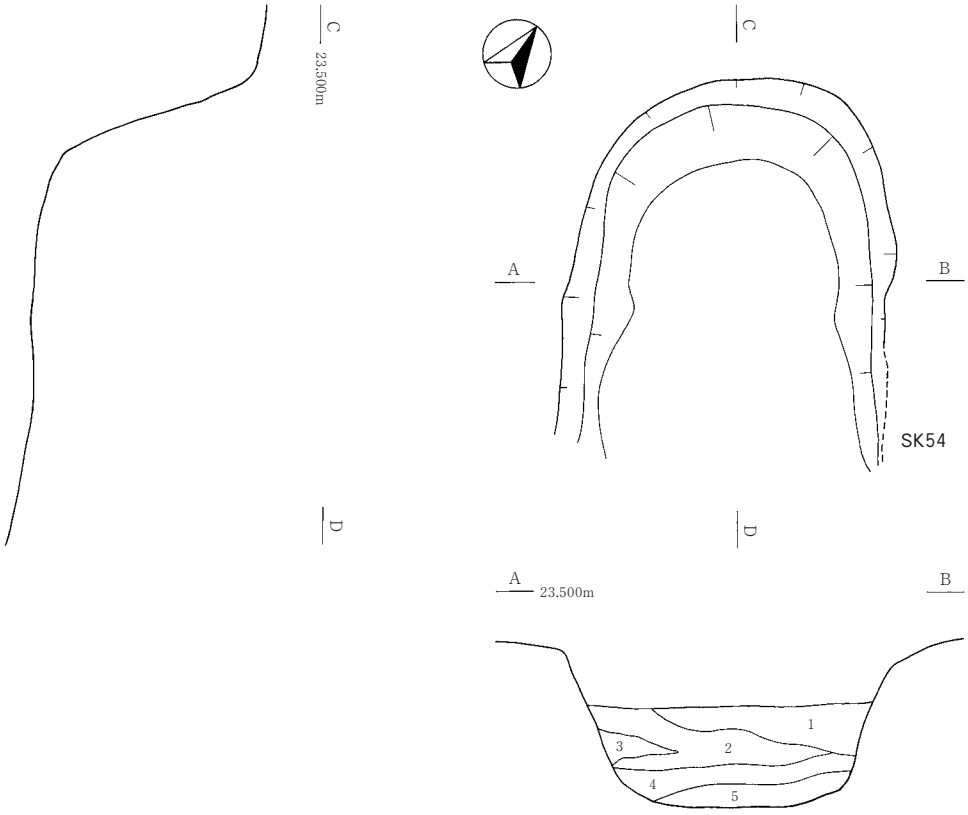


ＳＫ52
1　黒褐色（10ＹＲ３／２）シルト質土
　しまり強　粘性弱
　明黄褐色土（10ＹＲ７／６）が少量混入
　炭化物が少量混入

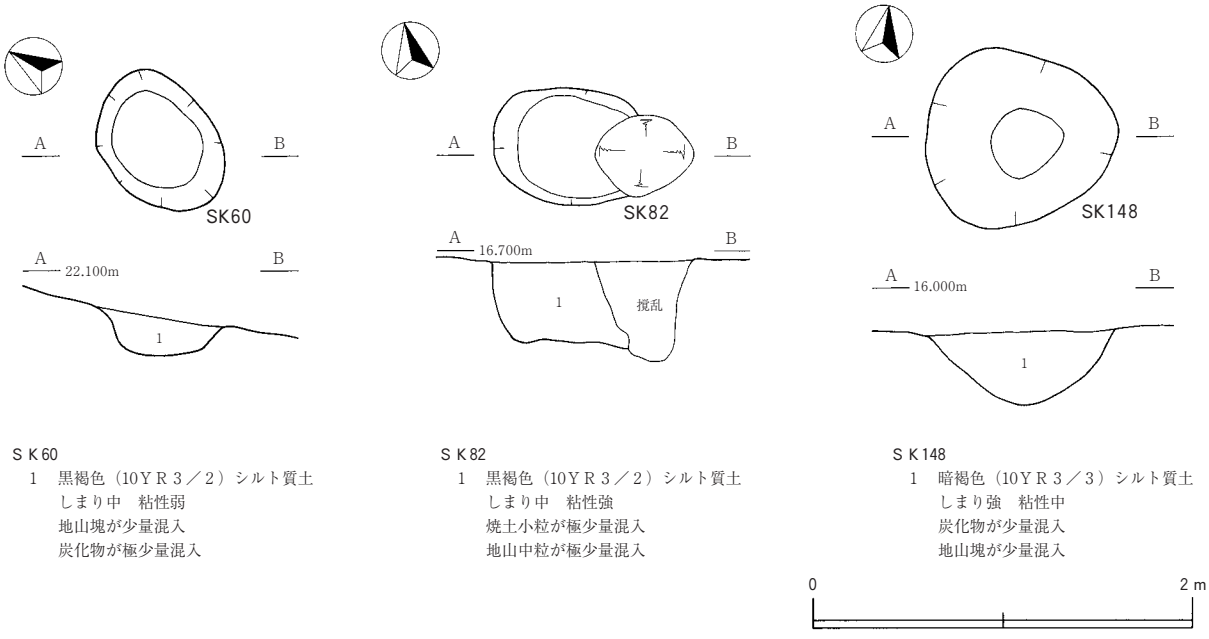


ＳＫ53
1　黒褐色（10ＹＲ２／２）シルト質土
　しまり中　粘性弱
　炭化物が極少量混入
2　褐色（7.5ＹＲ４／６）シルト質土
　しまり中　粘性弱
3　黒褐色（10ＹＲ３／２）シルト質土
　しまり中　粘性弱
　炭化物が極少量混入
4　黒褐色（10ＹＲ２／２）シルト質土
　しまり中　粘性弱
　褐色土（10ＹＲ４／４）が少量混入
　炭化物が極少量混入
5　褐色（10ＹＲ４／４）シルト質土
　しまり中　粘性弱
　黄褐色土（10Ｙ５／６）が少量混入
　炭化物が少量混入
6　褐色（10ＹＲ４／４）シルト質土
　しまり中　粘性弱
　炭化物が少量混入

第117図　土坑（ＳＫ50～53）



SK54
1　黒褐色（10YR3／2）シルト質土
　しまり中　粘性弱
　炭化物が極少量混入
2　褐色（10YR4／4）・浅黄色（2.5Y7／4）・黄褐色（10YR5／6）シルト質混合土
　しまり中　粘性弱
　炭化物が極少量混入
3　黄褐色（10YR5／6）シルト質土
　しまり中　粘性弱
　炭化物が極少量混入
4　黒色（10YR2／1）シルト質土
　しまり中　粘性弱
　地山小塊少量
5　褐色（10YR4／6）シルト質土
　しまり中　粘性弱
　浅黄色土（2.5YR7／4）中量
　地山小粒少量

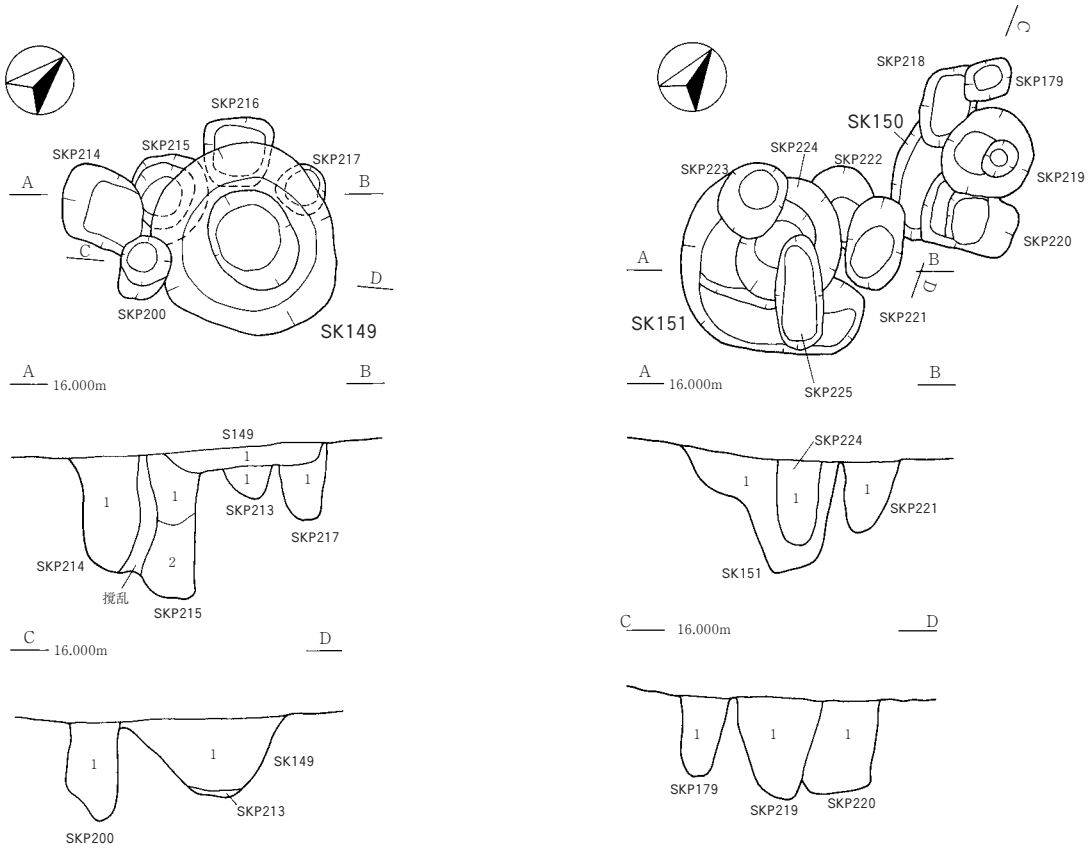


SK60
1　黒褐色（10YR3／2）シルト質土
　しまり中　粘性弱
　地山塊が少量混入
　炭化物が極少量混入

SK82
1　黒褐色（10YR3／2）シルト質土
　しまり中　粘性強
　焼土小粒が極少量混入
　地山中粒が極少量混入

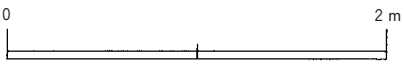
SK148
1　暗褐色（10YR3／3）シルト質土
　しまり強　粘性中
　炭化物が少量混入
　地山塊が少量混入

第118図　土坑（SK54・60・82・148）



S K 149
　1　褐色（10Ｙ Ｒ ４／４）シルト質土
　　しまり中　粘性中
　　炭化物極小粒が小量混入
S K P 179
　1　暗褐色（10Ｙ Ｒ ３／４）シルト質土
S K P 219
　1　褐色（10Ｙ Ｒ ４／６）
　　しまり弱　粘性中
　　地山塊小塊が中量が混入
　　炭化物・焼土極小粒が極少量混入
S K P 220
　1　褐色（10Ｙ Ｒ ４／６）
　　しまり中　粘性強
　　炭化物中粒が極少量混入
　　地山塊が底面に混入
S K P 221
　1　褐色（10Ｙ Ｒ ４／４）
　　しまり弱　粘性強
S K P 224
　1　にぶい黄褐色（10Ｙ Ｒ ５／４）シルト質土

S K 151
　1　にぶい黄褐色（10Ｙ Ｒ ５／４）シルト質土
　　しまり中　粘性強
　　地山塊極小粒が小量混入
　　炭化物中粒が極小量混入
S K P 200
　1　褐色（10Ｙ Ｒ ４／４）
　　しまり弱　粘性中
　　地山小塊が小量混入
S K P 213
　1　褐色（10Ｙ Ｒ ４／６）
　　しまり中　粘性強
　　炭化物極小粒子が極小量混入
S K P 214
　1　にぶい黄褐色（10Ｙ Ｒ ４／３）
　　しまり弱　粘性中
　　地山小粒・炭化物小粒が小量混入
S K P 215
　1　褐色（10Ｙ Ｒ ４／４）
　　しまり弱　粘性弱
　　炭化物中粒が極小量混入
　　地山中粒が極小量混入
　2　褐色（10Ｙ Ｒ ４／６）
　　しまり無　粘性強
　　地山小塊が小量混入
S K P 217
　1　褐色（10Ｙ Ｒ ４／４）
　　しまり弱　粘性弱
　　炭化物中粒が極小量混入



第119図　土坑（S K 149～151）

No	検出グリット	平面形	規模(cm)			底面標高(m)	備考
			長径	短径	深さ		
100	ＬＬ28	円形	22.0	－	27.0	23.842	
101	ＬＬ29	楕円形	25.0	18.0	18.8	24.468	
102	ＬＫ29	楕円形	32.0	25.0	28.9	24.148	
103	ＬＫ29	楕円形	26.0	18.0	30.7	23.965	
104	ＬＫ29	円形	27.0	25.0	41.7	23.700	
105	ＬＩ30	円形	35.0	－	19.8	23.802	
106	ＬＭ28	円形	30.0	－	－	－	
107	ＬＭ28	円形	20.0	19.0	－	－	長径は残存値
108	ＬＭ28	円形	24.0	－	－	－	
111	ＬＩ30	円形	24.0	21.5	14.2	23.703	SK53を切る
112	ＬＩ28	円形	35.0	30.0	12.5	20.961	
113	ＬＩ28	円形	30.0	26.5	14.5	20.891	
114	ＬＩ28	円形	36.0	32.0	25.7	20.865	
115	ＬＨ29	楕円形	40.0	33.5	22.8	20.979	
116	ＬＧ30	円形	52.0	－	45.6	20.850	
117	ＬＭ27	円形	35.0	－	9.4	21.729	SD62を切る
118	ＬＬ29	楕円形	32.0	25.0	8.1	24.727	
119	ＬＫ30	楕円形	60.0	46.5	11.2	24.721	
130	ＬＦ27	方形	30.0	25.0	56.0	15.000	
131	ＬＦ27	円形	21.0	19.0	19.0	15.523	
132	ＬＦ27	楕円形	27.0	23.0	22.0	15.399	
133	ＬＦ27	楕円形	25.0	21.0	9.0	15.395	
134	ＬＦ27	楕円形	32.0	25.0	15.0	14.925	
135	ＬＦ27	円形	22.0	19.0	9.0	15.123	
136	ＬＦ28	楕円形	45.0	44.0	20.0	15.684	
137	ＬＦ28	楕円形	51.0	37.0	50.0	15.350	
138	ＬＦ28	方形	33.0	28.0	40.0	15.423	
140	ＬＢ30	方形	24.0	21.0	36.0	15.757	
141	ＬＧ27	円形	23.0	20.0	16.0	15.791	
142	ＬＦ27･28	楕円形	28.0	12.0	43.2	15.538	
143	ＬＦ28	円形	26.0	25.0	13.0	15.708	
144	ＬＦ27	円形	20.0	19.0	20.0	15.720	
145	ＬＦ27	楕円形	29.0	26.0	50.0	15.454	
146	ＬＣ29	楕円形	62.0	36.0	26.0	15.733	SD85を切る
147	ＬＦ27	円形	22.0	21.0	17.0	15.395	
158	ＬＥ28	楕円形	30.0	21.0	65.0	15.161	
159	ＬＥ28	楕円形	45.0	25.0	55.0	15.273	
160	ＬＥ・ＬＦ28	円形	52.0	47.0	26.0	15.565	
161	ＬＥ28	楕円形	35.0	24.0	23.0	15.566	
162	ＬＥ29	楕円形	32.0	24.0	30.0	15.450	
164	ＬＥ29	円形	20.0	19.0	11.0	15.687	
165	ＬＥ29	楕円形	32.0	25.0	13.0	15.661	
169	ＬＤ29	方形	33.0	25.0	46.0	15.298	
170	ＬＤ29	方形	22.0	16.0	27.0	15.489	
171	ＬＤ29	方形	23.0	16.0	26.0	15.497	
172	ＬＤ29	楕円形	62.0	33.0	54.0	15.224	

No	検出グリット	平面形	規模(cm)			底面標高(m)	備考
			長径	短径	深さ		
173	ＬＤ29	方形	35.0	32.0	34.0	15.369	
174	ＬＤ29	楕円形	46.0	37.0	46.0	15.194	
175	ＬＥ29	方形	27.0	29.0	40.0	15.259	長径は残存値
177	ＬＤ29	方形	44.0	31.0	51.0	15.143	
178	ＬＤ29	不整楕円形	37.0	29.0	12.0	15.570	
179	ＬＤ29	方形	25.0	21.0	41.0	15.348	
180	ＬＤ29	楕円形	27.0	22.0	48.0	15.231	
184	ＬＥ28	円形	52.0	46.0	38.0	15.394	
185	ＬＤ29	楕円形	29.0	21.0	27.0	15.394	
187	ＬＥ28・29	楕円形	36.0	32.0	54.0	15.194	
189	ＬＥ29	楕円形	44.0	27.0	49.0	15.222	
191	ＬＤ・ＬＥ29	方形	58.0	34.0	42.0	15.327	
192	ＬＦ29	楕円形	22.0	18.0	35.0	15.495	
193	ＬＥ29	楕円形	36.0	22.0	46.0	15.283	長径は残存値
194	ＬＥ29	楕円形	19.0	29.0	11.0	15.635	
195	ＬＥ29	円形	24.0	20.0	55.0	15.182	
196	ＬＤ28･29	楕円形	32.0	26.0	38.0	15.283	
197	ＬＤ29	楕円形	28.0	20.0	23.0	15.409	
198	ＬＤ29	円形	23.0	22.0	29.0	15.531	
199	ＬＤ29	方形	21.0	19.0	13.0	15.623	
200	ＬＤ29	楕円形	35.0	26.0	63.0	15.015	
201	ＬＤ29	方形	23.0	23.0	32.0	15.310	
202	ＬＤ29	方形	18.0	26.0	41.0	15.310	長径は残存値
203	ＬＤ29	円形	30.0	29.0	22.0	15.487	
204	ＬＤ29	方形	36.0	30.0	53.0	15.227	
205	ＬＤ29	方形	43.0	36.0	51.0	15.235	長径は残存値
206	ＬＤ29	方形	44.0	40.0	69.0	15.030	
207	ＬＤ29	楕円形	37.0	33.0	29.0	15.404	
208	ＬＤ29	方形	19.0	16.0	14.0	15.588	
209	ＬＤ29	方形	21.0	17.0	33.0	15.476	
210	ＬＣ29	方形	41.0	29.0	73.0	15.015	
212	ＬＣ29	楕円形	70.0	30.0	75.0	14.971	短径は残存値
213	ＬＤ29	楕円形	57.0	43.0	40.0	15.240	
214	ＬＤ29	方形	45.0	40.0	65.0	14.997	
215	ＬＤ29	楕円形	49.0	41.0	75.0	14.861	長・短径は残存値
216	ＬＤ29	方形	36.0	35.0	37.0	15.342	長径は残存値
217	ＬＤ29	円形	27.0	26.0	42.0	15.291	長・短径は残存値
218	ＬＤ29	方形	44.0	28.0	44.0	15.201	長径は残存値
219	ＬＤ29	円形	50.0	47.0	61.0	15.112	
220	ＬＤ29	方形	50.0	39.0	57.0	15.116	短径は残存値
221	ＬＤ29	楕円形	49.0	29.0	50.0	15.136	
222	ＬＤ29	楕円形	44.0	24.0	46.0	15.168	短径は残存値
223	ＬＤ・ＬＥ29	楕円形	41.0	32.0	60.0	15.067	
224	ＬＤ29	楕円形	67.0	53.0	63.0	15.017	
225	ＬＤ29	長円形	59.0	25.0	62.0	15.027	

第４表　柱穴様ピット一覧（丘陵部分）

第３節　遺構外出土遺物

丘陵部分の遺構外出土遺物は、縄文土器３点、石篦・石匙各１点、剥片３点、土師器0.5箱、須恵器４片、陶磁器６点、銭貨２点である。鍛冶滓については構成の都合上、沖積地部分遺構外の記述に併せて記載した。

１　縄文時代

（１）縄文土器

縄文土器は３点が出土した。全て粗製の深鉢で縄文時代後期のものと考えられる。

（２）石器（第120図、図版15）

石器は石匙（233）、石楔（234）の２点を掲載した。233はつまみに対して刃部が縦形で、裏面は周縁のみの加工が施された石匙である。

２　平安時代

（１）土師器

土師器は約500ｇの破片が出土したが、接合復元には至らなかった。長胴甕が１点ある他は全て坏と考えられる。

（２）須恵器

須恵器は坏と甕の破片が各２点出土した。何れも胎土等から別個体のものと考えられる。

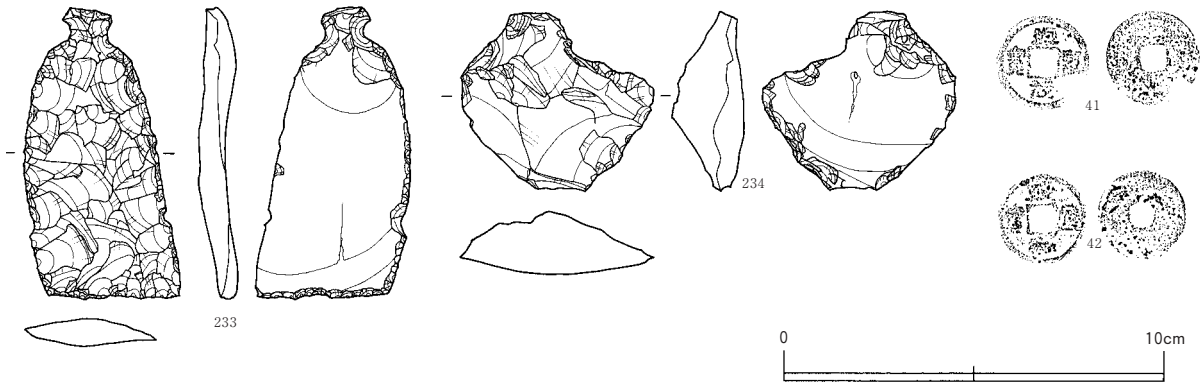
３　中世以降

（１）陶磁器

陶磁器は６点が出土したが、全て近世以降のものと考えられる。

（２）銭貨（第120図、図版15）

銭貨は（41・42）の２点を掲載した。共に錆化が激しく文字の判別は不明瞭である。41は北宋の紹聖元（1094）年初鋳「紹聖元宝」、42は北宋の政和元（1111）年初鋳「政和通宝」と推察されるが断定は避けるものとする。



遺物No.	図版No.	出土遺構	層位	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石質	その他
233	15	G-Hトレ	Ⅳ	石匙	7.7	4.1	1.0	23.3	珪質頁岩	土層断面に掲載
234	15	K-Lトレ	Ⅱa	石楔	4.7	5.1	1.9	35.6	珪質頁岩	土層断面に掲載

遺物No.	図版No.	出土位置	種別	外径	幅	厚さ	重量	磁着度	メタル度	備考
41	15	LG27	紹聖元宝?	2.4	―	1.5	2.9	1	特Ｌ（☆）	北宋(1094年初鋳)
42	15	LG27	政和通宝?	2.4	―	1.5	2.9	1	Ｌ（●）	北宋(1111年初鋳)

第120図　遺構外出土石器・銭貨

第４章　自然科学的分析

第１節　上谷地遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

上谷地遺跡は、秋田県本荘市土谷地区に所在し、子吉川右岸の寺岡と呼ばれる標高約 20 ｍの丘陵に接し、周囲の水田にかけて立地する縄文時代後期・平安時代・中世の複合遺跡である。今回の発掘調査では、縄文時代後期の水さらし場遺構が検出されており、当時導水設備を持った植物質食糧の加工処理施設が使用されていた事例として注目されている。

１　調査課題と分析手法

（１）遺構の時期

縄文時代後期の水さらし場遺構、河川跡、古代の掘立柱建物跡、溝跡、時期不明の水路跡から出土した木材や種実について、放射性炭素年代測定を行い、遺構の時期に関する資料を得る。また、古代の河川跡に堆積したテフラの同定を行い、時期に関する資料を得る。

（２）水さらし場遺構付近の古環境と掘立柱建物跡の用材

縄文時代後期の水さらし場遺構、古代の掘立柱建物跡の構築材や種実の同定を行い、用材や植物利用に関する資料を得る。また、水さらし場遺構の堆積物について珪藻分析、花粉分析を行い、古植生や堆積環境に関する資料を得る。

２　放射性炭素年代測定

（１）試料

試料は、縄文時代後期の水さらし場遺構、河川跡、古代の土坑、掘立柱建物跡、溝跡から出土した木材 10 点（試料番号 77，233，255 ～ 258，260 ～ 263）と種実遺体１点（試料番号 259）である。このうち、木材試料については、試料番号 77，233，255，261 ～ 263 が樹種同定試料と同一である試料番号 256 ～ 258，260 については、樹種同定の対象試料とされていなかったが、試料番号 256 では樹種同定が可能な量があったため、樹種同定も併せて行うことにした。なお、試料番号 259 の種実遺体については、肉眼で観察して種類の同定を行った。

なお、放射性炭素年代測定は、比較的量が多かった試料番号 77，233，255 の３点は β 線計数法で行う。他の試料は、いずれも小量であったため、加速器質量分析法（ＡＭＳ法）で行う。

（２）分析方法

測定は、株式会社加速器分析研究所（ＩＡＡ）が行った。

（３）結果

放射性炭素年代測定結果を第５表に示す。縄文時代後期の水さらし場遺構の構築材は、3050 ± 100 ＢＰ（補正年代 3440 ± 100 ＢＰ）～ 3930 ± 100 ＢＰ（補正年代 4320 ± 110 ＢＰ）、河道から出土した種実遺体は 4100 ± 30 ＢＰ（補正年代 4040 ± 30 ＢＰ）であった。また、古代の掘立柱建物跡の柱根は、1260 ± 30 ＢＰ（補正年代 1240 ± 30 ＢＰ）～ 1290 ± 30 ＢＰ（補正年代 1300 ± 30 ＢＰ）であり、誤差範囲で一致する。溝跡から出土した木材は、1200 ± 30（補正年代 1180 ± 30 ＢＰ）と 1270 ± 30 ＢＰ（補正年代 1270 ± 30 ＢＰ）で近い値が得られた。土坑から出土した木片は、1120 ± 30 Ｂ

Ｐ（補正年代 1050 ± 20 ＢＰ）であった。

（４）考察

縄文時代後期の水さらし場遺構の構築材は、試料番号 77 が 3050 ± 100 ＢＰ（補正年代 3440 ± 100 ＢＰ）、試料番号 233 が 3930 ± 100 ＢＰ（補正年代 4320 ± 110 ＢＰ）、試料番号 255 が 3470 ± 80 ＢＰ（補正年代 3860 ± 80 ＢＰ）であった。東北地方における縄文時代の年代については、キーリ・武藤（1982）による集成がある。それによると、東北地方北部では、後期の年代として同位体補正を行っていない年代値で、3340 ＢＰと 3680 ＢＰが報告されている。前後の時期では、晩期で 4820 ＢＰ～ 2820 ＢＰの値が記載されているが、中期の年代は記載されていない。東北地方南部では、縄文時代後期の年代として、3600 ＢＰ～ 3960 ＢＰの値が報告されている。この他、キーリ・武藤（1982）に記載されていない値としては、秋田県山内村虫内Ⅰ遺跡の縄文時代後期後葉～晩期に廃絶されたと考えられている住居跡から出土した炭化材の測定例があり、いずれも同位体補正を行っていない年代値で 2730 ＢＰと 3350 ＢＰの値が報告されている（秋田県埋蔵文化財センター，1998）。また、蟹子沢遺跡では、縄文時代後期の土坑出土炭化材で、3040 ＢＰの値が報告されている。これらの年代測定の報告例と比較すると、今回の結果はいずれも縄文時代後期の範囲に一致する。しかし、同一の遺構を構築する木材で、最大 900 年近い年代差がある。これらの木材の樹種は、試料番号 77 と 233 がクリ、試料番号 255 がイヌシデ節であった。樹齢などを考慮しても 900 年近い誤差を生じるとは考えにくく、構築材の中に異なる時期の木材が混在している可能性がある。この場合、古い年代を示した試料番号 233 が、流木などの古材の利用に由来する可能性がある。

河道跡から出土した種実遺体はトチノキで、年代は 4100 ± 30 ＢＰ（補正年代 4040 ± 30 ＢＰ）であった。この年代値は、前述の縄文時代後期の年代よりやや古く、キーリ・武藤（1982）が想定した縄文時代中期の年代に相当する。この結果から、種実遺体は水さらし場遺構よりやや古い時期ものの可能性もある。

古代の掘立柱建物跡の柱根は、1260 ± 30 ＢＰ（補正年代 1240 ± 30 ＢＰ）～ 1290 ± 30 ＢＰ（補正年代 1300 ± 30 ＢＰ）であった。また、溝跡から出土した木材は、1200 ± 30 ＢＰ（補正年代 1180 ± 30 ＢＰ）と 1270 ± 30 ＢＰ（補正年代 1270 ± 30 ＢＰ）、土坑から出土した木片は、1120 ± 30 ＢＰ（補正年代 1050 ± 20 ＢＰ）であった。土坑から出土した木片を除く各試料では、補正年代で最大でも 120 年前後の年代差であり、樹齢等も含めて考えると、ほぼ同時期の木材の可能性がある。これらの年代値は、暦年較正を行っても、それほど大きな変化はみられず、ほぼ 7 世紀後半～ 8 世紀後半頃に相当する。

このうち、掘立柱建物跡の柱根は、全て針葉樹のスギに同定されている。通常、スギは樹芯部の赤身の部分が樹脂を蓄積して強度や耐水性が高いが、白太と呼ばれる辺材部は心材部に比較すると耐水性等の材質が劣る。そのため、柱材として利用された部分は、心材部を主としている可能性がある。また、木材を用いた年代値は、それぞれの年輪が活動を停止した年代を示しており、伐採年代を直接示すものではない（東村，1990）。これらのことを考慮すると、柱根の年代値は、伐採年代を示す白太の部分が失われており、実際よりもやや古い年代を示している可能性もある。

試料番号 260 は、他の試料よりも若干新しい時期を示しているが、上述のような樹齢や部位の問題を考慮すると、ほぼ同時期の試料と考えても矛盾しない。

３　テフラ分析・屈折率測定

（１）試料

試料は、試料番号 273，274，275 の計 3 点である。試料番号 273 は、ＳＬ06と注記されており、現

地所見では古代の河川跡に堆積した火山灰層から採取されている。試料の質はにぶい黄橙色を呈する砂質シルトである。試料番号274は、ＳＫＰ31と注記されており、柱穴埋土から採取された、にぶい黄橙色を呈する砂質シルトである。試料番号275は、ＭＤ63と注記されており、古代の遺物包含層の直下から採取された、黄灰色を呈するシルト質粘土である。

（２）分析方法

試料約20ｇを蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観察する。観察は、テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象とし、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。火山ガラスについては、その形態によりバブル型と中間型、軽石型に分類する。各型の形態は、バブル型は薄手平板状あるいは泡のつぎ目をなす部分であるＹ字状の高まりを持つもの、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは塊状のもの、軽石型は表面に小気泡を非常に多く持つ塊状および気泡の長く延びた繊維束状のものとする。

また砕屑物中に火山ガラスが含まれる場合は、その屈折率を測定することにより、テフラの特定を試みる。屈折率の測定は、古澤（1995）のＭＡＩＯＴを使用した温度変化法を用いた。

（３）結果（第121図）

試料番号273：白色を呈する最大径約1.0㎜の粒径の比較的揃った軽石が少量含まれ、細砂径以下の火山ガラスが多量含まれている。火山ガラスは無色透明で塊状の軽石型が比較的多く、無色透明のバブル型も混在する。火山ガラスの屈折率は、ｎ 1.507 ～ 1.511（モードｎ 1.509 ～ 1.510）であった。

試料番号274：白色を呈する径約1.0㎜の軽石が微量含まれ、細砂径以下の火山ガラスが多量含まれている。火山ガラスは、無色透明で塊状の軽石型が比較的多く、これに無色透明のバブル型も混在する。さらにバブル型火山ガラスの中には、微量の淡褐色を帯びたものも認められた。火山ガラスの屈折率は、ｎ 1.508 ～ 1.512（モードｎ 1.509 ～ 1. 510）であった。

試料番号275：細砂径以下の火山ガラスが微量含まれる。火山ガラスは無色透明で塊状の軽石型と無色透明のバブル型が混在する。火山ガラスの屈折率は、ｎ 1.498 ～ 1.502（モードｎ 1.500）であった。

（４）考察

試料番号273：これまでに研究された東北地方におけるテフラの産状（町田ほか（1981；1984）、Arai et al.（1986）、町田・新井（1992）など）と上谷地遺跡の地理的位置および現地所見による検出層位の年代観から、本試料は、白頭山苫小牧テフラ（Ｂ－Ｔｍ）を主体とする火山ガラスと十和田ａテフラ（Ｔｏ－ａ）に由来する軽石が混在した堆積物であると考えられる。

Ｂ－Ｔｍは、中国と北朝鮮の国境にある白頭山を給源とし、10世紀頃に噴出したとされるテフラであり、日本の東北地方から北海道南部にかけての地域では細粒の火山ガラスからなるテフラとして各地で確認されている（町田ほか，1981）。上記の試料の特徴のうち、バブル型火山ガラスを含むこととその屈折率はＢ－Ｔｍとよく一致する。ただし、今回の値は、町田・新井（1992）に記載された高屈折率のものは少なく、町田ほか（1981）に記載された値に近い。一方、Ｂ－Ｔｍに由来する軽石は、日本では認められた例はなく、しかも本試料の場合最大径１㎜と比較的大きい。これは、Ｂ－Ｔｍとほぼ同時期に十和田カルデラから噴出した、Ｔｏ－ａに由来する軽石が混在したと考えるほかはない。なお、Ｂ－ＴｍとＴｏ－ａの噴出年代については、早川・小山（1998）による詳細な調査によれば、

Ｂ－Ｔｍは947年、Ｔｏ－ａはそれよりも30年ほど前の915年とされている。

以上のことから、試料が採取された火山灰層は、Ｂ－Ｔｍの降灰直後の時期に河川作用により、Ｂ－ＴｍとＴｏ－ａが混交し、再堆積した層であると考えられる。

試料番号274：火山ガラスの特徴および軽石の特徴ともに、上述の№273と同様であることから、それぞれの由来するテフラも同様に考えられる。したがって、本試料は、Ｂ－Ｔｍの火山ガラスを主体とし、Ｔｏ－ａ由来の軽石が微量混在した堆積物であるといえる。このことから、№274は、柱穴の埋積中に降下堆積した純粋なＢ－Ｔｍ層ではなく、すでに周囲に堆積していたＢ－Ｔｍの堆積物が柱穴中に流れ込んだものである可能性がある。この場合、柱穴が廃棄されて埋積が始まった時期は、Ｂ－Ｔｍの降灰以降である可能性が高いと考えられる。

試料番号275：本試料が採取された堆積層はかなり粘土質であったことから、火山ガラスが風化変質により溶失した可能性もあるが､現時点ではテフラの降下堆積層であると判断することはできない。しかし、含まれる火山ガラスは、その屈折率と形態から、Ｔｏ－ａに由来する可能性が高いと判断される。したがって、その直上の古代遺物包含層の年代は、Ｔｏ－ａ降灰以降である可能性が高い。

４　水さらし場遺構の検証と掘立柱建物跡の柱材

（１）試料

①珪藻分析・花粉分析：試料は、縄文時代後期の水さらし場遺構（ＳＤ18）土層ベルトから採取された土壌、試料番号264 ～ 269の計６点である。なお、試料番号264は１ｂ層、試料番号265は１ｆ層、試料番号266 ～ 269は３～６層から採取されている。

②種実分析：試料は、縄文時代後期の水さらし場遺構（ＳＤ18）の土層ベルトから採取された土壌、試料番号265，270 ～ 272の計４点である。なお、試料番号270は１ｂ層、試料番号271は１ｄ層、試料番号265は１ｆ層、試料番号272は１ｇ層から採取されている。各試料の重量等詳細は、第８表に記した。

③樹種同定：対象試料は、縄文時代後期の水さらし場遺構の構築材255点（試料番号１～255)、古代の掘立柱建物跡の柱根３点（試料番号261 ～ 263）である。この他、年代測定用試料のうち、樹種同定が可能であった試料番号256も同定を行った。したがって、合計点数は、259点である。各試料の詳細は、樹種同定結果とともに第９表に記した。

（２）分析方法

①珪藻分析：試料を湿重で７ｇ前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理・化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージで任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定･計数する。種の同定は､原口ほか(1998)､Krammer(1992)、Krammer and Lange-Bertalot（1986，1988，1991ａ，1991ｂ）などを参照する。

同定結果は、汽水生種、淡水～汽水生種、淡水生種の順に並べ、その中の各種類をアルファベット順に並べた一覧表で示す。なお、淡水生種はさらに細かく生態区分し、塩分･水素イオン濃度（pH）・流水に対する適応能についても示す。また、環境指標種についてはその内容を示す。そして、産出個体数200個体以上の試料については、産出率2.0％以上の主要な種類について、主要珪藻化石群集の層位分布図を作成する。また、産出化石が現地性か異地性かを判断する目安として、完形殻の出現率

を求める。堆積環境の解析は、海水～汽水生種については小杉(1988)、淡水生種については安藤(1990)、陸生珪藻については伊藤・堀内（1991)、汚濁耐性については、Asai and Watanabe（1995）の環境指標種を参考とする。

②花粉分析：試料約 10 ｇについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛：比重 2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸 9 ：濃硫酸 1 の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理･化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。

結果は同定・計数結果の一覧表、および主要花粉化石群集の層位分布図として表示する。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。

③種実分析：湿重秤量した土壌試料を５％水酸化ナトリウム水溶液（ＮａＯＨ）に一晩液浸し、試料の泥化を促す。0.5㎜の篩を通して水洗し残渣を集め、双眼実体顕微鏡下で観察し、同定可能な種実遺体等を抽出する。その形態的特徴および当社所有の現生標本との比較から種類を同定した。同定後の種実遺体は、種類毎にビンに入れ、ホウ酸・ホウ砂水溶液による液浸保存をおこなう。

④樹種同定：剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の 3 断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール，アラビアゴム粉末，グリセリン，蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

（３）結果

①珪藻分析：結果を第 6 表、第 122 図に示す。6 試料とも珪藻化石が豊富に産出し、産出分類群数は合計で 28 属 129 種類である。以下に珪藻化石群集の特徴を述べる。

珪藻化石群集は、試料番号 264 とそれ以外とに二分される。試料番号 265 ～ 269 では、全体としては流水不定性種と真＋好流水性種が多産するが、産出種類数が多く特定の種類が優占する傾向は見られない。一方、試料番号 264 は、流水不定性種が多い結果は同様であるが、産出種類数が減少し、Fragilaria pinnata var. lancettula が約 50％を占める。その他では、沼沢湿地付着生種群の Eunotia incisa、好止水性の Eunotia bilunaris、Eunotia exigua、Fragilaria pinnata 等がみられるが、いずれも 10％以下である。

②花粉分析：結果を第 7 表、第 123 図に示す。図表中で複数の種類をハイフンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。なお、木本花粉総数が 100 個体未満のものは、統計的に扱うと結果が歪曲する恐れがあるので、出現した種類を＋で表示するにとどめておく。

試料番号 265，268 からは、花粉化石はあまり産出されなかった。その他の試料は、いずれも木本花粉が多く、ハンノキ属・ブナ属・ニレ属・ケヤキ属が多く産出する。マツ属・スギ属・コナラ属コナラ亜属・トチノキ属等が検出されている。

草本花粉ではイネ科･カヤツリグサ科などが産出し、僅かではあるがツリフネソウ属も認められた。

③種実分析：種実分析結果を第 8 表に示す。種実遺体の保存状態は、比較的良好であった。木本 11 種類、草本 6 種類の種実と不明種実のほか、木の芽、材の細片、不明植物（部位・種類ともに不明である植物片)、菌類の菌核（おそらく樹皮の表面に付着していた肉座菌などが考えられる)、昆虫の細

片、土器の破片等が検出された。材は細かなものを中心に多数検出されたが、別試料で樹種同定をおこなっているため、種類構成に関する検討は割愛した。

検出された種類をみると、木本は、全て冷温帯ないし暖温帯の落葉広葉樹（サワシバ・ブナ・ヤマグワ・マタタビ属・カラスザンショウ属・トチノキ・タラノキ・ミズキ・エゴノキ属・ムラサキシキブ属・ニワトコ）で、針葉樹や常緑広葉樹を含まない。草本は、単子葉植物3種類（ヒゴクサ節・スゲ属・カヤツリグサ科)、双子葉類3種類（タデ属・ナデシコ科・スミレ属）である。堅い核や種子をもつ鳥獣散布型（カラスザンショウ属・ミズキ・ムラサキシキブ属等）の木本種実が比較的多く、草本種実は少ない。

（4）樹種同定

樹種同定結果を第9表に示す。水さらし場遺構の構築材の中には、樹皮が24点認められた。その他の試料は、針葉樹1種類（スギ）と広葉樹30種類（オニグルミ・ハンノキ属ハンノキ亜属・クマシデ属イヌシデ節・アサダ・ブナ属・コナラ属コナラ亜属コナラ節・クリ・エノキ属・ケヤキ・ニレ属・モクレン属・ヤブツバキ・アジサイ属・サクラ属・バラ科ナシ亜科・フジ・イヌエンジュ・キハダ・ヤマウルシ・カエデ属・トチノキ・ミズキ属・タラノキ・リョウブ・エゴノキ属・トネリコ属・ハシドイ・ムラサキシキブ属・ガマズミ属・タニウツギ属）に同定された。トネリコ属では、幹材に混じって根材も1点認められた。

（4）考察

①水さらし場遺構の環境：導水部分の横断面から採取された試料番号265～269の珪藻化石群集は、流水不定性種を主とするが、産出率は高いものでも20%前後であり、全体的に種類数が多く、特定の種が多く産出する傾向は見られない。このような珪藻化石群集は、混合群集と呼ばれ、上流域の様々な環境に生育していた種類が堆積して形成される（堀内ほか，1996)。水さらし場遺構の状況を考慮すると、水を引いた元の河川（沢）の流域に生育していた珪藻の生体あるいは死骸が、流下する際に水路に入り、遺構内の流れの緩やかな環境下で堆積した結果、混合群集が形成されたと考えられる。

一方、最上部の試料番号264では、全体的に産出する種類数が少なくなり、流水不定性種のFragilaria pinnata var. lancettula が優占する。本種は、弱アルカリ性の水域に生育する流水不定性種とされ、とくに水域を指標しないが、一般的には止水域で良く認められる種である。また、伴出する種の中には沼沢湿地付着生種群や止水性の種類が多い。これらの結果は、試料番号265～269で見られた混合群集とは明らかに異なる種類構成である。これらの種類構成から、水さらし場遺構が使われなくなった後に堆積がすすみ、試料採取地点周辺が湿地化したことが推定される。

②縄文時代後期の周辺植生:縄文時代後期の水さらし場遺構から検出された花粉化石は、ハンノキ属・ブナ属・ニレ属・ケヤキ属を中心に、スギ属・コナラ亜属・トチノキ属等の木本花粉が認められる。種実遺体や木材も、基本的には冷温帯落葉広葉樹林を構成する種類が多く、現在の周辺地域の山林にも生育している。よって、当時の本遺跡付近の後背山地には、ブナ・コナラ亜属など極相林を作る種類を中心として、スギを伴うような冷温帯性の森林が広がっていたと推定され、周辺の森林から木材を入手・利用したことが考えられる。

秋田県内の古植生に関する研究例として、辻（1981)、高原（1998）は、本荘市葛法や秋田市女潟・能代市坂形等の花粉化石群集から、2700年前～2000年前頃まではブナ属・コナラ亜属を中心とした

冷温帯性落葉広葉樹林で、その後スギ属が急増・優占すると報告しており、今回はこれら既存報告とも調和的である。

また、花粉、種実遺体、木材ともに、水分に恵まれた谷沿いの肥沃地等に生育する種類が多い。具体的に、スギ・オニグルミ・サワシバ・クマシデ・ハンノキ属・ブナ・ニレ属・ケヤキ・トチノキ等は河畔・渓谷林や低湿地林を構成する要素を含む分類群である。さらに、アサダ・クリ・エノキ属・モクレン属・サクラ属・バラ科ナシ亜科・イヌエンジュ・キハダ・カエデ属・ミズキ・リョウブ・エゴノキ属・トネリコ属等の高木や、中低木類のアジサイ属・カラスザンショウ属・ヤマウルシ・タラノキ・ムラサキシキブ属・ハシドイ・ニワトコ・ガマズミ属・タニウツギ属・籐本類のマタタビ属・フジ等は、周辺の丘陵地から斜面の林内や林縁部のマント群落やソデ群落から由来したと思われる。

以上のことから、水さらし場遺構から検出された花粉化石、種実遺体、木材は、丘陵地と低地との境界付近の植生を強く反映しており、おもに、丘陵地から谷底にかけての斜面などの河畔林や渓谷林を構成していた種類に由来するものと思われる。

検出された種実遺体の種類構成は、堅い核や種子をもつ鳥獣散布型種実などの木本類が主体で、草本類は種類数・個体数ともに少ない。これは、花粉化石群集においても同様の傾向が認められる。検出された草本類に着目すると、イネ科・スゲ属・カヤツリグサ科・タデ属・ナデシコ科等は、いわゆる「人里植物」を含む種類で、林縁部や集落周辺の明るく開けた場所に生育していたものに由来すると思われる。ヒゴクサ節・スミレ属・ツリフネソウ属等は、沢沿い等の湿った林床に生育するため、上述の木本類から構成される森林の林床に群落を形成していたであろう。

なお、木本は陽樹が多く、草本ともに先駆的に侵入する種類がみられることから、人為的に森林が切り開かれた場所である可能性もある。木材では二次林要素のクリが最も多く認められた。

③植物質食糧：水さらし場遺構は、トチノキが多量出土していることから、当時アク抜き作業を行っていたと考えられている。今回検出された種実遺体も全て破損個体で、完形個体は検出されなかったが、これは加工・処理されたためと考えられる。また、トチノキは成熟個体だけではなく、未熟個体も検出されている。花粉化石でもトチノキ属が多量に検出され、木材も認められることから、遺構周辺にはトチノキが生育していたと考えられ、種実が入手しやすい場所にこの遺構が構築されたものと推測される。当時トチノキの採取地に近い場所に、「水さらし場」を設けたことが示唆される。

なお、トチノキの他に、検出された花粉化石、種実遺体、木材から推定された豊富な植物相には、食用となる種類が多く含まれる。木材で認められた種類では、オニグルミ・コナラ属コナラ亜属（ナラ類）・ブナ属・クリ・サクラ属・バラ科ナシ亜科・ガマズミ属等が該当する。堅果類であるオニグルミ・ナラ類・ブナ属・クリ等は、収量が多く保存も利くことから、主に利用されていたと考えられる。特に、オニグルミと後述するクリはアク抜きせず生食が可能で美味であるため、優先的に利用された可能性も考えられる。種実遺体で認められた可食植物の種類は、ブナ・ヤマグワ・マタタビ属・ニワトコである。これらは人為的な痕跡は認められず、大部分が自然に堆積したものと考えられる。しかし遺跡周辺に生育する豊富な可食植物の種類を、当時利用していた可能性は高いと思われる。

④水さらし場遺構の構築材：水さらし場遺構の構築材は、写真や実測図を見る限りでは、丸棒状の木材を組み合わせており、表面には薄板状の部材が散見できる。また、試料番号 112（取上№ 152）、170（取上№ 216）、243（取上№ 305）、244（取上№ 306）、247（取上№ 309）、248（取上№ 310）、249

（取上№312）、252（取上№314）、253（取上№315）、254（取上№316）、255（取上№317）の11点は、溝底面近くで確認された立木であり、木組みの固定などに利用された部材の可能性がある。

これらの木材は、クリ（83点）、カエデ属（24点）、トネリコ属（22点）が比較的多いが、合計で針葉樹１種類と広葉樹30種類が認められ、様々な種類が利用されている。最も多かったクリは、強度や耐朽性に優れた材質を有し、カエデ属やトネリコ属の木材も比較的重硬で強度が高い。しかし、その他の種類の中には、強度の低い木材や小径の種類も含まれており、トネリコ属では根材も１点利用されている。また、年代測定の結果では、古材の利用を示唆する結果も得られている。図面等から分かる範囲で出土状況と樹種との関係をみると、大型の部材にはクリが多く見られるが、カエデ属、トネリコ属、トチノキ等も利用されており、丸棒状の試料の中にはブナ属やタニウツギ属等も使われている。これらの結果をみた限りでは、樹種による利用部位の明瞭な違いは認められない。これらのことから、周辺に生育していた樹木や流木等の手近で入手可能な木材を、あまり種類や材質に関わりなく利用した可能性がある。種類構成比の違いは、木材入手難易度の違いを反映している可能性がある。

一方、今回の水さらし場遺構では、樹皮が24点認められた。現地調査の所見や図・写真を見ると、木組みの上部に薄板状の部材が所々に見られる。状況を考慮すれば、これらの薄板状の部材が樹皮に相当すると考えられる。樹皮を剥いで板状に延ばしたものを、木組み上に敷くなどの可能性が想定されるが、利用された丸太の皮が剥がれた結果、底部に敷いたように見えている可能性もある。

ところで、最も多かったクリは、果実が重要な植物食糧であり、縄文時代における管理・栽培の可能性が指摘されている（千野，1983；岡田・ＮＨＫ青森放送局，1997）。本遺跡周辺でも栽培が行われ、収量の落ちた老木等が用材として利用された可能性がある。今後、残りの部材についても出土位置と樹種同定結果との比較を行って、各種類の利用方法の差異等についても検討したい。

⑤掘立柱建物跡の柱材：掘立柱建物跡から出土した柱根は、いずれも針葉樹のスギであった。スギ材は、木理が通直で加工が容易であり、精油成分により耐水性や防虫性にも優れる。また、大径木になる種類であり、大型建築に必要な大材も得られる。これらの材質を考慮した用材と考えられる。

これまで秋田県内で行われた古代の柱材では、払田柵跡第Ⅱ期内郭西門の柱材にクリ、礎板にスギが報告されている（パリノ・サーヴェイ株式会社，1991）。また、大平遺跡や池内遺跡等の古代の竪穴住居跡から出土した住居構築材でも、クリが多く見られる。スギの利用は、池内遺跡で住居構築材に１点見られるが、その他の報告例は殆どない。そのため、古代においては、構築材にクリが主とした用材とされた可能性がある。今回の結果は、これらのクリを主とする事例とは異なっている。この背景には、周辺植生、建物の構造、使用目的等が反映している可能性があるが、県内での調査例が少ないため現時点で詳細は不明である。今後、更に同様の柱材について樹種に関する資料を蓄積したい。

引用文献

秋田県埋蔵文化財センター編（1998）秋田県文化財調査報告書第274集　虫内Ⅰ遺跡　－東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書ＸＸⅢ－　本文編．452ｐ．，秋田県教育委員会．

安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用．東北地理，42，ｐ．73-88．

Arai,F.・Machida,H.・Okumura,K.・Miyauchi,T.・Soda,T.・Yamagata,K(1986)Cataalog for late quaternary marker-tephras in Japan Ⅱ-Tephras occurring in Northeast Honshu and Hokkaido-. Geographical reports of Tokyo Metropolitan University No.21,p.223-250.

Asai, K. and Watanabe, T.(1995)Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution(2)Saprophilous and saproxen ous taxa.Diatom,10,p.35-47.

千野裕道（1983）縄文時代のクリと集落周辺植生　－南関東地方を中心に－．東京都埋蔵文化財センター研究論集，Ⅱ，p.25-42．

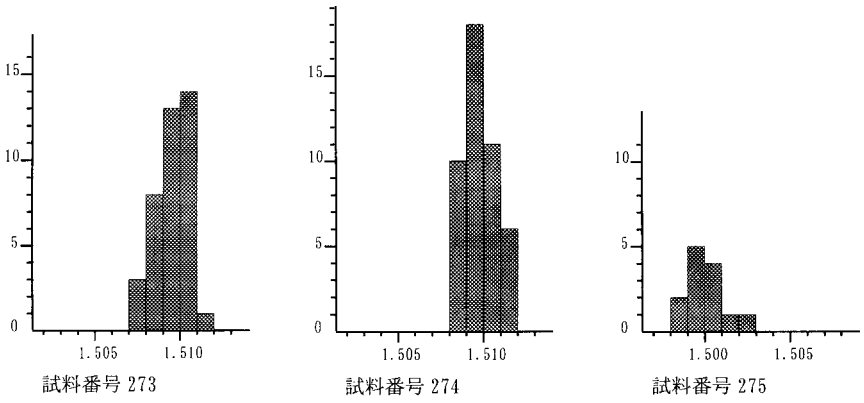
古澤　明（1995）火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別．地質学雑誌，101，p.123-133．

原口和夫・三友　清・小林　弘（1998）埼玉の藻類　珪藻類．埼玉県植物誌，埼玉県教育委員会，p.527-600.
早川由紀夫・小山真人（1998）日本海をはさんで10世紀に相次いで起こった二つの大噴火の年月日－十和田湖と白頭山－．火山，43，p.403-407.
東村武信（1990）改訂　考古学と物理化学．p.212，学生社.
堀内誠示・高橋　敦・橋本真紀夫（1996）珪藻化石群集による低地堆積物の古環境推定について　－混合群集の認定と堆積環境の解釈－．日本文化財科学会第13回大会研究発表要旨集，p.62-63.
伊藤良永・堀内誠示（1991）陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用．珪藻学会誌，6，p.23-45.
キーリ　C．T．・武藤康弘（1982）縄文時代の年代．加藤晋平・小林達雄・藤本　強編「縄文文化の研究1　縄文人とその環境」，p.246-275，雄山閣.
小杉正人（1988）珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用．第四紀研究，27，p.1-20.
Krammer,K. (1992)PINNULARIA,eine Monographie der europaischen Taxa.BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA,BAND 26,p.1-353.,BERLIN・STUTTGART.
Krammer,K. and Lange-Bertalot,H.(1986)Bacillariophyceae,Teil 1,Naviculaceae.Band 2/1von:Die Suesswasserflora von Mitteleuropa,876p.,Gustav Fischer Verlag.
Krammer,K. and Lange-Bertalot,H.(1988)Bacillariophyceae,Teil 2,Epithemiaceae,Bacillariaceae,Surirellaceae.Band 2/2 von:Die Suesswasserflora von Mitteleuropa,536p., Gustav Fischer Verlag.
Krammer,K. and Lange-Bertalot,H.(1991a)Bacillariophyceae,Teil 3,Centrales,Fragilariaceae,Eunotiaceae.Band 2/3 von:Die Suesswasserflora von Mitteleuropa,230p.,Gustav Fischer Verlag.
Krammer,K. and Lange-Bertalot,H.(1991b)Bacillariophyceae,Teil 4,Achnanthaceae,Kritsche Ergaenzungen zu Navicula(Lineolatae)und Gomphonema.Band 2/4 von:Die Suesswasserflora von Mitteleuropa,248p.,Gustav Fischer Verlag.
町田　洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス．276 p.，東京大学出版会.
町田　洋・新井房夫・森脇　広（1981）日本海を渡ってきたテフラ．科学，51，p.562-569.
町田　洋・新井房夫・杉原重夫・小田静夫・遠藤邦彦（1984）テフラと日本考古学－考古学研究と関連するテフラのカタログ－．渡辺直経編「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学」，p.865-928.
岡田康博・ＮＨＫ青森放送局編（1997）「縄文都市を掘る　三内丸山遺跡から原日本が見える」，245 p.，日本放送出版協会.
パリノ・サーヴェイ株式会社（1991）樹種鑑定．秋田県教育庁払田柵跡調査事務所編「秋田県文化財調査報告書第216集・払田柵跡調査事務所年報1990　払田柵跡　－第84～87次調査概要－」，p.64-65.
高原　光（1998）スギ林の変遷．「図説　日本列島植生史」，安田喜憲・三好教夫編，p.207-223，朝倉書店.
辻　誠一郎（1981）秋田県の低地における完新世後半の花粉群集．東北地理，33，p.81-88.

番号	遺構など	試料の質	樹種	方法	補正年代 BP	δ13C (‰)	測定年代 BP	Code. No.
77	SD18 No.102	木材	クリ	β法	3440±100	-26.8	3050±100	IAA-69
233	SD18 No.293	木材	クリ	β法	4320±110	-27.9	3930±110	IAA-70
255	SD18 No.317	木材	イヌシデ節	β法	3860± 80	-25.7	3470± 80	IAA-71
257	SD05 No.37	木材	未同定	AMS法	1180± 30	-26.00±0.77	1200± 30	IAAA-10502
258	SD05 No.44	木材	未同定	AMS法	1270± 30	-25.00±0.61	1270± 30	IAAA-10503
259	SL14	種実遺体	トチノキ	AMS法	4040± 30	-28.87±0.88	4100± 30	IAAA-10504
260	SK17	木材	未同定	AMS法	1050± 20	-29.40±0.79	1120± 30	IAAA-10505
261	SB19(SKP06)	木材	スギ	AMS法	1240± 30	-26.37±0.65	1260± 30	IAAA-10506
262	SB19(SKP07)	木材	スギ	AMS法	1290± 30	-24.85±0.63	1290± 20	IAAA-10507
263	SKP09	木材	スギ	AMS法	1300± 30	-24.29±0.73	1290± 30	IAAA-10508

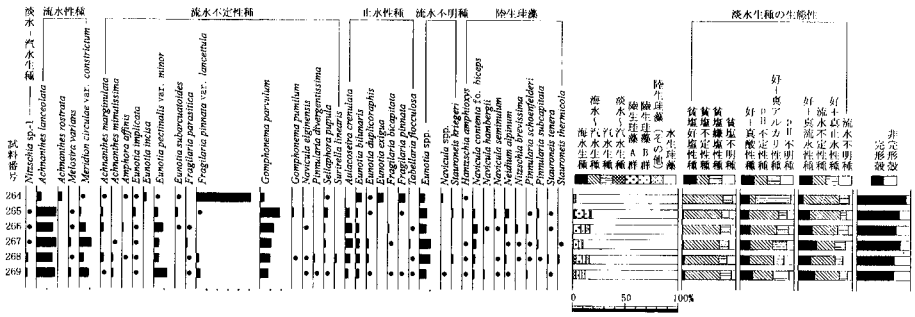
1)測定は、β法：β線計数法、AMS法：加速器質量分析法による。
2)年代は、1950年を基点とした年数で、補正年代はδ13Cの値を基に同位体補正を行った値。
3)放射性炭素の半減期は、5568年を使用した。

第5表　放射性炭素年代測定及び樹種同定結果（1）



横軸は屈折率、縦軸は測定個数を表す。

第121図　火山ガラスの屈折率



※淡水：淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。
いずれも 100 個体以上検出された試料について示す。なお、●は３%未満、１は 100 個体未満の試料について検出した種類を示す。

第122図　ＳＤ18主要珪藻化石群集

種類	生態性 塩分	pH	流水	環境指標種	SD18（水さらし場遺構） 1b 264	1f 265	3 266	4 267	5 268	6 269
Nitzschia plana W.Smith	Meh						1			1
Fragilaria brevistriata Grunow	Ogh-Meh	al-il	l-ph	U	–	–	1	–	1	1
Nitzschia palea (Kuetz.) W.Smith	Ogh-Meh	ind	ind	S	–	1	–	1	1	–
Nitzschia sp. -1	Ogh-Meh	unk	unk		–	2	1	1	5	4
Rhopalodia gibberula (Ehr.) O.Muller	Ogh-Meh	al-il	ind		–	–	–	–	–	1
Achnanthes lanceolata (Breb.) Grunow	Ogh-ind	ind	r-ph	K,T	9	38	33	38	31	38
Achnanthes marginulata Grunow	Ogh-ind	ind	ind	T	1	4	5	–	6	1
Achnanthes minutissima Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	–	–	–	1	3	4
Achnanthes montana Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RI,T	1	–	–	–	–	–
Achnanthes oblongella Ostrup	Ogh-ind	ind	ind	T	–	1	–	–	–	–
Achnanthes rostrata Oestrup	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	8	–	–	–	–	–
Actinella brasiliensis Grunow	Ogh-ind	ac-il	l-bi	O	–	–	–	–	–	1
Amphora affinis Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	1	–	3	–	1	–
Aulacoseira ambigua (Grun.) Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-bi	N	–	–	–	–	–	1
Aulacoseira crenulata (Ehr.) Krammer	Ogh-ind	ind	l-ph		–	8	14	15	10	7
Aulacoseira italica (Ehr.) Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-ph	U	–	1	1	–	1	–
Caloneis aerophila Bock	Ogh-ind	al-il	ind	RA	–	1	–	–	–	–
Caloneis angustivalva Petit	Ogh-unk	unk	unk	RI	–	1	1	–	–	–
Caloneis bacillum (Grun.) Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	1	–	–	–	–	–
Caloneis hyalina Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	RA	–	–	1	–	–	–
Caloneis silicula (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	al-il	ind		1	–	–	–	–	–
Caloneis silicula var. minuta (Grun.) Cleve	Ogh-ind	al-il	ind		–	–	–	1	–	–
Ceratoneis arcus var. recta (Cl.) Krasske	Ogh-ind	ind	r-bi	T	–	–	1	–	–	–
Cocconeis placentula var. euglypta (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	–	–	–	–	1	–
Cyclotella radiosa (Grun.) Lemm.	Ogh-ind	al-il	l-bi	M,U	–	–	–	1	–	–
Cymbella lanceolata (Ehr.) Kirchner	Ogh-ind	al-il	l-ph	T	–	1	–	–	–	1
Cymbella mesiana Cholnoky	Ogh-ind	al-bi	l-bi	O	–	–	–	–	–	1
Cymbella sinuata Gregory	Ogh-ind	ind	r-ph	K,T	–	1	1	–	–	1
Cymbella tumida (Breb. ex Kuetz.) V.Heurck	Ogh-ind	al-il	ind	T	–	1	–	–	–	–
Cymbella turgidula var. nipponica Skvortzow	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	–	–	1	–	–	–
Diatoma hyemals var. mesodon (Ehr.) Kirchener	Ogh-ind	al-il	r-bi	K,T	–	–	–	2	1	1
Diploneis marginestriata Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind		–	1	–	–	–	–
Diploneis ovalis (Hilse) Cleve	Ogh-ind	al-il	ind		–	1	–	1	1	2
Diploneis parma Cleve	Ogh-ind	ind	ind		–	–	–	–	–	1
Diploneis yatukaensis Horikawa et Okuno	Ogh-ind	ind	l-ph	RI	–	–	1	–	–	–
Eunotia bilunaris (Ehr.) Mills	Ogh-hob	ac-il	l-ph		11	4	7	7	8	7
Eunotia cristagalli Cleve	Ogh-hob	ac-il	ind		–	1	–	–	–	–
Eunotia duplicoraphis H.Kobayasi	Ogh-hob	ac-il	l-ph		1	1	–	4	4	1
Eunotia exigua (Breb.) Grunow	Ogh-hob	ac-bi	l-ph	P	12	–	–	–	–	–
Eunotia faba (Ehr.) Grunow	Ogh-hob	ac-il	l-ph		–	1	–	–	–	–
Eunotia gracialis Meister	Ogh-hob	ind	l-bi		–	1	–	–	1	–
Eunotia implicata Noepel & Lange-Bertalot	Ogh-hob	ac-il	ind	O	2	5	1	1	1	2
Eunotia incisa W.Smith ex Gregory	Ogh-hob	ac-il	ind	O	6	–	–	–	–	–
Eunotia muscicola var. tridentula Noerpel & Lange-B.	Ogh-hob	ac-il	ind		–	1	–	1	–	–
Eunotia paludosa Grunow	Ogh-hob	ac-il	ind		–	–	2	–	1	1
Eunotia pectinalis var. minor (Kuetz.) Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	O	2	8	18	10	10	27
Eunotia subarcuatoides Noerpel & Lange-Bertalot	Ogh-hob	ac-il	ind		2	5	2	–	–	–
Eunotia tenella (Grun.) Hustedt	Ogh-hob	ac-il	ind		–	–	–	2	–	–
Eunotia tenelloides H.Kobayasi	Ogh-hob	ac-il	ind	RB	–	1	–	–	–	–
Eunotia trinacria Krasske	Ogh-hob	ac-bi	ind		–	–	–	–	2	–
Eunotia spp.	Ogh-unk	unk	unk		10	15	14	22	21	14
Fragilaria bicapitata A.Mayer	Ogh-hob	ind	l-bi		–	–	3	2	–	1
Fragilaria capucina var. gracilis (Oestr.) Hustedt	Ogh-ind	al-il	l-ph	T	–	–	1	1	–	–
Fragilaria construens (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	al-il	l-ph	U	–	–	–	–	–	1
Fragilaria construens fo. venter (Ehr.) Hustedt	Ogh-ind	al-il	l-ph	S	–	2	–	1	–	–
Fragilaria parasitica (W.Smith) Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	U	–	–	1	3	1	1
Fragilaria pinnata Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	S	13	1	–	–	–	1
Fragilaria pinnata var. lancettula (Schum.) Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind	S	108	2	–	–	5	9
Fragilaria vaucheriae (Kuetz.) Petersen	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,T	–	–	1	–	1	–
Gomphonema acuminatum Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	O	–	–	1	1	1	–
Gomphonema affine Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	–	–	–	–	–	1
Gomphonema angustatum var. linearis Hustedt	Ogh-ind	ac-il	unk		–	1	–	–	–	1
Gomphonema gracile Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	O,U	–	1	2	2	–	1
Gomphonema helveticum Brun	Ogh-unk	ind	r-ph	T	–	–	–	–	–	1
Gomphonema parvulum Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	8	39	28	22	20	17
Gomphonema pumilum (Grun.) Reichardt & Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind		–	3	–	–	1	–
Gomphonema truncatum Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	T	–	–	–	–	1	–
Gomphonema spp.	Ogh-unk	unk	unk		–	–	1	–	1	–
Hantzschia amphioxys (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA,U	1	3	–	1	1	1
Melosira varians Agardh	Ogh-hil	al-bi	r-ph	K,U	–	1	1	4	2	5
Meridion circulae Agardh	Ogh-ind	al-il	r-bi	K,T	–	–	1	1	–	1
Meridion circulae var. constrictum (Ralfs) V.Heurck	Ogh-ind	al-il	r-bi	K,T	1	3	13	23	9	19
Navicula confervacea (Kuetz.) Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	RB,S	–	–	–	–	–	1
Navicula contenta Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA,T	1	1	–	–	1	–
Navicula contenta fo. biceps (Arnott) Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind	RA,T	–	4	9	6	5	3
Navicula cryptotenella Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	ind	T	–	–	–	–	–	1
Navicula decussis Oestrup	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,U	–	–	–	1	–	–

種類	生態性 塩分	pH	流水	環境指標種	SD18（水さらし場遺構） 1b 264	1f 265	3 266	4 267	5 268	6 269
Navicula elginensis (Greg.) Ralfs	Ogh-ind	al-il	ind	O,U	–	3	2	–	2	1
Navicula elginensis var. cuneata H.Kobayasi	Ogh-ind	al-il	ind		1	–	–	–	–	–
Navicula gallica var. perpusilla (Grun.) Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	ind	RI	1	–	–	–	–	–
Navicula hambergii Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	RI	–	–	1	–	–	3
Navicula ignota Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RB	–	–	–	–	–	1
Navicula ignota var. palustris (Hust.) Lund	Ogh-ind	ind	ind	RB	–	1	2	1	–	–
Navicula lapidosa Krasske	Ogh-ind	al-il	ind	RI	1	–	–	–	1	–
Navicula mutica Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	RA,S	–	1	1	–	–	2
Navicula placenta Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	ind	RI	1	–	–	–	–	–
Navicula seminulum Grunow	Ogh-ind	ind	ind	RB,S	–	4	2	–	1	1
Navicula subcostulata Hustedt	Ogh-ind	ind	ind		–	1	–	2	–	–
Navicula tenelloides Hustedt	Ogh-unk	unk	r-ph	J,U	–	–	–	–	2	–
Navicula ventralis Krasske	Ogh-ind	ind	ind	U	–	–	–	–	1	–
Navicula spp.	Ogh-unk	unk	unk		4	–	–	–	–	1
Neidium alpinum Hustedt	Ogh-unk	unk	ind	RA	–	8	4	1	3	1
Neidium bisulcatum (Lagerst.) Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind	RI	–	–	1	–	1	1
Neidium bisulcatum var. subampliatum Krammer	Ogh-ind	ac-il	ind		–	–	1	–	–	–
Neidium iridis (Ehr.) Cleve	Ogh-hob	ac-il	l-bi	O	–	–	1	1	–	1
Nitzschia angustata (W.Smith) Cleve	Ogh-ind	al-il	l-bi		–	–	–	–	–	1
Nitzschia brevissima Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RB,U	–	–	4	2	1	–
Nitzschia dissipata (Kuetz.) Grunow	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	–	–	–	–	–	1
Nitzschia hantzschiana Rabenhorst	Ogh-ind	al-bi	ind		–	–	–	–	–	2
Nitzschia tubicola Grunow	Ogh-unk	unk	unk		–	1	–	–	–	–
Nitzschia spp.	Ogh-unk	unk	unk		–	–	–	1	–	–
Pinnularia acrosphaeria W.Smith	Ogh-ind	al-il	l-ph	O	–	–	2	–	–	–
Pinnularia acuminata W.Smith	Ogh-ind	ac-il	l-ph		–	–	2	–	–	–
Pinnularia borealis Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	RA	–	1	–	–	–	–
Pinnularia brevicostata Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind		–	–	–	–	–	1
Pinnularia divergentissima (Grun.) Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind		–	–	–	–	3	1
Pinnularia gibba var. linearis Hustedt	Ogh-hob	ac-il	ind		–	–	–	1	–	–
Pinnularia hemiptera (Kuetz.) Cleve	Ogh-hob	ind	l-ph		–	–	1	–	–	–
Pinnularia microstauron (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind	S	–	–	–	–	–	1
Pinnularia nodosa Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph	O	–	–	1	1	1	2
Pinnularia obscura Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RA	–	–	–	2	2	–
Pinnularia ornata H.Kobayasi	Ogh-hob	ac-il	l-ph		–	1	–	1	–	1
Pinnularia rupestris Hantzsch	Ogh-hob	ac-il	ind		–	–	2	2	1	1
Pinnularia schoenfelderi Krammer	Ogh-ind	ind	ind	RI	–	2	4	1	2	3
Pinnularia silvatica Petersen	Ogh-ind	ind	ind	RI	–	–	1	–	–	–
Pinnularia stomatophora (Grun.) Cleve	Ogh-ind	ac-il	l-ph		1	–	–	–	–	2
Pinnularia subcapitata Gregory	Ogh-ind	ac-il	ind	RB,S	–	4	–	3	2	–
Pinnularia spp.	Ogh-unk	unk	unk		–	1	–	1	2	–
Rhopalodia gibba (Ehr.) O.Muller	Ogh-ind	al-il	ind		–	–	–	–	–	1
Sellaphora laevissima (Kuetz.) Mann	Ogh-ind	ind	ind		–	1	–	–	–	–
Sellaphora pseudopupula (Krasske) Lange-B.	Ogh-ind	ind	ind		–	–	2	–	–	–
Sellaphora pupula (Kuetz.) Mereschkowsky	Ogh-ind	ind	ind	S	1	8	3	3	3	2
Stauroneis anceps Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	T	–	–	–	–	1	–
Stauroneis kriegeri Patrick	Ogh-ind	ind	unk	T	–	3	–	–	3	–
Stauroneis lauenburgiana Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind		–	–	–	1	–	–
Stauroneis phoenicenteron (Nitz.) Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	O	–	–	1	–	–	–
Stauroneis phoenicenteron fo. hattorii Tsumura	Ogh-ind	ind	ind	O	–	–	–	–	–	1
Stauroneis tenera Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	RB	–	1	1	–	3	2
Stauroneis thermicola (Petersen) Lund	Ogh-unk	unk	unk	RI	–	–	–	2	3	–
Stauroneis spp.	Ogh-unk	unk	unk		–	–	–	–	1	–
Surirella angusta Kuetzing	Ogh-ind	al-il	r-bi	U	–	1	2	1	1	–
Surirella linearis W.Smith	Ogh-ind	ind	ind		–	–	–	–	4	–
Surirella robusta var. splendida (Ehr.) V.Heurck	Ogh-unk	al-il	l-ph		–	–	1	–	–	–
Synedra rostrata Pantocsek	Ogh-ind	al-il	r-ph		–	–	1	–	–	–
Tabellaria fenestrata (Lyngb.) Kuetzing	Ogh-ind	ac-il	l-bi	O,T	–	1	–	1	–	–
Tabellaria flocculosa (Roth) Kuetzing	Ogh-hob	ac-il	l-bi	T	–	–	2	3	2	1
海水生種合計					0	0	0	0	0	0
海水～汽水生種合計					0	0	0	0	0	0
汽水生種合計					0	1	0	0	0	1
淡水～汽水生種合計					0	3	2	2	7	6
淡水生種合計					210	206	213	205	198	211
珪藻化石総数					210	210	215	207	205	218

凡例

H.R.：塩分濃度に対する適応性
Meh　：汽水生種
Ogh-Meh　：淡水～汽水生種
Ogh-hil　：貧塩好塩性種
Ogh-ind　：貧塩不定性種
Ogh-hob　：貧塩嫌塩性種
Ogh-unk　：貧塩不明種

pH：水素イオン濃度に対する適応性
al-bi　：真アルカリ性種
al-il　：好アルカリ性種
ind　：pH 不定性種
ac-il　：好酸性種
ac-bi　：真酸性種
unk　：pH 不明種

C.R.：流水に対する適応性
l-bi　：真止水性種
l-ph　：好止水性種
ind　：流水不定性種
r-ph　：好流水性種
r-bi　：真流水性種
unk　：流水不明種

環境指標種群
J：上流性河川指標種，K：中～下流性河川指標種，M：湖沼浮遊性種，N：湖沼沼沢湿地指標種，
O：沼沢湿地付着生種，P：高層湿原指標種（以上は安藤，1990）
S：好汚濁性種，U：広域適応性種，T：好清水性種（以上は Asai, K. & Watanabe, T., 1986）
R：陸生珪藻（RA：A 群，RB：B 群，RI 群、伊藤・堀内，1991）

第６表　珪藻分析結果

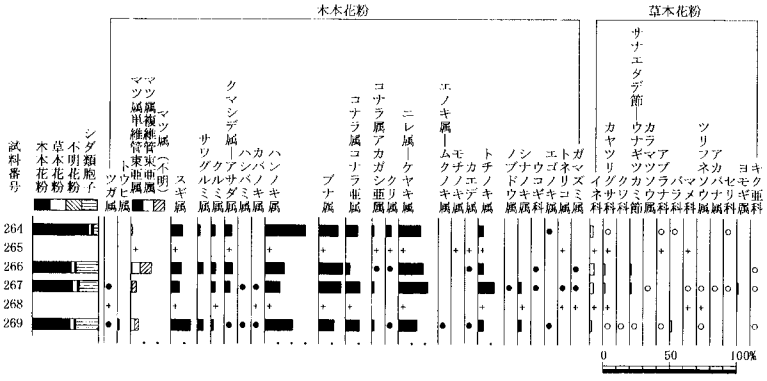
種類	遺構	SD18（水さらし場遺構）					
		1b層	1f層	3層	4層	5層	6層
	試料番号	264	265	266	267	268	269
木本花粉							
ツガ属		-	-	-	1	1	1
トウヒ属		-	-	-	-	-	3
マツ属単維管束亜属		-	-	1	-	-	-
マツ属複維管束亜属		-	1	7	2	-	6
マツ属（不明）		2	-	10	7	-	6
スギ属		18	4	9	14	5	31
サワグルミ属		4	-	5	-	-	9
クルミ属		6	-	4	7	1	4
クマシデ属－アサダ属		11	3	7	9	-	1
ハシバミ属		-	-	-	1	-	1
カバノキ属		-	-	-	1	1	1
ハンノキ属		63	6	17	25	8	43
ブナ属		30	8	21	36	3	24
コナラ属コナラ亜属		19	-	4	24	2	22
コナラ属アカガシ亜属		3	1	1	4	-	4
クリ属		9	1	1	-	-	2
ニレ属－ケヤキ属		35	12	22	48	10	29
エノキ属－ムクノキ属		-	-	-	-	-	2
モチノキ属		-	1	-	-	-	-
カエデ属		-	4	1	-	-	2
トチノキ属		9	1	5	27	2	9
ノブドウ属		-	-	-	1	-	-
シナノキ属		-	-	-	6	1	6
ウコギ科		-	-	1	1	-	-
エゴノキ属		1	-	-	-	-	1
トネリコ属		-	1	-	1	2	-
ガマズミ属		-	-	1	1	1	-
草本花粉							
イネ科		6	1	7	10	2	5
カヤツリグサ科		2	1	3	5	1	3
クワ科		-	-	-	-	-	3
サナエタデ節－ウナギツカミ節		-	-	2	4	-	2
カラマツソウ属		-	-	-	1	-	-
アブラナ科		1	1	-	-	-	1
バラ科		1	-	-	-	-	5
マメ科		-	7	-	3	5	-
ツリフネソウ属		-	-	-	1	1	3
アカバナ属		-	-	-	1	-	-
セリ科		1	-	-	1	-	-
ヨモギ属		-	-	-	4	-	-
キク亜科		-	-	1	1	-	1
不明花粉		6	2	4	9	2	6
シダ類胞子							
シダ類胞子		22	8	69	107	18	127
合　計							
木本花粉		210	43	117	216	37	207
草本花粉		11	10	13	31	9	23
不明花粉		6	2	4	9	2	6
シダ類胞子		22	8	69	107	18	127
総計（不明を除く）		243	61	199	354	64	357

第７表　花粉分析結果

種類名	遺構	SD18（水さらし場遺構）				備考
		1b層	1d層	1f層	1g層	
	試料番号	270	271	265	272	
	湿重(g)	302.2	299.4	163.9	75.7	
	部位					
木本						
サワシバ	果実	2+	-	-	1	
ブナ	殻斗	-	1	1	-	
ヤマグワ	種子	4	4	7	-	
マタタビ属	種子	-	3	1	2+	
カラスザンショウ属	核	1	-	-	-	
トチノキ	果実	-	-	-	1	未熟個体
トチノキ	種子	破	破	1+	破	全て破損個体
タラノキ	核	5	1	-	-	
ミズキ	核	1	-	-	-	
エゴノキ属	種子	5	1+	1	-	
ムラサキシキブ属	核	3	-	-	-	
ニワトコ	核	1	2	-	-	
草本						
ヒゴクサ節	果実	-	-	-	1	
スゲ属	果実	1+	-	-	2	
タデ属	果実	-	3	-	-	
ナデシコ科	種子	-	1	-	1	
スミレ属	種子	1	-	1	-	
不明種実		1	2	3	2	
木の芽		4+	-	1+	1	
材		破	破	破	破	
不明植物		-	-	破	-	
菌核		1	-	-	-	
昆虫		-	破	-	-	
土器		-	破	-	-	

注）破：細片のため個体数推定が困難である。
注）数字+：数字以上の個体数が推定される。

第８表　種実分析結果



出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類胞子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。なお、●○は１％未満、＋は木本花粉 100 個体未満の試料について検出した種類を示す。

第123図　ＳＤ18主要花粉化石群集

遺構	時代	用途	番号	遺物番号	樹種
SD18（水さらし場遺構）	縄文時代後期	構築材	1	No. 1	カエデ属
			2	No. 2	トネリコ属
			3	No. 4	クリ
			4	No. 5	ハシドイ
			5	No. 6	クリ
			6	No. 7	クリ
			7	No. 8	タラノキ
			8	No. 9	クリ
			9	No. 11	アサダ
			10	No. 12	タラノキ
			11	No. 14	樹皮
			12	No. 16	リョウブ
			13	No. 17	ブナ属
			14	No. 18	カエデ属
			15	No. 19	クリ
			16	No. 21	樹皮
			17	No. 22	カエデ属
			18	No. 24	トネリコ属
			19	No. 26	ブナ属
			20	No. 27	ブナ属
			21	No. 28	トネリコ属
			22	No. 33	樹皮
			23	No. 34	トネリコ属
			24	No. 35	ニレ属
			25	No. 36	樹皮
			26	No. 38	樹皮
			27	No. 39	ケヤキ
			28	No. 40	ブナ属
			29	No. 41	ブナ属
			30	No. 42	クリ
			31	No. 43	トネリコ属
			32	No. 44	クリ
			33	No. 46	トネリコ属
			34	No. 47	クリ
			35	No. 48	クリ
			36	No. 49	ブナ属
			37	No. 50	トネリコ属
			38	No. 52	クリ
			39	No. 53	樹皮
			40	No. 55	ケヤキ
			41	No. 56	クリ
			42	No. 58	エゴノキ属
			43	No. 59	エゴノキ属
			44	No. 60	ブナ属
			45	No. 61	トネリコ属
			46	No. 62	モクレン属
			47	No. 63	ムラサキシキブ属
			48	No. 64	クリ
			49	No. 65	樹皮
			50	No. 66	カエデ属
			51	No. 67	クリ
			52	No. 68	トネリコ属
			53	No. 69	トネリコ属
			54	No. 70	カエデ属
			55	No. 71	カエデ属
			56	No. 77	エゴノキ属
			57	No. 78	クリ
			58	No. 79	カエデ属
			59	No. 80	クリ
			60	No. 81	クリ
			61	No. 82	エゴノキ属
			62	No. 83	オニグルミ
			63	No. 84	クリ
			64	No. 85	クリ
			65	No. 86	エゴノキ属
			66	No. 87	クリ
			67	No. 88	クリ
			68	No. 91	クリ
			69	No. 93	ニレ属
			70	No. 94	ニレ属
			71	No. 95	クリ
			72	No. 96	カエデ属
			73	No. 97	ニレ属
			74	No. 99	エノキ属
			75	No. 100	クリ
			76	No. 101	クリ
			77	No. 102	クリ
			78	No. 104	クリ
			79	No. 105	クリ
			80	No. 106	クリ
			81	No. 107	クリ
			82	No. 108	樹皮
			83	No. 112	樹皮
			84	No. 114	ケヤキ
			85	No. 115	クリ
			86	No. 116	スギ
			87	No. 118	トネリコ属
			88	No. 119	樹皮
			89	No. 120	トネリコ属
			90	No. 121	クリ
			91	No. 122	樹皮
			92	No. 124	トネリコ属
			93	No. 125	トネリコ属
			94	No. 126	ブナ属
			95	No. 127	ニレ属
			96	No. 129	クリ
			97	No. 131	クリ
			98	No. 132	ブナ属
			99	No. 133	クリ
			100	No. 134	カエデ属
			101	No. 135	モクレン属
			102	No. 136	クリ
			103	No. 137	クリ
			104	No. 143	モクレン属
			105	No. 144	カエデ属
			106	No. 145	ニレ属
			107	No. 147	クリ
			108	No. 148	ケヤキ
			109	No. 149	トネリコ属
			110	No. 150	カエデ属
			111	No. 151	トネリコ属
			112	No. 152	ムラサキシキブ属
			113	No. 153	クリ
			114	No. 154	クリ
			115	No. 155	トネリコ属
			116	No. 156	樹皮
			117	No. 157	スギ
			118	No. 158	トネリコ属
			119	No. 159	クリ
			120	No. 160	クリ
			121	No. 162	クリ
			122	No. 163	クリ
			123	No. 165	ヤブツバキ
			124	No. 166	樹皮
			125	No. 167	ケヤキ
			126	No. 169	カエデ属
			127	No. 171	クリ
			128	No. 172	カエデ属
			129	No. 173	クリ
			130	No. 174	クリ

遺構	時代	用途	番号	遺物番号	樹種
SD18（水さらし場遺構）	縄文時代後期	構築材	131	No. 175	クリ
			132	No. 176	タニウツギ属
			133	No. 177	タニウツギ属
			134	No. 178	ケヤキ
			135	No. 179	ガマズミ属
			136	No. 180	ミズキ属
			137	No. 181	サクラ属
			138	No. 182	クリ
			139	No. 184	クリ
			140	No. 185	クリ
			141	No. 186	樹皮
			142	No. 187	クリ
			143	No. 188	カエデ属
			144	No. 189	樹皮
			145	No. 190	ハンノキ属ハンノキ亜属
			146	No. 191	モクレン属
			147	No. 192	エゴノキ属
			148	No. 193	クリ
			149	No. 194	樹皮
			150	No. 195	カエデ属
			151	No. 196	クリ
			152	No. 197	モクレン属
			153	No. 198	樹皮
			154	No. 199	クリ
			155	No. 200	カエデ属
			156	No. 201	アサダ
			157	No. 202	トチノキ
			158	No. 204	ガマズミ属
			159	No. 205	オニグルミ
			160	No. 206	タニウツギ属
			161	No. 207	クリ
			162	No. 208	クリ
			163	No. 209	エノキ属
			164	No. 210	コナラ属コナラ亜属コナラ節
			165	No. 211	エゴノキ属
			166	No. 212	トネリコ属
			167	No. 213	クリ
			168	No. 214	クリ
			169	No. 215	カエデ属
			170	No. 216	カエデ属
			171	No. 217	クリ
			172	No. 218	エゴノキ属
			173	No. 219	樹皮
			174	No. 220	樹皮
			175	No. 221	エゴノキ属
			176	No. 222	エゴノキ属
			177	No. 223	樹皮
			178	No. 224	トチノキ
			179	No. 227	イヌエンジュ
			180	No. 228	樹皮
			181	No. 229	エノキ属
			182	No. 230	ニレ属
			183	No. 231	ブナ属
			184	No. 232	タラノキ
			185	No. 233	クリ
			186	No. 234	クリ
			187	No. 235	クリ
			188	No. 236	フジ
			189	No. 237	カエデ属
			190	No. 238	トチノキ
			191	No. 239	クリ
			192	No. 241	キハダ
			193	No. 242	オニグルミ
			194	No. 243	樹皮
			195	No. 244	クリ
			196	No. 245	クリ
			197	No. 246	クリ
			198	No. 247	クリ
			199	No. 248	クリ
			200	No. 249	クリ
			201	No. 250	トネリコ属
			202	No. 253	カエデ属
			203	No. 254	トネリコ属＜根材＞
			204	No. 256	ガマズミ属
			205	No. 257	ケヤキ
			206	No. 258	ガマズミ属
			207	No. 260	クリ
			208	No. 261	ブナ属
			209	No. 262	ブナ属
			210	No. 263	カエデ属
			211	No. 264	カエデ属
			212	No. 266	クリ
			213	No. 268	クリ
			214	No. 269	クリ
			215	No. 270	タニウツギ属
			216	No. 271	モクレン属
			217	No. 272	クリ
			218	No. 273	エゴノキ属
			219	No. 274	キハダ
			220	No. 275	クリ
			221	No. 276	ブナ属
			222	No. 278	ミズキ属
			223	No. 279	クリ
			224	No. 280	クリ
			225	No. 281	フジ
			226	No. 282	ブナ属
			227	No. 283	樹皮
			228	No. 286	ムラサキシキブ属
			229	No. 287	ブナ属
			230	No. 290	クリ
			231	No. 291	カエデ属
			232	No. 292	オニグルミ
			233	No. 293	クリ
			234	No. 295	ガマズミ属
			235	No. 296	オニグルミ
			236	No. 297	トネリコ属
			237	No. 299	ヤマウルシ
			238	No. 300	ケヤキ
			239	No. 301	クリ
			240	No. 302	トネリコ属
			241	No. 303	クリ
			242	No. 304	樹皮
			243	No. 305	エゴノキ属
			244	No. 306	クリ
			245	No. 307	カエデ属
			246	No. 308	クリ
			247	No. 309	クリ
			248	No. 310	ガマズミ属
			249	No. 311	ムラサキシキブ属
			250	No. 312	エゴノキ属
			251	No. 313	バラ科ナシ亜科
			252	No. 314	アジサイ属
			253	No. 315	ガマズミ属
			254	No. 316	カエデ属
			255	No. 317	クマシデ属イヌシデ節
SX02（水路跡）	縄文時代後期	杭	256	No. 15	ヤマウルシ
SB19（掘立柱建物跡）	古代	柱根	261	SKP06	スギ
			262	SKP07	スギ
掘立柱建物跡	古代	柱根	263	SKP09	スギ

第 9 表　樹種同定結果

第２節　上谷地遺跡出土の種実遺体

パリノ・サーヴェイ株式会社

今回の分析調査では、縄文時代後期の水さらし場遺構（ＳＤ18）と、その他の遺構から出土した種実遺体の同定を行い、当該期の植物質食料資源に関する資料を得る。

１　試料

試料は、縄文時代後期の水さらし場遺構（ＳＤ18）等から出土した種実遺体33点（試料番号38～72、59は該当試料無し）である。その他の遺構の時期等詳細は不明である。各試料は、１試料中に複数の瓶や袋が存在するため、実施点数は計313点である。各試料の詳細は、同定結果とともに表１に記す。

２　方法

試料を双眼実体顕微鏡下で観察し、形態的特徴を当社所有の現生標本及び原色日本植物種子写真図鑑（石川，1994）、日本植物種子図鑑（中山ほか，2000）と比較し、種類の同定、計数を行う。なお、細片のため個体数推定が困難である種類を、表中に「＋（プラス）」と、数字の個体数以上が推定される種類を「数字＋」と、100個体以上が認められる種類を「多」と表示する。また、食害痕がみられる種類を「食」と、打撃痕がみられる種類を「打」と表示する。同定後の種実遺体等は、種類毎にビン詰めを行い、50％程度のエタノール溶液による液浸保存処理を施す。

３　結果

種実遺体同定の結果を第10表、図版16に示す。種実遺体の状態は比較的良好である。木本種実32種類、草本種実６種類が同定された他、不明種実、木の芽、材、炭化材、木の節、樹皮の破片等が確認された。材や炭化材は別試料で樹種同定を実施したため、本報告では樹種の種類構成に関する検討を割愛する。

同定された種実の種類をみると、木本は、全て広葉樹（オニグルミ・サワシバ・アサダ・ブナ・コナラ亜属・コナラ属・クリ・ブナ科・ケヤキ・ヤマグワ・ホオノキ・コブシ・クスノキ科・マタタビ属・ツバキ・スモモ・モモ・サクラ属・サンショウ属・カラスザンショウ・キハダ・ミツバウツギ・カエデ属・トチノキ・ブドウ属・ブドウ科・タラノキ・ミズキ・エゴノキ属・クサギ・ニワトコ・ガマズミ属）で、針葉樹を含まない。草本は、単子葉植物２種類（ヒルムシロ属・エノコログサ属）、双子葉植物４種類（アサ・タデ属・スミレ属・シソ属）である。トチノキやオニグルミ等の大型種実が多く、草本種実等の小型種実は少ない。また、堅い核や種子をもつ鳥獣散布型種実が比較的多く同定された。

４　考察

（１）有用植物

種実遺体同定の結果、縄文時代後期の水さらし場遺構（ＳＤ18）と、その他の遺構から出土した種実遺体群は、前報よりも種類数・個体数共に多く確認された。特に、有用植物が多く認められるのが特徴である。有用植物には、大陸等から持ち込まれた栽培植物と自生する種類とがある。スモモ、モモ、アサ、シソ属の一部（エゴマ・シソ等）は、中国から渡来した栽培植物とされる。ＳＬ06から多量出土したスモモや、ＳＤ05・25・26、ＳＫ27等から出土したモモは、食用のほか、薬用、観賞用等に広く利用される。なお、縄文時代後期の水さらし場遺構（ＳＤ18）からモモが出土しているが、これまで秋田県内で縄文時代後期の遺構からモモが出土した例はほとんどない。ＳＤ18では、木材を用いた放射性炭素年代測定を行っているが、その結果では縄文時代後期の年代に混じって中近世の年代

も得られており、後世の木材が混入している可能性が指摘されている。このことを考慮すれば、モモについても後世の混入等に由来する可能性がある。

ＳＤ18から出土したアサは、繊維が衣料や縄用に、果実が食用や油料に利用可能である。ＳＤ18から出土したシソ属の一部（エゴマ・シソなど）は、果実が食用や油料に利用可能である。これらの栽培植物は、当該期の遺構周辺で栽培されたか、もしくは持ち込まれ利用されていた可能性が考えられる。

自生する有用植物では、オニグルミ・ブナ・コナラ亜属・コナラ属の一部・クリ・ブナ科・トチノキ等の堅果類が挙げられる。これらの堅果類は、コナラ亜属（ナラ類）、コナラ属の一部、ブナ科の一部、トチノキはアク抜きを必要とするが、収量が多く長期保存が可能なため、古くから里山で保護、採取されてきた種類である。特に、縄文時代後期の水さらし場遺構（ＳＤ18）からはトチノキの種子が多量出土しており、当該期にアク抜き作業を行っていたと考えられている。種子は、完形個体に比べ破損個体が圧倒的に多いことから、加工処理されたことが考えられる。また、成熟個体だけではなく未熟個体（幼果）も出土していることから、トチノキは遺構周辺に生育していたと考えられ、種実の採取地に近い場所に、「水さらし場」を設けたことが示唆される。このように、トチノキは縄文時代後期の主要な植物質食糧として利用されていた可能性が考えられ、前報と調和的な結果となった。

一方、その他の遺構から出土したトチノキは、果実や完形個体、未熟個体を多量に伴って出土しており、ＳＤ18とは出土状態が異なる。このことから、トチノキは、当該期の遺構の至近に生育していたか、上流から流されて堆積した等、自然に堆積したことも想像される。しかし、現段階では遺構の位置関係等の詳細が不明であるため、今後の資料の蓄積を待ち検討したい。

オニグルミとクリについては、出土個体数はトチノキより少ないが、アク抜きせず生食が可能であるため、優先的に利用された可能性も考えられる。オニグルミの破片には、福井県鳥浜貝塚（畠中，1981）や、南木（1992）の報告例に従うと、核頂部を破損する打撃痕と認められる個体が認められたことから、人が食用に利用した後、廃棄した残渣であることが推定される。

その他に利用可能な植物として、ヤマグワ・マタタビ属・ブドウ属・ガマズミ属は、果実が多汁で生食が可能である。ツバキは種子が食用や油料に、花は鑑賞用に利用可能である。サンショウ属の一部は種子が香辛料や薬用に利用可能である。エゴノキ属には、果実にエゴサポニンを含み、洗濯や魚採に利用可能である種類（エゴノキ等）がある。ニワトコは、青森県三内丸山遺跡のニワトコ密集層をはじめ、酒造りなど人為的干渉の可能性を指摘する報告事例がある（南木，1994）。これらの有用植物については、人為的な痕跡は認められず、大部分が自然に堆積したものと考えられる。しかし、本遺跡周辺に生育する豊富な有用植物の種類を、当該期に利用していた可能性は高いと思われる。

（２）周辺植生

上谷地遺跡の縄文時代後期の水さらし場遺構（ＳＤ18）と、その他の遺構から出土した種実遺体群のうち、栽培植物を除く種類構成は、木本 30 種類、草本 4 種類である。堅い核や種子をもつ鳥獣散布型種実等の木本類が主体で、草本類は種類数・個体数共に少ない。草本類に着目すると、エノコログサ属・タデ属・スミレ属等は、いわゆる「人里植物」を含む種類で、林縁部や集落周辺の明るく開けた場所に生育していたものに由来すると思われる。水生植物のヒルムシロ属等は、水さらし場遺構付近の水湿地に由来するものと思われる。

木本類は、基本的には冷温帯落葉広葉樹林を構成する種類が多く、現在の周辺地域の山林にも生育

している。当該期の遺跡付近の後背山地には、ブナ・コナラ亜属等、極相林を作る種類を中心とした冷温帯性落葉広葉樹林が存在していたことが推定され、前報や辻（1981）、高原（1998）等の既存報告とも調和的である。具体的に、オニグルミ・サワシバ・ブナ・ケヤキ・トチノキは、谷沿い等の適湿地に生育する高木で、主に丘陵地から谷底にかけての斜面などの河畔林や渓谷林を構成していた種類に由来すると思われる。更に、アサダ・クリ・ヤマグワ・ホオノキ・コブシ・クスノキ科・ツバキ・サクラ属・カラスザンショウ・キハダ・カエデ属・ミズキ・エゴノキ属等の高木や、中低木類のサンショウ属・ミツバウツギ・タラノキ・クサギ・ニワトコ・ガマズミ属・籐本類のマタタビ属・ブドウ属等は、周辺の丘陵地から斜面の林内もしくは林縁部のマント群落やソデ群落から由来したものと思われる。陽樹が多く、草本共に先駆的に侵入する種類や、コナラ亜属・クリ等の二次林要素がみられることから、人為的に森林が切り開かれた場所である可能性も考えられる。

以上のことから、上谷地遺跡から出土した種実遺体群は、丘陵地と低地との境界付近の植生を強く反映しており、前報と調和的な結果となった。

引用文献

石川茂雄（1994）原色日本植物種子写真図鑑，328 p.，石川茂雄図鑑刊行委員会.

畠中清隆（1981）「クルミの形状別分類と欠損部位」．鳥浜貝塚研究グループ編，『鳥浜貝塚　1980 年度調査概報―縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査２―』，福井県教育委員会.

南木睦彦（1992）低湿地遺跡の果実．考古学ジャーナル　355，p.18-22.

南木睦彦（1994）三内丸山遺跡の縄文時代前期のニワトコ種子密集層．植生史研究，第２巻　第２号，p.43.

中山至大・井之口希秀・南谷忠志（2000）日本植物種子図鑑，642 p.，東北大学出版会.

高原　光（1998）スギ林の変遷.「図説　日本列島植生史」，安田喜憲・三好教夫編，p.207-223，朝倉書店.

辻　誠一郎（1981）秋田県の低地における完新世後半の花粉群集．東北地理，33，p.81-88.

記載内容	木本種実																					
	オニグルミ 核 完形	オニグルミ 核 破片	サワシバ 果実	アサダ 果実	ブナ 殻斗	ブナ 果実	コナラ亜属 殻斗	コナラ属 果実 破片	クリ 果実 破片	ブナ科 果実 破片	ケヤキ 果実	ヤマグワ 種子	ホオノキ 種子	コブシ 種子	クスノキ科 種子	マタタビ属 種子	ツバキ 種子	スモモ 果実	スモモ 核	モモ 核 完形	モモ 核 破片	サクラ属 核
SD18	11	189	49	4	217	53	48	12	9	29	6	15	4	10	3	6	1	0	0	2	0	14
	食8	打3																				
		1＋			1＋					15＋												
SL06	3	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	3	143	1	1	0
	食2																			食1		
SL14	28	42	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	食16							2+														
SL底面	10	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	食1																					
Aトレンチ（SL及びSL14）	1	6	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
ST20	0	1	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
SD05	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	32	1	0
SD25	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7	3	0
SD26	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2	0	0
SK27	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0

記載内容	木本種実																	草本種実						その他					
	サンショウ属 核	カラスザンショウ 核	キハダ 核	ミツバウツギ 種子	カエデ属 果実	トチノキ 果実 完形	トチノキ 果実 破片	トチノキ 種子 完形	トチノキ 種子 破片	ブドウ属 種子	ブドウ科 種子	タラノキ 核	ミズキ 核	エゴノキ属 種子	クサギ 核	ニワトコ 核	ガマズミ属 核	ヒルムシロ属 果実	エノコログサ属 穎	アサ 種子	タデ属 果実	スミレ属 種子	シソ属 果実	不明種実	木の芽	炭化材 破片	材 破片	木の節 破片	樹皮 破片
SD18	9	1	4	5	39	1	0	12	48	12	2	1	7	617	2	5	2	1	1	1	8	1	1	3	224	46	2	1	0
									多53																	多2			
									65＋																	23＋	1＋		
SL06	0	0	0	0	0	1	18	68	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
									1＋																				
							多1		多2																				
SL14	0	0	0	0	0	111	62	192	76	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
							123＋		多5																				
									138＋																				
SL底面	0	0	0	0	0	1	11	22	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
									24＋																				
Aトレンチ（SL及びSL14）	0	0	0	0	0	8	33	35	6	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
							23＋		76＋																				
ST20	0	0	0	0	0	0	7	9	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
									27＋																				
SD05	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0
SD25	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
SD26	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
SK27	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

第10表　種実遺体同定結果

第３節　上谷地遺跡から出土した木材の年代と樹種（平成 13・14 年度）

パリノ・サーヴェイ株式会社

上谷地遺跡は、子吉川右岸（東岸）の丘陵から沖積低地にかけて位置する。今回の発掘調査により、縄文時代後期の水さらし場遺構、河川跡、平安時代の掘立柱建物跡、河川跡、溝跡等が検出されている。縄文時代後期の水さらし場遺構では、木組みやトチノキの果皮の破片等が検出されており、トチノキのアク抜きに使用された施設と考えられている。本遺跡では、これまでに放射性炭素年代測定、テフラ分析、珪藻分析、花粉分析、種実遺体同定、樹種同定等の自然科学分析により、遺構の年代推

定、古植生、植物利用、木材利用等が検討されている。

今回の分析調査では、出土した木材の放射性炭素年代測定を行い、更に遺構の年代に関する資料を得る。また、樹種同定を併せて実施し、木材利用に関する資料を得る。

１　試料

試料は、縄文時代後期の水さらし場遺構等から出土した木材 33 点（試料番号１～ 33）である。このうち､試料番号１～ 15 は根株であった。放射性炭素年代測定は､試料番号１～ 16,18 ～ 20,24,26,31 の 22 点について行い、樹種同定は試料番号１～ 33 の 33 点を対象とする。いずれも大型の木片が採取されており、年代測定試料は確認できた中で最も外側の年輪から採取した。

２　方法

（１）放射性炭素年代測定

測定は、株式会社加速器分析研究所の協力を得た。なお、δ 13 Ｃの値は加速器を用いて試料炭素の 13 Ｃ濃度（13 Ｃ／ 12 Ｃ）を測定し、標準試料ＰＤＢ（白亜紀のベレムナイト類の化石）の測定値を基準として、それからのずれを計算し、千分偏差（‰；パーミル）で表したものである。今回の試料の補正年代は、この値に基づいて補正をした年代である。

（２）樹種同定

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール，アラビアゴム粉末，グリセリン，蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

３　結果

（１）放射性炭素年代測定

測定結果を第 11 表に示す。出土した木材・炭化材の測定年代値は、№１・２・９～ 16・18 ～ 20・31 が 1990 ～ 3470 ＢＰ（補正年代 2040 ～ 3430 ＢＰ）、№３～８が 1080 ～ 1210 ＢＰ（補正年代 1110 ～ 1250 ＢＰ）、№ 24・26 が 210 ～ 510 ＢＰ（補正年代 250 ～ 520 ＢＰ）であった。

（２）樹種同定

樹種同定結果を第 11 表に示す。試料番号 19 は、導管が認められ、その配列から散孔材となる広葉樹であるが､若年枝の小片で樹芯と１年目の木部の一部が観察できるのみであり､樹種は不明である。その他の試料は、針葉樹１種類（スギ）と広葉樹８種類（アサダ・ブナ属・コナラ属コナラ亜属コナラ節・クリ・ニレ属・ハリギリ・トネリコ属・ガマズミ属）に同定された。このうち、トネリコ属については、幹材の他に根材も認められた。

４　考察

（１）年代について

年代測定を行った試料のうち、ＳＤ18は縄文時代後期の水さらし場遺構と考えられている。東北地方における縄文時代の年代については、キーリ・武藤（1982）により、いずれも同位体補正を行っていない値で、縄文時代後期が 4000 ～ 3250 ＢＰ、縄文時代晩期が 3250 ～ 2250 ＢＰとされている。今回の結果をみると、試料番号 24，26 を除く５点が縄文時代後期末～晩期初頭頃の年代を示しており、ほぼ縄文時代後期の年代に一致する。この結果は、前回行われたＳＤ18出土木材の年代測定結果と比較すると若干若い年代を示す傾向があるが、ほぼ一致しており、大きな矛盾はない。

試料番号１～15は、ＳＤ18付近で検出した根株である。試料番号1，2，10～13，15の7点は、2360ＢＰ～3030ＢＰの年代値を示し、縄文時代晩期頃の年代に一致する。また、試料番号9，14は1990ＢＰ～2020ＢＰで、弥生時代の年代に一致する。これまでの調査では、同時期の年代値は得られていないが、年代値が比較的まとまることから、縄文時代晩期や弥生時代と考えられる。試料番号３～８の年代値は、1080～1210ＢＰ（補正年代1110～1250ＢＰ）を示す。これらの値は、補正年代を用いて、ＩＮＴＣＡＬ98（Stuiver et al.）による暦年較正を行っても、それほど大きな変化は見られず、8世紀初頭～10世紀頃に相当する。前回の分析調査では、平安時代の掘立柱建物跡等でほぼ一致する年代値が得られている。このことから、試料番号３～８もほぼ同時期の木材と考えられる。

（２）木材利用について

ＳＤ18から出土した木材は、クリ・コナラ節・ニレ属が比較的多く、他にスギ・ガマズミ属・トネリコ属・アサダ・樹皮が認められた。前述の年代測定結果から、後世の木材が混入している可能性もあるが、出土した種類は前回の結果とも一致する。比較的湿った場所を好む種類が多いことから、水さらし場周辺に生育していた樹木を利用した可能性がある。また、樹皮が２点出土しているが、前回の調査でも樹皮が確認されており、木組み上に敷いた可能性等が指摘されている。今回についても同様の可能性がある。

試料番号３～８は、年代測定で8世紀初頭～10世紀頃の年代に集中しており、同年代の木材と考えられる。樹種が全てブナ属に同定されていることから、ブナ属を選択的に利用した可能性がある。また、試料番号1，2及び9～15は、年代測定で縄文時代晩期や弥生時代の年代が得られている。樹種は、ハリギリ・クリ・ブナ属・ニレ属・トネリコ属で、トネリコ属が根材も含めて最も多く見られた。

引用文献

キーリ　Ｃ.Ｔ.・武藤康弘（1982）縄文時代の年代．加藤晋平・小林達雄・藤本　強編「縄文文化の研究１　縄文人とその環境」，p.246-275，雄山閣．

Stuiver, M., Reimer, P.J., Bard, E., Beck, J.W., Burr, G.S., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, G., van der Plincht, J. and Spurk, M.(1998)INTCAL98 radiocarbon age calibration, 24,000-0 cal BP. Radiocarbon, 40, p.1041-1083.

番号	試料名	試料の質	樹　種	測定年代	δ13C	補正年代	Code. No.
1	LT37．木1	木材	ハリギリ	2360±40BP	-21.19±0.85‰	2420±40BP	IAAA-11833
2	LT39．木2	木材	クリ	2890±40BP	-21.24±0.90‰	2950±40BP	IAAA-11834
3	MA39．木3	木材	ブナ属	1210±30BP	-22.77±0.79‰	1250±40BP	IAAA-11835
4	LS47．木4	木材	ブナ属	1130±30BP	-21.93±1.11‰	1180±30BP	IAAA-11836
5	LT47．木5	木材	ブナ属	1150±30BP	-23.95±1.23‰	1170±40BP	IAAA-11837
6	LT47．木6	木材	ブナ属	1140±40BP	-21.85±1.63‰	1200±50BP	IAAA-11838
7	LS48．木7	木材	ブナ属	1080±40BP	-23.14±1.16‰	1110±50BP	IAAA-11839
8	LS47．木8	木材	ブナ属	1160±40BP	-22.20±1.05‰	1200±40BP	IAAA-11840
9	LT48．木9	木材	クリ	1990±30BP	-21.90±0.83‰	2040±40BP	IAAA-11841
10	LT43．木10	木材	ニレ属	3030±40BP	-22.55±0.83‰	3070±40BP	IAAA-11842
11	LS42．木11	木材	ブナ属	2410±40BP	-21.49±0.85‰	2460±40BP	IAAA-11843
12	LS43．木12	木材	トネリコ属	2680±40BP	-25.38±1.85‰	2670±50BP	IAAA-11844
13	LR42．木13	木材	トネリコ属	2670±40BP	-21.76±0.83‰	2720±40BP	IAAA-11845
14	LR42．木14	木材	トネリコ属＜根材＞	2020±30BP	-22.74±1.07‰	2060±40BP	IAAA-11846
15	LR42．木15	木材	トネリコ属	2500±40BP	-22.60±1.13‰	2530±40BP	IAAA-11847
16	SD18 No.400	木材	クリ	3350±40BP	-24.65±1.03‰	3360±40BP	IAAA-11848
17	SD18 No.401	木材	クリ	－	－	－	－
18	SD18 No.402（立木）	木材	クリ	3340±30BP	-22.76±1.01‰	3370±40BP	IAAA-11849
19	SD18 No.403（立木）	木材	広葉樹（散孔材）	3250±40BP	-26.45±1.30‰	3230±40BP	IAAA-11850
20	SD18 No.404（立木）	木材	ガマズミ属	3290±40BP	-28.70±1.28‰	3230±40BP	IAAA-11851
21	SD18 No.405	木材	クリ	－	－	－	－
22	SD18 No.406	木材	ニレ属	－	－	－	－
23	SD18 No.407	木材	ニレ属	－	－	－	－
25	SD18 No.409	木材	ニレ属	－	－	－	－
27	SD18 No.412	木材	クリ	－	－	－	－
28	SD18 No.413	木材	コナラ属コナラ亜属コナラ節	－	－	－	－
29	SD18 No.414	木材	樹皮	－	－	－	－
30	SD18 No.415	木材	樹皮	－	－	－	－
31	SD18 No.416	木材	トネリコ属	3470±40BP	-27.12±1.03‰	3430±40BP	IAAA-11854
32	SD18 No.417	木材	アサダ	－	－	－	－
33	SD18 No.418	木材	コナラ属コナラ亜属コナラ節	－	－	－	－

1)測定は、加速器質量分析法（AMS法）による。
2)年代は、1950年を基点とした年数で、補正年代はδ13Cの値を基に同位体効果による年代誤差を補正した値。
3)放射性炭素の半減期は、5568年を使用した。

第11表　放射性炭素年代測定及び樹種同定結果（２）

第５章　まとめ

今回の調査では、水さらし場遺構１基、掘立柱建物跡１棟、溝跡16条、井戸跡１基、土坑17基、竪穴状遺構１基、捨て場１箇所、階段状遺構１基、性格不明遺構４基、柱穴様ピット129基、河川跡２条を検出した。これらは遺物の出土状況や埋土の特徴から、縄文時代～中世の時期にそれぞれ帰属するものと考えられる。遺物は、縄文時代の土器（早期末～晩期）・石器、平安時代の土師器・須恵器・石製品・木製品・金属製品・鍛冶関連遺物、中世以降の磁器・金属製品・鍛冶関連遺物が出土した。この他に遺構に係わる植物・種実遺体等を多く採集できた。遺跡の時期は、縄文時代（後期前葉が中心）、平安時代（10世紀頃）、中世（15～16世紀）と推察される。

１　水さらし場遺構と縄文時代の遺構

当遺構は、秋田県内では初めての水さらし場遺構の出土例で、出土した土器は縄文時代中期から晩期に及ぶが、遺構使用時や廃絶時に取り残されたと判断した遺物の時期から、当遺構が構築されたのは縄文時代後期前葉と考えられる。当遺構は２カ年に渡って調査を行った結果、丘陵の斜面下の湧水を引き込み、トチのアク抜きを行っていた水さらし場遺構であることがわかった。以下では当遺構の特徴を分類するとともに、他遺構との関連等を考えたい。

食材：トチである。トチノキは落葉高木で山地の谷沿い等の水気の多いところに育つ。沖縄を除くほぼ全国に分布し、花期は５～６月で、径３～５㎝のクリに似た種子（トチ）が９月頃に落ちる。トチはドングリやクリよりも実が大きく貯蔵も可能なことから、近年まで飢饉の救荒食として用いられた。トチを食材として加工する上で障害となるのが、アクである。トチのアクは非水溶性のサポニン・アロインで、アルカリ（灰）で中和（アク抜き）する必要がある。縄文時代前期の製粉技術の発達と中期以降の「灰あわせ」や「水さらし」の技術の発達によって主食としての位置を占めるようになったと考えられる。トチの食べ方には近年まで行われていた米と併用したトチ餅や粥等の他に団子状にして食べるコザワシの方法があり、縄文時代に行われていたのは後者の加工方法である。他地域の出土例からも水さらし場遺構は縄文時代の中期から晩期にかけて多く使用されている。

工程（トチのコザワシ）

┌──⑩灰あわせ（灰汁）──┐
①採集→②虫殺し→③乾燥→④保存→⑤ふやかし→⑥皮むき→⑦煮沸→⑧つき砕き→⑨水さらし
→⑪水切り→⑫調理→⑬食べる　　＊④～⑥は必ずしも必要な工程ではなく長期保存を伴う場合に行われる

当遺構で行われた作業は⑨で、⑩のアルカリ中和を行う「灰あわせ」の後に行われる。その他の工程について、出土遺物や他遺構の存在をふまえて推察したい。①はＳＬ14の川底でトチが検出されており、これに幼果が含まれいることから付近に自生していたものを採集したと考えられる。②は袋等を使い河川で行う、同様の方法でＳＥ30で行う、木組部を水没させ行う等の複数の方法が考えられる。④に相当する貯蔵坑は今回の調査では住居跡と同様に検出されなかった。当該地域は低地にあるため水の影響を受けやすく居住域には不向きであるため、東に隣接する丘陵に居住域があり、貯蔵坑も同様の地域にあったと考えられる。ＳＭ31が同時期の遺構であれば、この往来に利用された可能性があ

る。⑦は縄文時代後期前葉の深鉢が、⑧は凹石、敲石、石皿が遺構内で出土しており、付近で行われたと考えられる。⑩の際に使用された灰の供給源は不明だが、「トチ一升、灰一升」といわれるように、大量の灰が必要とされることから、④同様の地域から供給されたのではないかと考えられる。

構造：遺構の構造上の特徴を、他の遺跡で検出された水さらし場遺構と比較したい。ここでは渡辺誠氏の指摘に基づいて、広義でいう水場遺構との混同を避けるため、縄文時代にトチ等のアク抜きで使用された遺構に比較を留めたい。以下は全国で検出された水さらし場遺構である。

No.	遺跡名	所在地	時期	主な食材	構造の特徴	水源
1	忍路土場遺跡	北海道小樽市	後期	堅果類	木組	河川
2	岩渡小谷(４)遺跡	青森県青森市	前期	クリ	木組、木堰	沢水
3	小牧野遺跡	青森県青森市	後期	不明	湧水遺構、溝	湧水
4	近野遺跡	青森県青森市	中期	トチ	木枠	沢水
5	柏子所Ⅱ遺跡	秋田県能代市	後期	トチ	木組、木枠	沢水
6	**上谷地遺跡**	**秋田県本荘市**	**後期**	**トチ**	**木組、溝跡**	**湧水**
7	高瀬山遺跡	山形県寒河江市	後～晩期	トチ	木組、石敷	湧水
8	寺野東遺跡	栃木県小山市	後～晩期	堅果類	木組	湧水
9	明神前遺跡	栃木県鹿沼市	後期	トチ	木組	湧水
10	矢瀬遺跡	群馬県月夜野町	晩期	堅果類	石敷	湧水
11	茅野遺跡	群馬県榛東村	後～晩期	堅果類	石敷	湧水
12	赤山陣屋遺跡	埼玉県川口市	晩期	トチ	木組	湧水
13	三ノ耕地遺跡	埼玉県吉見町	晩期	堅果類	溝、土坑	湧水
14	真田・北金目遺跡群	神奈川県平塚市	後期			
15	元屋敷遺跡	新潟県朝日村	後～晩期	トチ	イネ科植物敷	湧水
16	寺地遺跡	新潟県青海町	晩期			
17	桜町遺跡	富山県小矢部市	中期	トチ、クリ	木組	湧水
18	栗林遺跡	長野県中野市	後期	堅果類	木枠	湧水
19	カクシキレ遺跡	岐阜県丹生川村	晩期	トチ、クルミ	木枠	湧水
20	たのもと遺跡	岐阜県丹生川村	晩期	堅果類	溝	湧水

当遺構の特徴は「立地と流路」、「作業場」についてあげられる。「立地と流路」については、沢等の自然な傾斜を利用するのではなく、ほぼ平坦な沖積地に溝を掘り込むことによって傾斜を造り、溝の幅等を変えることによって水量調節を行ったと考えられることである。排水部で溝の幅が狭くなっていることから、排水を調節することによって木組部を水没させることが可能であったと考えられる。「作業場」については、木組が流路と同方向に並んでいる点と木枠がない点があげられる。このことから作業時には編布は袋状ではなく木組の上に敷いた状態で使用されたと考えられる。但し、木組の北東端にはＳＫ32と同程度の直径で木組が抜けている部分があり、木組の架け替えがされたと仮定すると、一部にＳＫ32を伴った時期があったと推測され、このＳＫ32が木枠に近い役割を果たした可能性がある。

構造材：木組部の構造材は自然科学分析の結果、以下の樹種が使用されていることが解った。他遺跡

の水さらし場遺構の例でもクリ材を主として利用している場合が多く、クリが実を食用にする以外にも重要な資源であったことがわかる。岩渡小谷（４）遺跡等のように木製品が転用された形跡はなく、使用に適した太さの丸木や半裁した割材を主として使用している。横木や木組部の南北両端には幅20㎝前後の板材が数点見られる。両端の板材は作業時の足場であった可能性があるが断定は控える。

樹　種	点数	%	樹　種	点数	%	樹　種	点数	%
クリ	84	32.9	タラノキ	3	1.2	アジサイ属	1	0.4
カエデ属	25	9.8	トチノキ	3	1.2	クマデ属イヌシデ節	1	0.4
トネリコ属	22	8.6	エノキ属	3	1.2	ヤブツバキ	1	0.4
ブナ属	15	5.9	キハダ	2	0.8	サクラ属	1	0.4
エゴノキ属	13	5.1	ミズキ属	2	0.8	ハンノキ属ハンノキ亜属	1	0.4
ケヤキ	8	3.1	アサダ	2	0.8	コナラ属コナラ亜種コナラ節	1	0.4
ニレ属	7	2.7	スギ	2	0.8	イヌエンジュ	1	0.4
ガマズミ属	7	2.7	フジ	2	0.8	トネリコ属（根材）	1	0.4
モクレン属	6	2.4	リョウブ	1	0.4	ハシドイ	1	0.4
オニグルミ	5	2.0	ヤマウルシ	1	0.4	樹皮	24	9.4
タニウツギ属	4	1.6	バラ科ナシ亜種	1	0.4	計	255	100
ムラサキシキブ属	4	1.6						

２　平安時代の上谷地遺跡

平安時代の遺構は掘立柱建物跡１棟、溝跡３条、井戸跡１基、土坑２基、性格不明遺構１基、河川跡１条を検出した。遺物は、土師器・須恵器・石製品・木製品・金属製品・鍛冶関連遺物が出土した。平安時代の遺構は調査区北側の沖積地で多く検出された。この北側部分は、湿地帯に盛土（第Ⅲ層）、整地した上で土地を利用していることがわかった。

遺構：調査面積や出土遺物量に対して、遺構検出数が少ないことがあげられる。当該地域は現況が水田であったことから、耕作やほ場整備等で遺構が失われた可能性も考えられるが、遺物包含層（第Ⅱ層）や整地層（第Ⅲ層）が遺存しており、遺構は元々密度が低い状態であったと推察される。遺構の種別にも偏りが見られ、出土遺物の傾向から祭祀に関連したものが殆どと考えられる。ＳＤ05等からはモモ、ＳＬ06からはスモモの種子が検出されている。これらは中国から渡来した栽培植物で、食用・薬用・観賞用の他に祭祀で用いられた民俗例もあり、遺跡や各遺構の性格を考えるうえの資料と考えられる。今回の調査では竪穴住居跡は検出されず､掘立柱建物跡が１軒検出されたのみであった。平成３年に行われたボーリング調査では、遺跡範囲は約85,000㎡と推定されており、今回の調査範囲がこのうちの祭祀域に相当すると仮定した場合、居住域に相当する地域はどこなのかという問題があり、以下４つの推論があげられる。第１に当該範囲に竪穴住居跡等が存在したが、後世の耕作等のため失なわれた。第２に調査区より西側の沖積地に整地面が広がり、そこに居住域があった。平成13年度調査で沖積地への盛土整地が確認されている。第３に調査区より東側の丘陵上に居住域があった。現況からも大規模整地の痕跡が観察でき、本荘市教育委員会の分布調査で当該期の遺物が検出されている。第４に出土遺物等の特徴から、官衙遺跡の一部である可能性があり、通常の居住域が元々存在しなかった。今後、周辺の調査事例を併せてこの推論について検討する必要がある。

土器：平安時代の土器には以下の４つの特徴があげられる。第１に器種のうち土師器坏が突出して多く、８割以上を占める。また、坏は完形やほぼ完形のものが多く含まれるのに対して、壺・甕は破片

が殆どで、接合・復元可能なものは皆無である。第２にＳＤ05・ＳＥ30・ＳＤ06等、特定の遺構から集中して出土することである。ＳＤ05では環状に刺された杭の内側で、完形の土師器坏が重なり合うように、前述のモモの種子とともに出土した。ＳＥ30では 40 点余りの完形の土師器坏が斎串とともに出土し、この中には墨書土器１点、口縁部が意図的に打ち欠かれたと考えられる 10 数点、燈明皿として使用された痕跡のあるもの２点が含まれていた。ＳＬ06は点数は少ないが、墨書土器２点が出土した。これらの遺構は、溝・井戸・河川といずれも水に関連した遺構である。第３に同一遺構出土の土師器坏が統一性に欠けることである。特にＳＤ05・ＳＥ30は本文・挿図にも掲載したとおり、胎土・焼成・器形に幅があり、焼き膨れや歪み等の不良品も多く含まれている。第４に転用硯・燈明皿等の食膳具以外の用途に転用されたものが含まれていることである。これら４つの特徴は本荘市教育委員会の調査内容とも符合する点が多い。

木製品：ＳＤ05・ＳＥ30・ＳＫ17・ＳＬ06等から出土しているが、このうちＳＬ06が最も種別・点数ともに豊富であり、これを中心に分類したい。木製品は使用目的別に食膳具・容器・履物・調度具・灯火具・祭祀具に大別される。食膳具のうち刳物椀は未成品で付近に生産場所があったことを示唆している。挽物皿は器形から供献具の可能性がある。漆器椀は底に朱書きがあり、数少ない文字資料の一つである。祭祀具はＳＤ05の杭、ＳＥ30・ＳＬ06の斎串、ＬＥ41の人形がある。

３　おわりに

近年由利本荘地区では多くの発掘調査が行われており、今回の調査結果は、縄文時代の食物加工、平安時代の祭祀、中世の城館等、同地域の歴史を考えるうえでの幅広い資料を得ることができたと考えられる。しかし、全ての時代に共通して居住域が不明である等、断片的な資料であることも事実であり、今後は他遺跡の調査事例を集積し、資料の精査を更に進めることが必要である。

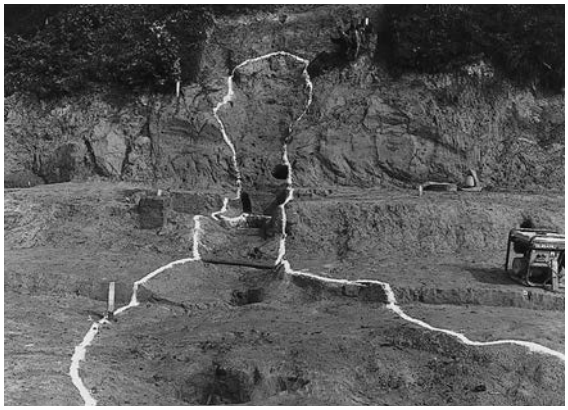
《参考文献》

奈良国立文化財研究所『木器修正図録　近畿古代編』奈良国立文化財研究所史料第 27 冊　1985(昭和 60)年
奈良国立文化財研究所『木器修正図録　近畿原始編』奈良国立文化財研究所史料第 36 冊　1993(平成５)年
青森県教育委員会『岩渡小谷(４)遺跡Ⅱ－東北縦貫自動車道八戸線(青森～青森)建設事業に伴う遺跡発掘調査報告－』青森県埋蔵文化財調査報告書第 371 集　2004(平成 16)年
青森県教育委員会主催『縄文人の台所・水さらし場遺構を考える－縄文人は水とどうかかわってきたか－』平成 14 年度　縄文講座資料　2003(平成 15)年
秋田県埋蔵文化財センター『研究紀要』第７号　1992(平成４)年
秋田県埋蔵文化財センター『研究紀要』第 12 号　1997(平成９)年
本荘市教育委員会『上谷地遺跡詳細分布調査報告書－第３次調査－』1997(平成９)年
本荘市教育委員会『上谷地遺跡詳細分布調査報告書－第４次調査－』1998(平成 10)年
本荘市教育委員会『上谷地遺跡・新谷地遺跡－内越地区担い手育成基盤整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』本荘市文化財調査報告書第 19 集　2003(平成 15)年
渡辺誠『縄文時代の植物食』雄山閣　1975(昭和 50)年
渡辺誠・甲元眞之編『縄文人・弥生人は何を食べたか』雄山閣　2000(平成 12)年
菱山忠三郎『身近な樹木』主婦の友社　1998(平成 10)年
大川清・鈴木公雄・工楽善通編『日本時辞典』雄山閣　1996(平成８)年
佐々木由香「縄文時代の水場遺構に関する基礎的研究」『古代』第 108 号　早稲田大学考古学会　2000(平成 12)年
鈴木道之助『図録　石器入門辞典　縄文』柏書房　1991(平成３)年

遺跡遠景（北西→）

基本土層Ｓ．Ｐ．Ｃ-Ｈ（南→）

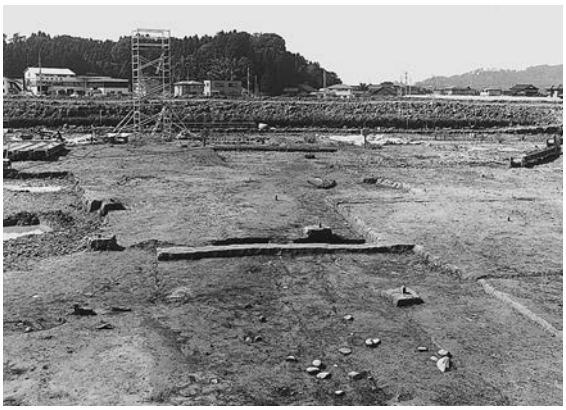
基本土層Ｓ．Ｐ．Ｉ-Ｊ（北→）



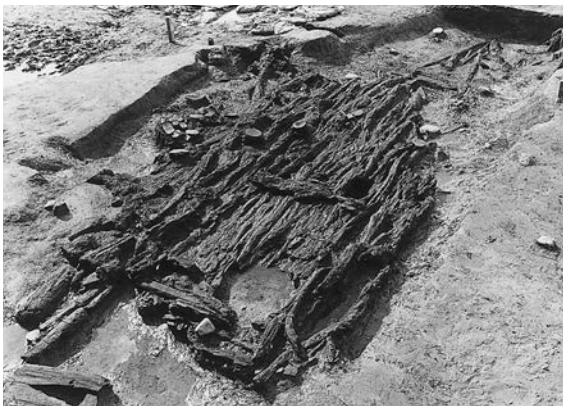
ＳＤ18湧水～木組部の完掘（西→）

ＳＤ18湧水部（西→）

ＳＤ18導水部断面（西→）



ＳＤ18検出状況（東→）



ＳＤ18木組部（北東→）

図版2

ＳＤ18精査出状況（南西→）

ＳＤ18土器出土状況（東→）

ＳＤ18木組下の土器・石器出土状況（北→）

ＳＤ18木組部完掘（西→）

ＳＴ20断面（東→）

ＳＢ19検出状況（南→）

ＳＢ19Ｐ７断面（東→）

人形出土状況（南→）

ＳＤ05遺物出土状況（南→）

ＳＥ30土師器・須恵器出土状況（西→）

ＳＤ05板枠・杭と土師器（東→）

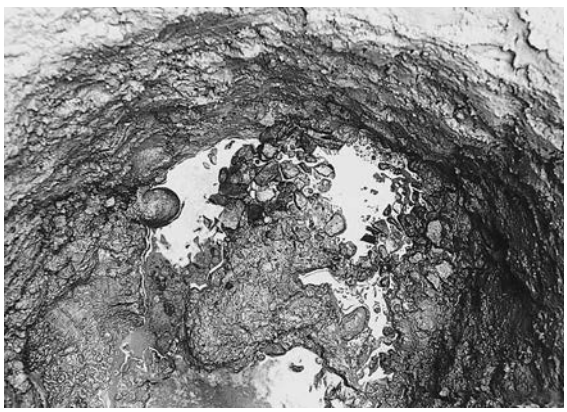
ＳＤ26検出状況（南→）

ＳＤ26遺物出土状況（南西→）

ＳＥ30礫・木製品の出土（南西→）

ＳＥ30土師器坏出土状況（北→）

ＳＥ30平安時代の井戸跡完掘状況（南→）



ＳＥ30縄文土器出土状況（北→）

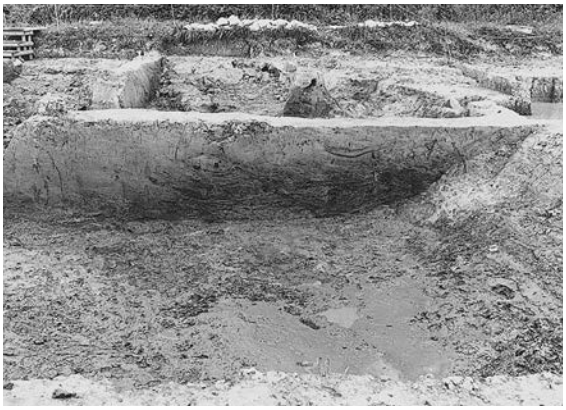
ＳＥ30湧水状況（東→）

ＳＫ17木板材出土状況（北西→）

ＳＭ31精査状況（西→）

ＳＬ14検出状況（東→）

ＳＬ14断面１（西→）

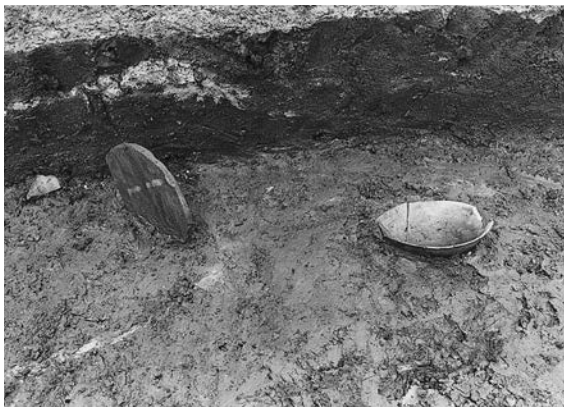


ＳＬ14断面２（南→）

ＳＬ14注口土器出土状況（南東→）

ＳＬ06板材出土状況（北東→）

ＳＬ06板材の加工痕（南西→）



ＳＬ06テフラと遺物（東→）

ＳＬ06用途不明木製品（南西→）

ＳＬ06曲物出土状況（東→）

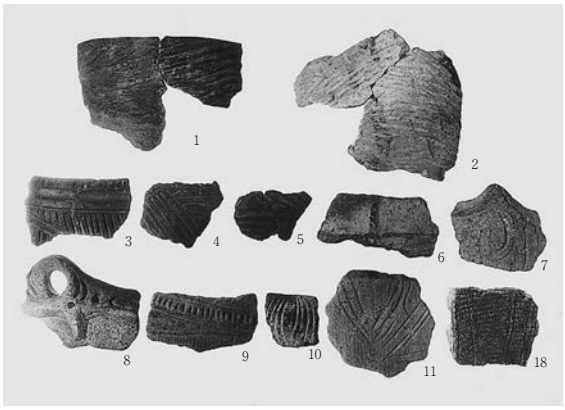
丘陵部近景（南西→）

ＳＤ59完掘（西→）

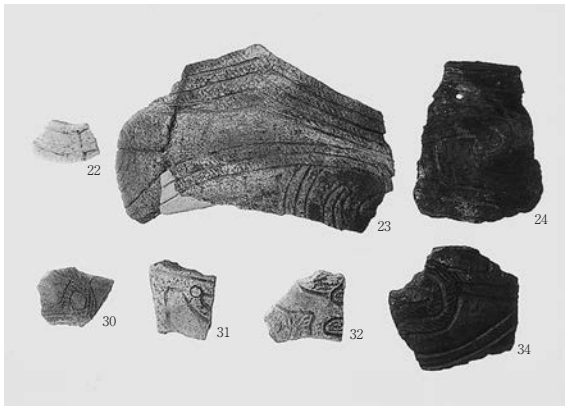
丘陵部南東側の遺構群検出状況（東→）

丘陵部南東側の遺構群完掘状況（西→）

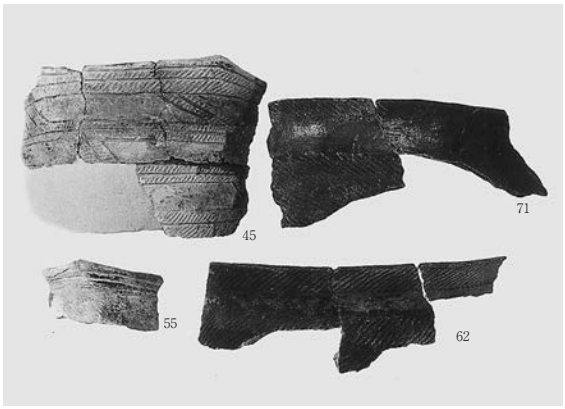
ＳＫＩ83完掘（北→）



ＳＤ18縄文土器（早期末～後期前葉）

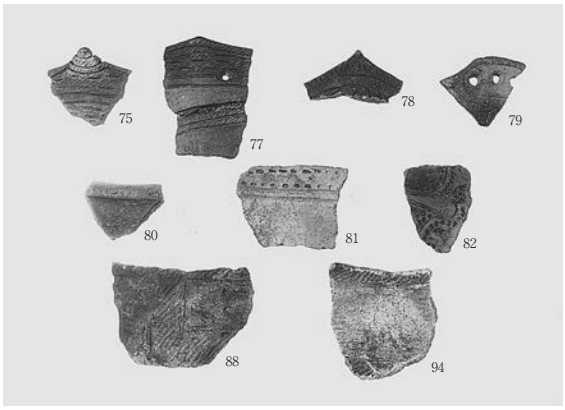


ＳＤ18縄文土器（後期前葉ａ・ｂ類）

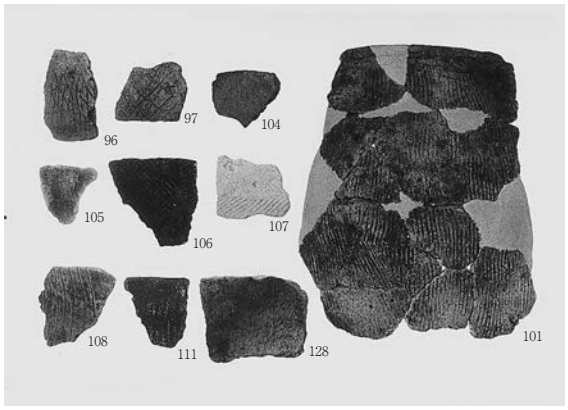


ＳＤ18縄文土器（後期前葉ｂ・ｃ・ｄ類）

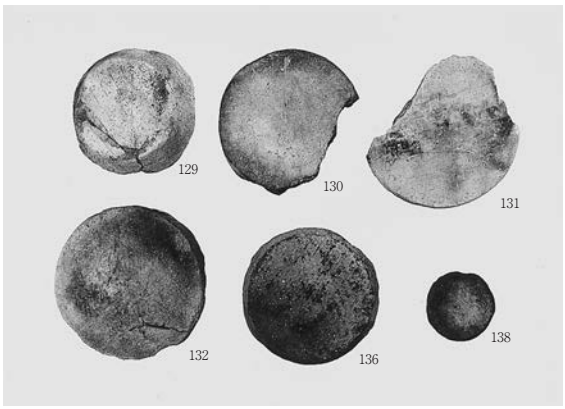
ＳＤ18縄文土器（後期前葉ｃ類）



ＳＤ18縄文土器（後期中葉）

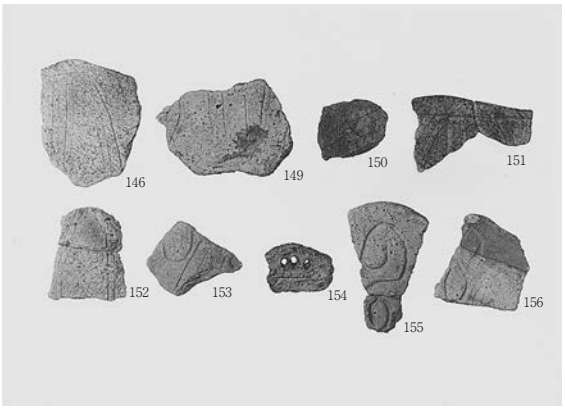


ＳＤ18縄文土器（後期）

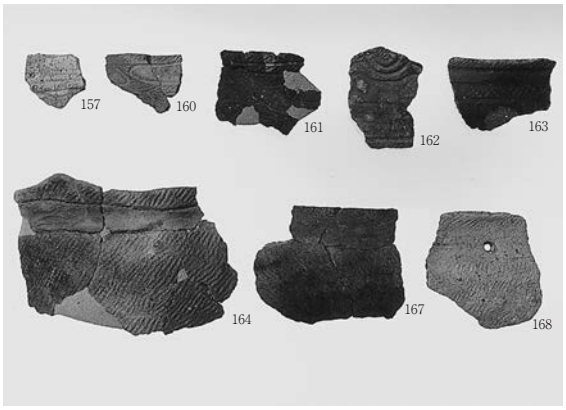


ＳＤ18縄文土器（後期）

ＳＥ30縄文土器（後期初頭～前葉）



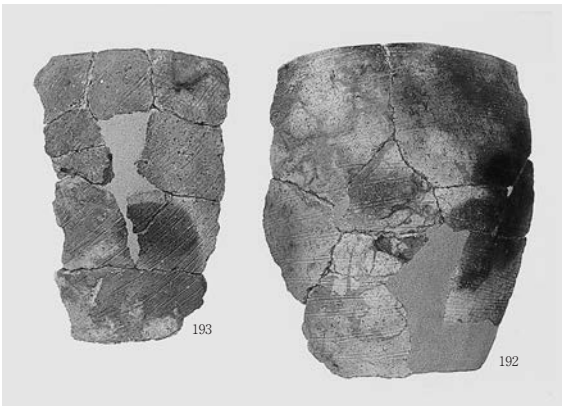
ＳＥ30縄文土器（後期初頭～前葉）



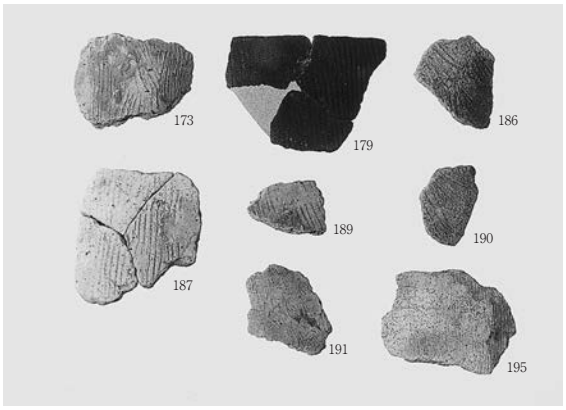
ＳＥ30縄文土器（後期前葉）

ＳＥ30縄文土器（後期中葉）

ＳＥ30縄文土器（後期）

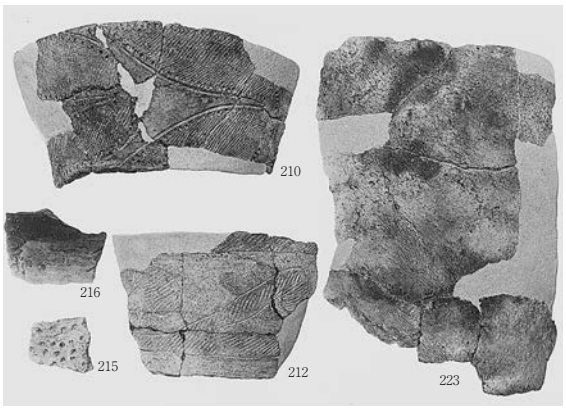


ＳＥ30縄文土器（後期）

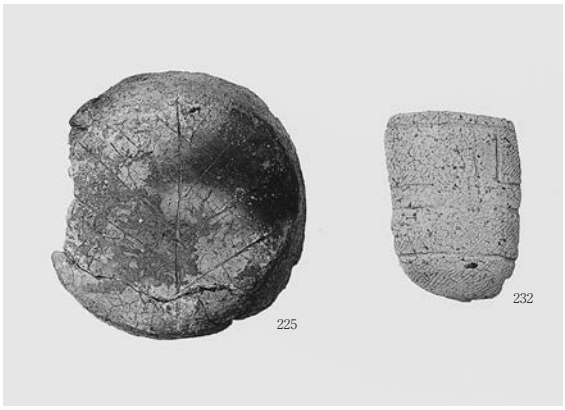


ＳＥ30縄文土器（後期）

ＳＥ30縄文土器（台付鉢）

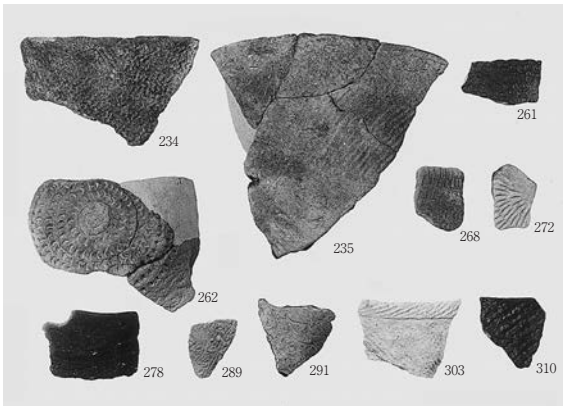


ＳＴ20縄文土器（後期中葉）



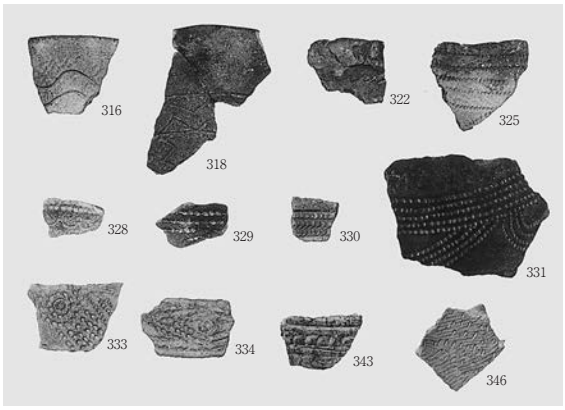
ＳＴ20縄文土器（底面木葉痕・壺）

ＳＴ20縄文土器（台付鉢・壺）

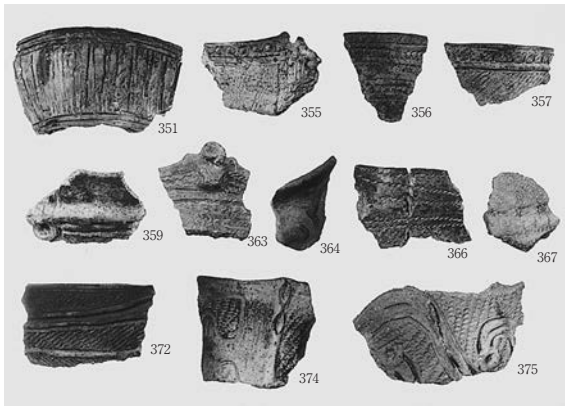


ＳＬ縄文土器（早期末～前期１）

ＳＬ縄文土器（早期末～前期２）

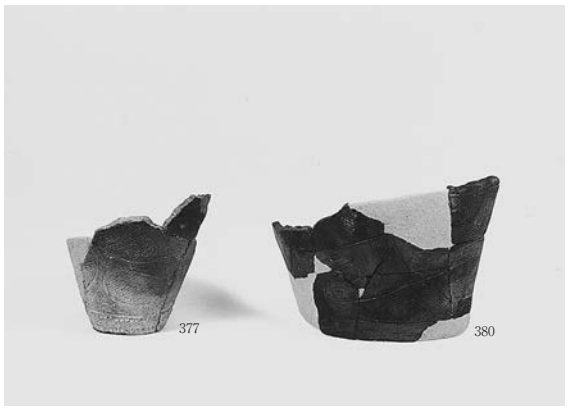


ＳＬ縄文土器（前期）



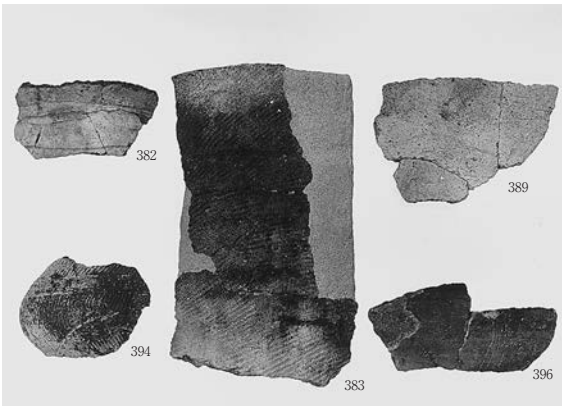
ＳＬ縄文土器（中期～後期前葉）

ＳＬ縄文土器（中期）



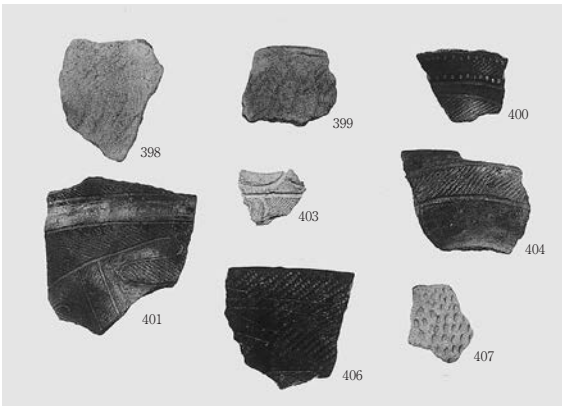
ＳＬ縄文土器（後期中葉～後葉１）

図版10



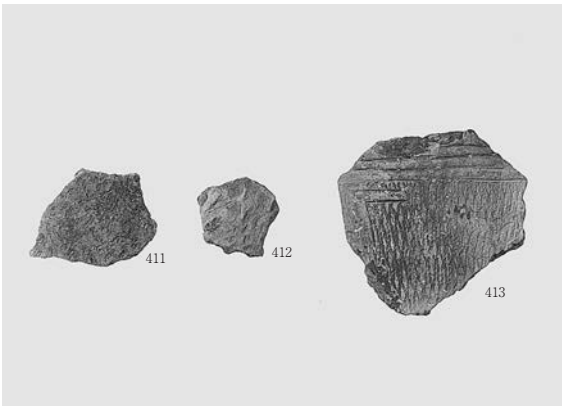
ＳＬ縄文土器（後期中葉～後葉２）

ＳＬ縄文土器（鉢・台付鉢）



ＳＬ14縄文土器（早期末～後期）

ＳＬ14縄文土器（注口土器）



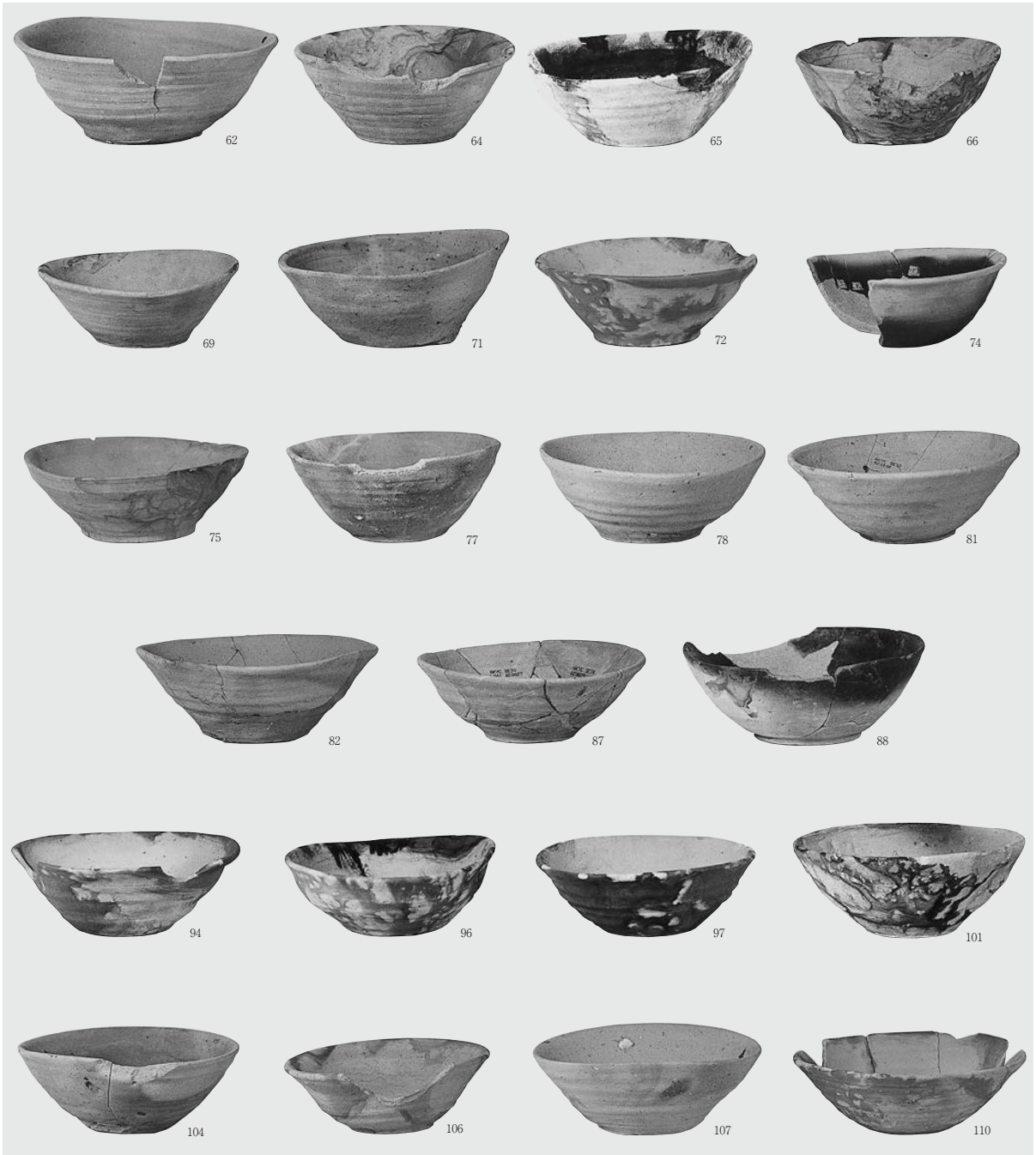
遺構外縄文土器（前期・中期）

ＳＤ05土師器有台坏

ＳＤ05土師器坏

ＳＤ05土師器耳皿

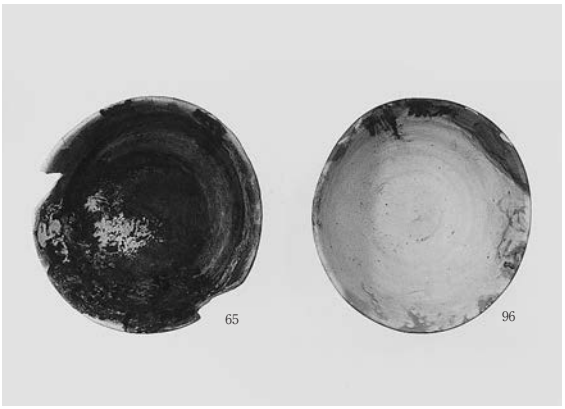
ＳＤ05転用硯



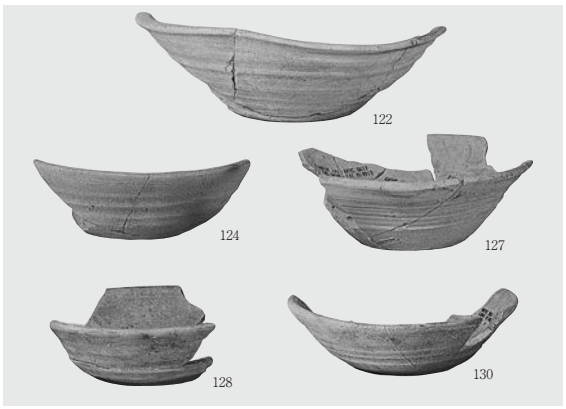
ＳＥ30土師器坏

ＳＥ30土師器有台坏・須恵器坏（穿孔）

ＳＥ30須恵器坏・土師器皿

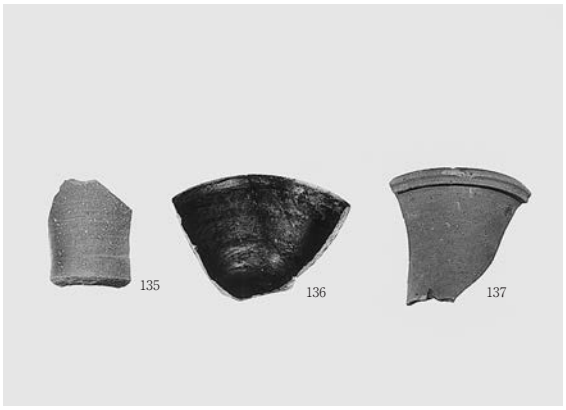


ＳＥ30土師器坏（燈明）



ＳＫ17土師器坏

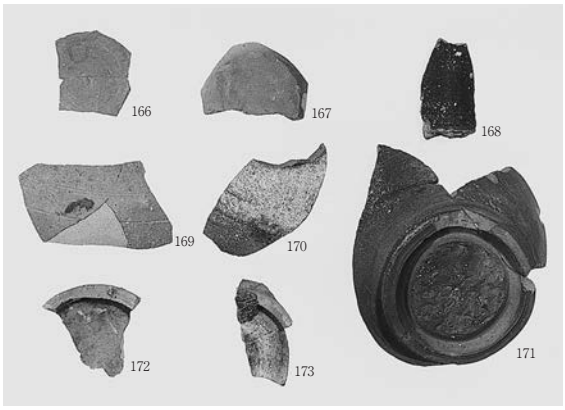
ＳＫ17須恵器坏



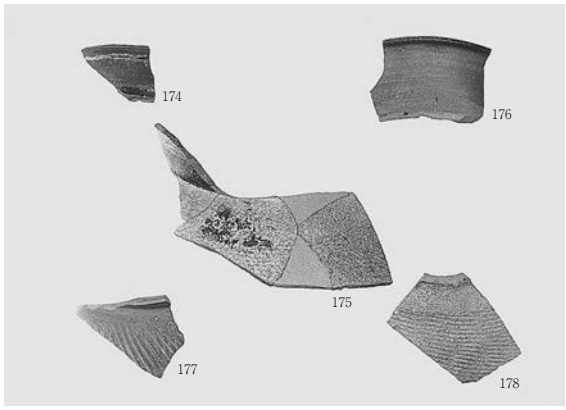
ＳＫ17・27須恵器長頸瓶・土師器坏

ＳＬ06土師器坏

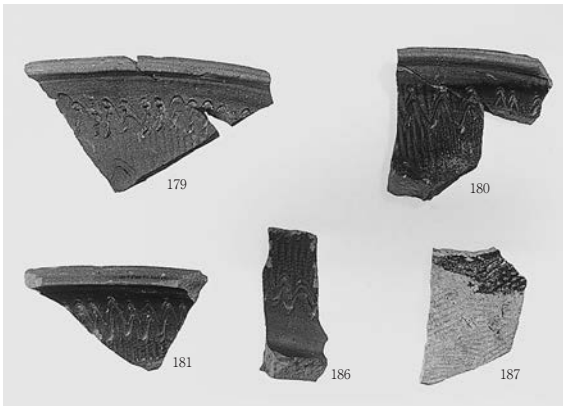
遺構外水滴



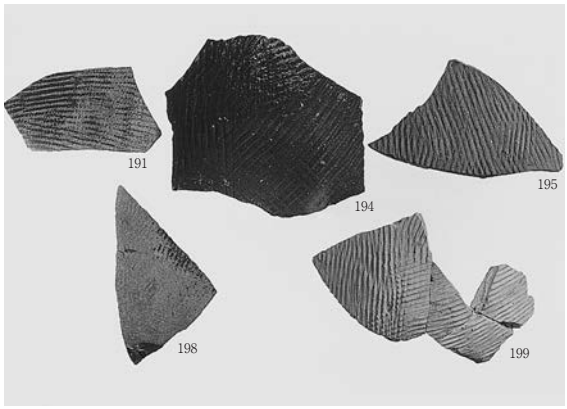
遺構外須恵器坏・鉢・瓶



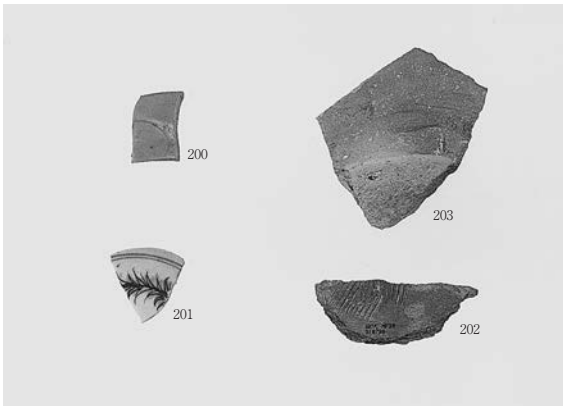
遺構外須恵器甕（小～中型）



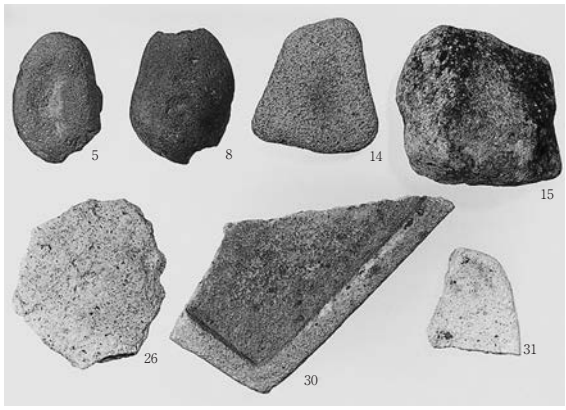
遺構外須恵器甕（大型）



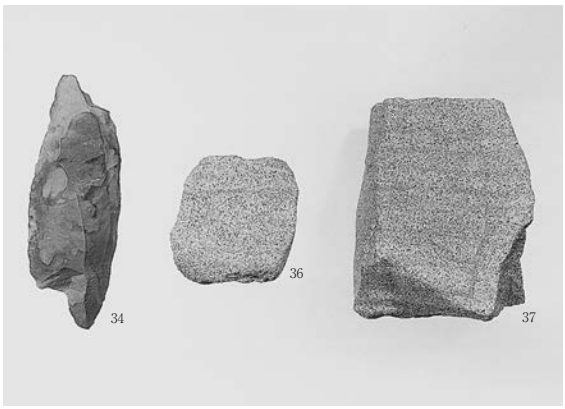
遺構外須恵器甕（転用硯・丸底等）



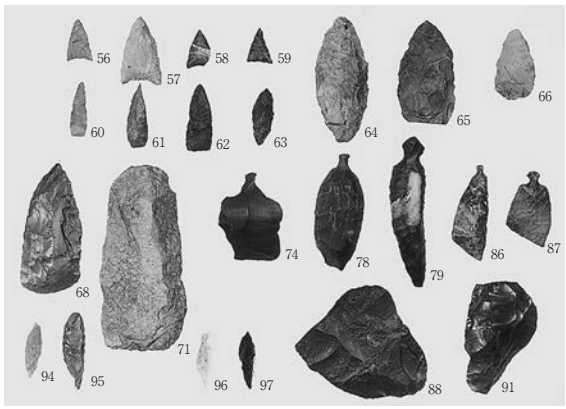
遺構外中世磁器・陶器



ＳＤ18凹石・石皿

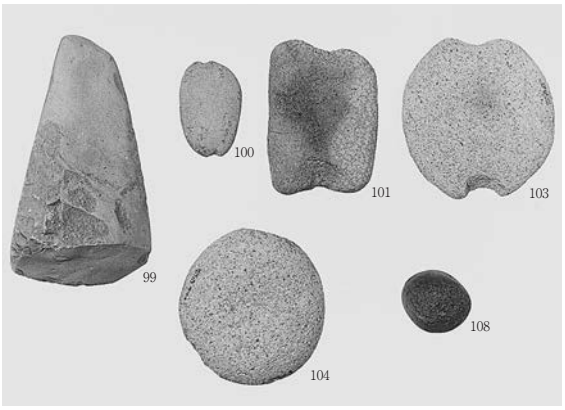


ＳＥ30掻器・砥石

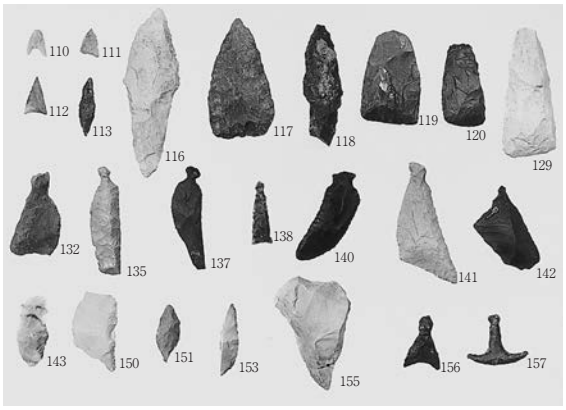


ＳＬ剥片石器

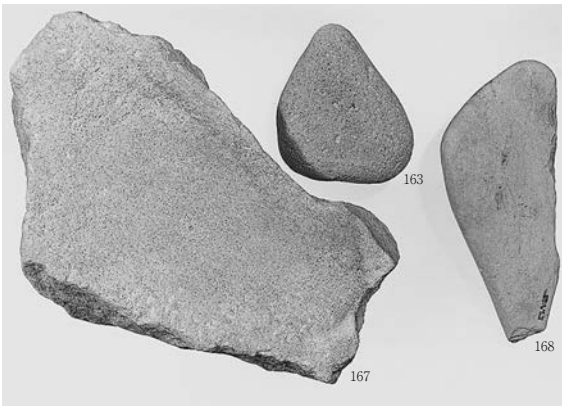
図版14



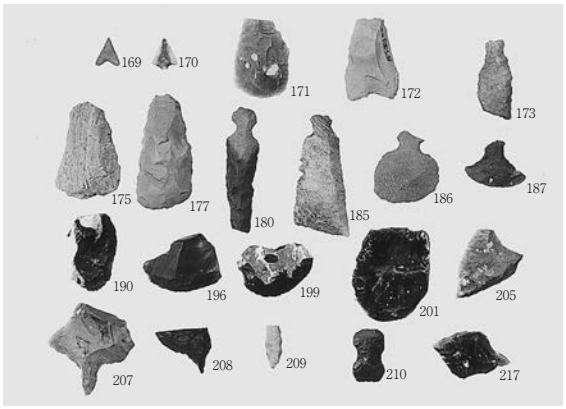
ＳＬ礫石器



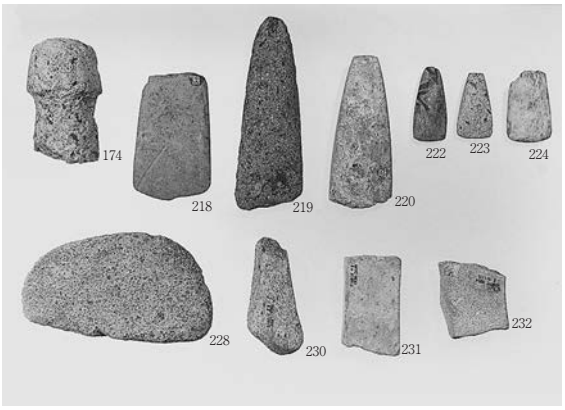
ＳＬ14剥片石器



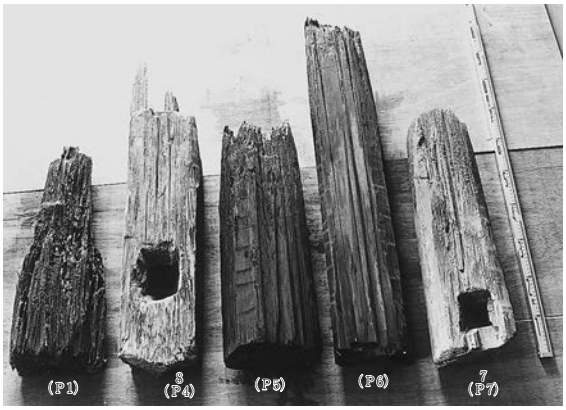
ＳＬ14礫石器



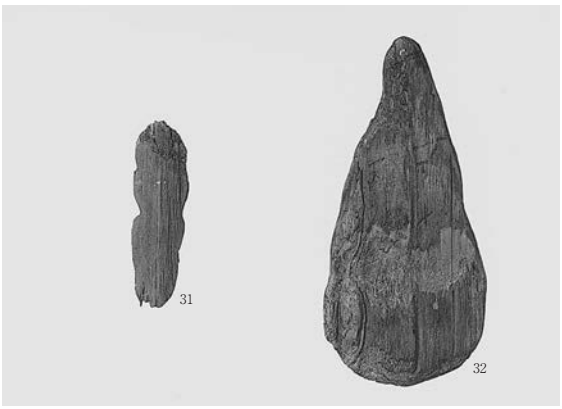
ＳＬ06・遺構外剥片石器



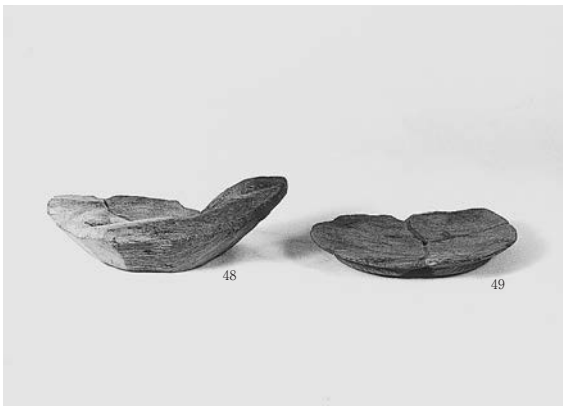
ＳＬ06・遺構外礫石器



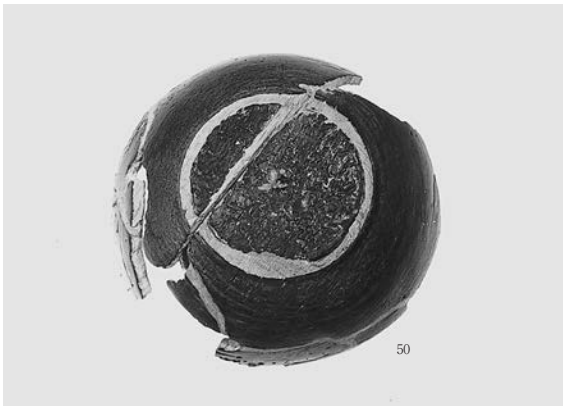
ＳＢ19柱材



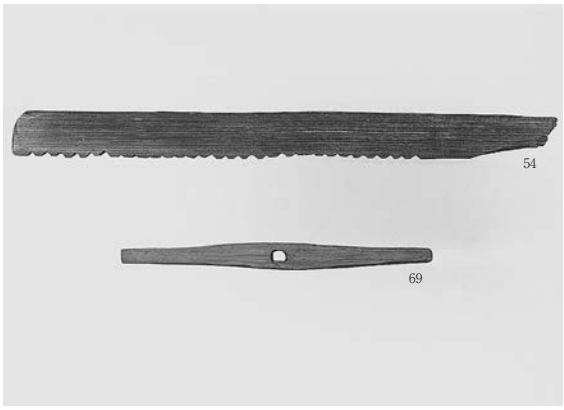
ＳＥ30斎串・木箆



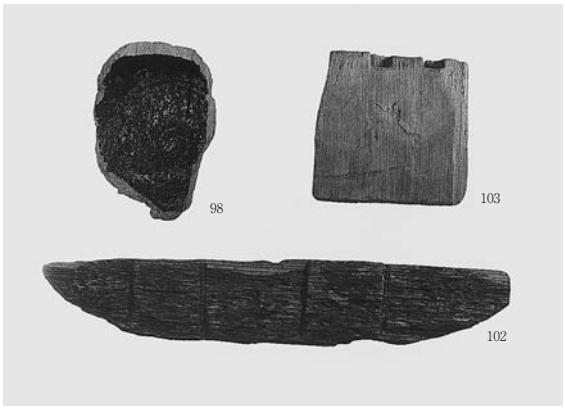
ＳＬ06刳物・木皿



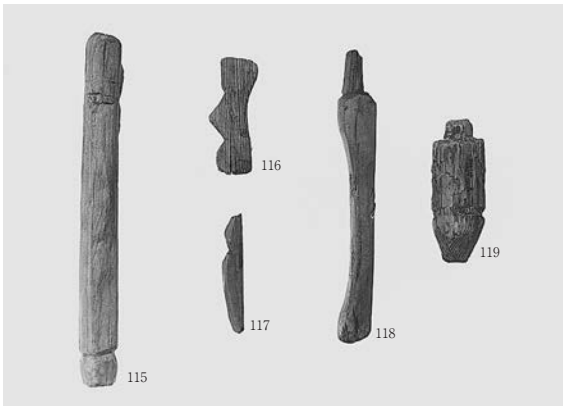
ＳＬ06漆器椀底部の朱書



ＳＬ06木製品

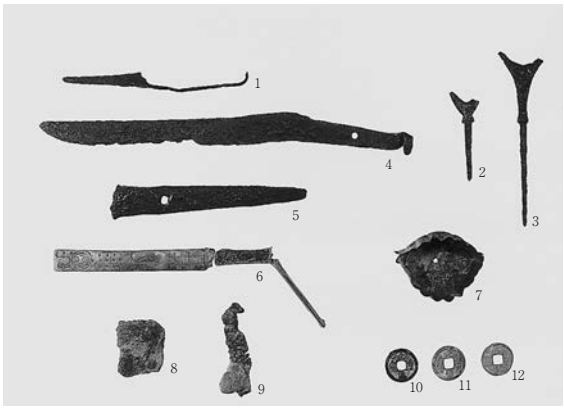


遺構外木製品１

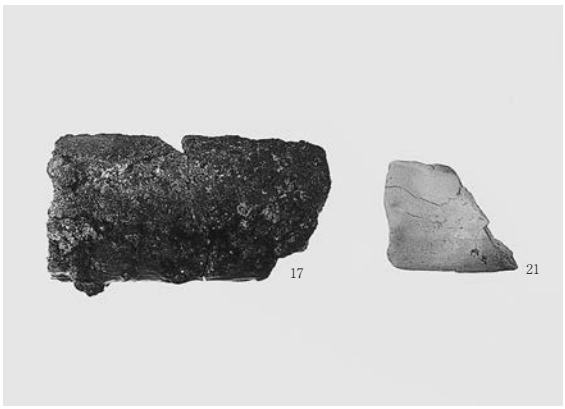


遺構外木製品２

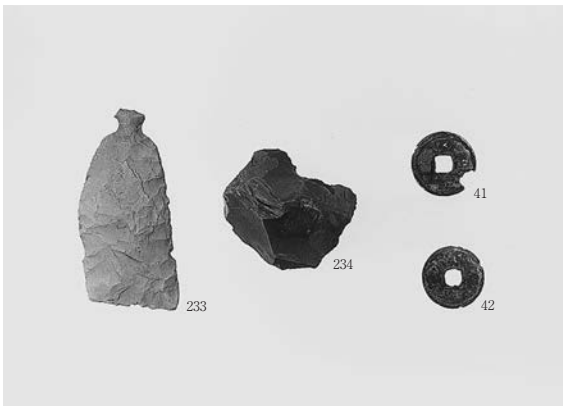
遺構外木人形



遺構外金属製品



鞴の羽口



丘陵部石器・宋銭

図版16　検出種実

1．オニグルミ 核(試料番号65)
2．オニグルミ 核;食害痕(試料番号63)
3．オニグルミ 核;頂部打撃痕(試料番号63)
4．モモ 核(試料番号69)
5．モモ 核(試料番号69)
6．トチノキ 果実(試料番号65)
7．トチノキ 種子(試料番号65)
8．トチノキ 幼果(試料番号48)
9．トチノキ 種子(試料番号65)
10．ブナ 殻斗(試料番号44)
11．クリ 果実(試料番号43)
12．スモモ 果実(試料番号64)
13．スモモ 核(試料番号64)
14．ツバキ 種子(試料番号39)
15．ブナ 果実(試料番号44)
16．コナラ亜属 殻斗(試料番号48)
17．コナラ属 果実(試料番号44)
18．ホオノキ 種子(試料番号48)
19．コブシ 種子(試料番号43)
20．クスノキ科 種子(試料番号40)
21．サクラ属 核(試料番号39)
22．エゴノキ属 種子(試料番号44)
23．クサギ 核(試料番号43)
24．ガマズミ属 核(試料番号48)
25．サワシバ 果実(試料番号44)
26．アサダ 果実(試料番号48)
27．コナラ亜属 幼果(試料番号48)
28．ケヤキ 果実(試料番号47)
29．サンショウ属 核(試料番号48)
30．カラスザンショウ 核(試料番号48)
31．キハダ 核(試料番号47)
32．ミツバウツギ 種子(試料番号49)
33．カエデ属 果実(試料番号48)
34．ブドウ属 種子(試料番号49)
35．ミズキ 核(試料番号44)
36．ヒルムシロ属 果実(試料番号41)
37．アサ 種子(試料番号47)
38．タデ属 果実(試料番号43)
39．ヤマグワ 種子(試料番号48)
40．マタタビ属 種子(試料番号49)
41．タラノキ 核(試料番号39)
42．ニワトコ 核(試料番号49)
43．エノコログサ属 穎(試料番号41)
44．スミレ属 種子(試料番号49)
45．シソ属 果実(試料番号41)

新　谷　地　遺　跡

（６ＳＹＣ）

第１章　発掘調査の概要

第１節　遺跡の概観

新谷地遺跡は本荘市土谷地区にあり、ＪＲ羽後本荘駅の北東約1.9㎞に位置する。出羽山地から西側に延びる丘陵の間に入り込む標高約６～７ｍの沢地が遺跡となっており、西側の山際に接する部分が調査区となった。

第２節　調査の方法

１　調査区の設定

調査の方法は、日本海沿岸東北自動車道建設工事のセンター杭ＳＴＡ.299を基点として真北方向をとり、４ｍ×４ｍの方眼杭を打設して遺構・遺物の検出地点を把握するグリッド法を採用した。基点には、ＭＡ50の呼称を付し、西に行くに従いＭＢ、ＭＣ、ＭＤ……というアルファベットを、北に行くに従い51、52、53 ……という二桁の算用数字を用い、これを組み合わせた記号で位置を示した。その際、４ｍ方眼の南東隅に位置する杭を当該グリッドの名称とした。

２　発掘方法と記録作成

調査は確認調査に基づき、表土除去は重機によって行い、グリッド杭を打設した。遺構の確認は、５・６層の上面とした。検出した遺構は、略記号及び番号を付し、図面と写真により記録した。図面の縮尺は１／20とした。遺物は、出土グリッド・層位・出土年月日を記入し、取り上げた。写真の撮影は、35㎜判モノクロ・リバーサルを合わせて使用した。

第３節　調査の経過

９月11日	調査開始
９月19日	ＳＤ01検出、土師器・須恵器・鍛冶滓が出土。
10月１日	遺構及び層序の記録を終え、調査の全日程を終了した。

第４節　整理作業の方法

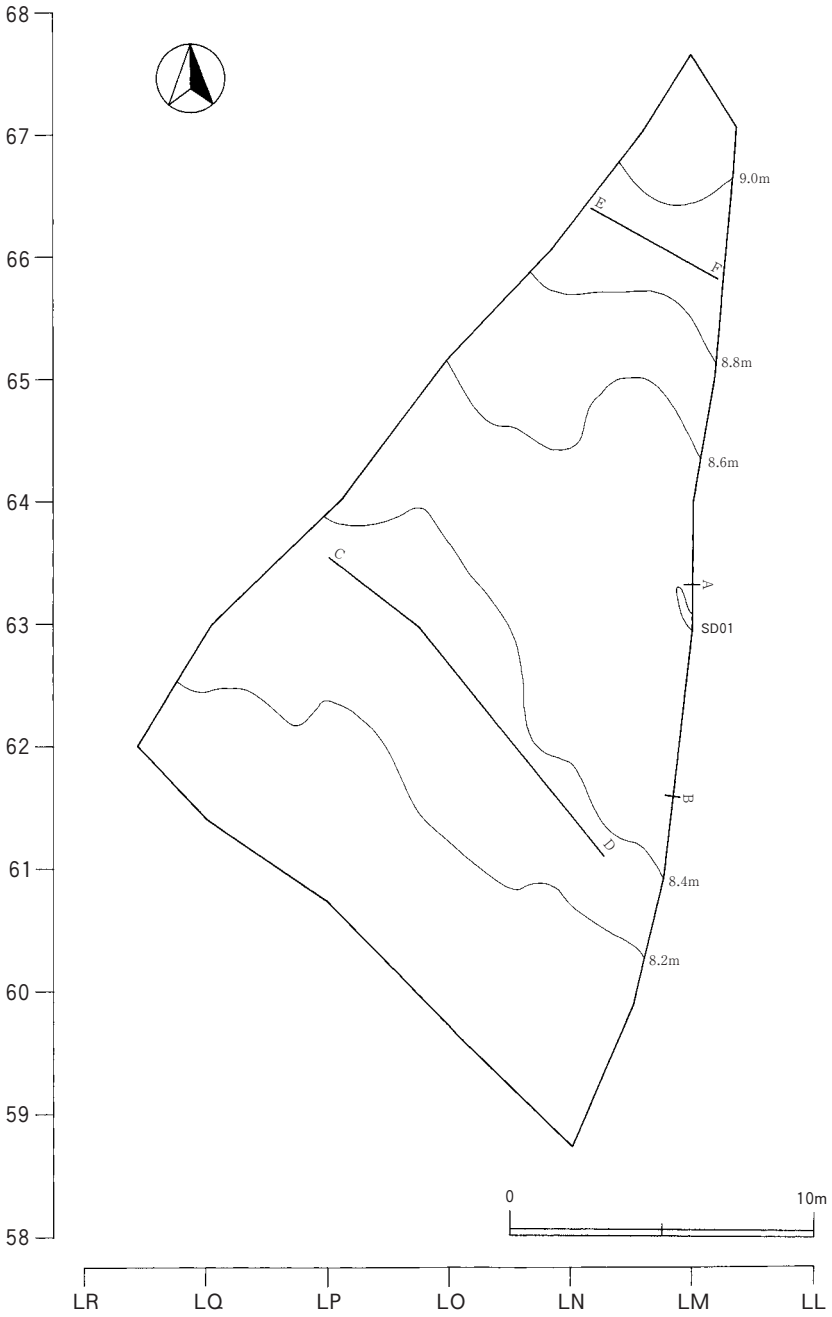
遺構は、現場で作成した平面図・断面図を点検・修正し、第２原図を作成し、これをトレースした。

遺物は、調査終了後に秋田県埋蔵文化財センター中央調査課で洗浄し、後に注記、土器の接合復元作業を行った。報告書掲載遺物を選択し、図化・採拓・写真撮影を行った。実測図は、残存状況を理解できるような作図を心がけ、残存状況の少ない遺物は180°回転で復元実測を行った。遺物分類の際、鍛冶関連遺物は穴澤義功氏の指導・助言を受けて進めた。報告書の作成に当たっては、遺構・遺物の時代や出土状況を明確にする構成に努めた。以上の経過を経て、原稿作成、編集作業を行った。

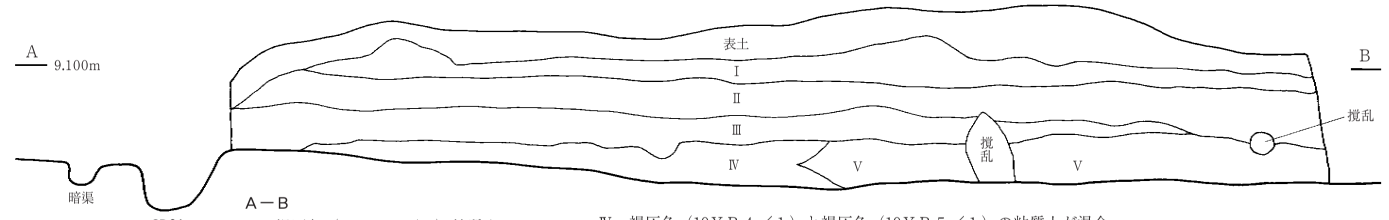
第２章　調査の記録

第１節　基本土層

新谷地遺跡のある沢地は、現在の地表面から基盤層までかなりの深さがある。遺跡は沢が徐々に埋没し、古代の頃に安定した地盤となり、製鉄や鍛冶等の作業場となったと考えられる。土層の観察は以下に示す３本のベルトを設定して行った。Ａ－Ｂでは現在の地表面～遺構確認面基盤層を、Ｃ－ＤとＥ－Ｆでは遺構確認面～基盤層を表した。



第124図　グリッド配置と遺構・トレンチ配置図



A－B

Ⅰ　褐灰色（10ＹＲ４／１）粘質土
　しまり中　粘性中

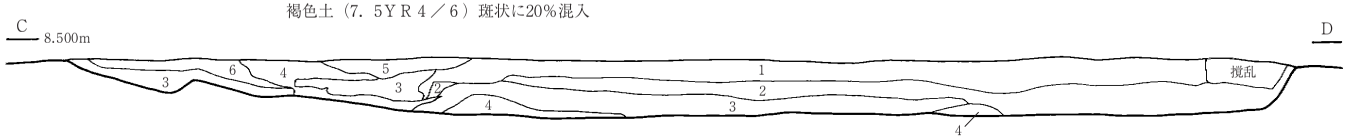
Ⅱ　灰黄褐色（10ＹＲ４／２）粘質土
　しまり中　粘性中
　褐色土（7．5ＹＲ４／６）斑状に10％混入

Ⅲ　褐灰色（10ＹＲ４／１）粘質土
　しまり中　粘性中
　褐色土（7．5ＹＲ４／６）斑状に20％混入

Ⅳ　褐灰色（10ＹＲ４／１）と褐灰色（10ＹＲ５／１）の粘質土が混合
　しまり中　粘性中
　褐色土（7．5ＹＲ４／６）斑状に20％混入

Ⅴ　灰黄褐色（10ＹＲ４／２）とにぶい黄橙色（10ＹＲ７／４）の粘質土が混合
　しまり中　粘性中
　褐色土（7．5ＹＲ４／６）斑状に20％混入

0　1.4m



C－D

1　灰黄褐色（10ＹＲ６／２）砂質土
　しまり中　粘性弱
　炭化物１％未満混入
　全体に酸化鉄が縦方向に入る
　西側に撹乱が多くみられる

2　青灰色（10Ｇ６／１）粘質土
　しまり強　粘性中

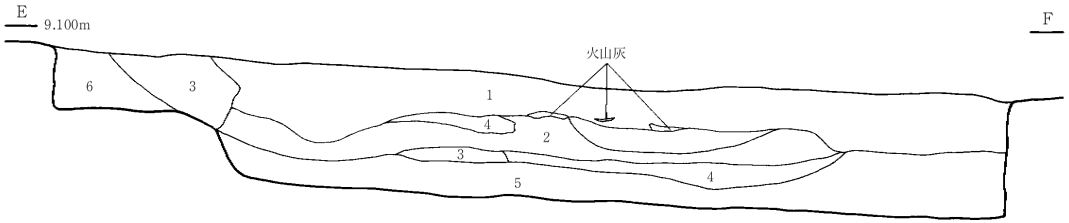
3　黒褐色（10ＹＲ３／２）粘質土～シルト質土
　しまり強　粘性中
　炭化物が10％混入（未確認だが包含層の可能性有）

4　暗オリーブ灰色（５ＧＹ４／１）砂質土
　しまり弱　粘性弱
　φ約20㎜の地山塊が80％混入

5　褐灰色（10ＹＲ６／１）砂質土
　しまり中　粘性弱
　上面に火山灰を塊状に含む

6　暗褐色（10ＹＲ３／３）シルト質土
　しまり中　粘性中
　炭化物５％混入

0　2.8m



E－F

1　灰黄褐色（10ＹＲ６／２）砂質土
　しまり中　粘性弱
　炭化物１％未満混入
　全体に酸化鉄が縦方向に入る
　西側に撹乱が多くみられる

2　青灰色（10Ｇ６／１）粘質土
　しまり強　粘性中

3　黒褐色（10ＹＲ３／２）粘質土～シルト質土
　しまり強　粘性中
　炭化物が10％混入（未確認だが包含層の可能性有）

4　暗オリーブ灰色（５ＧＹ４／１）砂質土
　しまり弱　粘性弱
　φ約20㎜の地山塊が80％以上混入

5　暗オリーブ灰色（５ＧＹ４／１）砂質土
　しまり弱　粘性弱
　φ約20㎜の地山塊が40％以上混入（特に東側）
　中央部に撹乱と思われる黒褐色土が含む

6　褐灰色（10ＹＲ４／１）と灰黄褐色（10ＹＲ４／２）の粘質土が混合
　しまり中　粘性中
　西側丘陵部から続く地山

0　1.4m

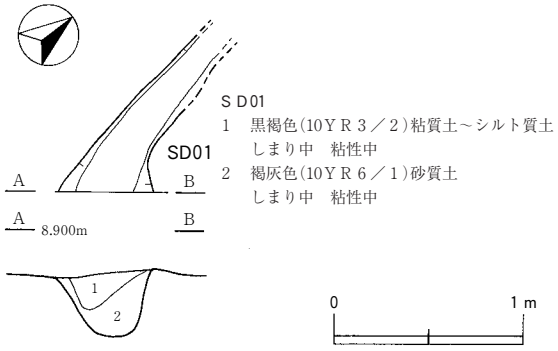
第125図　基本土層図

第２節　検出遺構

（１）溝跡

ＳＤ01（第 126 図、図版 17）

ＬＭ63グリッドに位置する。Ⅳ～Ⅴ層精査中に黒色の溝状プランを確認した。検出された長さ（南－北）1.08 ｍ、幅（北西－南東）約 0.36 ～ 0.52 ｍで、確認面からの深さは 0.36 ｍである。埋土は２層に分かれる。１層は黒褐色の粘性の強いシルト質土、２層は褐灰色の砂質土である。遺物はフイゴの羽口が１点出土した。



第126図　溝跡（ＳＤ01）

第３節　遺構外出土遺物

１　古代

（１）**土師器**（第 127 図、図版 17）

土師器は、坏・甕が出土した。１～３は坏で全て回転糸切りである。１は内湾ぎみに立ち上がる。２は焼成が甘く、胎土に１～４㎜の砂礫を含み底径が広い。４・５は砲弾型の甕と考えられる。

（２）**須恵器**（第 127 図、図版 17）

須恵器は、坏・壺・甕が出土した。６は坏で回転糸切りである。７～９は壺である。７が体部でロクロ調整は緻密だが、胎土に１～２㎜の砂礫を含む。８・９は台付きの底部である。８は回転糸切りと思われるが残りが少なく不明瞭である。９は回転糸切りでロクロ調整はやや粗めである。10 ～ 12 は甕でいずれも内面に当て目、外面に叩き目がある。10 は外面に製作時のものと考えられる掻き傷が４箇所に観られる。

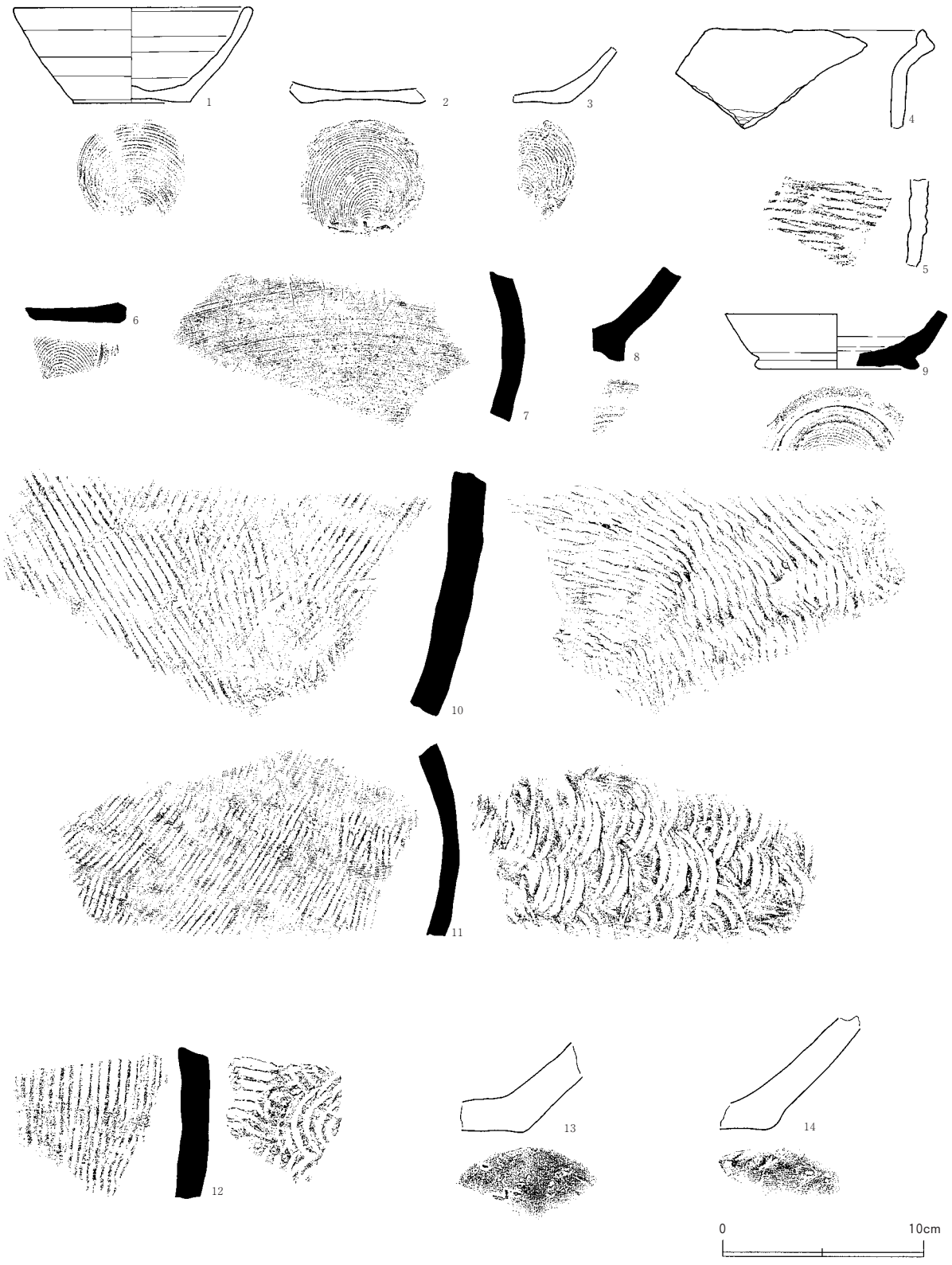
２　中世

（１）**須恵器系中世陶器**（第 127 図、図版 17）

須恵器系中世陶器は、擂鉢が２点出土した。いずれも卸目は無いが、使用により内面が磨滅している。14 の底部は静止糸切りである。

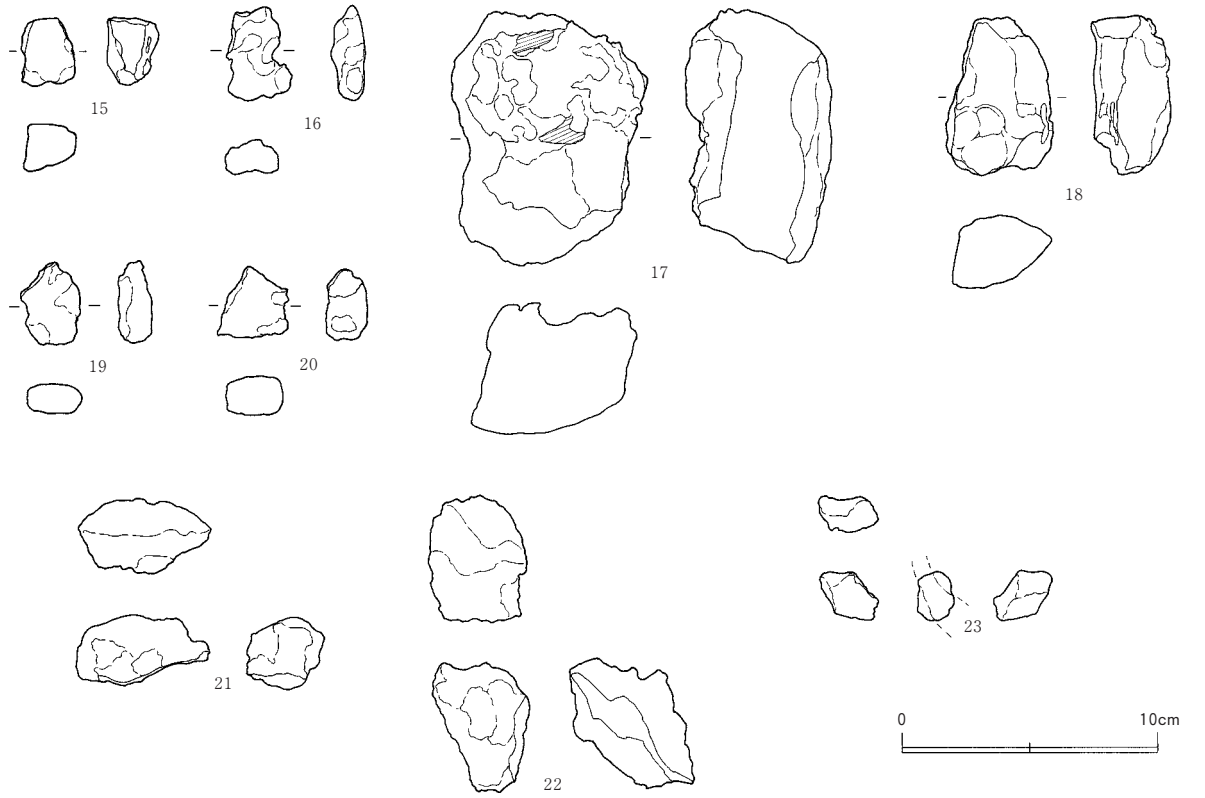
（２）**鍛冶関連遺物**（第 128 図）

流動滓・椀形鍛冶滓・炉壁・羽口が出土した。計測及び分類方法は上谷地遺跡と同様に行った。出土遺物の総重量は 1111.7 ｇである。関連する遺構は検出されなかったが、遺跡内か隣接する丘陵に製錬炉を含む工房があったと考えられる。時期は古代・中世いずれの可能性も考えられる。15・16 は流動滓、17 ～ 20 は椀形鍛冶滓、21・22 は炉壁、23 は羽口である。これらは特徴から製錬炉に起因するものと考えられる。



遺物No.	出土位置	種別	時期	器種	部位	器高	口径	底径	外底部	調整・施文
1	LO62	土師器	古代	坏	口縁部～底部	4.7	11.9	5.8	回転糸切	
9	LM62	須恵器	古代	壺	体部下半～底部	2.7	11.0	7.9	回転糸切、高台付	ロクロ

第127図　遺構外出土土器



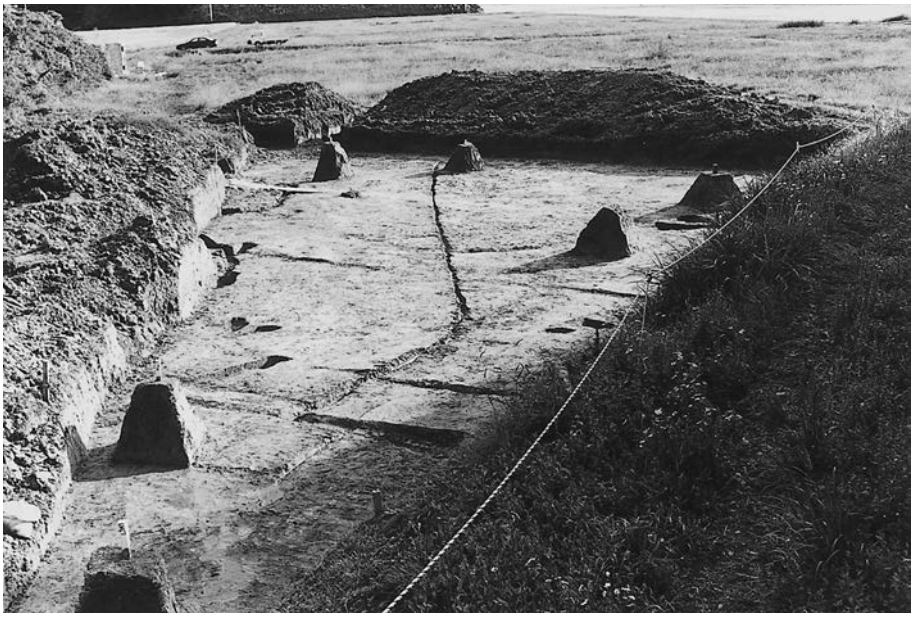
No.	出土位置	種別	長さ（㎜）	幅（㎜）	厚さ（㎜）	重量（g）	磁着度	メタル度	備考
15	LM66	流動滓	21.0	27.0	21.0	19.0	2	なし	製錬炉？
16	LO60	流動滓	25.0	37.0	14.0	14.2	2	なし	製錬炉？
17	LM66	椀形鍛冶滓（大）	77.0	100.0	57.0	439.4	2	なし	製錬炉？
18	LN62	椀形鍛冶滓（中）	42.0	63.0	31.0	118.0	2	なし	製錬炉？
19	LO63	椀形鍛冶滓（小）	24.0	32.0	13.0	15.3	2	なし	製錬炉？
20	LM63	椀形鍛冶滓（小）	28.0	27.0	16.0	15.7	2	なし	製錬炉？
21	LL66	炉壁	29.0	52.0	30.0	14.6	2	なし	製錬炉？
22	LM67	炉壁	51.0	38.0	48.0	52.4	4	なし	製錬炉？
23	SD01	羽口	23.0	19.0	10.0	3.0	1	なし	

第128図　遺構外出土鍛冶関連遺物

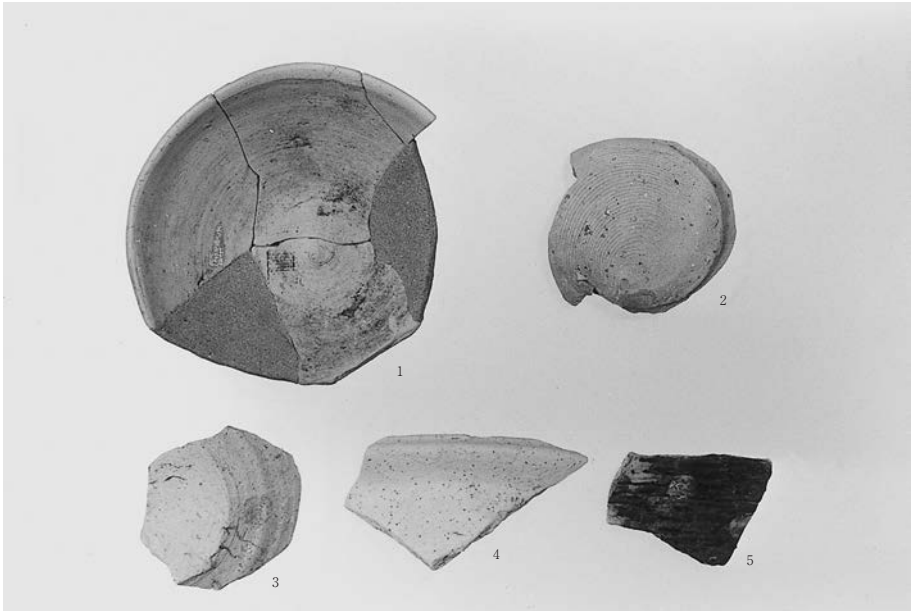
第３章　まとめ

調査の結果、遺構は溝跡１基が検出され、遺物は土師器、須恵器、鍛冶滓等が出土した。今回の調査範囲では遺構・遺物ともに検出数が少なく、具体的な考察をするに至らなかった。

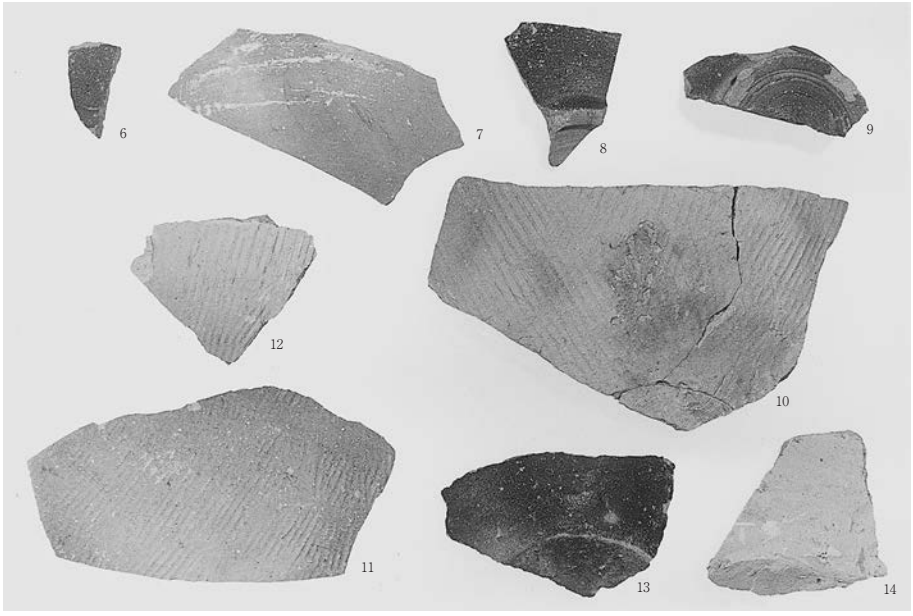
調査区東側では本荘市教育委員会によって、同じく新谷地遺跡が調査され、古代～中世の掘立柱建物跡や井戸跡や、祭祀に関連すると考えられる遺物が出土している。また、調査区北側には鎌倉時代の鋳造遺跡である堤沢山遺跡が所在しており、新谷地遺跡でも部分的に鍛冶・鋳造に係る生産が行われたと推測される。このことから、今回の調査範囲は遺跡全体の西端にあたるものと考えられる。



調査区近景



土師器



須恵器・須恵器系陶器

報　告　書　抄　録

ふりがな	かみやちいせき・しんやちいせき
書名	上谷地遺跡・新谷地遺跡
副書名	日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	ＸＸⅡ
シリーズ名	秋田県文化財調査報告書
シリーズ番号	第395集
編著者名	進藤　紀
編集機関	秋田県埋蔵文化財センター
所在地	〒014-0802　秋田県仙北郡仙北町払田字牛嶋20番地　　℡0187-69-3331
発行機関	秋田県教育委員会
所在地	〒010-8580　秋田県秋田市山王３丁目１番１号　　℡018-860-3193
発行年月日	西暦2005年３月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
かみやちいせき 上谷地遺跡	あきたけん 秋田県 ほんじょうし 本荘市 つちや 土谷 あざかみやち 字上谷地 ２番地外	05205		39° 23′ 11″	140° 4′ 51″	20010619 〜 20011112 20020805 〜 20021004 20030621 〜 20030718	8,600m² 1,700m² 350m²	日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財事前発掘調査
しんやちいせき 新谷地遺跡	あきたけん 秋田県 ほんじょうし 本荘市 つちや 土谷 あざしんやち 字新谷地 90番地外	05205		39° 23′ 26″	140° 4′ 53″	20020911 〜 20021001	280m²	日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財事前発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上谷地遺跡	集落跡	縄文時代後期 平安時代 中　世	水さらし場遺構 捨て場 井戸跡、溝跡 掘立柱建物跡 溝跡、竪穴状遺構 土坑	縄文土器、石器 土製品 土師器、須恵器 木製品 須恵器系陶器	県内で初の縄文時代後期の水さらし場遺構を検出した。平安時代には井戸跡等で祭祀が行われていたことが分かった。
新谷地遺跡	生産域	古　代	溝跡	土師器、須恵器	古代・中世の遺物

秋田県文化財調査報告書第395集
上谷地遺跡・新谷地遺跡
－日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書XXII－

印刷･発行　平成17年３月
編　　集　秋田県埋蔵文化財センター
〒014-0802　仙北郡仙北町払田字牛嶋20番地
電話 0187（69）3331　FAX（0187）69-3330
発　　行　秋田県教育委員会
〒010-8580　秋田市山王４丁目１番２号
電話 018（860）3193
印　　刷　株式会社 江川印刷所